

日向市所在

お か

岡遺跡（第9・13・15次調査）

東九州自動車道（日向～都農間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書9

2013

宮崎県埋蔵文化財センター



岡遺跡調査区全景（東から）



岡遺跡から海岸方面を臨む（西から）

卷頭図版 2



岡遺跡第 15 次調査区 縄文時代晩期土器



岡遺跡第 9・13・15 次調査区 縄文時代早期石器

序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道（日向～都農間）建設予定地にかかる埋蔵文化財の発掘調査を平成20年度から実施して参りました。本書は、平成23年度に実施した日向市大字平岩に所在する岡遺跡の発掘調査の成果を記載しております。

今回報告する岡遺跡は、縄文時代早期の集石遺構や炉穴が検出され、古墳時代中期の竪穴建物跡も検出されました。遺物も旧石器時代の石器や縄文土器、須恵器等が出土しました。また、中世～近世の掘立柱建物跡も検出され、貿易陶磁器等も出土しています。

今回の調査で得られた多くの成果が、今後、当地域の歴史を解明する上で非常に貴重な資料になるものと考えられます。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場等で活用され、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後に、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関・地元の方々に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成25年 1 月

宮崎県埋蔵文化財センター
所 長 北郷 泰道

例 言

- 1 本書は、東九州自動車道（日向～都農間）建設に伴い、平成23年度に宮崎県埋蔵文化財センターが実施した日向市大字平岩所在の岡遺跡（第9・13・15次調査）の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2 発掘調査は、西日本高速道路株式会社九州支社の委託により、宮崎県教育委員会が調査主体となり、同県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 現地調査のうち、以下のものについては業務委託した。
 - 岡遺跡第9次調査
 - 空中写真撮影・・・・・・・・・・・・（有）スカイサーベイ九州
 - 岡遺跡第15次調査
 - 空中写真撮影・・・・・・・・・・・・（有）ふじた
- 4 現地での遺構図作成・写真撮影については、各遺跡の担当者が行った。
- 5 整理作業は、各遺跡の担当者が、整理作業員の協力を得て宮崎県埋蔵文化財センターで行った。なお、一部の石器実測及びトレースについては、岡遺跡第9次調査は（有）ジパング・サーバイに、岡遺跡第13・15次調査は（株）大成エンジニアリングへそれぞれ業務委託した。
- 6 自然科学分析として、放射性炭素年代測定を（株）古環境研究所に委託し、その成果報告については、第Ⅴ章で久保田陽香が編集して掲載した。
- 7 本文の執筆は分担して行い、第Ⅰ章は松林豊樹、第Ⅱ章は久保田陽香、第Ⅲ章は竹下昭彦、第Ⅳ章は松浦朋彦、第Ⅵ章は久保田陽香・竹下昭彦が執筆した。
- 8 本書の作成は宮崎県埋蔵文化財センターで行った。
- 9 出土遺物および記録類は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。
- 10 出土した陶磁器の分類については、埋蔵文化財センター主査柳田晴子、県文化財課主査堀田孝博の協力を得た。
- 11 岡遺跡第9次調査区の火打ち石の同定、銃弾X線写真については、西都原考古博物館主査藤木聡、嶋田史子の協力を得た。

凡 例

- 1 本書で使用する土層および土器の色調については、農林水産農林水産技術会議事務局ならびに財団法人日本色彩研究所監修の『新版標準土色帖』に拠り記述した。
- 2 本書に使用した主な略記号は次の通りである。
 - SB = 掘立柱建物跡 SC = 土坑 SE = 溝状遺構 SH = ピット・小穴
 - SI = 礫群・集石遺構 SP = 炉穴 SX = 性格不明遺構 Gr = グリッド Tr = トレンチ
- 3 本書で使用した標高は海拔高であり、方位は座標北 (G.N.) を基本として一部の平面図・遺構実測図は磁北 (M.N.) を用いた。なお、図面上で磁北 (M.N.) はM.N.と明記し、座標北 (G.N.) に関しては未表記である。
- 4 石器の節理面は1点鎖線で、敲打痕の認められる部分は波線の○で表示した。
- 5 石器実測図への表現として以下のようにした。
 - ※図面上で明示できない範囲については矢印とコ・ス・マ・トで示した。
 - コ = 敲打痕 ス = 磨痕 マ = 磨滅 ト = 砥痕
 - ※実測図中の網掛けは磨面・砥面20%、磨滅痕10%、強い磨滅痕30%、ガジリは黒塗りで表す。
- 6 遺構・遺物写真などの図版の縮尺については任意であり、統一していない。

本文目次

第 I 章 はじめに

第 1 節 調査に至る経緯	1
第 2 節 調査の組織	2
第 3 節 遺跡の位置と環境	2
第 4 節 調査の概要	5

第 II 章 岡遺跡第 9 次調査の成果

第 1 節 調査の方法と経過	7
第 2 節 旧石器時代の遺構と遺物	13
第 3 節 縄文時代の遺構と遺物	19
第 4 節 古代～近世の遺構と遺物	33
第 5 節 その他の時代の遺構と遺物	45
第 6 節 小結	49

第 III 章 岡遺跡第 13 次調査の成果

第 1 節 調査の方法と経過	50
第 2 節 縄文時代の遺物	54
第 3 節 古墳時代の遺構と遺物	68
第 4 節 中世～近世の遺構と遺物	71
第 5 節 小結	76

第 IV 章 岡遺跡第 15 次遺跡調査の成果

第 1 節 調査の方法と経過	77
第 2 節 縄文時代の遺構と遺物	82
第 3 節 弥生時代～近世の遺物	103
第 4 節 小結	105

第 V 章 自然科学分析

第 1 節 岡遺跡第 9・15 次調査のテフラ分析	106
第 2 節 岡遺跡第 9・15 次調査の放射性炭素年代測定	110

第 VI 章 総括

報告書抄録	巻末
-------------	----

挿図目次

第 I 章 はじめに

- 第 1 図 岡遺跡及び周辺遺跡分布図 4
- 第 2 図 岡遺跡調査区全体図 6

第 II 章 岡遺跡第 9 次調査の成果

- 第 3 図 岡遺跡第 9 次調査区 第 6・9 次基本土層比較図 10
- 第 4 図 岡遺跡第 9 次調査区 調査区周辺地形・トレンチ配置・遺構分布図 11
- 第 5 図 岡遺跡第 9 次調査区 土層断面図 12
- 第 6 図 岡遺跡第 9 次調査区 礫群 (SI9) 実測図 13
- 第 7 図 岡遺跡第 9 次調査区 旧石器時代の遺構・遺物分布図 13
- 第 8 図 岡遺跡第 9 次調査区 旧石器時代石器実測図 (1) ... 15
- 第 9 図 岡遺跡第 9 次調査区 旧石器時代石器実測図 (2) ... 16
- 第 10 図 岡遺跡第 9 次調査区 旧石器時代石器実測図 (3) ... 17
- 第 11 図 岡遺跡第 9 次調査区 旧石器時代 遺物平面・垂直分布図 18
- 第 12 図 岡遺跡第 9 次調査区 縄文時代遺構・遺物分布図 ... 19
- 第 13 図 岡遺跡第 9 次調査区 SI1、SI2 実測図 20
- 第 14 図 岡遺跡第 9 次調査区 SI3、SI4 実測図 21
- 第 15 図 岡遺跡第 9 次調査区 SI5、SI6、SI7 実測図 22
- 第 16 図 岡遺跡第 9 次調査区 SP1・SP2・SP3 実測図 22
- 第 17 図 岡遺跡第 9 次調査区 縄文時代土器実測図 24
- 第 18 図 岡遺跡第 9 次調査区 縄文時代石器実測図 (1) 27
- 第 19 図 岡遺跡第 9 次調査区 縄文時代石器実測図 (2) 28
- 第 20 図 岡遺跡第 9 次調査区 縄文時代石器実測図 (3) 29
- 第 21 図 岡遺跡第 9 次調査区 縄文時代石器実測図 (4) 30
- 第 22 図 岡遺跡第 9 次調査区 縄文時代石器実測図 (5) 31
- 第 23 図 岡遺跡第 9 次調査区 縄文時代石器実測図 (6) 32
- 第 24 図 岡遺跡第 9 次調査区 古代～近世遺構分布図 (1) ... 34
- 第 25 図 岡遺跡第 9 次調査区 古代～近世遺構分布図 (2) ... 34
- 第 26 図 岡遺跡第 9 次調査区 SB1 実測図 35
- 第 27 図 岡遺跡第 9 次調査区 SB2 実測図 36
- 第 28 図 岡遺跡第 9 次調査区 SX1 実測図 36
- 第 29 図 岡遺跡第 9 次調査区 柵列状遺構実測図 38
- 第 30 図 岡遺跡第 9 次調査区 SC1、SC2 実測図 38
- 第 31 図 岡遺跡第 9 次調査区 遺構出土遺物実測図 40
- 第 32 図 岡遺跡第 9 次調査区 古代～近世遺物実測図 40
- 第 33 図 岡遺跡第 9 次調査区 中世～近世陶磁器実測図 41
- 第 34 図 岡遺跡第 9 次調査区 近世陶磁器・近世石器実測図 ... 42
- 第 35 図 岡遺跡第 9 次調査区 近世銭貨拓本図 43

- 第 36 図 岡遺跡第 9 次調査区 その他の時代遺構分布図 46
- 第 37 図 岡遺跡第 9 次調査区 SX2 実測図 46
- 第 38 図 岡遺跡第 9 次調査区 SC3 出土遺物実測図 47
- 第 39 図 岡遺跡第 9 次調査区 その他の時代遺物実測図 47

第 III 章 岡遺跡第 13 次調査の成果

- 第 40 図 岡遺跡第 13 次調査区 調査区周辺地形・トレンチ配置・グリッド図 52
- 第 41 図 岡遺跡第 13 次調査区 土層断面図 53
- 第 42 図 岡遺跡第 13 次調査区 突帯文土器分類図 54
- 第 43 図 岡遺跡第 13 次調査区 縄文時代早期・晩期土器実測図 57
- 第 44 図 岡遺跡第 13 次調査区 縄文時代晩期土器実測図 (1) 58
- 第 45 図 岡遺跡第 13 次調査区 縄文時代晩期土器実測図 (2) 59
- 第 46 図 岡遺跡第 13 次調査区 縄文時代晩期土器実測図 (3) 60
- 第 47 図 岡遺跡第 13 次調査区 縄文時代石器実測図 (1) ... 61
- 第 48 図 岡遺跡第 13 次調査区 縄文時代石器実測図 (2) ... 62
- 第 49 図 岡遺跡第 13 次調査区 縄文時代石器実測図 (3) ... 63
- 第 50 図 岡遺跡第 13 次調査区 縄文時代石器実測図 (4) ... 64
- 第 51 図 岡遺跡第 13 次調査区 古墳時代遺構分布図 69
- 第 52 図 岡遺跡第 13 次調査区 SA1 実測図および遺物出土状況図 69
- 第 53 図 岡遺跡第 13 次調査区 SA1 出土土器実測図 70
- 第 54 図 岡遺跡第 13 次調査区 古墳時代土器実測図 70
- 第 55 図 岡遺跡第 13 次調査区 近世遺構分布図 72
- 第 56 図 岡遺跡第 13 次調査区 SB1 実測図 73
- 第 57 図 岡遺跡第 13 次調査区 SB2 実測図 74
- 第 58 図 岡遺跡第 13 次調査区 土坑実測図 74
- 第 59 図 岡遺跡第 13 次調査区 中世～近世遺物実測図 75

第 IV 章 岡遺跡第 15 次調査の成果

- 第 60 図 岡遺跡第 15 次調査区 調査区周辺地形・遺構分布・トレンチ配置・グリッド図 79
- 第 61 図 岡遺跡第 15 次調査区 Tr1 (北壁面)・Tr2 (東壁面) 土層断面図 81
- 第 62 図 岡遺跡第 15 次調査区 SII 実測図 82
- 第 63 図 岡遺跡第 15 次調査区 SII 構成礫データ 83
- 第 64 図 岡遺跡第 15 次調査区 組織痕土器・打製石斧出土状況実測図 83

第 65 図	岡遺跡第 15 次調査区	縄文時代遺物分布図	84
第 66 図	岡遺跡第 15 次調査区	縄文時代早期土器実測図	85
第 67 図	岡遺跡第 15 次調査区	縄文時代晩期土器実測図 (1)	88
第 68 図	岡遺跡第 15 次調査区	縄文時代晩期土器実測図 (2)	89
第 69 図	岡遺跡第 15 次調査区	縄文時代石器実測図 (1)	...	96
第 70 図	岡遺跡第 15 次調査区	縄文時代石器実測図 (2)	...	97
第 71 図	岡遺跡第 15 次調査区	縄文時代石器実測図 (3)	...	98
第 72 図	岡遺跡第 15 次調査区	縄文時代石器実測図 (4)	...	99
第 73 図	岡遺跡第 15 次調査区	縄文時代石器実測図 (5)	...	100
第 74 図	岡遺跡第 15 次調査区	縄文時代石器実測図 (6)	...	101
第 75 図	岡遺跡第 15 次調査区	弥生時代～古代遺物実測図	...	103
第 76 図	岡遺跡第 15 次調査区	中世～近世遺物実測図	104
第 V 章 自然科学分析				
第 77 図	テフラ分析結果 (1)		108
第 77 図	テフラ分析結果 (2)		109
第 78 図	暦年較正結果		111
第 VI 章 総括				
第 79 図	岡遺跡調査区全体遺構分布図	115	116
第 80 図	岡遺跡調査区全体	縄文時代早期遺構分布図	115
第 81 図	岡遺跡調査区全体	中世～近世遺構分布図	...	115

表目次

第 II 章 岡遺跡第 9 次調査の成果

第 1 表	岡遺跡第 9 次調査区	旧石器時代石器計測表	18
第 2 表	岡遺跡第 9 次調査区	縄文時代集石遺構一覧表	23
第 3 表	岡遺跡第 9 次調査区	縄文時代炉穴一覧表	23
第 4 表	岡遺跡第 9 次調査区	縄文時代土器観察表	32
第 5 表	岡遺跡第 9 次調査区	縄文時代石器計測表	32
第 6 表	岡遺跡第 9 次調査区	中世～近世掘立柱建物跡一覧表	36
第 7 表	岡遺跡第 9 次調査区	古代～近世土器・陶磁器観察表 (1)	43
第 7 表	岡遺跡第 9 次調査区	古代～近世土器・陶磁器観察表 (2)	44
第 8 表	岡遺跡第 9 次調査区	古代～近世土製品観察表	44
第 9 表	岡遺跡第 9 次調査区	近世石器計測表	44
第 10 表	岡遺跡第 9 次調査区	SC3 出土陶磁器観察表	48
第 11 表	岡遺跡第 9 次調査区	その他の時代土器観察表	48
第 12 表	岡遺跡第 9 次調査区	その他の時代土製品・金属製品・ガラス製品類観察表	48
第 13 表	岡遺跡第 9 次調査区	貝類一覧表	48

第 III 章 岡遺跡第 13 次調査の成果

第 14 表	岡遺跡第 13 次調査区	縄文時代早期土器観察表	65
第 15 表	岡遺跡第 13 次調査区	縄文時代晩期土器観察表 (1)	65
第 15 表	岡遺跡第 13 次調査区	縄文時代晩期土器観察表 (2)	66
第 15 表	岡遺跡第 13 次調査区	縄文時代晩期土器観察表 (3)	67
第 16 表	岡遺跡第 13 次調査区	縄文時代石器計測表	67
第 17 表	岡遺跡第 13 次調査区	SA1 出土土器観察表	70
第 18 表	岡遺跡第 13 次調査区	古墳時代土器観察表	71
第 19 表	岡遺跡第 13 次調査区	掘立柱建物跡一覧表	73
第 20 表	岡遺跡第 13 次調査区	中世～近世陶磁器観察表	75
第 21 表	岡遺跡第 13 次調査区	近世遺物計測表	75

第 IV 章 岡遺跡第 15 次調査の成果

第 22 表	岡遺跡第 15 次調査区	縄文時代早期土器観察表	85
第 23 表	岡遺跡第 15 次調査区	縄文時代晩期土器観察表	90
第 24 表	岡遺跡第 15 次調査区	縄文時代石器計測表	102
第 25 表	岡遺跡第 15 次調査区	弥生時代～古代遺物観察表	104
第 26 表	岡遺跡第 15 次調査区	中世～近世遺物観察表	104

第V章 自然科学分析

第27表 重軽鉱物組成表	108
第28表 火山ガラスの形態分類	108
第29表 測定試料、前処理・調整法および測定法	111
第30表 放射性炭素年代測定結果	111

写真図版

巻頭図版1 岡遺跡調査区全景（東から）、岡遺跡から海岸方面を臨む（西から）

巻頭図版2 岡遺跡第15次調査区 縄文時代晩期土器、岡遺跡第9・13・15次調査区 縄文時代早期石器

図版1 岡遺跡第9次調査区	119
調査区全景、SB1・SB2	
図版2 岡遺跡第9次調査区	120
Tr3・5・7土層断面、AT下位遺物出土状況、1号礫群、SI1	
図版3 岡遺跡第9次調査区	121
SI2、SI3、SI4、SI5、SI7	
図版4 岡遺跡第9次調査区	122
SP1、SP2、SX1、SE1・柵列状遺構、SC1、SC2	
図版5 岡遺跡第9次調査区	123
SX2、SC3、歯検出状況、SB1、調査風景	
図版6 岡遺跡第9次調査区	124
旧石器時代石器（AT下位・AT上位）	
図版7 岡遺跡第9次調査区	125
縄文時代土器・縄文時代石器33～71、98	
図版8 岡遺跡第9次調査区	126
縄文時代石器72～97、SB1・SE1・SC1出土遺物	
図版9 岡遺跡第9次調査区	127
SC7出土遺物、古代～中世 土器・土製品、中世陶器、近世磁器、近世陶磁器	
図版10 岡遺跡第9次調査区	128
近世陶磁器、近世石器、金属製品・古銭、SC3出土遺物、その他の時代出土遺物、参考資料1・2、SC3鉄製銃弾	
図版11 岡遺跡第9次調査区	129
貝、歯	
図版12 岡遺跡第13次調査区	130
調査前風景、調査区近景、作業風景、調査区南半部垂直写真	
図版13 岡遺跡第13次調査区	131
Tr1土層堆積状況、SA1検出状況、SA1遺物出土状況、SA1完掘状況、SB1検出状況、SB1完掘状況、SB2完掘状況	

図版14 岡遺跡第13次調査区	132
縄文時代早期土器、縄文時代晩期土器（1）～（3）	
図版15 岡遺跡第13次調査区	133
縄文時代晩期土器（4）～（5）	
図版16 岡遺跡第13次調査区	134
縄文時代石器（1）～（5）	
図版17 岡遺跡第13次調査区	135
縄文時代石器（6）、SA1出土土器、古墳時代出土土器、SA1出土須恵器、近世出土遺物	
図版18 岡遺跡第15次調査区	136
調査区遠景、調査区垂直写真	
図版19 岡遺跡第15次調査区	137
Tr2（東壁面）南端土層堆積状況、SI1検出状況、SI1配石検出状況、SI1完掘状況、組織痕土器・打製石斧出土状況（上）、打製石斧出土状況（下）	
図版20 岡遺跡第15次調査区	138
縄文時代早期土器、縄文時代晩期土器（1）・（2）	
図版21 岡遺跡第15次調査区	139
縄文時代晩期土器（3）・（4）、縄文時代石器（1）	
図版22 岡遺跡第15次調査区	140
縄文時代石器（2）～（5）	
図版23 岡遺跡第15次調査区	141
縄文時代石器（6）～（9）	
図版24 岡遺跡第15次調査区	142
縄文時代石器（10）・（11）、弥生時代～古代遺物、中世遺物、近世遺物	

第 I 章 はじめに

第 1 節 調査に至る経緯

東九州自動車道は、福岡県北九州市を起点として大分・宮崎両県の東海岸部を經由し鹿児島県鹿児島市に至る総延長 436 kmの自動車専用道路である。宮崎県内では延岡～清武間が平成元年 2 月に基本計画決定されて以降、平成 13 年 3 月に西都～清武間、平成 22 年 7 月に高鍋～西都間、平成 22 年 12 月に門川～日向間の供用が開始されている。現在、上記を除く各区間において、有料道路方式と新直轄方式の併用により、道路建設事業が進行中である。

岡遺跡が所在する日向市は東九州自動車道の日向～都農間に含まれ、平成 9 年 3 月に整備計画区間（門川～西都間）決定された。平成 10 年 12 月には門川～都農間 34 kmについて施行命令が発令され、事業が本格化している。

宮崎県教育委員会では、国の補助を得て、平成 3 年度に西都～清武間、平成 6 年度に延岡～西都間及び延岡道路、平成 9 年度に清武～日南間を対象とした広域的な分布調査を実施し、埋蔵文化財包蔵地の周知化を図るとともに各区間に関する路線協議を進めた。平成 17 年度には、日向～都農間の計画路線 19.7 km区間を対象として、更に詳細な分布調査を実施し、306,700 m²の調査対象面積を道路公団（現西日本高速道路株式会社）に提示した。その後、暫定二車線化や工法変更による対象面積の変更等協議を重ねた結果、道路建設によって影響を受ける 32 遺跡 261,400 m²について、やむを得ず記録保存のための発掘調査を実施することとなった。平成 20 年 7 月には西日本高速道路株式会社と宮崎県知事の間で『埋蔵文化財発掘調査協定書』が締結され、同年から調査に着手し、現在も継続中である。

岡遺跡は調査対象面積が約 40,000 m²と広く、用地買収や家屋移転等の関係から全面的な調査は不可能であったため、ある程度まとまった面積が確保できた時点で、細切れに調査を実施している。平成 22 年 1 月に第 1 次調査を開始し、平成 23 年度までに第 15 次調査を終了している。なお、調査

の詳細については、第 4 節を参照されたい。

第 2 節 調査の組織

本遺跡の調査・整理報告作成に係る組織については、平成 23 年度に刊行された『宮崎県埋蔵文化財センター調査報告書第 212 集』「岡遺跡第 III 章」において第 8 次調査までの組織を明記しているの

ので、ここでは第 9 次調査以降の組織のみを示す。

事業主体	西日本高速道路株式会社	
調査主体	宮崎県教育委員会	
教育長	渡辺 義人	(平成 23 年度)
	飛田 洋	(平成 24 年度)
教育次長	亀田 博昭	(平成 23 年度)
	高原みゆき	(平成 24 年度)
教育次長	飛田 洋	(平成 23 年度)
	長濱美津哉	(平成 24 年度)
教育次長	山本 真司	(平成 23・24 年度)
事業調整	宮崎県教育庁文化財課	
文化財課長	田方 浩二	(平成 23・24 年度)
課長補佐	矢野 雅博	(平成 23 年度)
	壹岐 進	(平成 24 年度)
埋蔵文化財担当		
主幹	谷口 武範	(平成 23・24 年度)
主査	堀田 孝博	(平成 23・24 年度)
調査実施	宮崎県埋蔵文化財センター	
所長	森 隆茂	(平成 23 年度)
	北郷 泰道	(平成 24 年度)
副所長	北郷 泰道	(平成 23 年度)
	佐々木真司	(平成 24 年度)
総務課長	坂上 恒俊	(平成 23・24 年度)
調査第一課長	長津 宗重	(平成 23・24 年度)
総務担当リーダー		
副主幹	長友由美子	(平成 23 年度)
〃	高園 寿恵	(平成 24 年度)
調査第一担当リーダー		
主幹	飯田 博之	(平成 23・24 年度)
(第 9 次調査)		
調査第一課	調査第一担当	
主事	久保田陽香	(平成 23 年度)
主査	野崎 一人	(平成 23 年度)

主査	松林 豊樹	(平成 23 年度)
(第 10 次調査)		
調査第一課	調査第一担当	
主査	竹下 昭彦	(平成 23 年度)
主任主事	二方 和也	(平成 23 年度)
(第 11 次調査)		
調査第一課	調査第一担当	
主査	竹下 昭彦	(平成 23 年度)
主任主事	二方 和也	(平成 23 年度)
(第 12 次調査)		
調査第一課	調査第一担当	
主査	松浦 朋彦	(平成 23 年度)
主査	橋本 英俊	(平成 23 年度)
主査	竹下 昭彦	(平成 23 年度)
主任主事	二方 和也	(平成 23 年度)
(第 13 次調査)		
調査第一課	調査第一担当	
主査	竹下 昭彦	(平成 23 年度)
主任主事	二方 和也	(平成 23 年度)
主査	松林 豊樹	(平成 23 年度)
(第 14 次調査)		
調査第一課	調査第一担当	
主査	橋本 英俊	(平成 23 年度)
主査	松浦 朋彦	(平成 23 年度)
(第 15 次調査)		
調査第一課	調査第一担当	
主査	松浦 朋彦	(平成 23 年度)
主査	橋本 英俊	(平成 23 年度)
主査	松林 豊樹	(平成 23 年度)
(整理作業及び報告書作成)		
主事	久保田陽香	(平成 23・24 年度)
主査	竹下 昭彦	(平成 23・24 年度)
主査	松浦 朋彦	(平成 23・24 年度)
主査	松林 豊樹	(平成 23 年度)
主査	柳田 晴子	(平成 23・24 年度)
主査	日高 広人	(平成 24 年度)
主査	橋本 英俊	(平成 24 年度)
主事	中川みな子	(平成 24 年度)

第 3 節 遺跡の位置と環境

3-1. 地理的環境

岡遺跡は、日向市大字平岩字岡に所在する。日向市は宮崎県の北東部に位置し、東は日向灘を臨み、西は九州山地が海岸近くまで迫る起伏に富んだ地形を呈する。海岸線の多くは出入りの多い沈水海岸の様相を呈しており、美々津や細島など、古くから良港として利用されている。現在の日向市街地が広がる日知屋から財光寺付近の低地は、中央を東流する塩見川による開析や完新世の海成沖積等によって形成されたもので、財光寺には小倉ヶ浜と平行する数条の自然堤防がみられる。この沖積低地を取り囲むように迫る沈水型山麓線の裾部には狭小な海岸段丘がみられる。市内の大部分を山地が占め、海岸線の直近まで迫り、平野や扇状地は極端に狭く散在的である。陸地の基盤にあたるのは、主に四万十累層群と尾鈴山酸性岩類である。日向層群は、それまで海底にあったものが新生代古第 3 紀～新第 3 紀にかけて陸地化したもので、砂岩、泥岩、頁岩から構成されている。一方、尾鈴山酸性岩類は、流紋岩、石英斑岩、凝灰岩等の特徴を示しており、日向岬一帯～耳川北域の海岸線では波蝕を受けた柱状節理を見ることができる。この 2 つの基盤は、東郷地区の坪谷から塩見地区の坪谷川、耳川、塩見川南岸に続く遠見山断層線によって分かれ、この断層の北部が四万十累層群、南部は尾鈴山酸性岩類であり、岡遺跡が所在する平岩地区は、断層よりも南部に位置している。

本遺跡は、標高約 20m～30mの海岸段丘上に立地しており、遺跡の南側には吉野川の支流である高森川が遺跡を横切るように流れている。

3-2. 歴史的環境

岡遺跡が所在する旧日向市域では、細島地区 1、日知屋地区 17、富高地区 18、塩見地区 18、財光寺地区 17、平岩地区 21、幸脇地区 5、美々津地区 20 の合計 117 遺跡が確認されている(第 1 図)。

旧石器時代

平岩地区には、旧石器時代の遺跡は 5 箇所確認されている。標高 20mの海岸段丘上に位置している中別府遺跡では、小型のナイフ形石器が出土している。本市で出土した石器の石材の多くは、本

県五ヶ瀬川流域から採取される無斑晶流紋岩や大分県姫島産黒曜石などが使われており、この時期から既に大分県との交流が行われていたことを窺わせる。

縄文時代

平岩地区では、縄文時代の遺跡は10箇所を確認されており、その多くが海岸段丘上に位置している。金ヶ浜遺跡は、2基の集石遺構が無文土器を伴う層から検出され、中別府遺跡では、塞ノ神式土器が出土している。平岩地区の南に隣接する幸脇地区の権現崎遺跡では、押型土器が出土し、7基の集石遺構が円弧を描くような位置から検出され、その中心付近から柱状岩が立った状態で出土している。

後期から晩期になると、本市内では遺跡数が増加する傾向にあるが、集落の発見例は未だなく、東草場遺跡で円形プランの竪穴建物跡が1軒検出されているのみである。

弥生時代

平岩地区では、中別府遺跡で中期の下城式とみられる甕形土器が出土しているのみである。この他、秋留、馬込、本村、坂元、原、鶴毛Bなどの遺跡が散布地として知られている。隣接する財光寺地区では、松原第3～第5遺跡では表採ではあるが、方形石庖丁が確認されている。

古墳時代

市内には、28基の古墳が確認されていたが、多くが滅失している。6基あったとされる前方後円墳についても1基を残すのみである。

平岩地区においては、平岩小中学校の敷地に旧県指定岩脇2号墳～7号墳が所在し、そこから南西約1kmに1号墳がある。いずれも墳丘の大部分を失っているが、これらのうち5基が前方後円墳であったとされている。隣接する幸脇地区には、旧県指定岩脇8号墳～11号墳があり、いずれも円墳であったとされている。10号墳とみられる墳丘跡から6世紀後半～末の須恵器壺と提瓶を採集している。この他、近隣には、財光寺地区の比良山古墳があり、5世紀後半～6世紀初頭とみられる須恵器の高杯を採集している。

古代

布痕土器が、市内2箇所の遺跡から出土してい

るが、調査例が少ないため詳細は不明である。本市内には『延喜式』に記載された西海道のルートが通っていたとされ、周辺には刈田、美弥といった駅の想定地があり、美弥駅が美々津に比定されている。平岩地区は、刈田～美弥間に所在しており、官道のルートは、おおむね現在の旧国道10号線沿いを通っていたとも言われているが、はっきりとはしていない。地区内には、官道関連地名として、坂ノ下、馬込、峠、馬溝等の地名がみられる。

中世

市内には、伊東氏48城の一つである日知屋城、門川城とともに「日向三城」と呼ばれた塩見城跡や中山遺跡があり、中世の掘立柱建物跡や輸入陶磁器等が確認されている。

平岩地区には、本村城が所在し、現在も残る本村という地名から、かつて平岩の中心地であったともされている。本村城は、丘陵の先端付近を削平し、3か所の曲輪を設け、3つの堀切を刻んでいるが、周辺との比高差は大きくない。この本村城跡の約200m東には、曹洞宗幸福寺が所在し、文禄5(1595)年に松葉源之丞景守が創建した古刹と伝えられている。平岩地区では、この他に秋留城、初木ノ城の城跡がある。

近世

近世の遺跡は調査例が少なく、詳細は不明であるが、岡遺跡(第7次調査)では、中世または近世と思われる掘立柱建物跡が5棟検出されており、柱穴の埋土からは洪武通寶や寛永通寶の銭貨が出土している。現在の日向市域は、江戸時代初期に県藩(延岡藩)に属していたが、元禄3(1690)年に発生した山陰・坪屋村百姓逃散一揆による政道不行届を問われ、藩主有馬氏が元禄5(1692)年に越前国糸魚川に転封になった。それにともない、日向市域のほとんどが幕府領となり、以後、幕府直轄の代官所支配を受けて幕末に至っている。

〈参考・引用文献〉

宮崎県 1987 『土地分類基本調査』「日向」

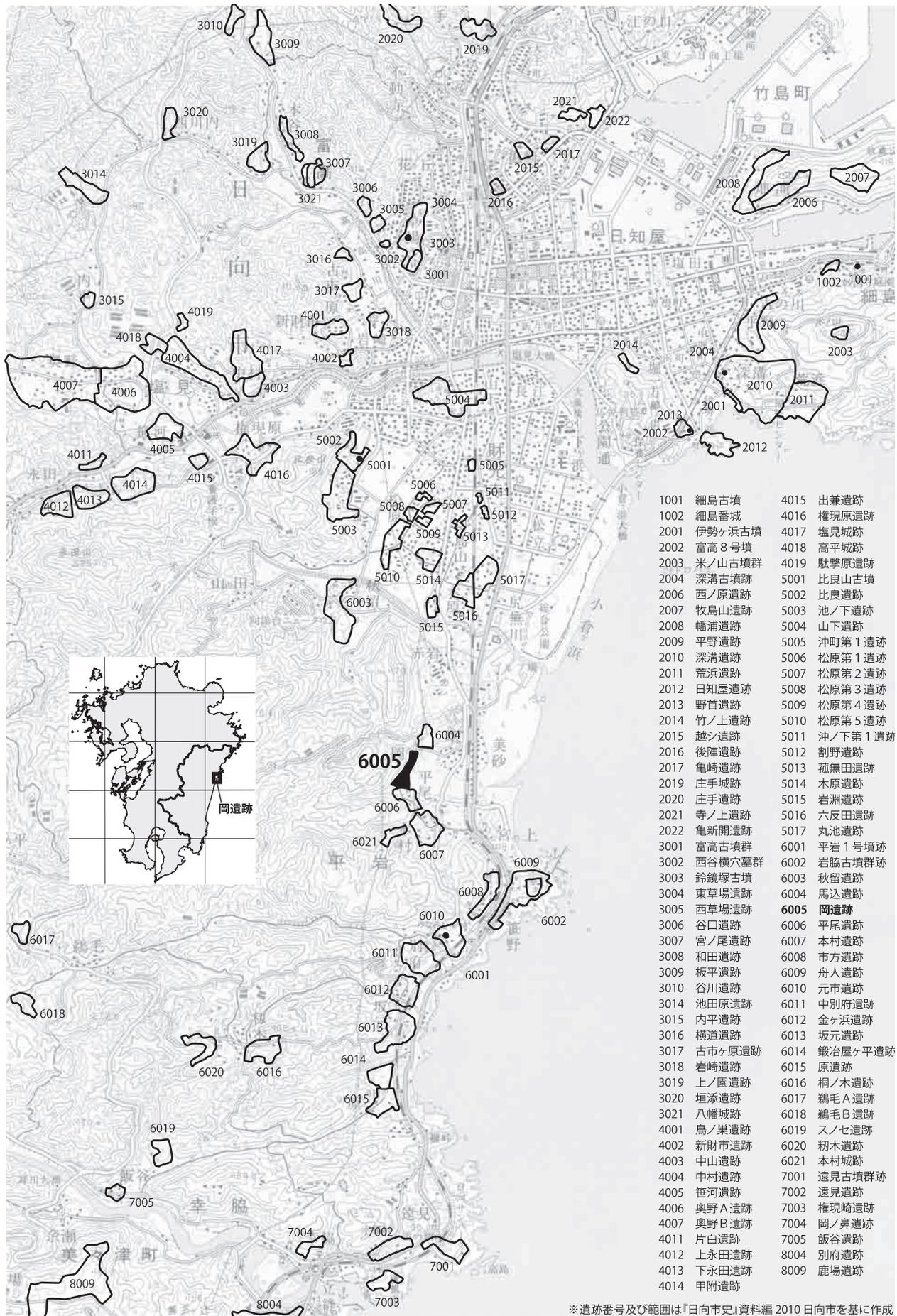
宮崎県埋蔵文化財センター 2004 『中山遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第93集

日向市教育委員会 1985 『日向市遺跡詳細分布調査報告書』

日向市史編纂委員会 2006 『日向市史 自然編』日向市

日向市史編纂委員会 2009 『日向市史 資料編』日向市

日向市史編纂委員会 2010 『日向市史 通史編』日向市



※遺跡番号及び範囲は『日向市史』資料編 2010 日向市を基に作成

第1図 岡遺跡及び周辺遺跡分布図 (1:50,000)

第4節 調査の概要

岡遺跡は全体の調査対象面積が40,000㎡を測る。調査面積を確定するため、用地交渉がまとまった箇所から発掘調査を随時行うこととなった(第2図)。第1～3次調査は平成21年度に実施し、第1次調査が第6次調査として継続され、第4～8次調査は平成22年度に行われ、第5次調査が第7次調査として継続された。以下、平成23年度に調査された第9次調査から第15次調査について述べる。

第9次調査は、第6次調査の西側に位置し、平成23年5月9日から平成23年11月7日まで2,580㎡(追加分を含む)を対象に調査を実施した。もともと緩やかな斜面地であったところを畑とするために大きく改変したと考えられる。この時に第6次調査区で多く見られた二次堆積アカホヤ火山灰層が削られたと思われ、第9次調査区では一部でしか二次堆積アカホヤ火山灰が残存していなかった。調査区内からは旧石器時代や縄文時代、中近世の遺物が出土した。詳細については第II章で記述する。

第10次調査は、平成23年6月22日に対象面積6,100㎡に対し調査を実施した。重機による掘削を行い、トレンチを5箇所設定し調査をおこなったが、遺物・遺構は確認されなかった。調査区は、尾根地形であった部分を削平し、盛り土をしたと考えられ、トレンチからは造成土や水田跡と思われる層が確認された。

第11次調査は、平成23年7月6日から平成23年7月8日までの3日間で3,950㎡を対象に調査を行った。重機による掘削を行い8本のトレンチを設定した。調査区の東側では第9次調査区に続く堆積がみられたことから、720㎡が第9次の追加分となった。また、調査区の中央に設定したトレンチでは二次堆積アカホヤ火山灰層中から縄文時代晩期土器が出土し、その他のトレンチからは土坑・ピット等の遺構が確認された。そのトレンチの周辺1,950㎡を調査対象地とし、第13次調査区へと継続する。調査地南端の高森川に面している範囲は傾斜が急であり、遺構・遺物の残存する可能性は低いと思われ、宅地跡の部分に関しては、周囲より一段低くなっており、加えて宅地の基礎があ

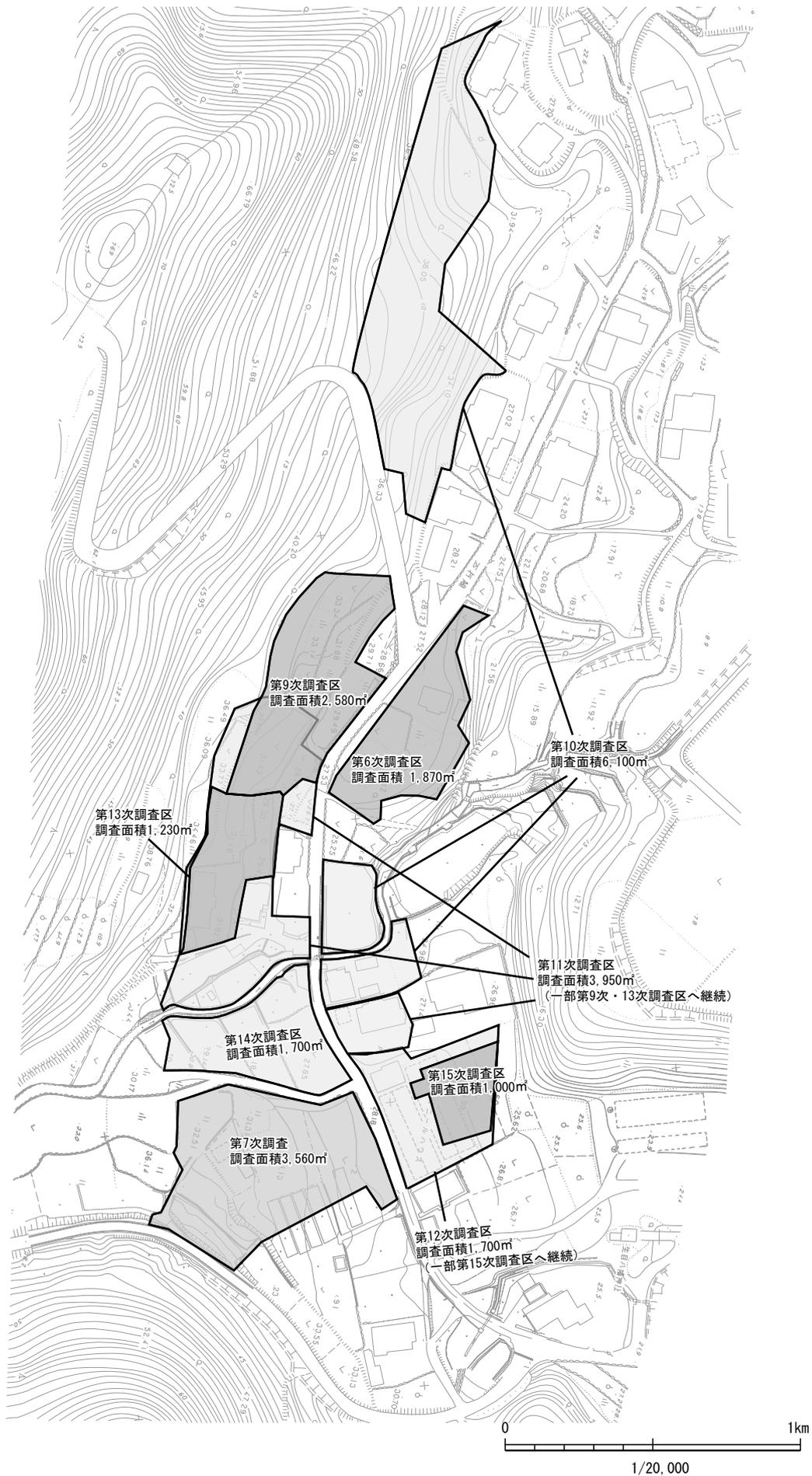
るため、遺構・遺物が残存する可能性は低いと思われ、調査対象地外とした。

第12次調査は、平成23年8月1日から平成23年8月3日までの3日間で調査対象面積1,700㎡を対象に行った。調査当時は平坦な地形であるが、西側は段丘、東側は崖になっており、旧地形は、西側から東側にかけて、緩やかな斜面地であったと考えられる。重機による掘削を行い、調査区内に7本のトレンチを設定した。調査区の西側では良好な堆積が確認されず、遺構・遺物等も確認されなかった。東側では第7次調査区の遺物包含層に相当する堆積が確認され、さらには縄文土器や姫島産黒曜石製剥片、近世の陶磁器等が出土し、ピットも1基検出された。よって、調査対象地の東側1,000㎡は第15次調査へ継続する。

第13次調査は、平成23年8月29日から平成23年11月28日まで調査を実施した。調査区は、近年まで宅地や畑等に使用されており、調査着手時には石垣によって2段の段差のある地形を呈していた。第11次調査の結果、旧地形は緩やかな斜面地であり、斜面を切って平坦に造成したことが明らかになった。表土下に縄文時代晩期を主体とする遺物包含層が堆積し、Ⅲ層からは遺物の出土は少量であったが縄文時代早期の遺物が出土した。詳細については第III章で記述する。

第14次調査は、平成23年9月6日から平成23年9月7日まで、調査面積1,700㎡を対象に実施した。調査区内は石垣により5段に区切られ、西から東に標高を下げる。調査以前は果樹栽培や水稻耕作として利用されていた。重機による掘削を行い、10本のトレンチを設定した。一部のトレンチでは二次堆積アカホヤ火山灰層が確認できたが、ほとんどのトレンチで表土または造成土の下層に礫層が確認され、包含層は認められなかった。

第15次調査は、平成23年9月26日から平成23年12月27日まで、第12次調査の継続で1,000㎡を対象に実施した。旧地形は第7次調査区から北東部に向けて緩やかに傾斜する谷地形を形成しており、耕作土の下に客土を入れ、平坦に造成している場所が見られた。調査区内からは、縄文時代晩期を中心とした遺物が多く出土した。詳細については第IV章で記述する。



第2図 岡遺跡調査区全体図

第Ⅱ章 岡遺跡第9次調査の成果

第1節 調査の方法と経過

1-1. 発掘調査の方法と経過

本調査区は、微地形により形成された谷地形であることから、調査区全体の土層堆積状況を確認する必要があった。現地形に沿ってトレンチを設定し、地形や内容を確認した上で、遺構の検出を行った。

先行トレンチの結果、調査区全体が近代の時期に緩斜面を切り盛り造成し、石垣が作られ、3段の平坦地を作り出していること、土石流が幾度かに渡り堆積していることが判明した。土層観察用のベルト（Tr2・Tr7）を残した状態で、掘削を行った（第4図）。

調査区は、近代の石垣造成により表土剥ぎを行っても、3段の差が生じていた。そのため、段毎に掘り下げを行い、遺物の取り上げは各段の一括で行った。その後10mグリッドの設定を行い（第4図）、グリッドによる取り上げへと移行した。掘削を進めていくと調査区内が斜面地となるため、グリッド杭が作業の妨げになる可能性があった。そのため、数本のみを杭で打ち込み、それ以外は遺物取り上げ時のグリッド確認用として、仮杭を設定するに留まった。包含層内から出土した遺物はトータルステーションで出土位置を記録し、取り上げを行った。

調査は調査区の3・2・1段目の順番に行い、各段からは樹痕の可能性のあるものも含むが、多数のピットと集石遺構等を検出した。1段目では平面プランが四角の小穴が列をなして検出され、3段目では掘立柱建物跡の一部を検出した。この柱穴が調査区外の4段目まで続いていたため、4段目を拡張した。また、隣接する岡13次調査が8月から調査に入るため、第13次の排土置き場の関係上、調査区南側部分の拡張も行い、調査区全体で1,200㎡の拡張を重機により行った。先に拡張した調査区南側部分（2段目）からの調査を行い、そこからは、1段目と同じような小穴が3列並んで検出された。

遺構は主にIV層とV層から検出され、IV層から

は集石遺構、V層からは集石遺構と炉穴が検出された。VI層下位は調査区南側の範囲で層毎に掘削を行った。遺構はVI層上面で礫群を1基検出したのみである。先行トレンチの結果、VIIc層下位にも旧石器時代の遺物が出土しており、VIIc層下位の堆積が調査区のJ4・J5・K4Gr付近のみで確認されたため、その部分の調査を重点的に行った。

検出された遺構については半截を基本とし、埋土状況を確認後、完掘をおこなった。また、7基検出された縄文時代の集石遺構については、残存状態が比較的良好と判断したもののみ現地にて構成礫の計測を行った。その後、すべての礫を廃棄した。

遺構の図化記録は個別遺構ごとに進め、縮尺は1/20または1/10で実施した。遺構図の作成は、平面図と断面図、レベルまでを基本とし、必要としたもののみ土層断面図を記入した。写真記録は主として35mmモノクローム・リバーサル写真およびデジタルカメラを併用し記録を行った。

発掘調査の経過は調査日誌抄で代える。

調査日誌抄

平成23（2011）年度

0509 環境整備、安全対策等。

0516 重機による表土剥ぎ。

0519 作業員21人雇用。3段目II層掘削。

0602 3段目小穴・柱穴列2列検出。

0603 集石遺構2基検出。

0622 2段目に移行し小穴検出。

0624 2段目V層遺構検出。

0630 2・3段目ピット完掘。

0704 1段目、重機による排土移動・表土剥ぎ。

0707 1段目南側II層掘削。小穴検出。

0726 溝状遺構検出。

0728 小穴・遺構完掘。

0803～0804 調査区拡張部、重機による表土剥ぎ。

0808 4段目遺構検出。

0811 調査区南側1・2段目II層掘削。

0823 調査区南側（2段目）遺構掘削。

- 0825～26 調査区南側（2段目）調査終了。
4段目表土剥ぎ。
- 0829 岡第13次調査開始。
- 0830 波が高く、風が強い日が続く。台風の影響か？
- 0906 掘立柱建物跡柱穴掘削。西都原考古博物館より藤木主査、崎田主査来跡。
- 0912 Tr7延長部分AT下より石核出土。
- 0921 4段目遺構完掘。柱穴から碁笥底皿等出土。
- 0922 集石遺構1基検出。
- 0927 集石遺構2基検出。
- 0928 礫群1基検出。
- 1002 現地説明会（参加者56名と盛況）
- 1003 岡第15次調査開始。
- 1007 縄文時代早期面と掘立柱建物跡の空撮。
- 1011 3段目Ⅱ層一部残存のため掘削。小穴検出。
- 1018 SP1・2検出。
- 1019～20 旧石器面まで重機による掘り下げ。
SP3検出。旧石器面の掘削。
- 1027 旧石器面の空撮。
- 1031 作業員雇用終了。実測の日々続く…。
- 1107 調査終了。



調査前状況



調査風景

1-2. 整理作業及び報告書作成

埋蔵文化財センターでの整理作業は、平成23年12月から開始し、水洗、注記、計測、接合、実測、製図、写真撮影を経て、平成24年8月の期間で整理作業を行い、収蔵前整理の作業は平成24年9月に全て終了した。

石器分類については、見た目や手触り、風化の状況などを重視して行った。

石器の実測は石鏃等の剥離が細やかな石器は、作業の効率化を図るため業者に委託した。また、土層・遺構トレース、分布図等についてはデジタルトレースまたはデジタル編集作業を行い、それに伴うデジタル機器を使用した。

報告書作成にあたっては、宮崎県埋蔵文化財センター報告書マニュアルに則って作成した。



整理作業風景（実測）



整理作業風景（トレース）

1-3. 基本層序

本調査区は、調査以前は畑として利用され、近代～昭和の時期に石垣を造成するなど旧地形の改変が激しく行われたと考えられる。この時に第6次調査区で多く見られた二次堆積アカホヤ火山灰層が削平されたと思われ、第9次調査区では石垣が造られていた縁辺部にしか二次堆積アカホヤ火山灰層が残存していなかった。特に4段目においては表土除去を行うとすぐにⅧ層が確認できた。

本遺跡の旧地形は谷状の微地形によって調査区内に小さな谷が存在し、北西から南東の高森川の方へと尾根が延びる。全体としては北西から第6次調査区のある南東に向かって緩やかに傾斜しているが、北部と谷部、南部では堆積状況が異なる様相を示しており、標高差約43mの高低差をもつ緩斜面に位置することから土の流失は多かったと考えられる。また、拡張して調査を行った部分についても近世～昭和の時期に旧地形が大きく改変されており、大部分が削平を受け盛り土をされていた。旧地形としては高森川に向かって緩やかに傾斜する尾根上に位置すると考えられる。

基本層序を設定するにあたって、Tr1とTr2、Tr5、Tr7の壁面を土層観察用として利用し、土層は色調、土質によりⅠ～Ⅺ層に分層した。拡張した調査区の土層断面についてはTr1とTr7の土層断面と同一であるため、ここでは取り上げない。

以下、各層の特徴を述べ、詳細については土層断面図（第5図）に代える。

- Ⅰ層：現耕作土
- Ⅱ層：明治頃の造成土とみられ、縄文時代から近世までの遺物を含み、特に中世～近世の遺物が多く出土する。
- Ⅲ層：二次堆積したアカホヤ火山灰層で、本調査区ではほとんどみられない。縄文時代晩期から古代までの遺物が出土する。
- Ⅳ層：土石流の可能性があるが、縄文時代早期から晩期の遺物包含層。Tr1では2層に分かれて堆積し、Tr2とTr5、Tr7では1層しか堆積しない。これらは谷の微地形によって堆積・形成されたものと考えられる。
- Ⅴ層：縄文時代早期の遺物包含層。Tr1、Tr2、

Tr7では1層しか堆積しないが、Tr5においては3層に分かれて堆積する。谷の微地形によって1度に堆積したと考えられ、時期差は生じないとしⅤ層とした。

- Ⅵ層：AT 上位の旧石器時代遺物包含層。Tr5のみで3層に分層できたが、他のトレンチでは1層の堆積であった。谷の微地形によって1度に堆積したと考えられ、時期差は生じないとしⅥ層とした。また、テフラ分析によってⅥa層で、少量ながらATの火山灰を確認している。
- Ⅶ層：Tr7のⅦc層においてATがブロックで確認できたが、堆積は不安定で、ブラックバンドもブロックで堆積する。Tr1とTr2は1層の堆積であるが、Tr5ではⅧ層との漸移層で2層に分かれて堆積する。
- Ⅷ層：AT 下位の旧石器時代遺物包含層。Ⅸ層を由来とする土石流層であると考えられ、Ⅷ層は調査区のTr3からTr14にかけて広がりが確認できた。第6次調査区では、確認されていない。
- Ⅸ層：旧石器時代の遺物を含む。Tr1とTr7において確認した。
- Ⅹ層：Ⅸ層からⅪ層の漸移層と考えられる。Tr1、Tr7において確認した。
- Ⅺ層：地山層。下位では岩盤となる。

本遺跡は、昨年度調査が行われた近接する岡遺跡（第6次）調査区と土層の堆積状況に類似性が見られるため、第6次調査区の基本層序もここで述べる（第3図）。

- Ⅰ層：表土
- Ⅱ層：二次堆積したアカホヤ火山灰層
 - Ⅱa層 縄文時代早期末～古代末までの遺物を包含している。古代末までに形成されたものと思われる。
 - Ⅱb層 縄文時代晩期の遺物が多く含むが、弥生時代終末～古墳時代初頭のものも比較的多く混じる。
 - Ⅱc層 遺物などは確認されなかった。一次堆積のアカホヤ火山灰層の可能性がある。

Ⅲ層：非常に粘性が強く、φ2～5mmの白色・赤色の軽石、拳大の礫が多く混ざる。土石流により形成されたものと考えられ、縄文時代早期の遺物を含む。

Ⅳ層：旧石器時代～縄文時代早期の遺物包含層と思われ、断続的に堆積しており、粘性・色調の違いでⅣa層とⅣb層とに細分される。縄文時代早期前葉の遺構は、Ⅳa層～Ⅳb層の間に営まれている。

Ⅳa層 φ2～5mm程度の白色軽石を多く含み、わずかに拳大の礫を含む。粘性はあり、しまりも非常に強い。

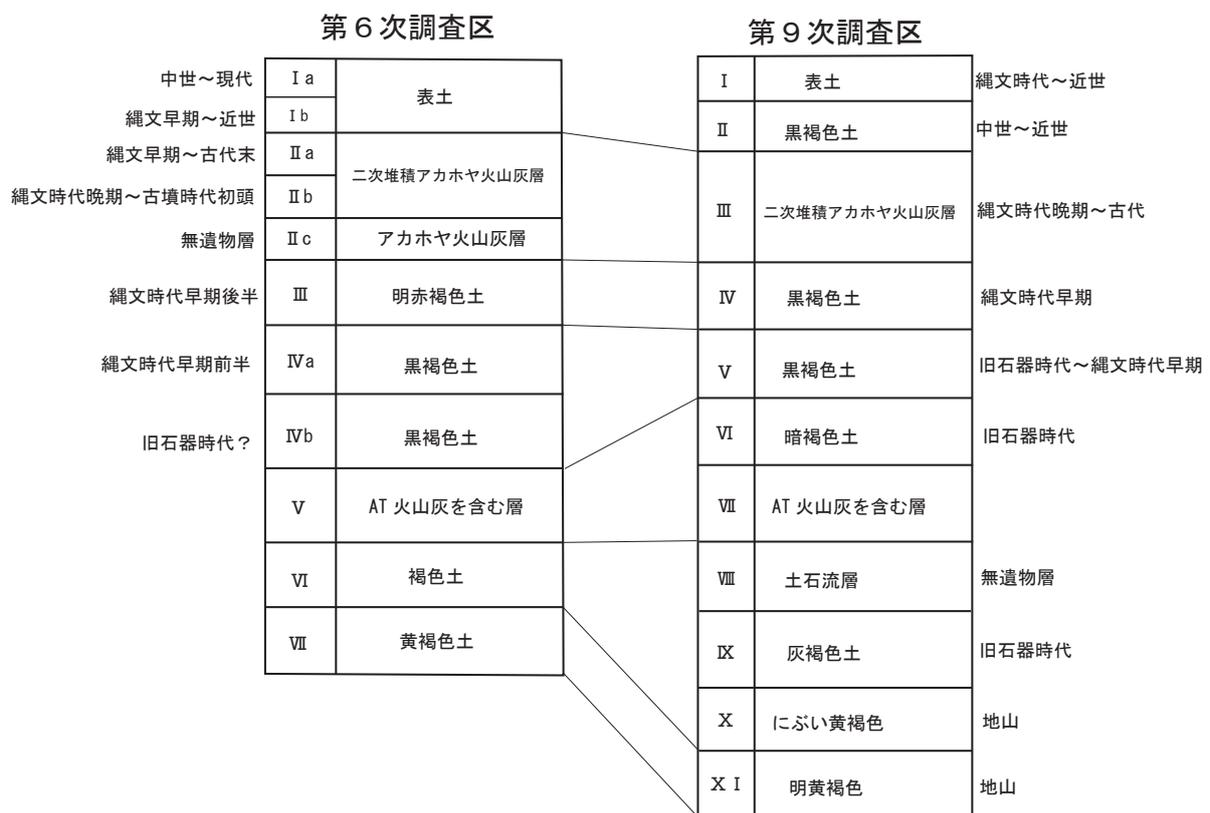
Ⅳb層 φ1～5mm程度の白色軽石をまばらに含

む。粘性はあるものの、Ⅳa層にくらべると弱く、しまりは強い。旧石器時代包含層とも考えられるが遺物はほとんど出土しない。

Ⅴ層：始良 Tn 火山灰層である。AT 粒子の混ざり方で a、b、c に分かれていた。a は黒褐色土 (7.5YR2/2) で、白色軽石が混じることより、Ⅳ層との混じり土と思われる。b 層は暗褐色土 (7.5YR3/3) で c 層はⅥ層との混じり土である。

Ⅵ層：遺構・遺物などは出土していない。

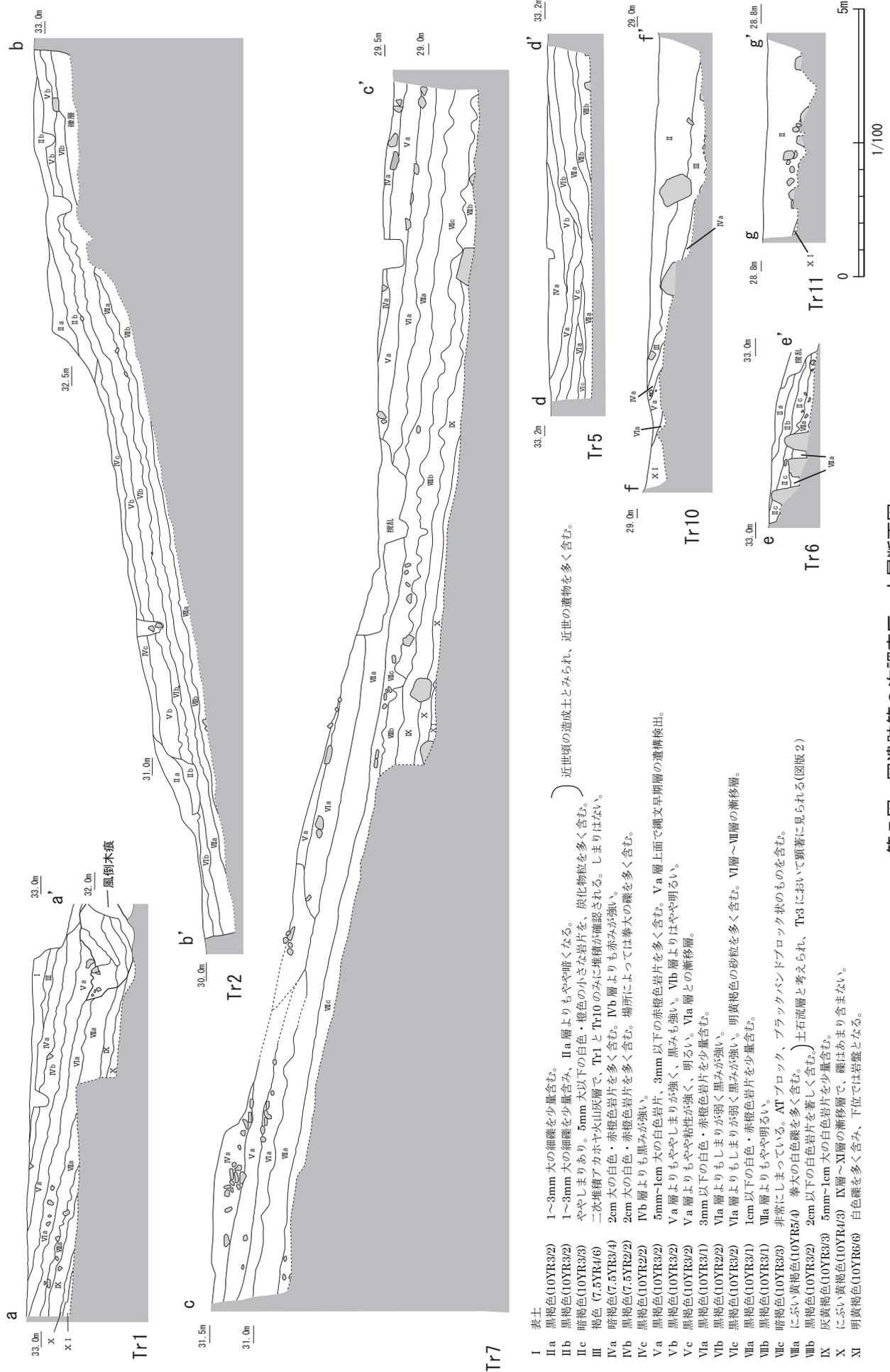
Ⅶ層：遺構・遺物などは出土していない。Ⅷ層の下は岩盤層であった。



第3図 岡遺跡第9次調査区 第6・9次基本土層比較図



第4図 岡遺跡第9次調査区 調査区周辺地形・トレンチ配置・遺構分布図



第5図 岡遺跡第9次調査区 土層断面図

I 表土

- IIa 黒褐色(10YR3/2) 1~3mm 大の細礫を少量含む。
- IIb 黒褐色(10YR3/2) 1~3mm 大の細礫を少量含む、IIa層よりもやや暗くなる。
- IIc 暗褐色(10YR3/3) ややしまりあり。5mm 大以下の白色・橙色の小さな岩片を、炭化物粒を多く含む。
- III 褐色(7.5YR4/6) 二次堆積アカホヤ火山区層で、Tr1とTr10のみに堆積が確認される。しまりはない。
- IVa 暗褐色(7.5YR3/4) 2cm 大の白色・赤褐色岩片を多く含む。IVb層よりも赤みが強い。
- IVb 黒褐色(7.5YR2/2) 2cm 大の白色・赤褐色岩片を多く含む。場所によっては拳大の礫を多く含む。
- IVc 黒褐色(10YR2/2) IVb層よりも黒みが強い。
- Va 黒褐色(10YR3/2) 5mm~1cm 大の白色岩片、3mm 以下の赤褐色岩片を多く含む。Va層上面で細文早期層の遺構検出。
- Vb 黒褐色(10YR3/2) Va層よりもややしまりが強く、黒みも強い。Vib層よりはやや明るい。
- Vc 黒褐色(10YR3/2) Va層よりもやや粘性が強く、明るい。Vla層との漸移層。
- Vla 黒褐色(10YR3/1) 3mm 以下の白色・赤褐色岩片を少量含む。
- Vlb 黒褐色(10YR3/2) Vla層よりもしまりが弱く黒みが強い。
- Vlc 黒褐色(10YR3/2) Vla層よりもしまりが弱く黒みが強い。明黄褐色の砂粒を多く含む。VI層~VII層の漸移層。
- Vla 黒褐色(10YR3/1) 1cm 以下の白色・赤褐色岩片を少量含む。
- Vlb 黒褐色(10YR3/1) Vla層よりもやや明るい。
- Vlc 暗褐色(10YR3/3) 非常にしまっている。ATブロック、ブラックバンドブロック状のものを含む。
- Vla 黄褐色(10YR5/4) 拳大の白色礫を多く含む。土石流層と考えられ、Tr3において顕著に見られる(図版2)
- Vlb 黒褐色(10YR3/2) 2cm 以下の白色岩片を著しく含む。
- IX 灰黄褐色(10YR3/3) 5mm~1cm 大の白色岩片を少量含む。
- X 灰黄褐色(10YR4/3) IX層~XI層の漸移層で、礫はあまり含まない。
- XI 明黄褐色(10YR6/6) 白色礫を多く含む、下位では岩盤となる。

第2節 旧石器時代の遺構と遺物

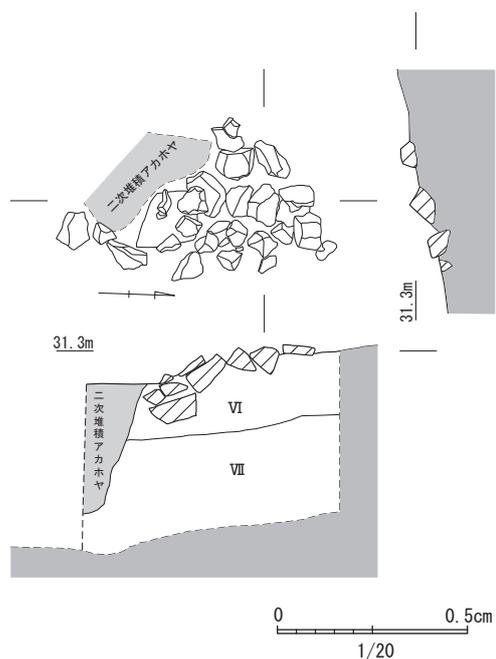
2-1. 遺構（第6図、図版2）

遺構は、J3GrVI層上面で確認された礫群1基（SI9）のみである（第7図）。

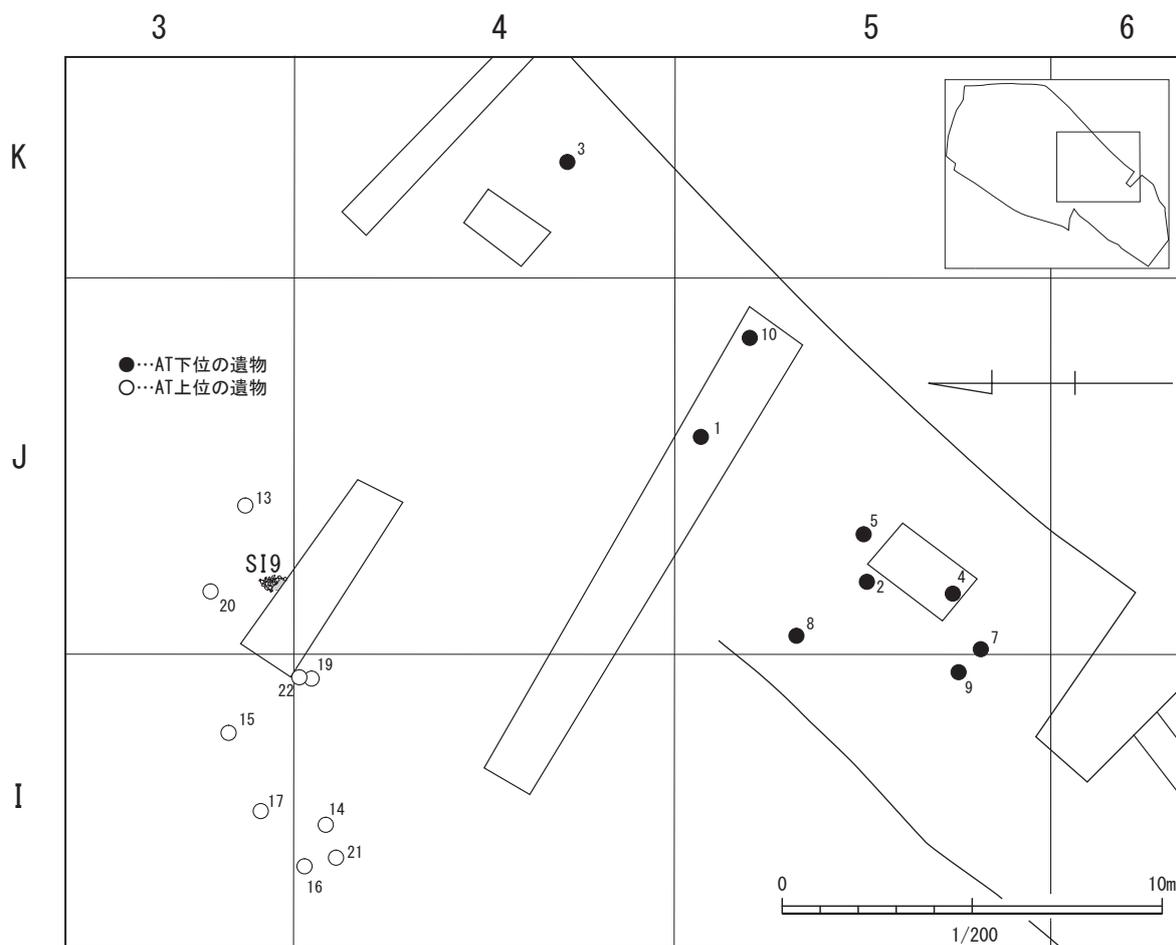
Tr8で削平した可能性があるが、現存規模は長径0.7m、短径0.4mと小さく、掘り込みは確認できなかった。礫は全て尾鈴山溶結凝灰岩で、赤化しているものを数点含むが、炭化物の広がりや、礫への付着等は確認されなかった。礫群横には、木の根による攪乱と思われる二次堆積アカホヤ火山灰の堆積が見られた。

2-2. 遺物（第8～10図1～22、図版6）

旧石器時代の遺物は、始良 Tn 火山灰層（以下AT）の上下の層で確認した。遺物は、出土した層だけでなく、形態的な特徴などから、旧石器時代の遺物として抽出したのものも含まれる。なお、遺物の出土位置や詳細な情報等については第1表を参照されたい。



第6図 岡遺跡第9次調査区 礫群（SI9）実測図



第7図 岡遺跡第9次調査区 旧石器時代の遺構・遺物分布図

(1) AT 下位 (第8・9図1～10)

AT 下位に属する石器はⅦ層～Ⅸ層で出土したもので、珪質頁岩8点、白流紋岩1点、黒流紋岩1点、石英1点で総数11点出土した。そのうち、石錐1点、スクレイパー2点、剥片等6点、石核1点の図化を行った。

石錐 (第8図1)

表面右下に、わずかに自然面を残す横長剥片を素材として、左側縁は表面から、右側縁は主要剥離面より加工を行い、錐部を作出している。

スクレイパー (第8図2・3)

2は横長剥片を素材とし、下縁には正面から細かな加工を施し、刃部を作出している。なお、上縁には微細剥離痕が見られる。3は表面右側縁から左側縁下部にかけて礫面が残存する。表面の左側縁および下部に主要剥離面より加工を行い、刃部を作出している。また、裏面の左側縁は、裏面に平坦剥離が行われ、打瘤除去作業を行っている。

二次加工剥片・剥片 (第8・9図4～9)

4は二次加工剥片である。厚みのある幅広の剥片を素材とし、両側縁には粗い二次加工が施され、表面下部には礫面を有する。5は微細剥離のある剥片で、平坦打面を有する幅広の剥片を素材としている。表面左側縁上部から中部、右側縁中部、主要剥離面下縁に微細剥離痕が見られる。なお、右下には礫面が残存する。6は微細剥離のある剥片で、礫面打面を有する横長剥片を素材としている。表面下縁に微細剥離痕が見られる。7～9は剥片である。

石核 (第9図10)

AT 下位の石核は1点のみの出土である。

10は、打面を転移させながら剥片剥離作業が行われている。なお、正面では幅広の剥片が作出されている。

(2) AT 上位 (第9・10図11～22)

AT 上位に属する石器はⅥ層から出土したもので、縄文時代早期のⅤ層との判別が難しい所もあり、層での判断がしづらかったが、礫群が検出された面の遺物は旧石器時代のものとして扱うことにした。

珪質頁岩11点、砂岩4点、ホルンフェルス10点、

チャート3点、白流紋岩1点、黒流紋岩1点、黒曜石3点、頁岩1点、石英1点で総数35点出土した。そのうちナイフ形石器1点、スクレイパー1点、剥片等6点、礫器1点、石核3点の図化を行った。なお、図化した12点の中には石垣の裏込めから出土した1点も含まれている。

ナイフ形石器 (第9図11)

幅広の剥片を素材とし、主要剥離面側から左側縁及び基部に二次加工が施されている。下縁は面的な加工を行い、基部を作り出している。先端部は折損しているが、刃部には微細剥離痕が確認できる。

スクレイパー (第9図12)

12はやや厚みのある幅広の剥片を素材とし、左側縁から下縁にかけて、主要剥離面から加工を行い、刃部を作出している。特に、下縁の刃部は急斜度に整形されている。

二次加工剥片・剥片 (第9・10図13～18)

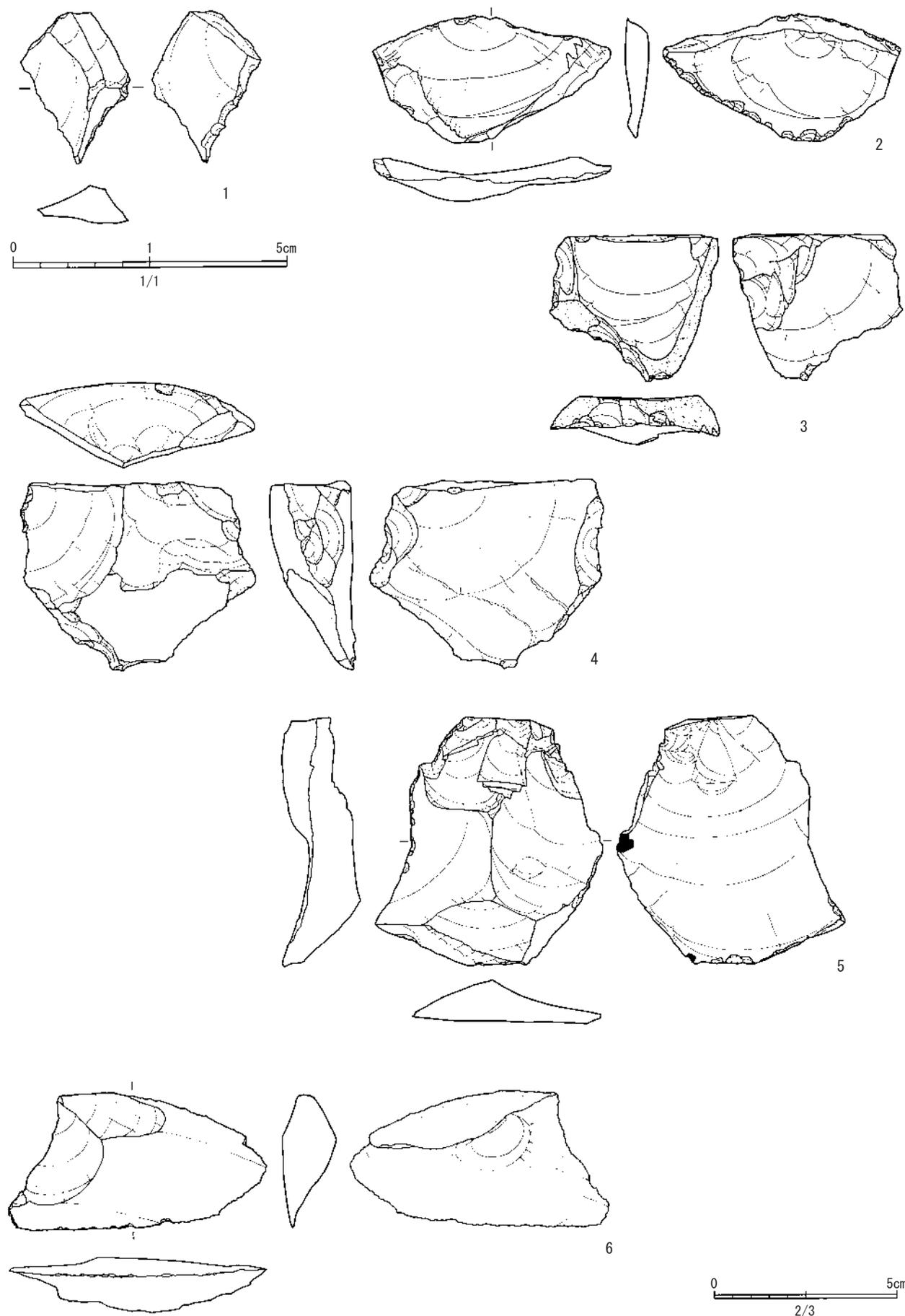
13～15は二次加工剥片である。13は縦長の剥片を素材とし、末端に表面から二次加工を施している。14は縦長剥片の右側縁下部に、主要剥離面から二次加工が施されている。15は幅広剥片の下縁などに二次加工が見られる。16・18は微細剥離のある剥片である。縦長の剥片左側縁(16)や、右側縁(18)に微細剥離が見られる。17は礫面打面を有する幅広の剥片である。表面の剥離面より、この剥片が作出される前には、4枚の剥片が剥離されたものと考えられる。

礫器 (第10図19)

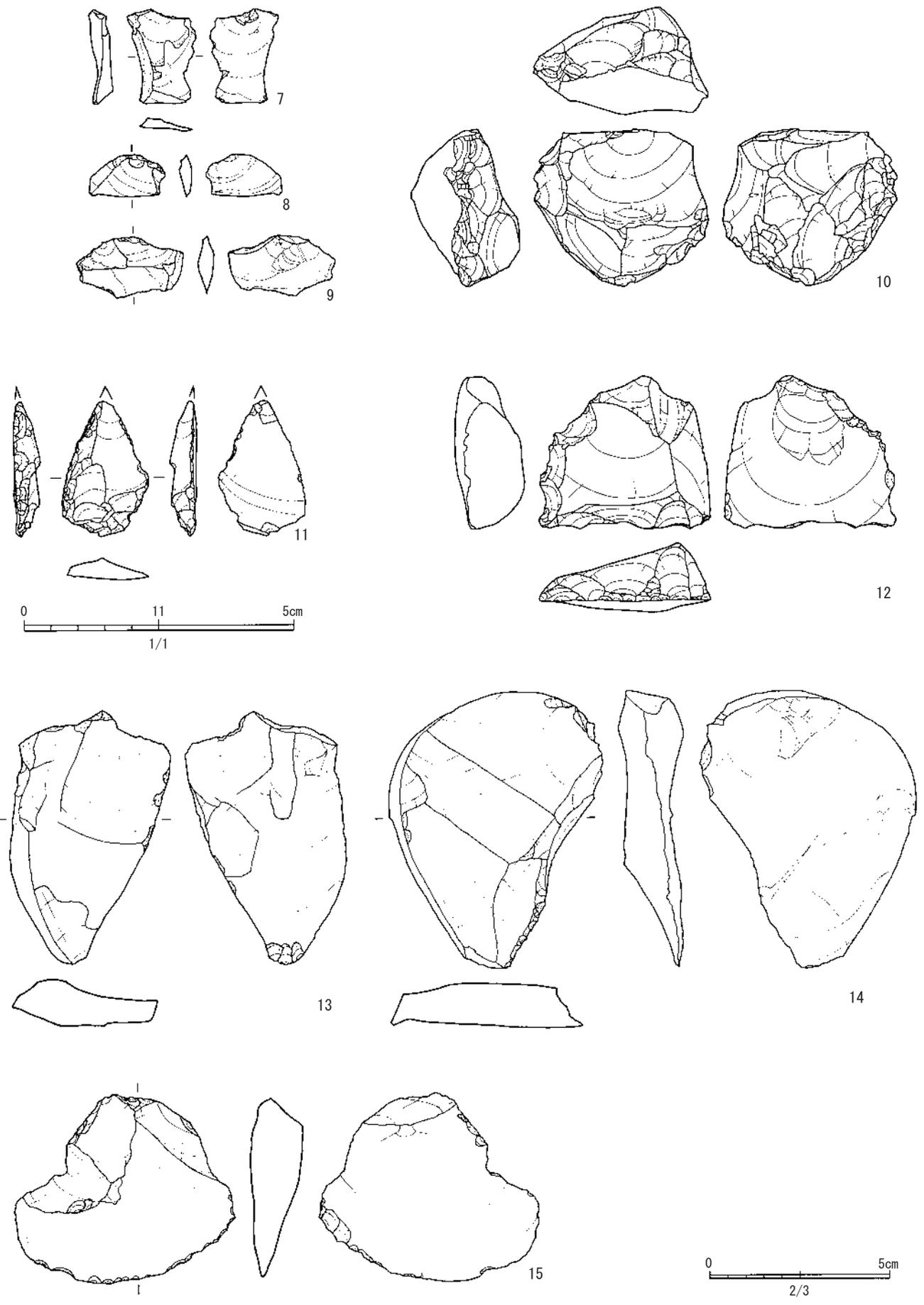
19は円礫の一端から加工を行い、刃部を作出している。刃部には、使用時についたと思われる潰痕(敲打痕)が認められる。

石核 (第10図20～22)

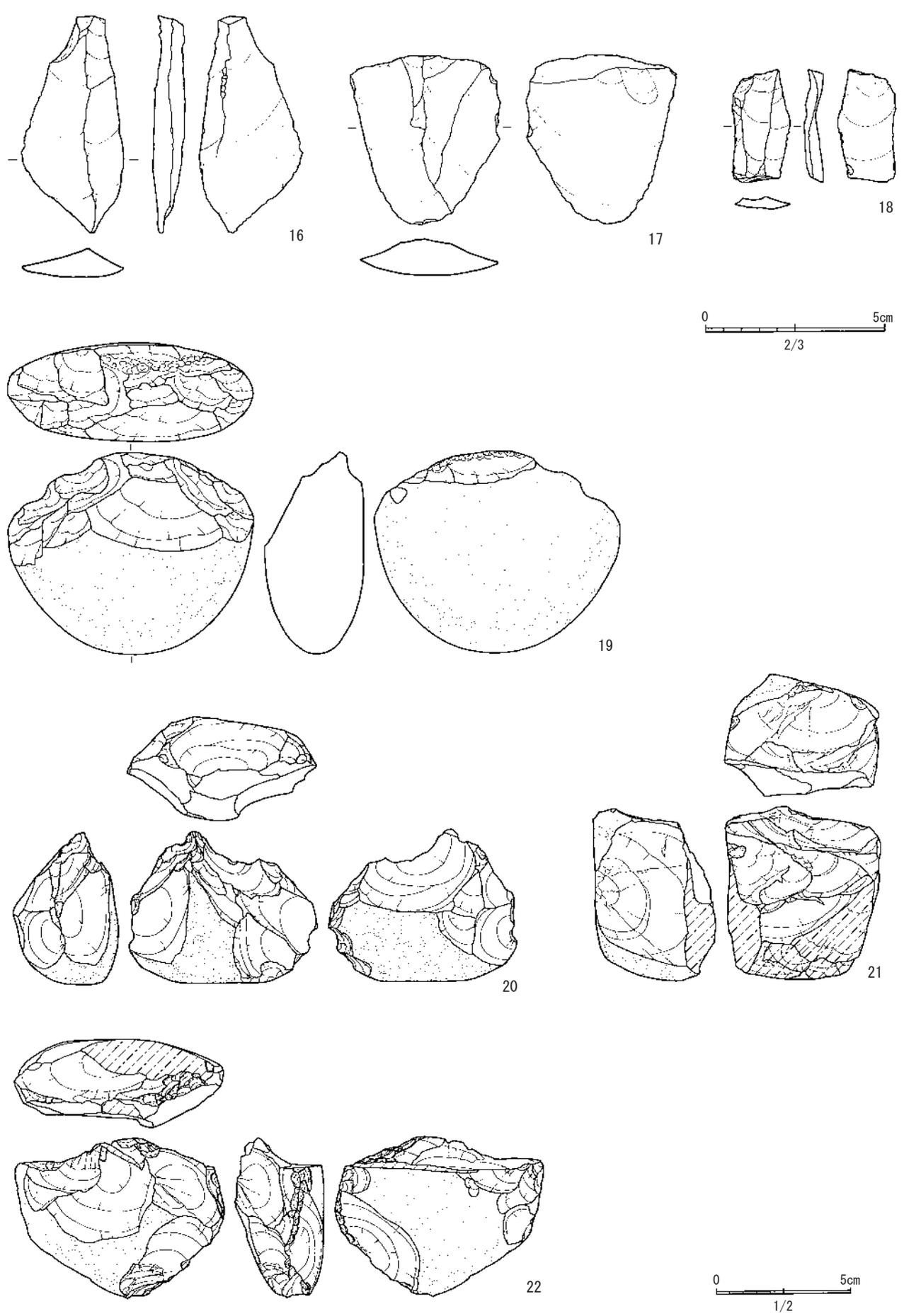
20は扁平な円礫を素材に、正面と裏面で剥片剥離作業を行っている。21は正面および上面、左側面で剥離痕が認められる。そのうち上面と左側面では礫面を打面として、そのまま剥片を剥出している。22は扁平な円礫を素材とし、正面および裏面で剥片剥離作業が行われている。右側縁には両面より二次加工が行われ、刃部を作出し、スクレイパーとして使用されたものと考えられる。



第8図 岡遺跡第9次調査区 旧石器時代石器実測図(1)



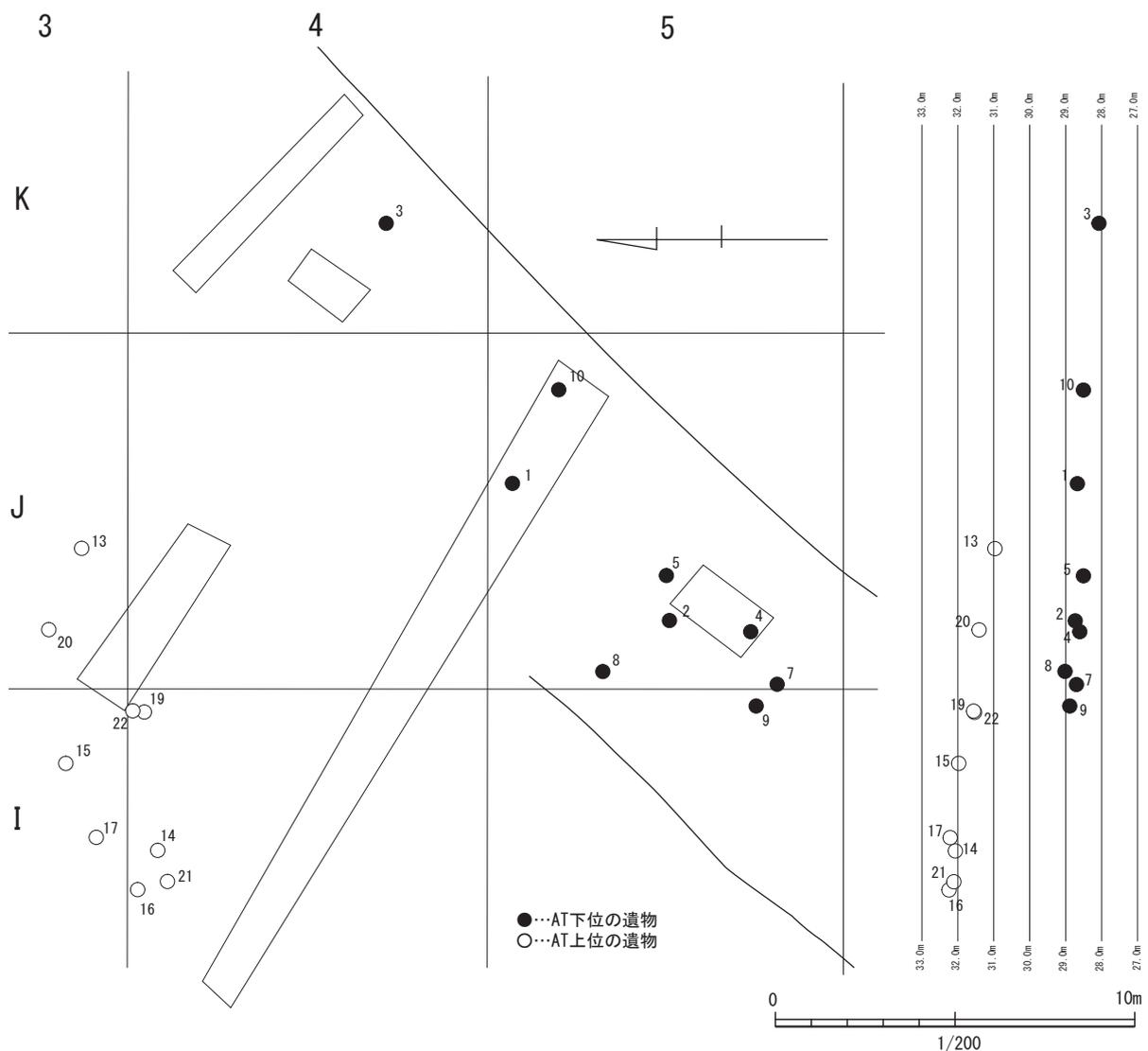
第9図 岡遺跡第9次調査区 旧石器時代石器実測図(2)



第10図 岡遺跡第9次調査区 旧石器時代石器実測図(3)

第1表 岡遺跡第9次調査区 旧石器時代石器計測表

No.	出土地点 (グリッド)	層	器種	石材	X座標	Y座標	Z座標	法量			
								長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
1	J5	IX	石錐	珩質頁岩	-68290.704	58375.754	28.739	2.79	1.99	0.68	3.1
2	J5	VIIIa中部	スクレイパー	珩質頁岩	-68295.078	58371.905	28.793	3.53	6.51	1.2	15.4
3	K4	VIIc下部	スクレイパー	珩質頁岩	-68287.185	58383.046	28.136	4.05	4.63	1.33	25.5
4	J5	VIIIa中部	二次加工剥片	黒流紋岩	-68297.332	58371.599	28.668	2.65	1.91	3.0	1.9
5	J5	IX	微細剥離剥片	白流紋岩	-68294.984	58373.166	28.569	1.19	2.11	3.0	0.9
6	J5	VIII	微細剥離剥片	珩質頁岩				3.75	7.05	1.55	30.6
7	J5	VIIIa中部	剥片	珩質頁岩	-68298.066	58370.12	28.756	1.71	2.97	4.50	2.2
8	J5	IX中部	剥片	珩質頁岩	-68293.215	58370.482	29.076	5.22	6.43	2.35	72.7
9	I5	VIIIa下部	剥片	珩質頁岩	-68297.481	58369.516	28.951	3.18	1.62	5.3	2.3
10	J5	VIIIa直上	石核	珩質頁岩	-68291.99	58378.377	28.564	4.41	4.85	3.0	63.7
11	K4	VI	ナイフ形石器	珩質頁岩				2.53	1.61	0.5	1.7
12	K4	石垣裏込め	スクレイパー	珩質頁岩				4.27	4.75	1.93	35.7
13	J3	VI	二次加工剥片	珩質頁岩	-68278.716	58373.928	31.028	7.0	4.45	1.55	40.5
14	I4	VI	二次加工剥片	珩質頁岩	-68280.825	58365.46	32.133	7.7	5.95	1.75	65.5
15	I3	VI	二次加工剥片	珩質頁岩	-68278.279	58367.909	32.044	5.25	6.05	1.5	36.3
16	I4	VI	縦長剥片	黒流紋岩	-68280.267	58364.366	32.308	6.05	2.85	0.9	11.0
17	I3	VI	剥片	珩質頁岩	-68279.121	58365.826	32.278	4.70	4.15	1.25	18.6
18	H5	VI	縦長剥片	チャート				3.18	1.62	5.3	2.3
19	I4	VI	礫器	砂岩	-68280.457	58369.344	31.598	7.57	9.14	3.71	325.4
20	J3	VI	石核	珩質頁岩	-68277.795	58371.657	31.473	5.70	7.02	3.90	148.3
21	I4	VI	石核	珩質頁岩	-68281.099	58364.594	32.173	6.48	5.77	4.55	219.7
22	I4	VI	石核	珩質頁岩	-68280.131	58369.376	31.626	6.00	7.77	3.32	168.8



第11図 岡遺跡第9次調査区 旧石器時代 遺物平面・垂直分布図

第3節 縄文時代の遺構と遺物

3-1. 遺構

遺構は縄文時代早期のみ確認した。集石遺構7基と炉穴2基をIV層～VI層で検出しており、J2Gr・J5Gr・I3Gr付近に見られる(第12図)。

これらの遺構は、IV層またはV層での検出が困難であったこと、縄文時代早期以降の土石流の影響や後世の土地改変等により本来の検出面より下がった状態で検出している。

(1) 集石遺構(第13～15図、図版2・3)

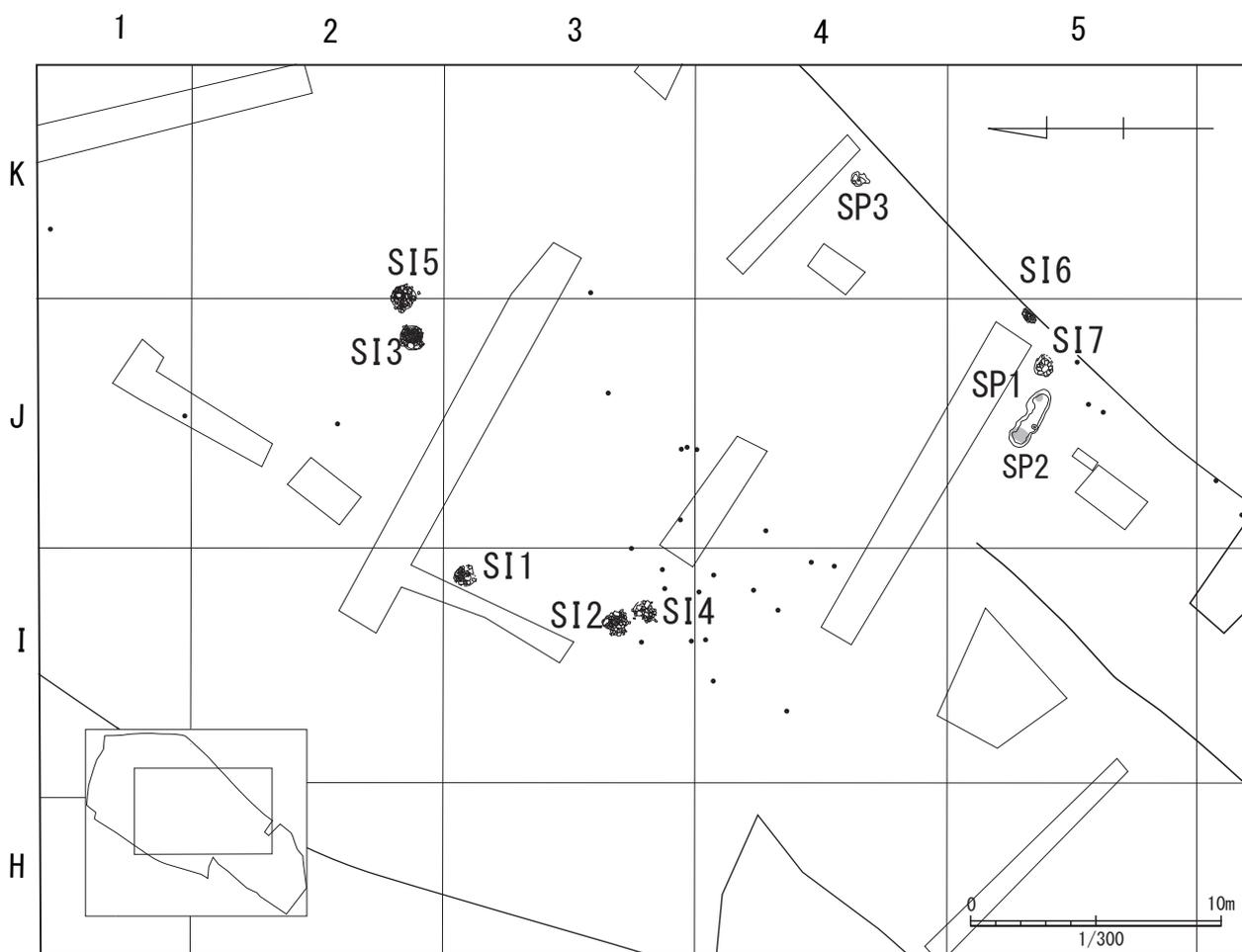
縄文時代早期の遺物包含層自体に礫を多く含むことから集石遺構の検出には判断が難しい部分もあったが、礫が密集している範囲を集石遺構と判断し7基(第2表)を検出した。特に、1段目で検出された2基に関しては、層に含まれる礫とみなしたため、掘削と同時に集石遺構内部の礫を除去した可能性がある。

配石は比較的平らな面を有し、遺構底部付近または壁面に敷き詰めるように検出できたものを配石とした。集石遺構はほとんどが配石を持つもので、配石を持たないものは7号集石(SI7)の1基であった。配石と掘り込みを有し、焼礫を内部に包含するものが集石遺構の大部分を占めるが、精査によって掘り込みのプランが確認されたものはなかった。また、本遺跡では、掘り込み面の精査について地山と埋土の違いが明確ではなく、掘り込み内の配石等の礫を取り除いた後に精査を行い、そこを掘り込み面と判断した。

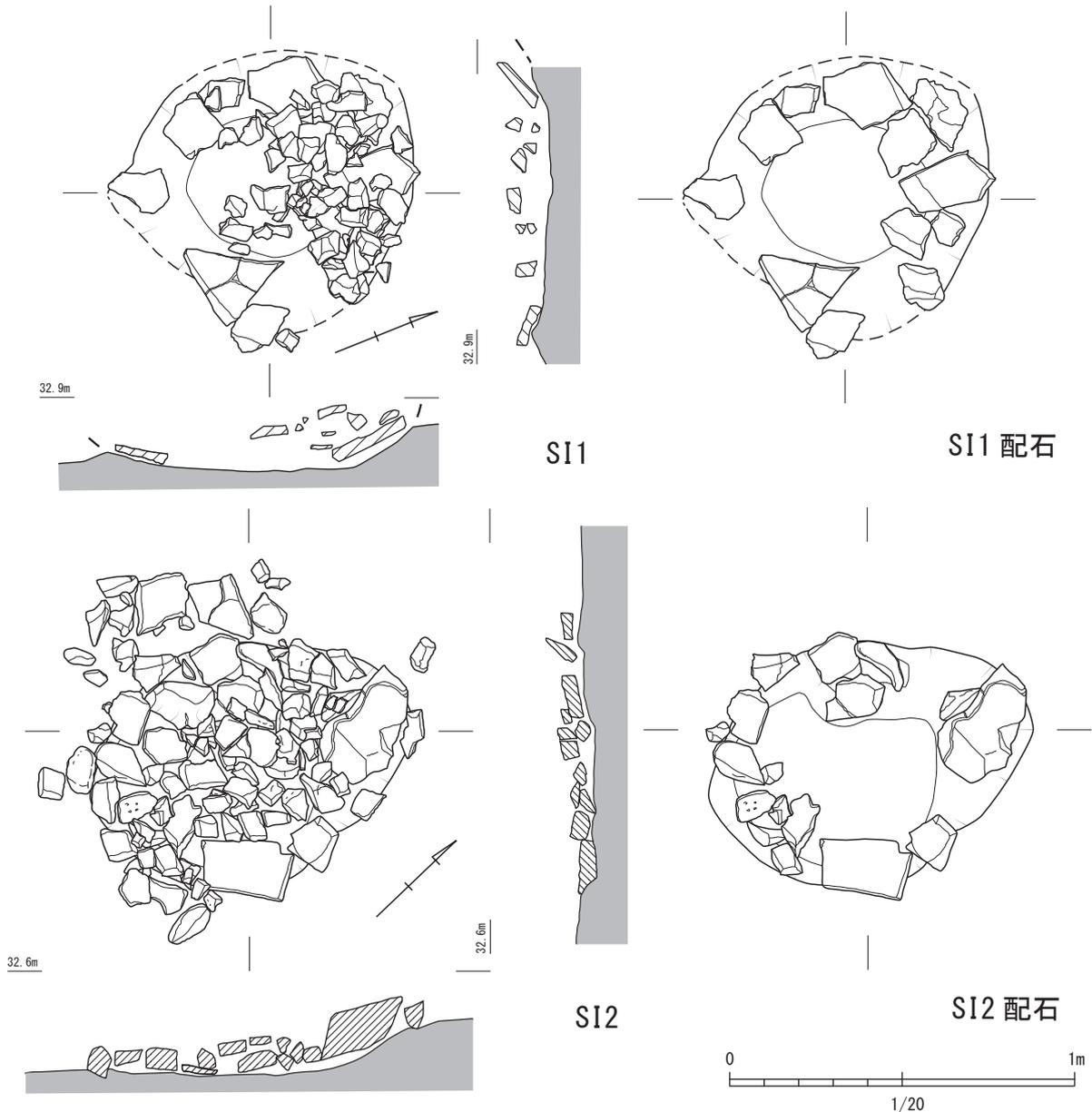
集石遺構の調査は、検出した順に遺構番号を振りながら進めた。

SI1(第13図)

I3Grに位置し、VI層で検出した。Tr3の壁面に配石がかかっているのに気づき、SI1を検出した。



第12図 岡遺跡第9次調査区 縄文時代遺構・遺物分布図



第13図 岡遺跡第9次調査区 SI1、SI2 実測図

配石が露出した状態で検出しており、内部礫の残存状況は良好でない。配石には扁平な石が使用され、掘り込みの周縁部に確認された。掘り込み底部の中心には配石されていない。掘り込みの形状は平面形が直径 0.8～0.9mの不整円形で、掘り込みは浅皿状を呈し、深さは最大で 12cm を測る。遺構の構成礫はすべて尾鈴山溶結凝灰岩で、総重量 33.2kg を測る。遺構内より出土した炭化材に対し放射性炭素年代測定を行ったところ $9370 \pm 30\text{BP}$ の年代結果が得られた。

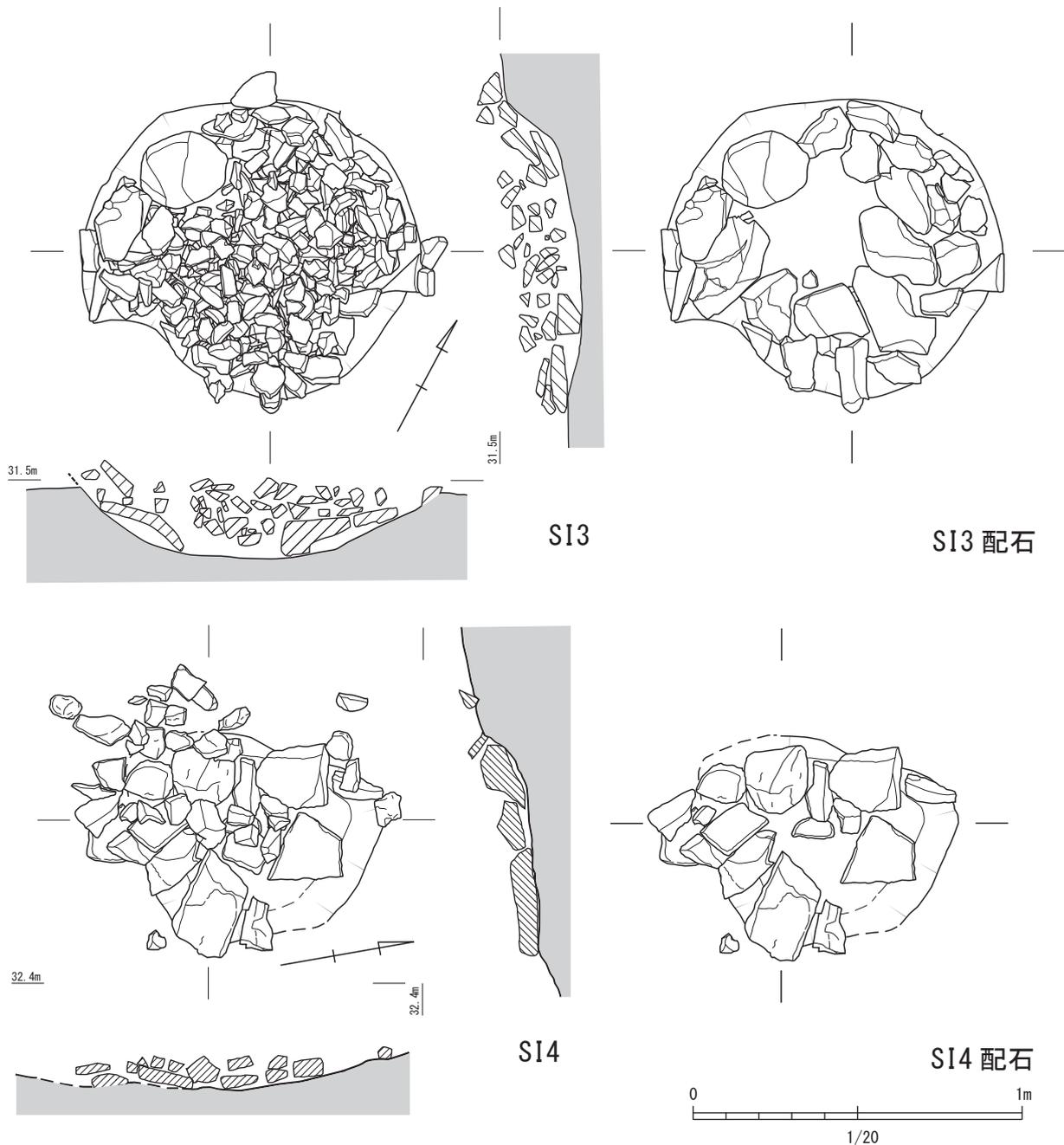
SI2 (第13図)

I3Gr に位置し、VI層で検出した。内部礫はやや密な状況であるが、大半の礫が流された状態で検

出したと考えられる。配石は掘り込みの周縁部にみられ、中心部には配置されていない。他の配石とは異なり、扁平な礫と小さな礫を併用して配石としている。掘り込みは、南側の残りは良好でない。掘り込みの形状は平面形が直径 0.7～0.91mの不整円形で、断面は皿状を呈し、深さは最大で 15cm を測る。遺構の構成礫はすべて尾鈴山溶結凝灰岩で、総重量 52.7kg を測る。遺構内より出土した炭化材に対し放射性炭素年代測定を行ったところ $9120 \pm 30\text{BP}$ の年代結果が得られた。

SI3 (第14図)

J2Gr に位置し、VI層で検出した。検出した集石の中では内部礫が一番多く残存し、比較的良好的な

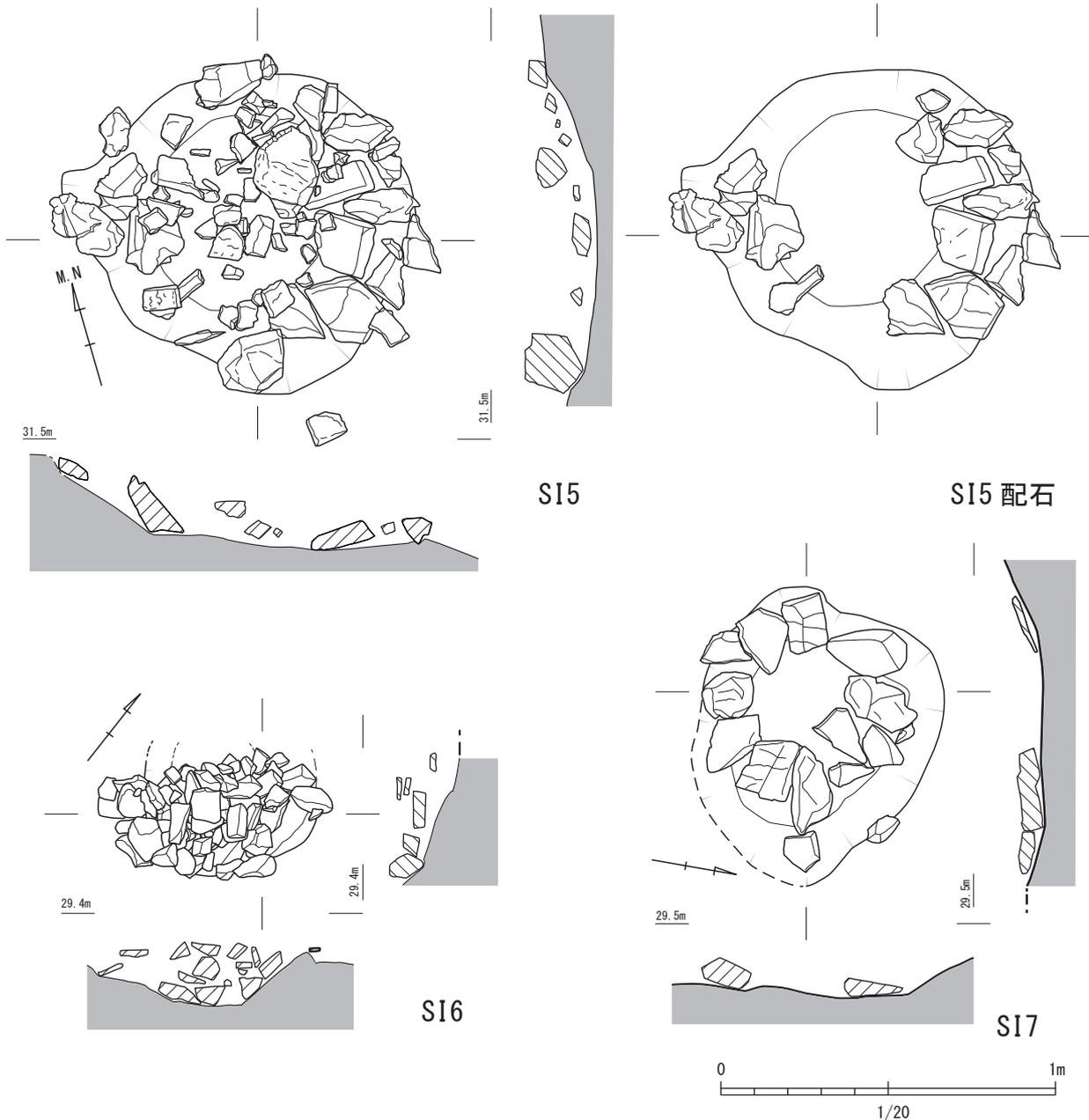


第14図 岡遺跡第9次調査区 S13、S14 実測図

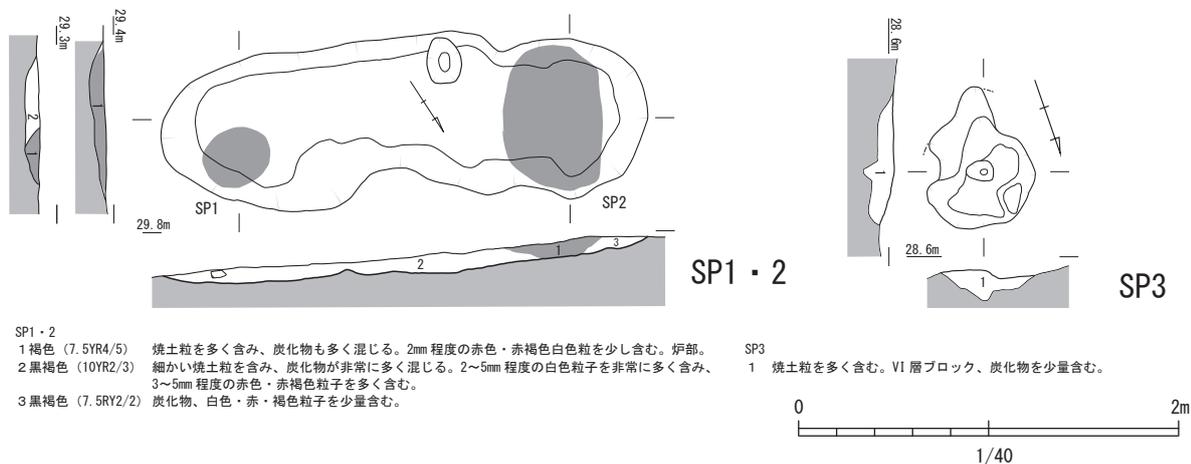
状態で検出した。配石には人頭大から手のひらサイズのものなど様々な形状の礫が利用され、それらが掘り込みの周縁部に敷き詰めるように配置されている。掘り込み底部の中心には配石されていない。掘り込みの形状は平面形が0.92～1.03mの円形で、断面は皿状を呈し、深さは最大で22cmを測る。遺構の構成礫はすべて尾鈴山溶結凝灰岩で、総重量109kgを測る。遺構内より出土した炭化材に対し放射性炭素年代測定を行ったところ9370±30BPの年代結果が得られた。

S14 (第14図)

I3Grに位置し、VI層で検出した。後世に造られた石垣の影響を受けているため、配石がほぼ露出し、内部礫はほとんど残存していない状況で検出した。配石は円礫と扁平な角礫で構成され、礫は最大で30cmになる。掘り込みの周縁部に配置され、掘り込み底部の中心には配置されていない。掘り込みの形状は平面形が0.54～0.75mの円形で、断面は浅皿状を呈し、深さは最大で13cmを測る。遺構の構成礫はすべて尾鈴山溶結凝灰岩で、総重



第 15 図 岡遺跡第9次調査区 S15、S16、S17 実測図



SP1・2

- 1 褐色 (7.5YR4/5) 焼土粒を多く含む、炭化物も多く混じる。2mm 程度の赤色・赤褐色白色粒を少し含む。炉部。
- 2 黒褐色 (10YR2/3) 細かい焼土粒を含み、炭化物が非常に多く混じる。2~5mm 程度の白色粒子を非常に多く含む、3~5mm 程度の赤色・赤褐色粒子を多く含む。
- 3 黒褐色 (7.5RY2/2) 炭化物、白色・赤・褐色粒子を少量含む。

SP3

- 1 焼土粒を多く含む。VI 層ブロック、炭化物を少量含む。

第 16 図 岡遺跡第9次調査区 SP1・SP2・SP3 実測図

量 42.2kg を測る。

SI5 (第 15 図)

J2Gr と K2Gr にまたがって位置し、VI層で検出した。配石が露出した状態で検出し、内部礫の残存は良好でない。大半が土石流等の影響を受け、本来の形態を保っていないと考えられる。配石を一部しか確認できないが、他の集石遺構のように掘り込みの縁辺部に配置してあった可能性も考えられる。5号集石は特に配石の赤化が目立つ。掘り込みの形状は平面形が 0.9 ~ 1.08m の不整形円で、断面は皿状を呈し、深さは最大で 15cm を測る。遺構の構成礫はすべて尾鈴山溶結凝灰岩で、総重量 55 kg を測る。遺構内より出土した炭化材に対し放射性炭素年代測定を行ったところ 10880 ± 35 BP の年代結果が得られた。

SI6 (第 15 図)

J5Gr に位置し、IV層で検出した。遺構のおよそ半分が石垣の裏込めにより削平を受けている。掘り込みの壁面として利用されている地山の石の内面が赤化していることから、集石遺構であると判断したが、正確な判断はしづらい。配石は検出されておらず、掘り込みの形状は平面形が最大 0.53m で、断面の深さは最大 19cm を測る。

SI7 (第 15 図)

J5Gr に位置し、IV層で検出した。IV層掘削時に、規則的に配置される礫を確認し、配石と認定した。そのため、SI7 は配石のみの検出である。礫が広がっていた層はIV層で、もとはIV層からの掘り込みみであると考えられる。配石は、角礫と扁平な礫

で構成される。掘り込み周縁部に配され、掘り込み底部の中心には配石されていない。残存した掘り込みの形状は、平面形が 0.72 ~ 0.92m で、断面の深さは最大 11cm を測る。

(2) 炉穴 (第 16 図、図版 4)

焼土および炭化物を含み、底面が赤化しているものを炉穴とし、2基を検出した。炉穴の埋土と地山の違いが明確でないため、炉穴上部やブリッジ等を削平した可能性もある。

SP1・2 (第 16 図)

J5Gr に位置し、V層を掘削中に焼土の広がりを検出した。焼土面が2箇所確認されたことから、もとは一基であった炉穴を再利用した可能性が考えられる。1号炉穴は調査区南側の谷を利用するように主軸を西方向へと向け、土層断面では分層が困難で、先行関係を判断出来ないが、炉部の2箇所で年代測定を実施した結果、西側の炉部 (SP2) が 9170 ± 30BP、東側 (SP1) が 9120 ± 30BP 年代が得られ、谷風を利用するため、西側方向へ炉穴を再利用しながら作っていたものと考えられる。

SP3 (第 16 図)

K4Gr に位置し、重機で掘削中に焼土面を確認しVI層で検出した。焼土部分のみの検出のため規模は小さく、75cm (残存長軸) × 50cm (残存短軸) である。中央のくぼみや、いびつな形状は樹根による攪乱の可能性もある。第6次調査区の結果や SP1 から、主軸を西に向ける炉穴の可能性が考えられる。

第 2 表 岡遺跡第 9 次調査区 縄文時代集石遺構一覧表

遺構名	調査区	検出層位	長軸(m)	短軸(m)	掘り込み(cm)		配石	放射性炭素年代
					残深	平面形		
SI1	I3	VI	0.9	0.8	12	不整形円形	○	9370 ± 30BP
SI2	I3	VI	0.7	0.91	15	不整形円形	○	9120 ± 30BP
SI3	J2	VI	1.03	0.92	22	円形	○	9370 ± 30BP
SI4	I3	VI	0.75	0.54	13	円形	○	—
SI5	J2-K2	VI	1.08	0.9	15	不整形円形	○	10880 ± 35BP
SI6	J5	IV	0.53	0.53	19	不明	-	—
SI7	J5	IV	0.92	0.72	11	不明	○	—

第 3 表 岡遺跡第 9 次調査区 縄文時代炉穴一覧表

遺構名	調査区	検出層位	残存規模			平面形	焼土	放射性炭素年代
			長軸(m)	短軸(m)	残深(cm)			
SP1・2	J5	V	2.5	0.7	0.11	長楕円形	埋土最下部～床面にかけて残存	SP1: 9120 ± 30BP SP2: 9170 ± 30BP
SP3	K4	VI	0.75	0.5	0.1	不整形円形	全体的に焼土粒を多く含む	—

3-2. 遺物 (第 17 ~ 23 図 23 ~ 98、図版 7・8)

遺物は、Ⅲ層～Ⅴ層出土のものが主体をなす。また、包含層中の出土ではないが、土器・石器の特徴等から縄文時代の所産であると判断したものもここで記述する。なお、遺物の出土位置や詳細な特徴等については観察表を参照されたい。

(1) 土器 (第 17 図 23 ~ 29)

縄文時代早期層から出土した土器に関しては、風化が著しく実測等に耐えうるもののみ実測を行った結果、2点のみの実測となった。残りの土器は、調査区内に一部残存していた二次堆積アカホヤ火山灰層などからの出土である。

23・24 は深鉢形土器の胴部片で、23 は内・外面ともに風化が激しく調整は不明瞭である。24 は内面の風化は著しいが、外面に条痕が施されている。26・27 は口縁部下の外面に突帯を有する深鉢で、共に突帯を貼り付けた後、ヨコナデ調整を行っている。27 は口縁部がやや外反気味に開く。28 は底部から外反しながら開き、端部がやや張り出す。29 は精製の浅鉢で、口縁端部内面に沈線を施すものである。

(2) 石器 (第 18 ~ 23 図 30 ~ 98)

石器については、出土した層だけでなく、形態的な特徴などから判断し、縄文時代の遺物として抽出したものも含まれている。

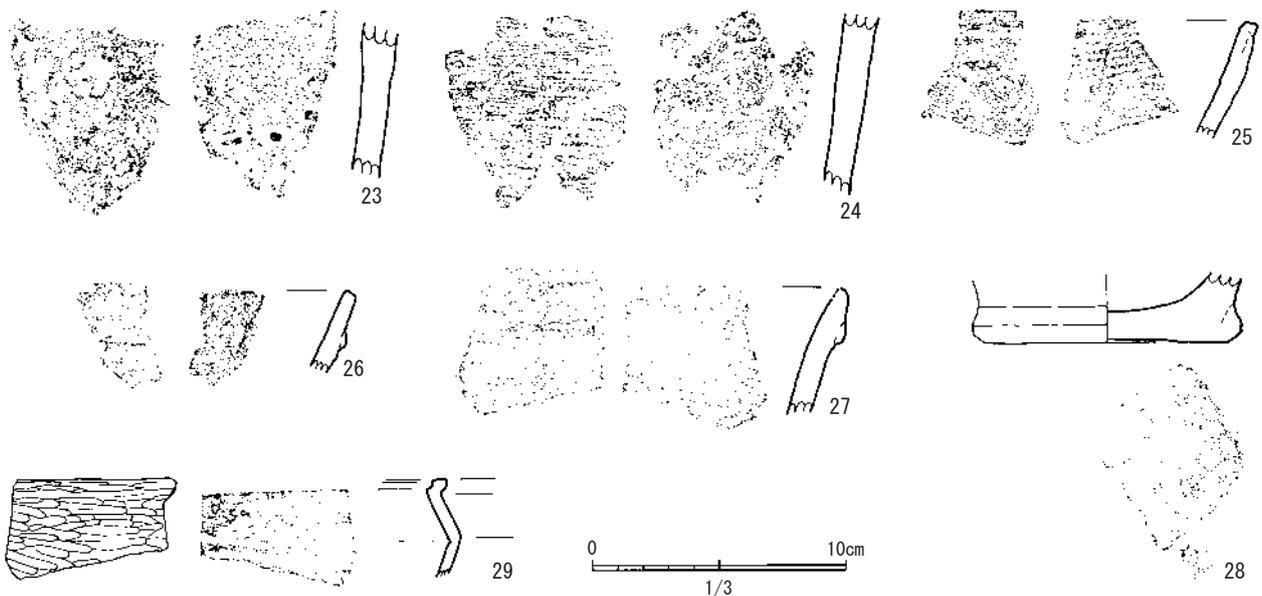
石材別では珪質頁岩 36 点、砂岩 25 点、ホルン

フェルス 44 点、チャート 121 点、白流紋岩 3 点、黒流紋岩 1 点、黒曜石 4 点、頁岩 7 点、尾鈴山溶結凝灰岩 1 点、石英 3 点で総数 245 点出土した。縄文時代の石器は 74 点出土しており、石鎌 17 点、石匙 1 点、石錐 1 点、スクレイパー 8 点、剥片 15 点、石核 5 点、石斧 12 点、石錘 6 点、敲石 4 点、磨石 1 点、凹石 3 点、礫器 1 点、用途不明石器 1 点で、そのうち 68 点を図化した。利用石材は砂岩や珪質頁岩が多く、黒曜石といった石材は製品ではほとんどみられない。なお、Ⅴ層出土の遺物については、Ⅴ層が縄文時代早期と旧石器時代の遺物が混在しているため、旧石器時代の遺物である可能性も含まれる。

石鎌 (第 18 図 30 ~ 42)

調査区内で 17 点が出土し、13 点の図化を行った。

30 ~ 34 は平面形が正三角形を呈し、基部がほぼ直線的なもので、すべてチャート製である。そのうち、31 は先端部が丸みを帯び、基部の両端が角張る。32 は正三角形の部類に入れたが、平面形はやや左右非対称で、全体的にずんぐりとしている。先端部が体部と比べてかなり薄く、先端部の加工が他よりも細かいことから、再加工を施しているものと考えられる。35 はチャート製で、平面形が二等辺三角形を呈し、基部が曲線的にやや凹んでいる。



第 17 図 岡遺跡第 9 次調査区 縄文時代土器実測図

36～38は、平面形が二等辺三角形を呈し、基部に浅い抉りを有するもので、すべてチャート製である。38は左右非対称であるが、石鏃の中で最も薄く、先端が鋭く尖っている。

39～41は平面形が二等辺三角形を呈し、U字状の抉りをもつもので、チャート製が2点、姫島産黒曜石が1点である。39は丁寧な作りで、右の脚部は欠損しているが、脚端は平らになる。40は丁寧な作りで、細身の脚部をもつ。先端部は欠損しているが、裏面上方から基部付近に見られる細長の剥離は、衝撃により生じたものと考えられる。41は調査区内唯一の黒曜石製品で、脚端がやや丸みを帯びる。

42は両面に剥離面を大きく残し、周縁に粗い剥離を行ったもので、珪質頁岩製が1点である。これは、石鏃未製品と推察される。

石匙（第18図43）

調査区内で1点のみの出土で、SH6から出土した。流れ込みの可能性が考えられるが、石器の形態的な特徴から縄文時代の所産であるとし、ここで報告する。43は両面に大きく剥離面を残し、扁平で幅広な剥片を素材としている。上方を両面からの抉り状の加工によって、つまみ状の突起を作り出し、他の縁辺は二次加工によって刃部を作出している。刃部は左右非対称で、右側縁の調整が上部と下部の調整を切っていることから、再加工を施していると考えられる。

石錐（第18図44）

扁平な円礫を素材として、裏面から抉り状の加工を行い、錐部を作出している。

スクレイパー（第18・19図45～52）

45～47は、大きな礫から厚みのある幅広の剥片を剥出し、その剥片端部に連続的に打撃を行い、やや粗い加工を施し、刃部を作出している。45は下縁、46は上縁から打面と、下縁にかけて弧状の刃部を持つ。どちらも礫面から加工が行われている。47は打面から下縁と、右側縁にかけて刃部が形成されている。加工は、下縁右側が主要剥離面から行われているのに対し、他は礫面から加工が施される。なお、いずれも刃部には明確な使用痕は見られない。

48～50は厚みのある剥片を素材とし、剥片下

部または側縁部に加工を行い、刃部を作出している。48は幅広で重量感のある剥片を利用し、下部の縁辺部にやや鋸歯状を呈する刃部が作出される。49は主要剥離面からの二次加工を施し、刃部を幅広く作出している。50は石核を転用したものと考えられる。左側縁に礫面からの加工を行い、刃部を作り出している。

51・52は礫面を大きく残す縦長剥片を素材とし、側縁または両側縁に加工を行い、刃部を作出している。51は下部を欠損しているものの、両側縁全体に加工を行い、刃部を形成している。また、打面側の加工は基部を意識し、作り出していると考えられる。52は左側縁全体に細かな加工を施す。

蛤形剥片石器（第19図53～58）

蛤形剥片石器は、IV層またはV層において19点確認し、そのうち6点を図化した。これらは、砂岩・ホルンフェルス・頁岩製の剥片を素材にしている。平面形は楕円形や円形、下縁に丸みを帯びる三角形を呈する。自然礫から打面調整を行わず剥離されたもので、断面形は打点から下縁に向かい鋭利になるものと半月状になるものがある。これらを使用の有無や剥片形態の差異からI～IV類に細分した。

本石器が出土している藏座村（ぞうざむら）遺跡では、石器の時期を縄文時代早期に限定している。しかし、本遺跡のものは、堆積状況が不安定であることや、後世の造成等により詳細な時期の特定が困難であることから、早期以降に相当するものも含まれている可能性がある。そのため、ここでは一括して蛤形剥片石器として報告する。なお、第6次調査区では、蛤形粗製剥片の名称を用いていたが、本稿より蛤形剥片石器の名称で統一する。

I類（第19図53）

横長や幅広の剥片を素材とし、加工が行われないものを一括した。6点出土し、そのうちの1点を図化した。断面形は、ほとんどが53のように下縁が鋭くなるが、1点のみ半月状になるものも含まれる。大きさは幅が5cm～9cmとややばらつく。

II類（第19図54・55）

横長剥片を素材とし、側縁や下縁に二次的な加工が行われている。2点出土し2点とも図化を行ったが、共通して平面形が下縁に丸みを帯びた三角形となる。加工は行われるものの明らかな刃

部調整とは認識しづらいため、蛤型剥片石器として報告する。

Ⅲ類 (第 19 図 56)

横長剥片を素材とし、明確な刃部調整は施されないが、側縁から下縁にかけて微細な剥離が認められる。6点出土し、1点を図化した。56は下縁の稜が潰れて丸みを帯びているもので、使用痕による摩滅と推察される。

Ⅳ類 (第 19 図 57・58)

その他のものを一括した。57は縦長剥片を素材としている。左側縁には、使用による稜の潰れが確認できる。表面に摩滅が認められることから磨石を転用したものと考えられる。58は、スクレイパーもしくは打製石斧の刃部再生剥片から転用した可能性が高い。

二次加工を有する剥片 (第 19 図 59～61)

60の素材剥片は不整形で、両側縁上部に二次加工が施されている。61は尖頭状石器の一部である可能性が考えられる。

剥片 (第 20 図 62・63)

62は円礫を素材とする剥片で、打面から表面左側縁下部にかけて礫面を残している。63は上面に節理面、表面には自然面を大きく残す。剥離面の末端の形状は羽毛状剥離を呈する。

なお、写真のみの掲載(図版10)であるが、日東産黒曜石の剥片と考えられるものも出土している。

接合資料 (第 20 図 64～66)

微細剥離を有する剥片(64)と石核(65)の接合資料である。

65は打面を転移させながら、主に幅広の剥片を作出している。作出された64の下縁には、微細剥離痕が認められる。

石核 (第 20 図 67～70)

67は分割礫を素材に、礫面を打面に設定して、一方向から剥離を行っている。なお、左側に見られる大きな剥離痕は人為的なものではなく、何らかの要因で割れたものと考えられる。68は扁平な円礫を素材としている。上面を作業面として、剥片剥離を行っている。69は扁平な円礫を素材にして、表裏両面より、剥片剥離を行っている。下半部の剥離面は側面での作業中に欠損したものと考えられる。また、裏面には削痕が確認できる。70

は円礫を素材とするもので、上面に打面を作出し、正面で剥片を剥出している。なお、上面には打面調整が顕著に認められる。

礫器 (第 20 図 71)

71は長さ18.4cm、重量2.2kgと大型で、扁平な円礫を素材としている。扇状を呈し、裏面より粗い加工を施すことで片刃を作り出している。

石斧 (第 21 図 72～83)

調査区内で12点出土し、打製石斧と磨製石斧に分けられる。

72～81は裏面に大きく礫面を残す剥片を素材としている。礫面から粗い加工を行い、両側縁がほぼ直線的になるように作り出し、断面が台形状になる。刃部は加工せずにそのままのもの(72・73・80)や加工を行い、刃部を形成するもの(75・79)がある。また、裏面にも加工が施されるもの(72・75・79)も見られる。

76は下部の欠損部分に二次加工がみられる。80・81は未製品と考えられる。

82は基部に比べて刃部幅が狭い。裏面に剥離面を大きく残し、全体的に粗い剥離によって整形されている。下部は欠損しているが、刃先が尖るような形状になると考えられる。

83は小型の磨製石斧で、刃部は欠損している。主に両側面と刃部に研磨が施されている。

石錘 (第 22 図 84～89)

調査区内で6点のみの出土で、すべてを図化した。全て扁平な円礫を素材とし、礫の長軸方向に紐掛部を持つもので、ほとんどが両面からの剥離によって紐掛部を作出している。

84・85は紐掛部の縁辺に潰れが認められ、使用によるもの、または、整形時のものと考えられる。85・88は、長軸の両側縁に敲打痕が観察できる。86・87は他のものとは規格が小さく、紐掛部縁辺の挟りの度合いも低い。また、84・89は礫の赤化が見られ、紐掛部までおよんでいる。そのため、石錘として使用された後に被熱もしくは石自体が赤化したものと考えられる。

敲石 (第 22 図 90～93)

円礫を素材とし、長軸の両端に敲打痕がみられるものと、礫周縁部に敲打痕がみられるものがある。

90は左側面上部及び下面に、91は長軸両端に敲

打による平坦面が作られている。92・93は敲打が礫周縁部にみられる。93の表には磨面が確認できる。

磨石 (第22図94)

使用にともなう摩滅がみられるもので、調査区内で1点のみの出土である。円礫を素材とし、両面と両側面に摩滅がみられる。特に両側面の摩滅は顕著で、平坦面を作り出している。

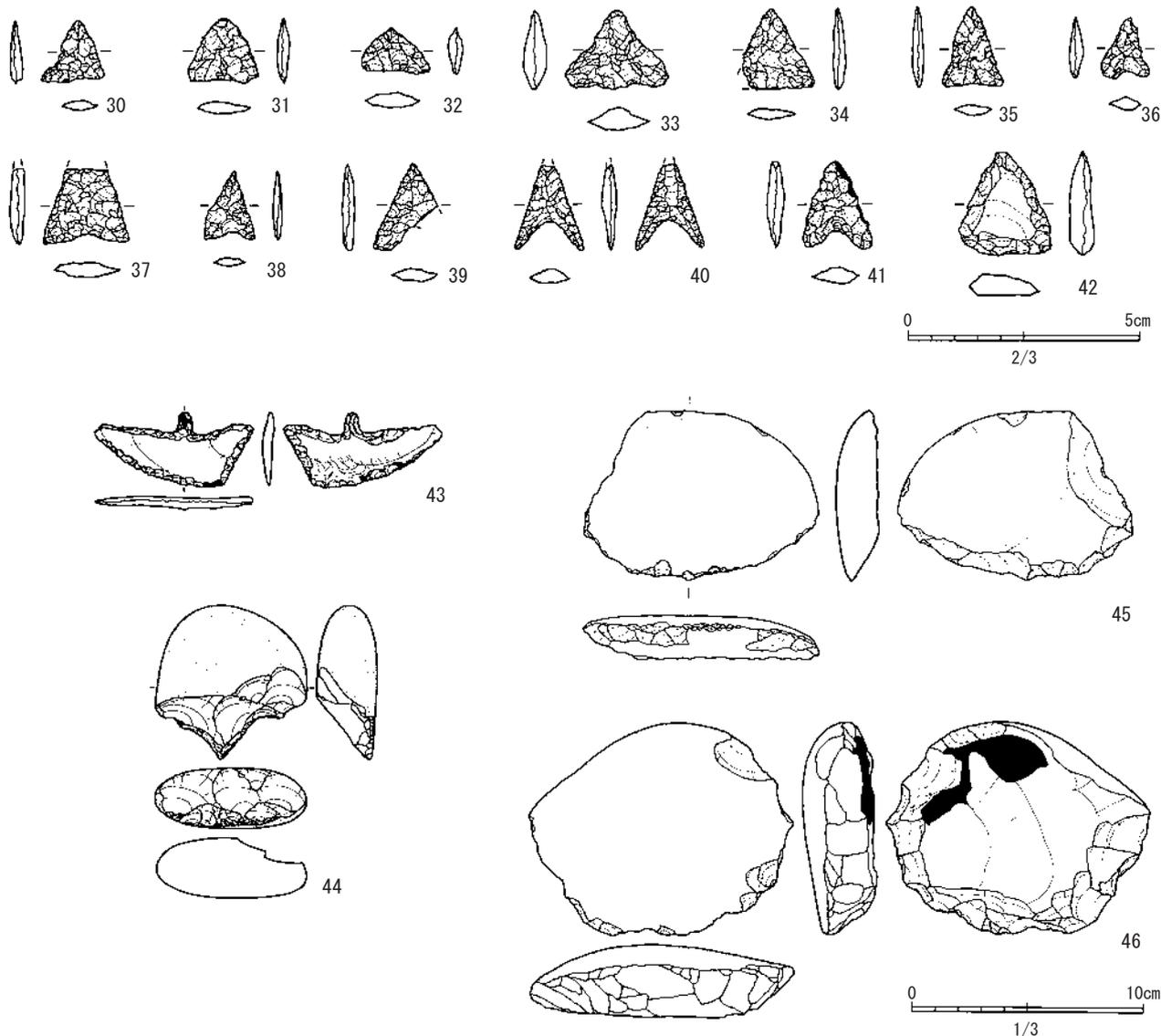
凹石 (第22・23図95～97)

礫平坦部の両面もしくは片面に凹部が認められるもので、円礫で扁平なものと肉厚なものに分けられる。95は両面に顕著な凹部がみられ、断面形が皿状になる。左側面と裏面の上部に見られるトーンをかけた部分は、平坦面を作りややざらついている。ガジリの可能性も考えられるが、新し

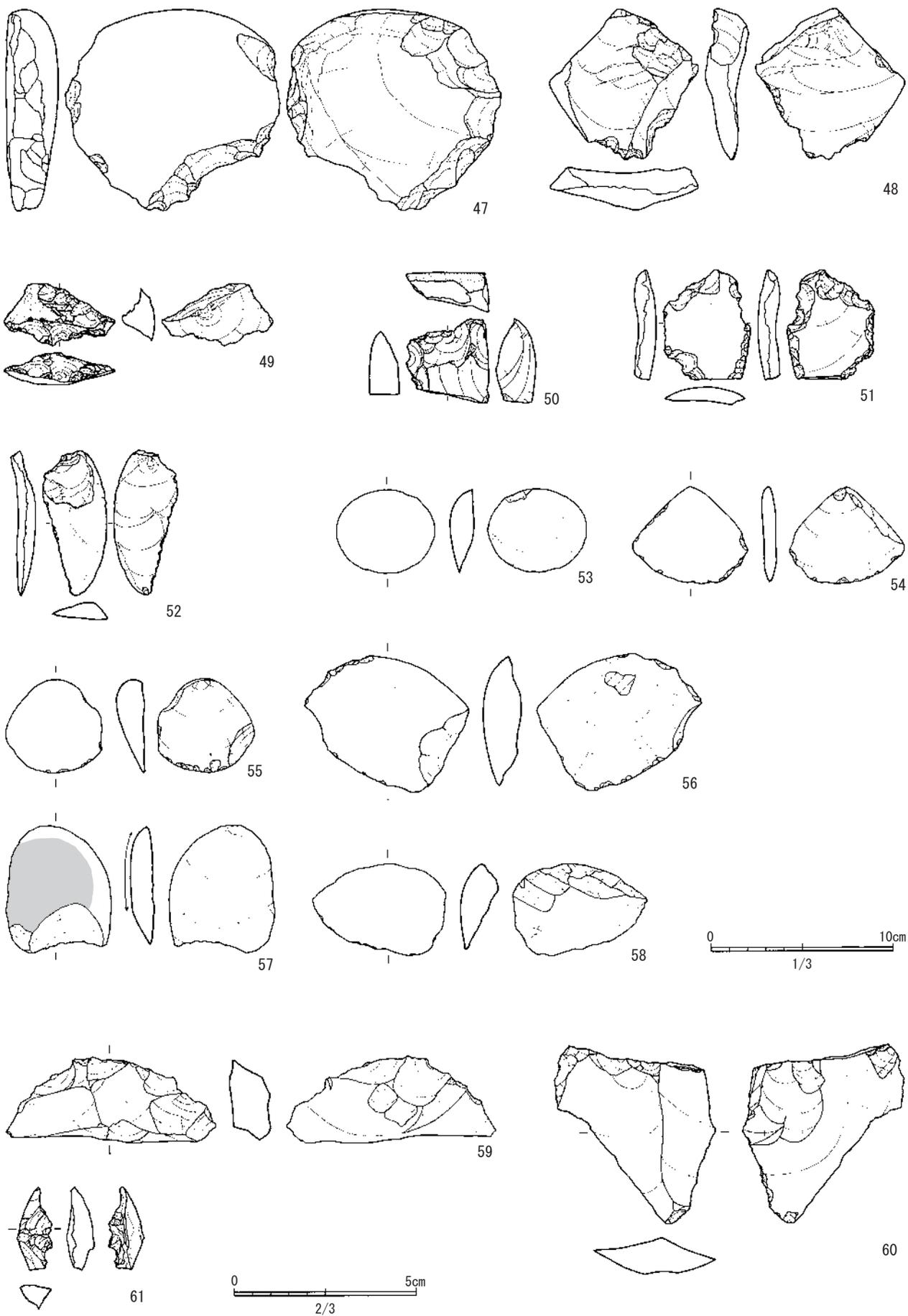
く削られた様子もないため、敲きもしくは敲き擦っている可能性が十分考えられる。96は敲石としての使用も想定でき、その範疇に含まれると考えられるが、表面に凹みを有することから凹石とした。下面と両側面、裏面は敲打痕が残る。また、礫全体が黒ずみ、煤が付着している可能性があり、敲打は礫が熱を受けた後に施される。97は両面に凹部、上下面には敲打痕、両側面には磨面が認められることから、様々な用途で使用されたと考えられる。上下両側面は、敲打と使用による摩滅によって平坦面が作られたものと考えられる。

用途不明石器 (第23図98)

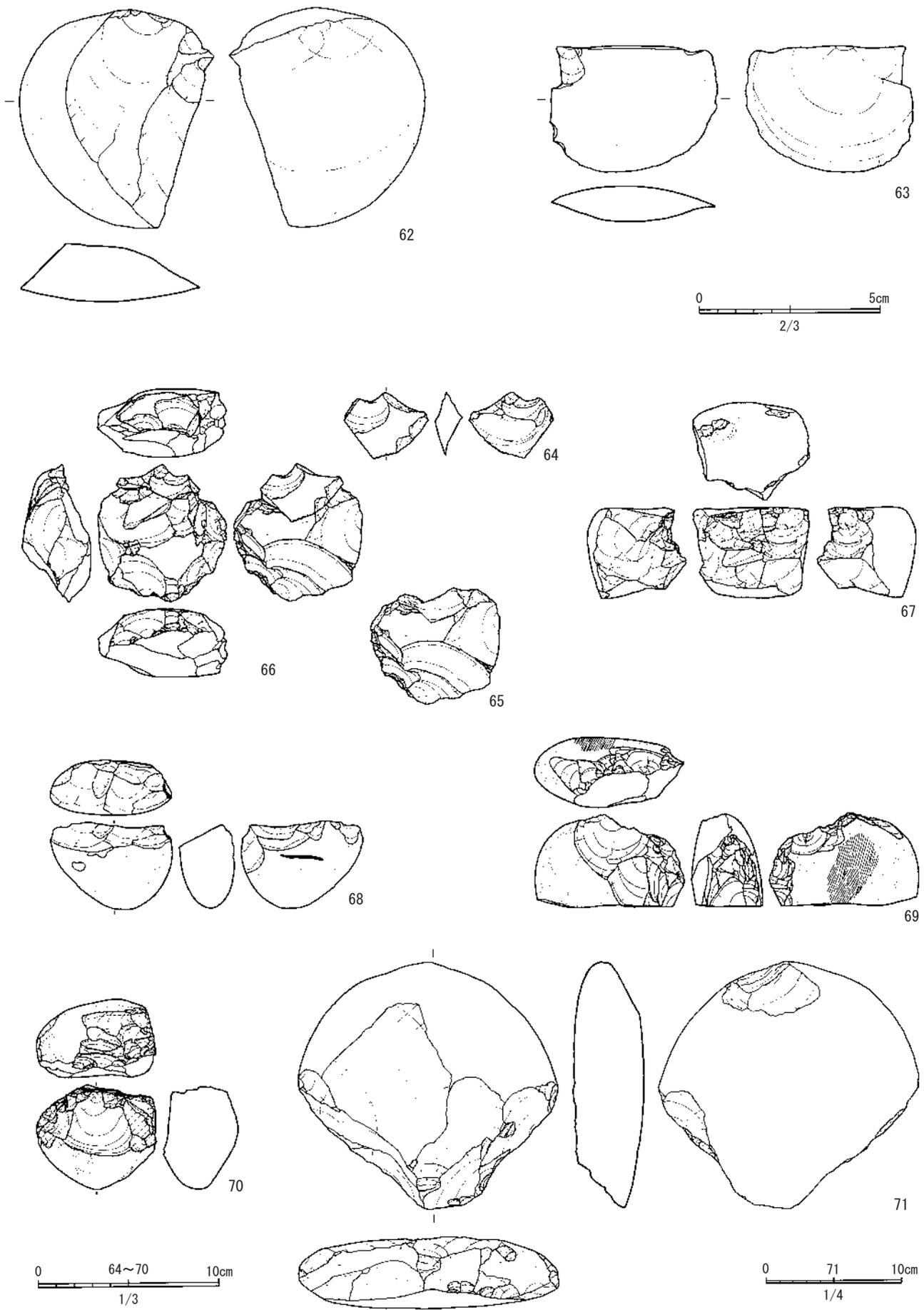
珪質頁岩製で棒状を呈している。全体的にツルツルとした手触りで、一部に磨かれた痕がみられる。



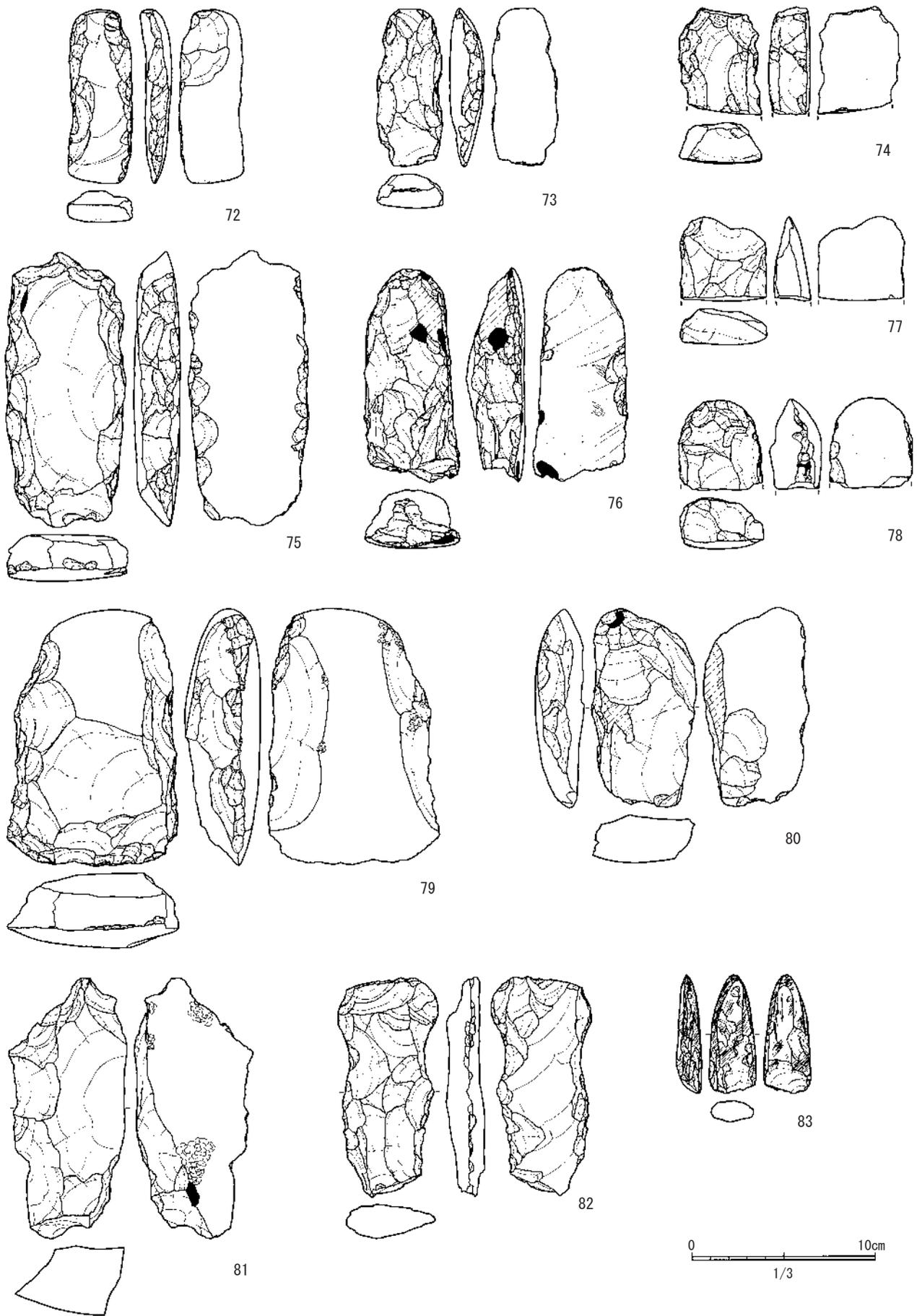
第18図 岡遺跡第9次調査区 縄文時代石器実測図(1)



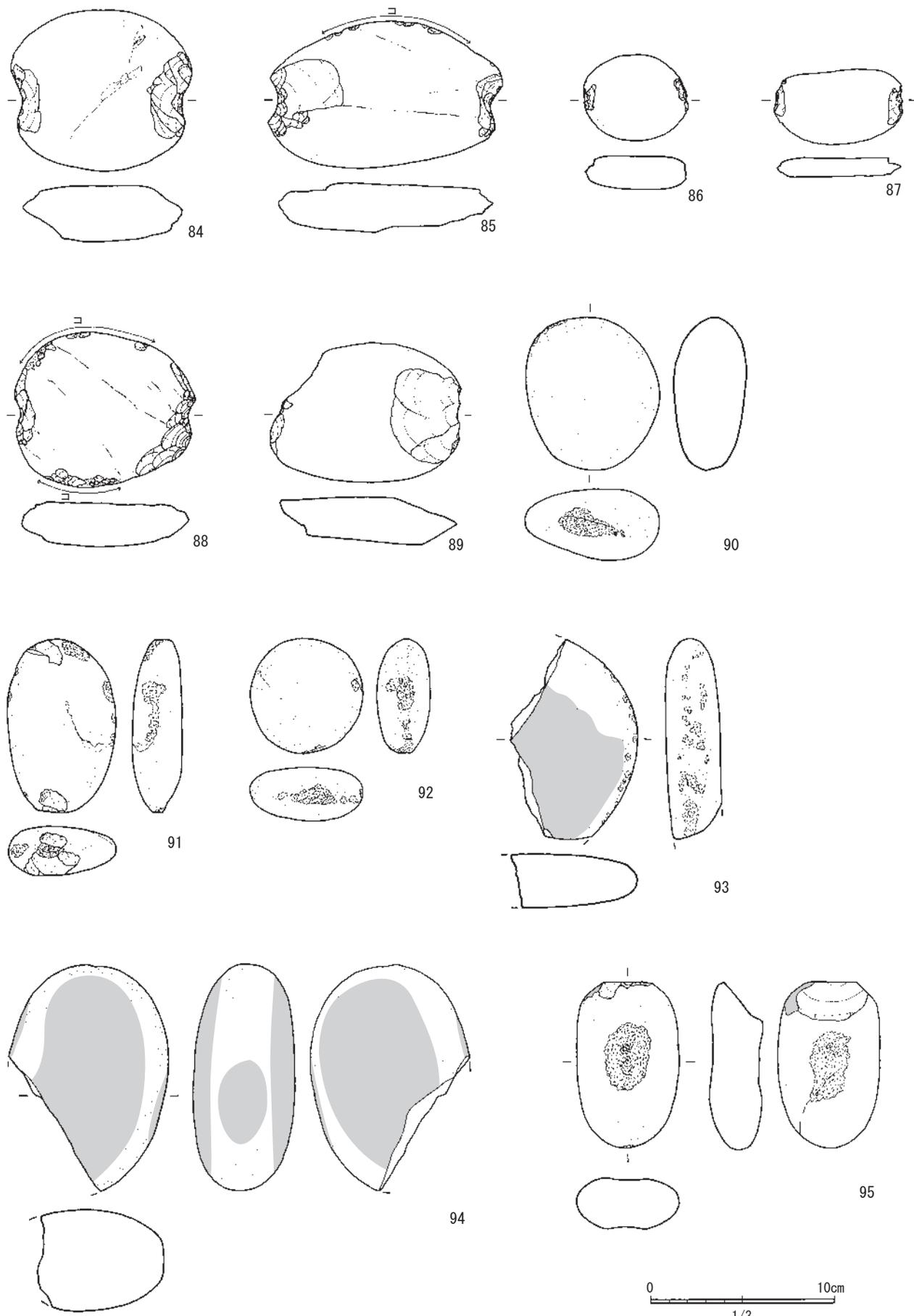
第 19 図 岡遺跡第 9 次調査区 縄文時代石器実測図 (2)



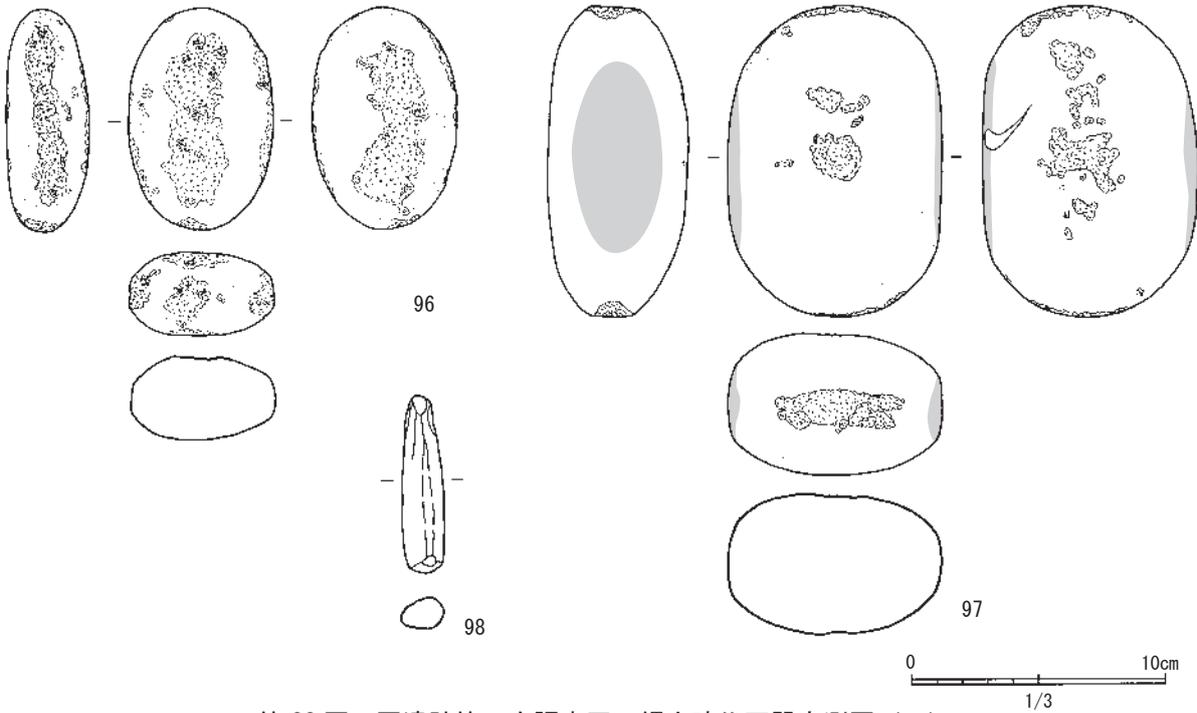
第20図 岡遺跡第9次調査区 縄文時代石器実測図(3)



第21図 岡遺跡第9次調査区 縄文時代石器実測図(4)



第 22 図 岡遺跡第 9 次調査区 縄文時代石器実測図 (5)



第23図 岡遺跡第9次調査区 縄文時代石器実測図(6)

第4表 岡遺跡第9次調査区 縄文時代土器観察表

No.	出土地点	器種	部位	法量			手法・調整・文様ほか		色調		胎土	備考
				口径	底径	器高	外	内	外	内		
23	33	深鉢	胴部	-	-	-	黒斑		にぶい黄橙 10YR5/4	褐 10YR4/4	5mm以下の灰白色粒、微細な透明光沢粒を多量	内外共に風化著しく調整不明
24	3Ⅲ	深鉢	胴部	-	-	-	横方向の条痕文	ナデ?	灰黄褐 10YR5/2	にぶい黄褐 10YR5/3	3mm以下の灰白・褐色粒・透明光沢粒、3mm以下の黒色柱状光沢粒	
25	K1Ⅲ	鉢	口縁部	-	-	-	横方向の粗いナデ	横方向の条痕文	明赤褐 5YR5/6	にぶい黄 2.5Y6/3	2mm以下の白・灰白・褐色粒、3mm以下の透明光沢粒	外面にスス付着
26	G6Ⅳ	鉢	口縁部	-	-	-	横方向のナデ 突帯	横方向のナデ	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	微細な灰白・透明光沢粒、柱状の黒色光沢粒	
27	H6カクラン	鉢	口縁部	-	-	-	横方向の粗いナデ スス付着	横方向の条痕文	にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい黄橙 10YR6/4	3mm以下の灰白色粒、2mm以下の黄褐色粒	口唇部横ナデ
28	H6カクラン	深鉢	底部	(10.6)	-	-	粗い横方向のナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/3	8mm以下の灰白の小石、3mm以下の柱状黒色光沢粒、乳白色粒	
29	G4表土	浅鉢	口縁部	-	-	-	横方向のミガキ	横方向のナデ	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい橙 7.5TR/3	精良、微細な灰白色粒、2mm以下の透明光沢粒	

第5表 岡遺跡第9次調査区 縄文時代石器計測表

No.	出土地点 (グリッド)	層	器種	石材	法量			
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
30	I4	V	石鏃	チャート	1.35	1.36	0.27	0.4
31	J3	V	石鏃	チャート	1.42	1.53	0.27	0.5
32	J5	IV	石鏃	チャート	1.03	1.48	0.33	0.4
33	I4	IV	石鏃	チャート	1.71	2.97	0.45	0.6
34	J4	IV	石鏃	チャート	1.77	1.57	0.28	0.6
35	G5	II	石鏃	チャート	1.75	1.31	0.24	0.5
36	I4	V	石鏃	チャート	1.33	1.04	0.31	0.4
37	一括		石鏃	チャート	1.66	1.85	0.33	1.0
38	SP1-i		石鏃	チャート	1.48	1.10	0.19	0.3
39	J6	IV	石鏃	チャート	1.90	1.40	0.27	0.5
40	K4	III	石鏃	チャート	1.87	1.48	0.32	0.5
41	K4	II	石鏃	姫島産黒曜石	1.87	1.49	0.38	0.8
42	J5	II	石鏃	珪質頁岩	2.26	2.00	0.52	
43	SH6		石鏃	珪質頁岩	3.25	6.88	0.58	10.1
44	J5	IV	石鏃	白色流紋岩	6.70	6.57	2.64	132.3
45	SC1		スクレイパー	砂岩	7.4	10.1	1.9	173.5
46	J5	V	スクレイパー	砂岩	9.34	11.46	3.23	401.1
47	K3	V	スクレイパー	砂岩	11.17	11.8	2.89	461.7
48	I4	V	スクレイパー	黒流紋岩	8.39	8.19	2.38	113.6
49	I4	V	スクレイパー	白流紋岩	3.45	6.12	1.79	25.6
50		III	スクレイパー	珪質頁岩	4.66	4.53	2.19	48.9
51	I4	V	スクレイパー	珪質頁岩	6.1	4.81	1.2	39.4
52	J5	IV	スクレイパー	珪質頁岩	8.01	3.52	1.33	26.3
53	J1	VI	絵形剥片石器	砂岩	4.6	5.4	1.35	35.1
54	J3	V	絵形剥片石器	ホルンフェルス	5.35	6.3	0.9	30.5
55		IV	絵形剥片石器	ホルンフェルス	5.2	5.3	1.55	44.3
56	I3	V	絵形剥片石器	ホルンフェルス	7.5	9.1	2.1	132.4
57	J3	V	絵形剥片石器	砂岩	7.05	5.8	1.3	74.3
58	I4	V	絵形剥片石器	砂岩	5.05	7.3	2.05	65.9
59	I3		二次加工剥片	珪質頁岩	2.4	5.75	1.15	13.4
60	H5		二次加工剥片	白色流紋岩	4.9	4.45	1.4	19.0
61	J4	V	二次加工剥片	チャート	2.30	9.60	7.50	1.1
62	J2	V	剥片	珪質頁岩	6.05	5.35	2.1	11.5
63	Tr2	V	剥片	珪質頁岩	3.5	4.6	1.2	22.4
64	表土		微細剥離剥片	珪質頁岩	3.69	4.65	1.48	18.6

No.	出土地点 (グリッド)	層	器種	石材	法量			
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
65	I4	V	石核	珪質頁岩	6.48	7.16	3.80	166.7
66	-	-	接合資料	珪質頁岩	7.690	7.130	3.800	185.3
67	I4	IV	石核	珪質頁岩	5.08	6.47	5.48	248.1
68	J3	IV	石核礫器	ホルンフェルス	4.88	6.72	3.10	128.3
69	J5	V	石核礫器	珪質頁岩	5.18	8.25	3.92	221.3
70	I3	V	石核	珪質頁岩	5.88	6.63	4.37	223.5
71		I	礫器	尾鈴山溶結凝灰岩	18.4	19.2	5.35	2200.0
72	J4	IV	石斧	ホルンフェルス	9.62	3.55	1.74	71.6
73	I3	V	石斧	砂岩	8.73	3.61	1.89	70.2
74		II	石斧	砂岩	5.96	4.52	2.28	88.0
75	SX1-1	V	石斧	砂岩	15.2	6.6	2.58	386.1
76	ウラゴメ		石斧	頁岩	11.84	5.22	3.24	235.4
77		VI	石斧	ホルンフェルス	4.46	4.75	2.02	51.7
78	K4	I	石斧	ホルンフェルス	4.98	4.6	2.84	85.2
79	K1	Vb	石斧	砂岩	14.21	9.38	4.15	726.1
80	I4	VI	石斧	ホルンフェルス	11.00	5.75	2.68	224.0
81	一括		石斧	砂岩	14.4	6.5	3.9	424.3
82	I4	I	石斧	ホルンフェルス	12.14	5.49	2.1	153.1
83	K4	II	石斧	ホルンフェルス	6.57	2.6	1.41	29.7
84	I4		石鏃	砂岩	8.85	9.9	3.1	398.0
85	I4		石鏃	砂岩	8.05	12.75	2.7	347.6
86	K4	IV	石鏃	砂岩	4.75	5.75	1.85	72.1
87	G6		石鏃	砂岩	4.1	7.0	1.1	50.1
88	SE1		石鏃	砂岩	8.55	9.9	2.5	299.8
89	I4		石鏃	砂岩	7.65	10.4	2.6	269.0
90	J4	IV	敲石	ホルンフェルス	8.4	7.3	3.95	343.1
91	J3	V	敲石	砂岩	9.5	5.9	2.7	219.6
92	I4	IV	敲石	砂岩	6.3	6.15	2.9	156.0
93	SX1-2		敲石	砂岩	11.0	6.9	3.0	280.5
94	I4	IV	磨石	砂岩	12.4	8.65	5.55	756.3
95	J3	V	凹石	砂岩	10.1	5.55	2.9	214.7
96	I3	V	凹敲石	砂岩	8.8	5.7	3.3	242.6
97	表土		凹・敲磨石	砂岩	12.35	8.5	5.6	956.4
98	K4	III	用途不明石器	珪質頁岩	7.05	1.7	1.25	23.8
参考1		III	剥片	日東産黒曜石	2.3	1.97	0.93	4.93

第4節 古代～近世の遺構と遺物

4-1. 遺構

中世～近世の遺構として確認されたものは掘立柱建物跡2棟、石組遺構1基、土坑1基、柵列状遺構7条、溝状遺構1条である(第24・25図)。

(1) 掘立柱建物跡(第26図、図版1)

調査区の1段目と4段目、拡張部の2段目を中心に柱穴と考えられるピットが多数分布していた。ピットの中には、樹痕の可能性のあるものも含まれる。現地での検討の結果、2棟の掘立柱建物跡を検出した。SB1は石垣によって柱穴を半分ほどしか確認できていなかったが、石垣を除去し調査区を4段目まで拡張したところ、岩盤に掘り込まれた柱穴を多数確認した。同様にSB2も石垣の除去によって西側の柱穴を検出した。2軒とも石垣の造成や耕作地整地によって、実際の掘り込み面より下がった状態で検出されていると考えられる。柱穴は調査区外の西側にまで及ぶと考えられるが、掘立柱建物として並びが確定されたものだけ報告する

SB1(第26図)

調査区の北側、K0Gr～L0Grにかけて検出した。建物は、主軸を北東方向にとる1間×4間の側柱建物で、西側部分は軸を異にする柱列が並んでいる。西側の柱列にはそれぞれ添え木のような柱が伴う。梁行は北側柱間が4.24m、南側柱間は4.34mを測る。桁行は10.1mで、東側柱間は北から2.1m、2.2m、1.9m、2.1mを測り、西側柱間は北から2.16m、2.04m、2.1m、1.9m、1.9mを測り、平均柱間は約2.04mである。柱穴掘方は長径平均64.7cm、短径平均53.2cmで、円形や楕円形を呈し、検出面からの深さは最大で平均51.6cmである。

西側柱列の柱間は北側から2.14m、2.1m、1.94m、1.98mを測る。柱穴掘方は長径平均66cm、短径平均52.8cmで、円形や楕円形を呈し、検出面からの深さは最大で平均44.2cmである。添え木のような柱の柱間は北側から2.14m、2.1m、1.97m、1.95mを測る。掘方は長径平均22cm、短径平均18.4cmでほぼ円形を呈し、検出面からの深さは最大で平均25.4cmである。

西側は主軸が若干ずれ、別の建物である可能性も考えられる。しかし、別の建物であるとする

添え木のような柱が建物の内側に配置されてしまうため、付設や増設等で造られた同一の建物であるとも考えられる。または建物の柱と西側柱列の高低差が大きく、山側に位置していること、地形に沿うように立てられていることから塀のように防御的なものがあつた可能性も考えられる。

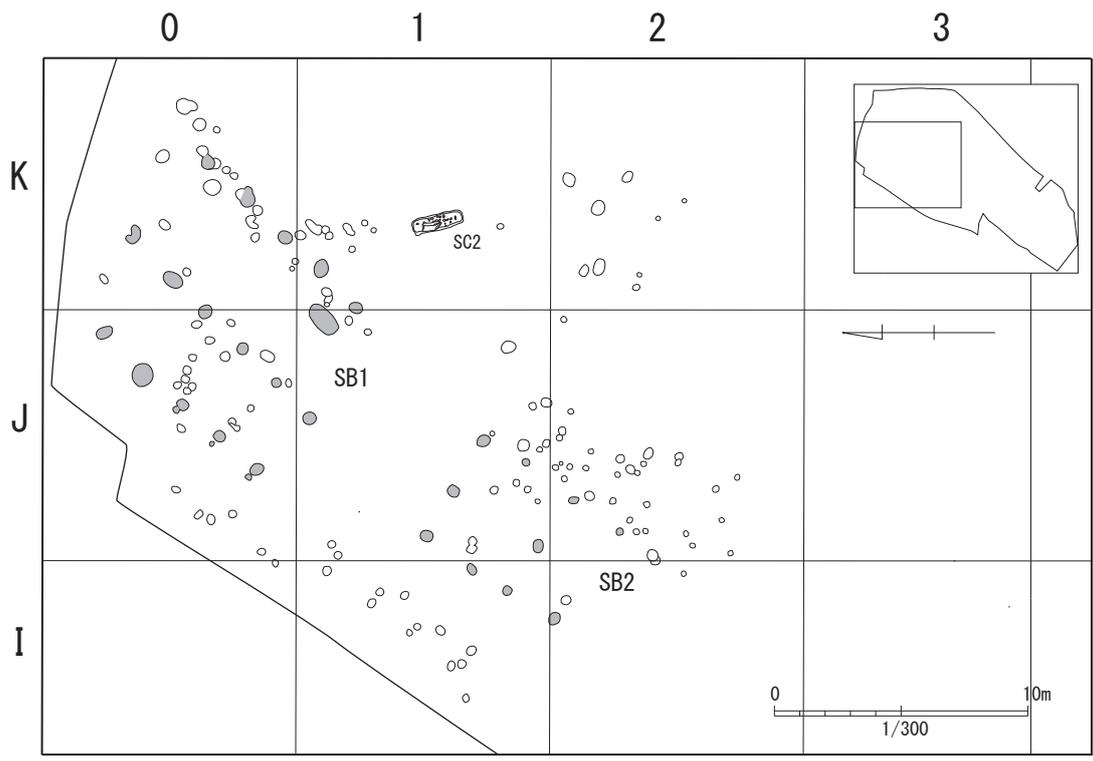
SB2(第27図)

J1Gr～I1Grで検出した。建物は1間×3間の側柱建物で、主軸を北東方向にとる。梁行は北側柱間が4.34m、南側柱間が4.33mを測る。桁行は6.58m、5.99mで、東側柱間は北から2.22m、2.13m、2.23m、西側柱間は北から2.16m、1.66m、2.17mを測り、平均柱間は約2.09mである。柱穴掘方は長径平均43.7cm、短径平均37.5cmで、円形や楕円形を呈し、検出面からの深さは最大で平均31cmである。

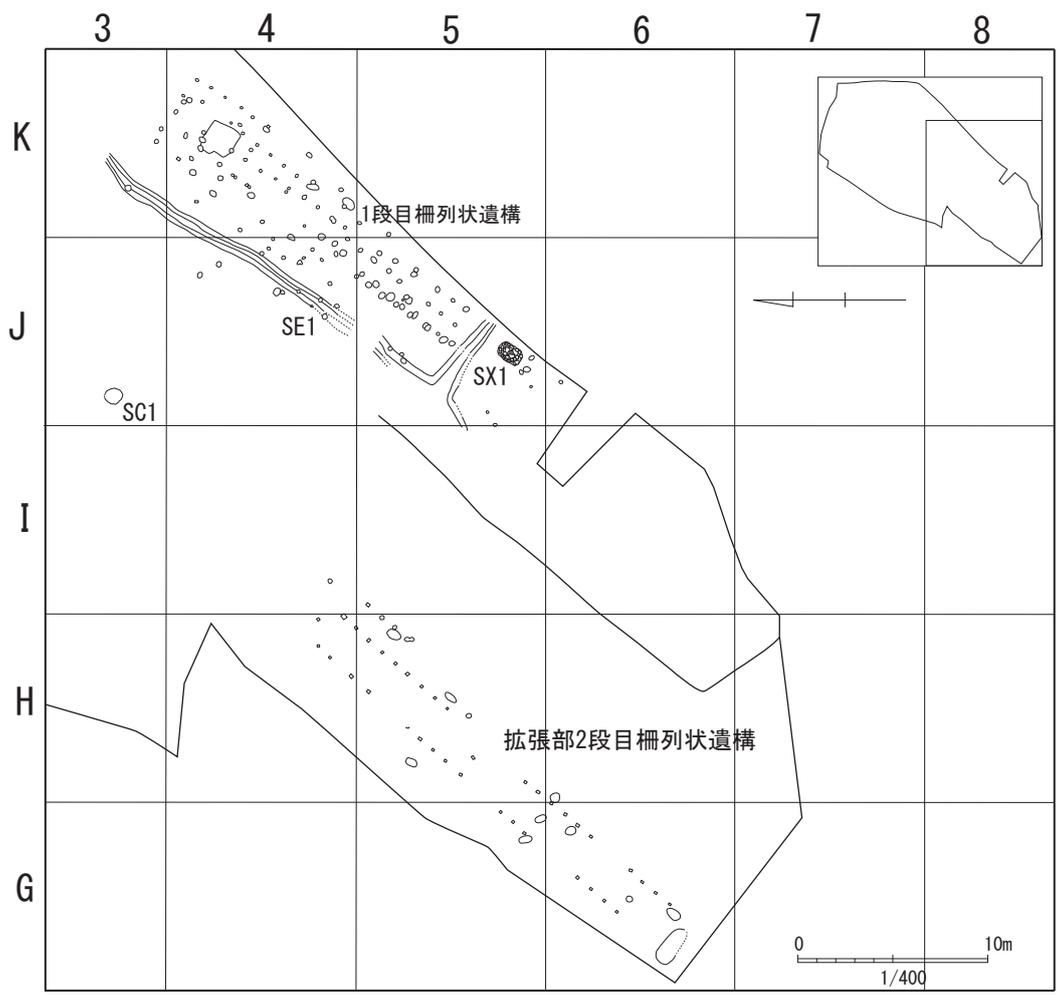
(2) 石組遺構(第28図、図版5)

SX1(第28図)

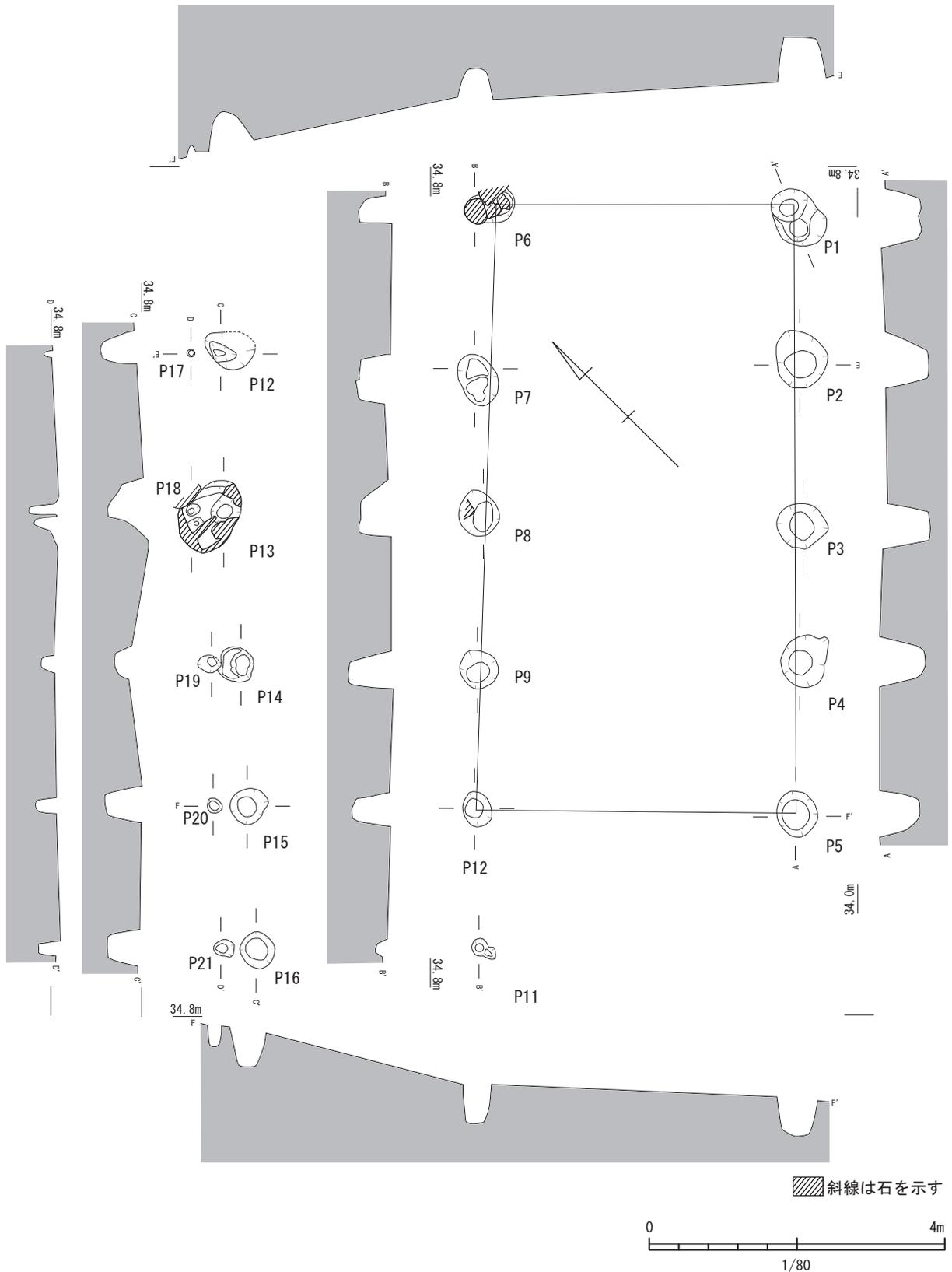
調査区の南側、J5Grに位置し、IV層で検出した。検出時は礫の間にIII層と同じ土質の土が堆積していたため、面的に掘り下げを行った。周囲には溝状遺構や柵列状遺構が見られるが、これらの遺構に関しては後述する出土遺物から時期差があると考えられる。石組遺構は主軸を北西方向にとる隅丸長方形の平面プランを呈し、長軸約1.37m、短軸0.9m、積まれた石の最高位から底面までの深さは約45cmを測る。壁面にはやや角張った石が主体とし積み、やや外側に開き気味に立ち上がる。床面には壁面よりも大きな石が用いられ、敷き詰めるように貼られている。床面を平坦にするために、床を掘り窪め多少の微調整を行っている。検出時に露出していた石には赤化が見られ、埋土中には炭化物や焼土粒を多く含み、床面付近では炭化物が床面ほぼ全体を覆って堆積している。このことから石組内で火を焚いた可能性が高い。また、石組上面や埋土中には崩落礫と考えられる石が多数見られることから、本来は何段か高かった可能性が考えられる。遺構内より出土した炭化材に対し放射性炭素年代測定を行ったところ585±20BP(AD1300～1370、1380～1410)の年代結果が得られた。



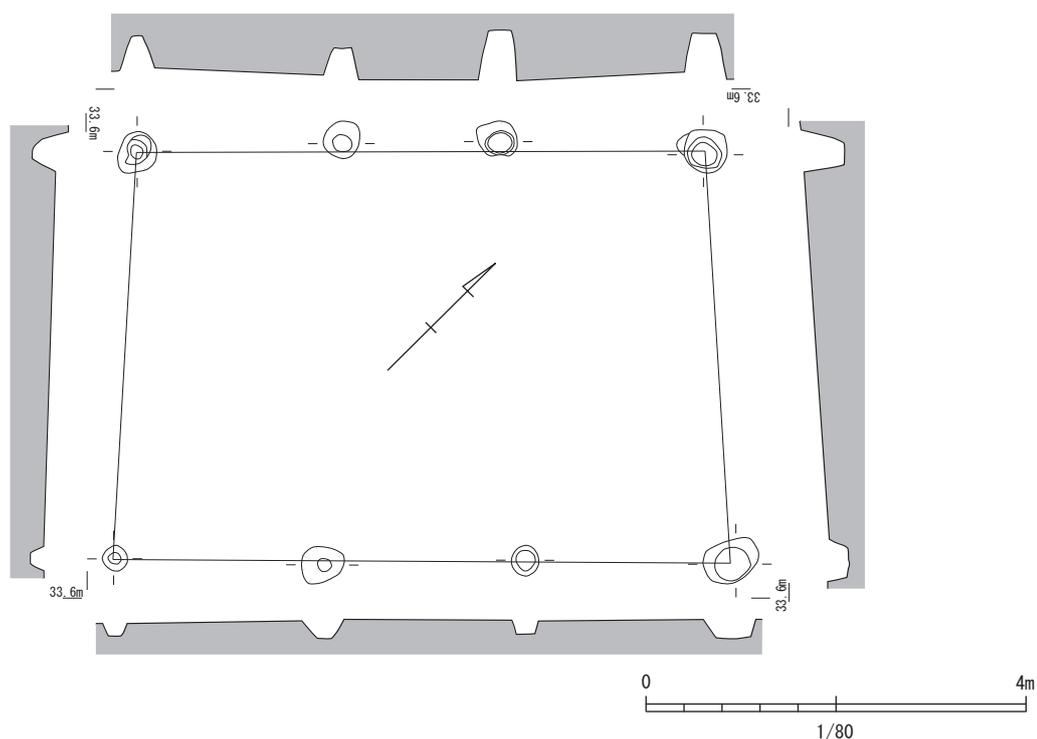
第24図 岡遺跡第9次調査区 古代～近世遺構分布図(1)



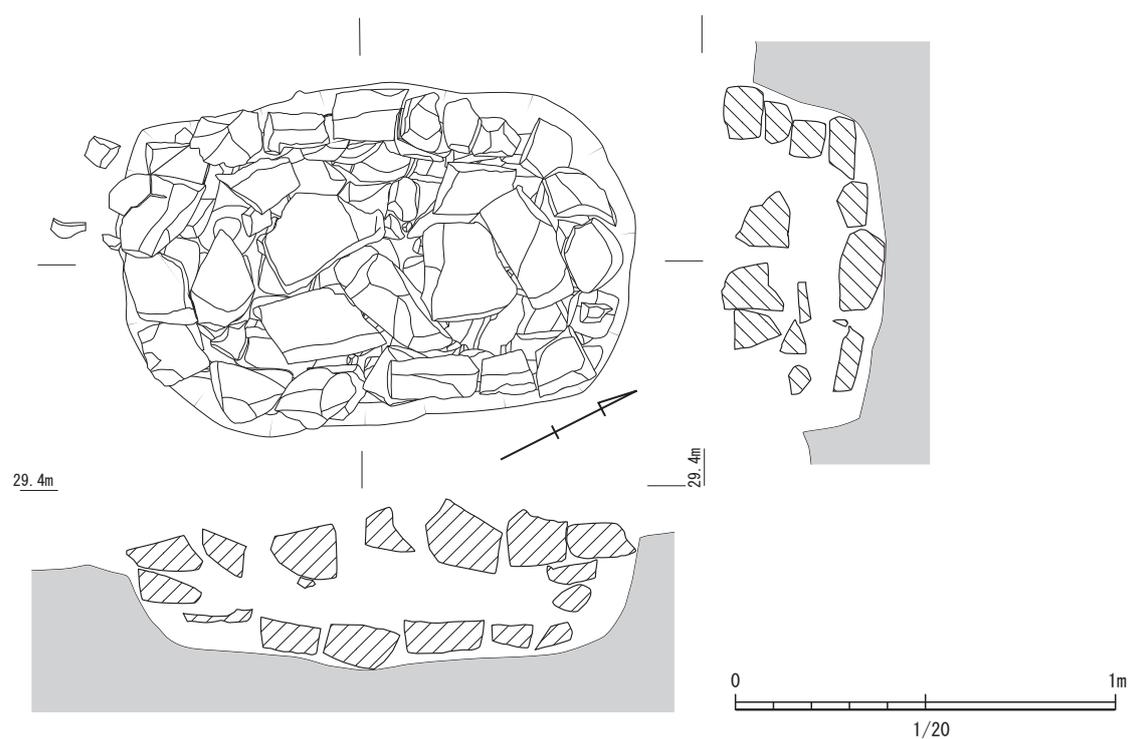
第25図 岡遺跡第9次調査区 古代～近世遺構分布図(2)



第26図 岡遺跡第9次調査区 SB1 実測図



第 27 図 岡遺跡第 9 次調査区 SB2 実測図



第 28 図 岡遺跡第 9 次調査区 SX1 実測図

第 6 表 岡遺跡第 9 次調査区 中世～近世掘立柱建物跡一覧表

遺構名	検出位置	方位	身舎面積 (m ²)	梁(m)			桁(m)			柱穴径 (cm)
				間数	梁行	平均柱間	間数	桁行	平均柱間	
SB1	L0~K0	北東	43.8	1	4.24	4.24	4	4.24~4.34	2.04	53.2~64.7
SB2	J1~I1	北東	28.6	1	4.34	4.34	3	5.99~6.58	2.09	37.5~43.7

(3) 溝状遺構 (第 29 図、図版 4)

SE1 (第 29 図)

調査区の 1 段目 K3Gr ~ J5Gr に位置する。表土を剥ぐとすぐに検出した。検出面からの溝の深さは非常に浅く、埋土の堆積は 1 層のみの確認である。J6Gr で T 字形になっており、2 本の直行する溝は切り合いが確認出来なかったため、同時期に共存していたと考えられる。

(4) 柵列状遺構 (第 29 図、図版 4)

調査区の 1 段目 K3Gr ~ J5Gr、拡張部 2 段目の I4Gr ~ G6Gr に位置し、溝状遺構と同様に表土を剥ぐと検出した。1 段目は溝状遺構とほぼ平行に並んでおり、何らかの関係性があると考えたため、柵列状遺構として報告する。拡張部の 2 段目は、1 段目と平面形や並ぶ間隔等が類似していることから、同様の遺構として扱うことにする。

1 段目の小穴間隔は 0.9 ~ 1 m、横列が約 1 m 間隔で、およそ 4 条の柵列があったと考えられる。拡張部 2 段目の小穴間隔も約 0.9 ~ 1 m、横列が 2 m 間隔で 2 条確認できた。小穴埋土の II 層目が、砂層であったものを数基確認した。1 段目の小穴からキセルが 1 点出土している。

(5) 土坑

SC1 (第 30 図、図版 4)

調査区のほぼ中央 J3Gr に位置する。平面形は 0.85m ~ 0.97m の楕円形を呈し、断面形の深さは最大で 30cm を測る。埋土中には炭化物や炭化粒を多く含み、2 mm ~ 1 cm の白色粒や 3 mm 程の赤褐色粒も多く含んでいる。地山と埋土の差は明確ではなく、埋土の堆積状況も詳細に確認出来なかった。土坑上面から青磁片 1 点が出土しているが、流れ込みによって混入した可能性が高いと考えられる。

遺構内より出土した炭化材に対し放射性炭素年代測定を行ったところ 585 ± 20BP (AD1300 ~ 1370、1380 ~ 1410) の年代結果が得られた。これは、SX1 と全く同じ年代であることに注目したい。

SC2 (第 30 図、図版 4)

調査区の 3 段目、K1Gr に位置し V 層で検出した。長軸が最大 2.03m、短軸は 0.58m、確認面からの深さ最大 24cm を測る。杭状痕跡の埋土の主体が二次堆積アカホヤ火山灰であるため、樹痕で

ある可能性もあるが、土坑底面からある程度並んで検出されたため、陥し穴状遺構とした。

杭状痕跡の直径は 5 ~ 10cm で、床面からの深さは 3 ~ 10cm である。埋土は二次堆積アカホヤが一層で堆積しており、埋土中からは縄文土器片や土師器片、須恵器片、土錘、鞆の羽口が出土している。第 9 次調査区では、二次堆積アカホヤ火山灰層の残存がほとんど見られなかったため、遺構から出土した遺物と 23 年度刊行された第 6・7 次調査の結果と、踏まえると、この遺構の埋土は第 6・7 次調査の II a 層と同一であると考えられ、遺構の形態等からも古くとも古代以降の所産と考えられる。

4-2. 遺物

中世 ~ 近世の遺物は II 層の出土が多数を占めており、明治期に造成されたと考えられる石垣の裏込めからも出土が見られる。

(1) 土器・陶磁器類 (第 32 ~ 34 図 99 ~ 170、図版 8 ~ 10)

SB1 (第 32 図 99 ~ 103)

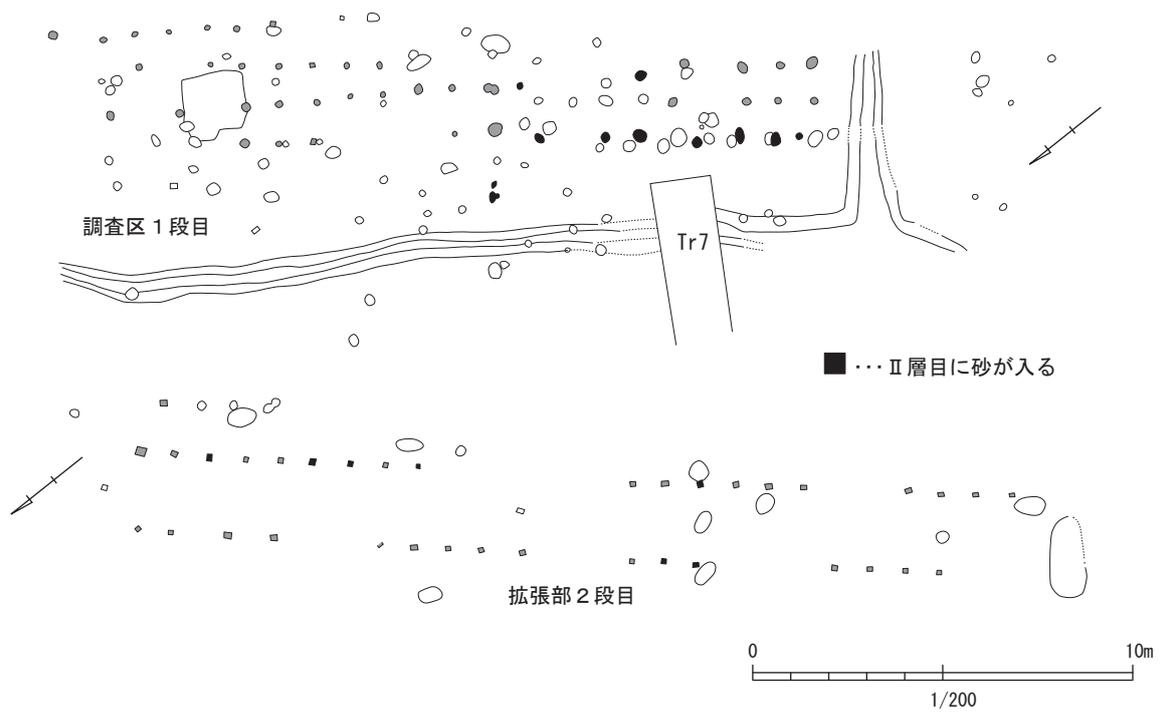
99 は P2 の埋土中と II 層出土のものの接合資料である。内外面ともに自然釉がかかっており、内面には同心円の当て具が施されている。100 は青花皿である。白化粧土後に施釉を行い、釉は高台内面にまでみられ、畳付き部分と高台内に糊殻の痕跡がある。見込みに文字が書かれているが、文字は不明である。101 は龍泉窯系青磁碗の小片、102 は、土師皿で京都系のものか？ 103 は染付碗で外面には、草花文が描かれる。99 は P2、100 は P4、101・103 は P7、102 は P9 からそれぞれ出土した。この他、図化していないが P5 からは備前焼や縄文土器片、P6 からは外面に褐釉のかかる陶器片も出土している。

SE1 (第 32 図 104 ~ 105)

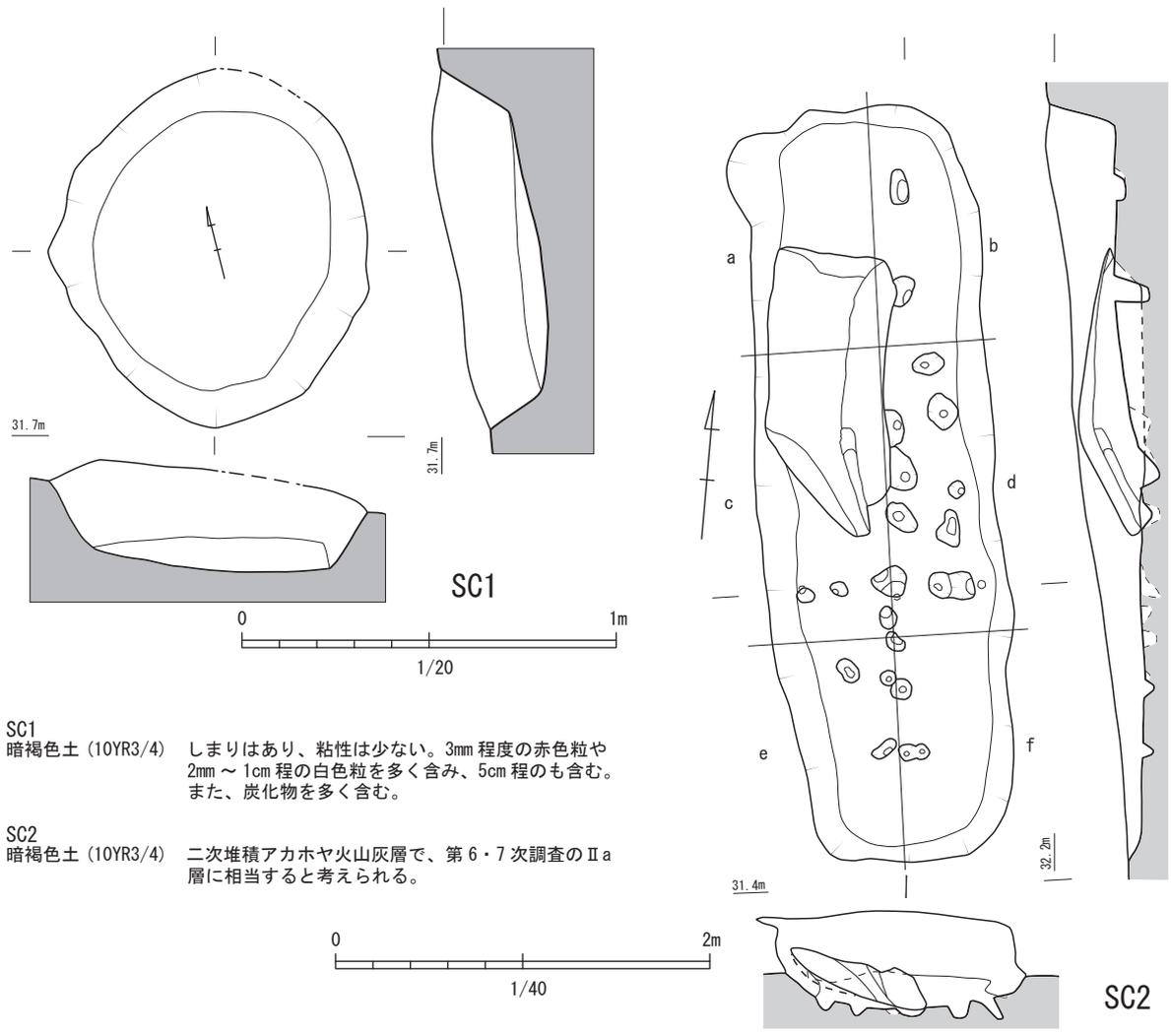
104 は端反青磁碗の口縁部片である。105 は肥前系青磁染付碗の蓋で、内面には四方禪文、見込みにコンニャク印判五弁花文がみられ、18 世紀後半の様相を呈している。この他、縄文土器片や二彩唐津、鑄鉄等が出土しており、特に近世の陶磁器類が多くみられる。

SC1 (第 32 図 106)

106 は端反青磁碗の口縁部片で上田編年の D 類



第29図 岡遺跡第9次調査区 柵列状遺構実測図



第30図 岡遺跡第9次調査区 SC1、SC2 実測図

と思われ、14世紀代の所産か。

SC2 (第32図 107～111)

SC2は遺構を8等分にし、それぞれに便宜上a～hに振り分け遺物を取り上げた。それ以外のものは一括資料として報告する。

107は甕の口縁部で、bから出土した。108は土師皿の小片、109は轆の羽口片で、それぞれdから出土している。羽口片は第7次調査区からも出土し、第6次調査区からは鉄滓の可能性のあるものが出土している。鍛冶遺構は見つかっていないが、平岩における鍛冶の可能性を考える上で重要な資料である。一括の資料では、110・111が挙げられ、110は須恵器甕の胴部片で外面には格子目タタキ、内面には横方向のタタキがみられる。111は管状土錘で最大長2.8cmと小型である。その他、a、b、dから108と同一個体の土師器小片が出土している。

(2) 遺構外の出土遺物

古代～中世の土器・土製品 (第32図 112～120)

112・113は布痕土器で112は断面を三角形に尖らせ、113は口縁部先端を尖らせるように成形している。114はやや軟質な須恵器の胴部片、115は小型壺の口縁である。116は須恵器の坏で、底部はヘラ切り後ナデ調整を行う。117は土師皿の底部片でヘラ切り後ナデ調整を行う。118は瓦質鍋で16世紀前半か？119は土製の羽釜で、耳の一部にススが付着している。120は管状土錘で最大長4.55cmである。

貿易陶磁器 (第33図 121～136)

121～136は中国産の貿易陶磁器である。

121～123は青磁碗である。121は外面にヘラ描き、線描きによってやや細い蓮弁文を施文する。15世紀中葉の様相を示す。122は外面に線刻によって簡略化された細い蓮弁文を施す。白化粧土後に施釉を行う。123は高台部分で、一部高台内面まで釉がかかり、溶着物が高台内面に付着している。124は青磁稜花皿で、文様は粗略で内面に二条の圈線を施す。

125～129は白磁である。125は口縁部が外反する碗で、口縁部外面直下までケズリが入る。轆轤目が明瞭で、全体的に薄く施釉され、ピロースクタイプⅢに相当する。126は邵武四都窯の碗で

あると考えられ、127は八角杯である。128は皿の高台部で産地については不明である。高台内面まで施釉される。

130～136は青花碗である。130～132は、体部が開き、見込みはやや窪む、いわゆる「蓮子碗(レンツー碗)」である。外面と見込みに丸を三つ結合した文様を描いた碗で、口縁や畳付きは鋭い造りである。132は施釉後に畳付き周辺のみ釉剥ぎを行う。133は彰州窯の碗で、外面には文様が施される。134・135は青花皿である。134は端反の皿で、外面胴部には宝相唐草文が描かれる。135は碁笥底の皿で、口縁部がやや内湾気味に立ち上がる。外面には略化した字のような文様を描き、見込みには人形化した「寿」?の字が描かれる。136は青花盤で、芙蓉手花文や鳥文などが描かれている。

国産陶磁器 (第33・34図 137～170)

137～143は国産陶器で、すべて備前焼の播鉢である。137は乗岡編年の中世5期aに相当し、138は中世以降に下る可能性もあるが、産地も不明であったためここで紹介する。139・141は近世1期aないしbに該当する。140は139と同一個体で、時期もそれに準ずる。142・143は播鉢底部で胎土に砂粒を多く含む粗い粘土が用いられている。

144～149は染付碗で、144は底部には離れ砂が付着する。見込みは釉剥ぎされているが、その範囲は小さく蛇ノ目釉剥ぎかは不明である。145は小峰焼の可能性がある。146は雪輪梅花文の一部であると考えられる雪笹文が描かれ、149は二重網目文が見られ、文様は粗く描かれる。

150は北部九州系と思われる碗で、同一個体のものが石垣裏込めからも出土している。151は広東碗で、152は湯呑碗である。153～160は染付皿または鉢で、156は釉の縮れが見られる。155は見込みと高台内に砂目積痕が見られる唐津陶器皿である。161は土瓶の蓋のつまみで、162は薩摩焼の土瓶底部である。外面はススが付着している。163・164は仏飯器である。163は全体的に明るい黒褐色の釉がかけられている。産地は不明である。165は肥前系の播鉢で17世紀後半～18世紀後半の様相を呈する。166は備前焼小型甕に類似する。167は瓦質の火鉢で、体部の底部界に亀甲文を持ち、内面は板状工具に回転ナデが施され

る。168は荒焼(アラヤチ)の甕である。169は堺・明石系の播鉢で、白神分類のⅢ期に相当する。170は釘文が付いていることから17世紀後半の様相を示す。

(3) 石器製品 (第34図 171~180)

171~178は火打ち石で、火打ち石と確認でき図化しているものは全部で8点である。それに関連すると思われる石材も26点出土しており、これらの中には鉄分が付着しているもの見られる。全ての石材がチャートで、第7次調査区で出土していた徳島県太田井産のようなグリーンチャートは見受けられない。

179・180は砥石で、179は正面・右側面・左側面

に砥痕が確認でき、180は節理により裏面は欠損しているが、よく利用されていたことが推察できる。

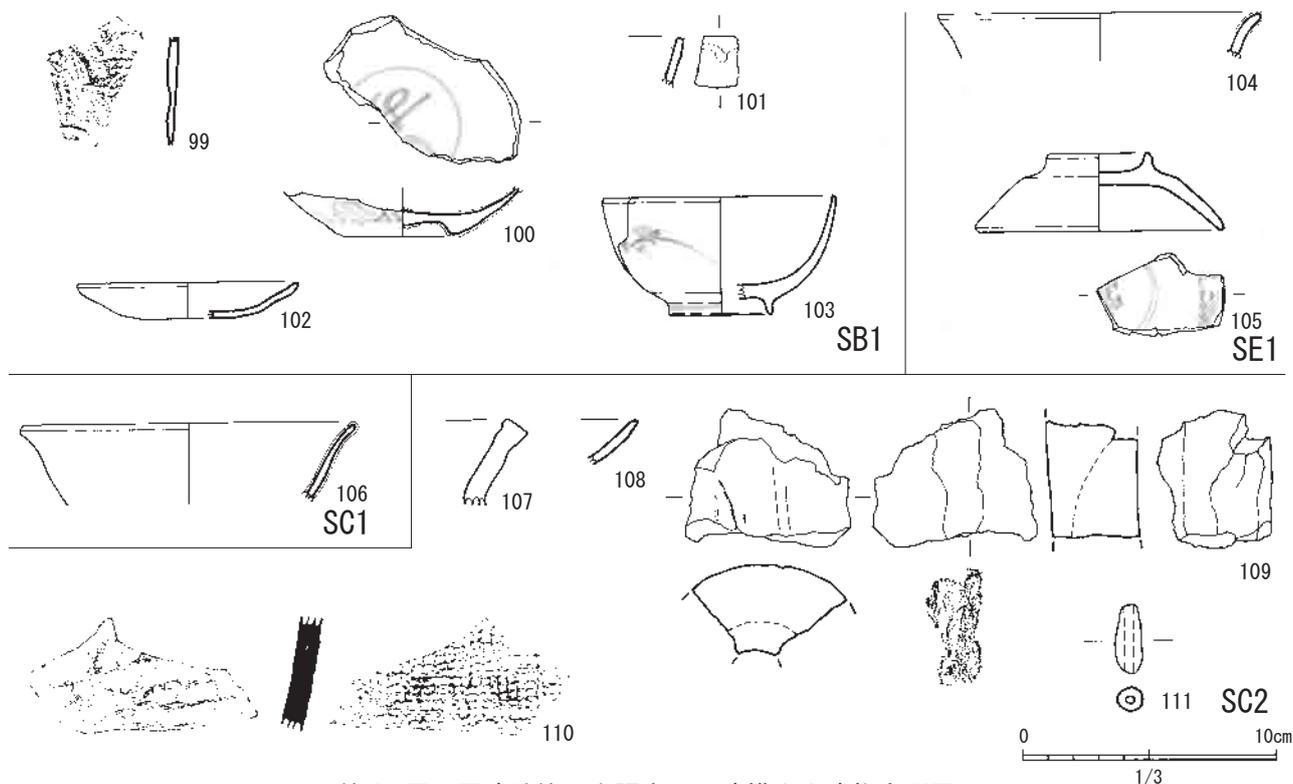
(4) 金属製品類

銭貨 (第35図 181~183)

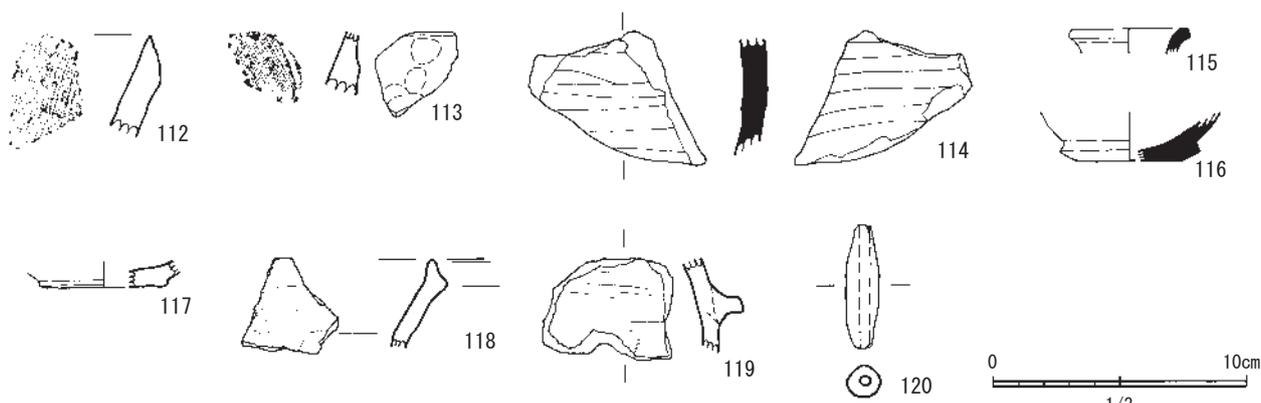
掘立柱建物跡からSB1のP1、P2、P9からそれぞれ1枚出土し、遺構外から1枚の銭貨が出土している。P1のものは柱穴の最下部から出土しているが、サビの腐食が激しく、元の状態は不明である。おそらく地鎮のために埋納されたものと考えられる。

その他の金属製品 (図版10)

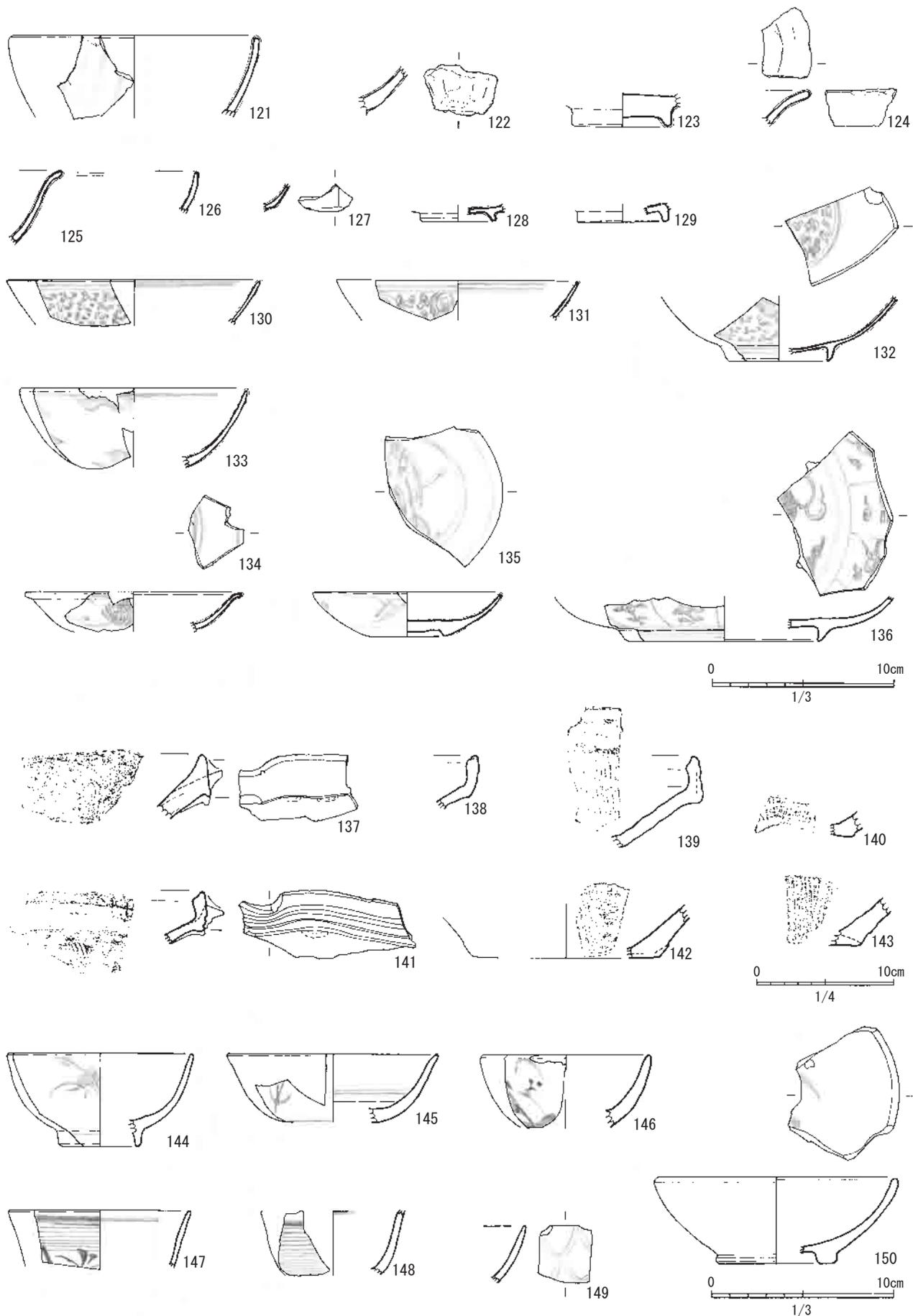
図版10上段左は銅製品と考えられ、その性格は明らかにしえない。SB1のP5より出土している。



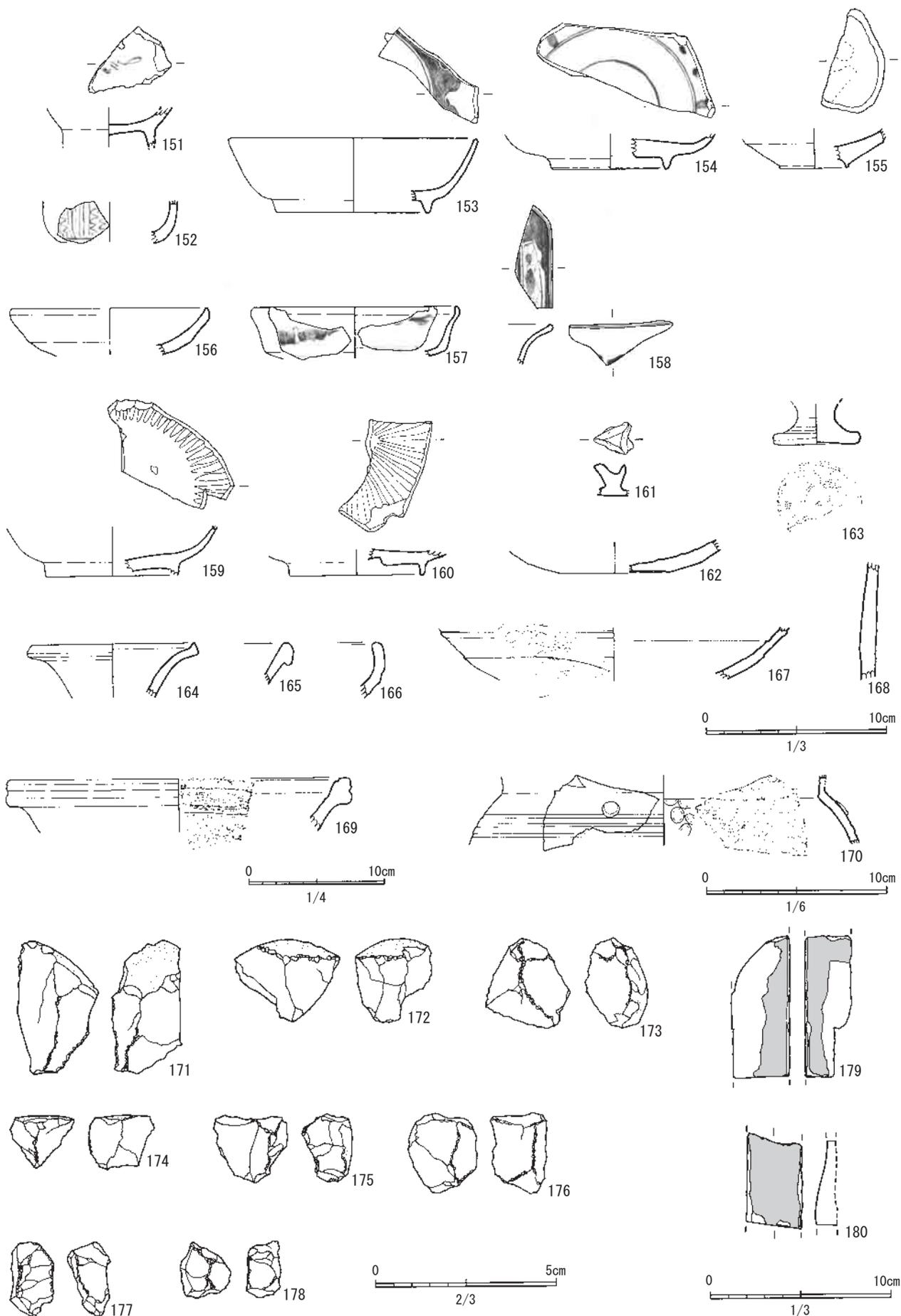
第31図 岡遺跡第9次調査区 遺構出土遺物実測図



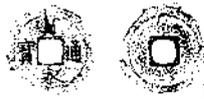
第32図 岡遺跡第9次調査区 古代~近世遺物実測図



第33图 岡遺跡第9次調査区 中世～近世陶磁器実測图



第34图 岡遺跡第9次調査区 近世陶磁器・近世石器実測図



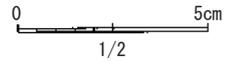
181



182



183



第35図 岡遺跡第9次調査区 近世銭貨拓本図

第7表 岡遺跡第9次調査区 古代～近世土器・陶磁器観察表(1)

No.	出土地点	種別	器種	部位	法量			文様・調整の特徴		色調		胎土	備考	分類
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
99	K4 II + SB1P2	陶器	壺・壺	胴部	—	—	—	自然釉	同心円当て具痕/自然釉	黒 7.5YR2/1	胎土: 灰黄褐 10YR5/2	1mm以下の白色、黄橙、灰白色粒多	磁摩焼か?	
100	SB1P4	磁器	皿	体部 ~底部	—	(3.6)	—	芭蕉文、高台内全面施釉、量付付近にもみ散り着	見込み・文字	釉: 灰白 10Y7/1	胎土: 浅黄橙 10YR8/3	粗	白化粧土の後施釉 貫入: 有	
101	SB1 P7	磁器	碗	口縁	—	—	—	片切彫蓮弁文		釉: 明緑灰 7.5GY7/1	胎土: 灰黄 2.5Y7/2	粗	貫入: 有	B類IV
102	SB1 P9	土師器	皿	口縁 ~底部	—	(4.0)	—	ナデ	ナデ	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/4	微細な白・褐・黒色粒、2mm以下の灰白粒	手づくね? 京都系?	
103	SB1 P7	染付	碗	口縁 ~高台	(9.0)	(4.0)	4.7	草花文/圏線		釉: 灰白 2.5GY8/1	胎土: 灰白 5Y8/1	良		
104	SE1+K3ウラゴメ	磁器	碗	口縁	(12.8)	—	—			釉: オリーブ灰 10Y6/2	胎土: 灰黄 2.5Y7/2	粗	貫入: 有	D類
105	SE1	磁器	蓋	天井 ~口縁	(9.6)	天(4.0)	2.1	青磁釉	四方権文/コンニャク印版/圏線	釉: 明緑灰 10GY7/1	胎土: 灰白 7.5GY8/1	良	肥前青磁 1750~1780年代	
106	SC4	磁器	碗	口縁 ~体部	(13.4)	—	—			釉: 灰オリーブ 7.5Y6/2	胎土: 灰白 2.5Y7/1	精	貫入: 有	D類 龍泉窯系?
107	SC7b	土器	壺	口縁 ~頸部	—	—	—	横方向のナデ	横方向のナデ	にふい黄橙 10YR7/2	にふい黄橙 10YR7/2	5mm以下の褐色粒を多量、2mm以下の灰白粒		
108	SC7d	土師器	皿	口縁部	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	にふい黄橙 10YR7/2	にふい黄橙 10YR7/3	微細な光沢粒多量、2mm以下の褐色粒		
110	SC7	須恵器	壺	胴部	—	—	—	格子目タタキ	横方向の平行タタキ	灰 N6	灰白 N7	精良		
112	K1 II	布痕土器	鉢	口縁部	—	—	—	ナデ	布目圧痕	にふい橙 7.5YR7/4	にふい黄橙 10YR7/2	4mm以下の灰白色粒、3mm以下の褐・透明光沢粒		
113	G6 III	布痕土器	鉢	口縁部	—	—	—	指押さえ/ナデ	布目圧痕	にふい橙 7.5YR7/4	にふい黄橙 10YR7/4	2mm以下の灰白・透明光沢粒、1mm以下の褐色粒		
114	I3カクラン	須恵器	壺?	胴部	—	—	—	横方向の丁寧なナデ	横方向のナデ	灰白 5Y8/1	灰白 7.5Y8/1	1mm以下の黒色粒	焼成はやや軟質	
115	I7 II	須恵器	小型壺	口縁部	(4.6)	—	—	回転ナデ/自然釉	回転ナデ 自然釉	灰 5Y5/1	黄灰 2.5Y6/1	微細な黒色粒、1mm以下の灰白色粒	小型壺	
116	K4 II	須恵器	坏	底部	—	(5.4)	—	回転ナデ/ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	灰白 7.5Y7	灰白 7.5Y7	1mm以下の黒色粒多量		
117	H6 II	土師器	皿	底部	—	(5.0)	—	丁寧なナデ/ヘラ切り後ナデ	丁寧なナデ	にふい橙 5YR7/3	にふい黄橙 10YR7/2	きめ細か		
118	ウラゴメ	瓦質土器	鍋	口縁部	—	—	—	回転ナデ	横方向の工具ナデ	灰 N 5	灰白 5Y7	微細な白色粒、5mm以下の灰白粒		
119	I2 表土	瓦質土器	羽釜	胴部	—	—	—	横方向のナデ/耳付き	横方向のハケ	灰黄褐 7.5YR6/2	黄灰 2.5Y5/1	2mm以下の灰白・褐色粒	耳部分は被熱により赤褐色に着色し、スス付着	
121	I1表土	磁器	碗	口縁 ~体部	(13.8)	—	—	蓮弁文		釉: オリーブ灰 2.5GY6/1	胎土: にふい黄橙 10YR7/4	粗	口縁は蓮弁を意識している	B類III 漳州窯
122	H6 II	磁器	碗	口縁 ~高台脇	—	—	—	線刻蓮弁文		釉: オリーブ灰 2.5GY5/1	胎土: 淡黄 2.5Y8/3	粗	白化粧土後施釉 貫入: 有	B類IV' 漳州窯
123	K3ウラゴメ	磁器	碗	底部	—	5.3	—	高台内まで施釉		釉: 灰オリーブ 5Y5/2	胎土: 灰白 5Y7/1	精	貫入: 無	龍泉窯系
124	H5 II	磁器	皿	口縁 ~体部	—	—	—		圏線/二重沈線	釉: 明緑灰 7.5GY7/1	胎土: にふい黄橙 10YR8/1	粗	貫入: 有	稜花皿
125	3表土	磁器	碗	口縁 ~体部	—	—	—			釉: オリーブ黄 5Y6/3	胎土: 灰白 5Y7/1	精	貫入: 有	ピロースク III
126	G6 II	磁器	碗?	口縁	—	—	—			釉: 灰白 2.5Y8/2	胎土: 浅黄橙 10YR8/3	粗	貫入: 有	邵武四都 窯
127	H5 II	磁器	碗	高台脇	—	—	—			釉: 灰白 2.5YR8/2	胎土: 淡黄 2.5YR8/3	粗	貫入: 有	D群
128	I16 II	磁器	皿	高台	—	(4.0)	—			釉: 灰白 10Y7/1	胎土: 淡黄 2.5Y8/3	粗	貫入: 有	
129	3表土	磁器	皿	高台	—	(4.8)	—			釉: 灰白 10Y7/1	胎土: 淡黄 2.5Y8/3	粗	貫入: 有	
130	表土	磁器	碗	口縁	(14.0)	—	—	界線/丸を三つ結合した文	界線	釉: 明緑灰 10GY8/1	胎土: 灰白 N 8	精良	貫入: 無	碗C群
131	H5 II	磁器	碗	口縁	(13.4)	—	—	界線/丸を三つ結合した文	界線	釉: 明緑灰 10GY8/1	胎土: 灰白 5Y8/2	精良	貫入: 無	碗C群
132	表土	磁器	碗	体部 ~高台	—	(5.2)	—	界線/丸を三つ結合した文/施釉後量付周辺施釉	界線/見込み・丸を三つ結合した文	釉: 明緑灰 10GY8/1	胎土: 灰白 7.5GY8/1	精良	貫入: 無	碗C群
133	J2 II	磁器	碗	口縁 ~底部	(12.4)	—	—		界線	釉: 灰白 5Y8/2	胎土: 浅黄橙 10YR8/3	粗	貫入: 有	
134	2 II	磁器	碗	口縁 ~体部	(12.0)	—	—	界線/牡丹唐草文	界線	釉: 明緑灰 7.5GY8/1	胎土: 灰白 N 8	精良	貫入: 無	碗B群
135	T1バレット+ウラゴメ	磁器	皿	体部 ~底部	(10.4)	(4.0)	2.45	界線/簡化した文字? 量付周辺もみ散り着	界線/見込み・文字「寿」か?	釉: 灰白 10Y8/1	胎土: 灰白 N 8	精良	貫入: 無	皿C群III
136	I7 II	磁器	盤	高台脇 ~高台	—	(10.4)	—	折枝花文?	鳥文、雲文/見込み・龍?	釉: 明緑灰 10GY8/1	胎土: 灰白 5Y 8/1	精良	全面施釉後量付周辺を施釉し、明末~清初(17~18c)	
137	H4 II	陶器	播鉢	口縁部	—	—	—	回転ナデ/自然釉	播目(単位不明)/回転ナデ/自然釉	灰黄褐 10YR6/2	胎土: 褐灰 7.5YR6/1	5mm以下の褐色粒、2mm以下の白色粒多	15世紀前葉~15世紀後葉	
138	J4 表土	陶器	播鉢	口縁部	—	—	—	横ナデ/回転ナデ	回転ナデ	にふい橙 7.5YR6/4	胎土: にふい赤褐 5YR5/3	2mm以下の黒色粒多、微細な灰白色粒少		
139	J4 表土	陶器	播鉢	口縁部 ~胴部	—	—	—	回転ナデ/施釉	播目(単位不明)/回転ナデ/施釉	灰赤 2.5YR5/2	胎土: 灰黄 2.5Y7/2	微細な灰白色粒多		

第7表 岡遺跡第9次調査区 古代～近世土器・陶磁器観察表(2)

No.	出土地点	種別	器種	部位	法量			文様・調整の特徴		色調		胎土	備考	分類
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
140	3Ⅲ	陶器	鐏鉢	胴部 ～底部	-	-	-	回転ナデ/施釉	襷目(9条以上)/回転ナデ/施釉	にふい赤褐 5YR5/3	胎土:黄灰 2.5YR6/1	1mm以下の灰白色粒、微細な灰白色粒多		
141	K4ウラゴメ	陶器	鐏鉢	口縁部	-	-	-	回転ナデ/指押さえ/自然釉	襷目(単位不明)/回転ナデ/自然釉	にふい赤褐 5YR5/4	胎土:灰白 10YR7/1	5mm以下の灰白色粒、1mm以下の灰白色粒多	16世紀中葉～17世紀初頭	
142	I7Ⅱ	陶器	鐏鉢	胴部 ～底部	(13.6)	-	-	横ナデ	襷目(7条以上)/回転ナデ	にふい黄褐 10YR6/3	胎土:灰黄褐 10YR6/2	1mm以下の灰白色粒多、淡黄褐色の粘土が部分的にマーブル状を呈する		
143	I3カクラン	陶器	鐏鉢	胴部 ～底部	-	-	-	回転ナデ/施釉	襷目(8条以上)/施釉	にふい赤褐 5YR5/3	胎土:灰 5Y6/1	1mm以下の灰白色粒多		
144	具	染付	碗	口縁 ～高台	(10.0)	(4.4)	5.2	草花文/圏線	見込み:釉剥ぎ	釉:灰白 10Y8/1	胎土:灰白 N8	精		
145	K4ウラゴメ	染付	碗	口縁 ～体部	(11.4)	-	-	草文?/圏線	圏線/見込み:釉剥ぎ	釉:灰白 10Y8/1	胎土:灰白 5Y8/1	良		
146	K4ウラゴメ	染付	碗	口縁 ～体部	(9.2)	-	-	雷笹文		釉:灰白 5Y8/1	胎土:灰白 7.5Y8/1	良	肥前系	
147	表探	染付	碗?	口縁 ～体部	(9.8)	-	-	唐草文?	圏線	釉:灰白 5Y8/1	胎土:灰白 2.5Y 8/2	良	肥前系	
148	I7Ⅱ	染付	碗	体部	-	-	-	圏線	圏線	釉:灰白 5Y8/1	胎土:灰白 N8	精	肥前、端反碗(19世紀前半から後半)	
149	K4Ⅱ	染付	碗	口縁 ～体部	-	-	-	二重網目文		釉:灰白 2.5GY8/1	胎土:灰白 5Y8/1	良	18C後半	
150	表土	磁器	碗	口縁 ～底部	(13.0)	(6.4)	4.7	施釉	見込み:鉄絵	釉:にふい黄 2.5Y6/3	胎土:灰白 2.5Y8/2	良	同一と思われるものがウラゴメから出土。肥前系?	
151	H6表土	磁器	碗	高台	-	-	-	圏線	鶴か?	釉:明緑灰 7.5GY8/1	胎土:灰白 5Y8/1	良	広東碗	
152	表土	染付	碗	体部	-	-	-	よろけ縞文/圏線		釉:灰白 7.5GY8/1	胎土:灰白 5Y8/1	良	湯呑碗(19世紀後半)	
153	I4ウラゴメ	染付	皿	口縁 高台	(13.8)	(8.4)	4.2	口鉢	波文、墨弾き	釉:灰白 10Y8/1	胎土:灰白 7.5Y 8/1	良	輪花皿	
154	I4ウラゴメ	染付	皿	体部 ～高台	(6.3)	-	-	蛇ノ目凹型高台	圏線	釉:灰白 5GY8/1	胎土:灰白 2.5Y8/1	良	18C後半 肥前系	
155	J4Ⅱ	陶器	皿	体部 ～底部	(3.8)	-	-	高台内に砂付着/所々に釉	砂目積みの痕	釉:灰黄 2.5Y7/2	胎土:にふい黄 5YR6/4	良	1610～1650年代 唐津	
156	K4ウラゴメ	陶器	皿	口縁部 ～体部	(10.8)	-	-	長石釉	長石釉	釉:灰白 7.5Y7/1	胎土:灰白 2.5Y8/2	粗		
157	K3Ⅱ	染付	皿	口縁 鉢部	(11.2)	-	-	染付	見込み:二重圏線	釉:灰白 5GY8/1	胎土:灰白 7.5Y8/1	良		
158	K4ウラゴメ	染付	八角鉢	口縁 ～体部	-	-	-	氷裂花文		釉:灰白 10Y8/1	胎土:灰白 2.5GY8/1	良		
159	I4ウラゴメ+ K4Ⅱ	磁器	皿	体部 ～底部	-	-	-	蛇ノ目凹型高台	ヘラ彫り/足付ハマの滑着痕	釉:明緑灰 7.5GY8/1	胎土:灰白 5Y8/1	良	輪花皿	
160	I2表土	磁器	皿	底部	(7.4)	-	-	蛇ノ目凹型高台	ヘラ彫り	釉:灰白 10Y8/1	胎土:灰白 2.5Y 8/1	良	輪花皿	
161	K1Ⅱ	磁器	蓋	つまみ	-	-	-	青磁釉		釉:灰オリーブ 7.5Y6/2	胎土:灰 5Y6/1	精	関西系	
162	H6Ⅱ	陶器	土瓶	底部	(5.9)	-	-	回転ナデ/底部は被熱しており、全体的にニス付着	回転ナデ/施釉	にふい赤褐 5YR4/3	灰黄褐10YR4/2 胎土:橙5YR6/6	微細な灰白色粒多	薩摩焼	
163	I3カクラン	陶器	仏飯器	底部	-	4.8	-	施釉	糸切り痕	釉:黒褐 10YR2/3	胎土:褐灰 10YR6/1	堅緻。1mm以下の灰白色粒多	北部九州産か?	
164	J4Ⅱ	磁器	花瓶	口縁部	(9.0)	-	-	青磁釉		釉:明オリーブ灰 5GY7/1	胎土:灰白 5Y8/1	精	肥前系	
165	J6Ⅱ	陶器	鉢類	口縁部 ～胴部	-	-	-	口唇部部分に薄く施釉/回転ナデ	回転ナデ	にふい赤褐 5YR4/3	胎土:にふい赤褐 5YR45/4	精良	肥前系 17C後半～18C後半	
166	I表土	陶器	小型皿	口縁部	-	-	-	回転ナデ/自然釉	回転ナデ施釉	暗赤褐 5YR3/3	胎土:灰 5Y6/1	微細な灰白色粒多		
167	95	瓦質土器	火鉢	胴部				回転ナデ/亀甲文	板状工具によるナデ	灰 5Y6/1	灰 5Y6/1	精良		
168	I4ウラゴメ	陶器	壺・壺	胴部	-	-	-	縦方向の工具痕	横方向の工具ナデ	灰黄褐 10YR5/2	胎土:明赤褐 5YR5/6	精良	琉球 荒焼	
169	H4Ⅱ	陶器	鐏鉢	口縁部 ～胴部	(25.0)	-	-	回転ナデ	襷目(10条以上)/回転ナデ/回転ヘラケズリ	にふい褐 5YR5/4	胎土:明赤褐 5YR5/6	微細な灰白・淡黄褐色粒多、2mm以下の灰白色粒、にふい黄褐色の粘土	堺焼鉢	
170	K3ウラゴメ	陶器	壺	頸部 ～胴部	-	-	(35.8)	鉋文/回転ナデ	粗い棒目タタキ/回転ナデ/指押さえ	暗赤褐 5YR3/2	胎土:褐 7.5YR4/3	にふい黄褐色の粘土がマーブル状に入る。	17C後半	
参考2	表土	陶器	碗	胴部	-	-	-	施釉	施釉	釉:黒褐 2.5Y3/1	胎土:黒褐10YR2/2 胎土:灰白2.5Y8/1	精良		

第8表 岡遺跡第9次調査区 古代～近世土製品観察表

No.	出土地点	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
109	SC7-d	羽口	5.0	6.5	3.7	98.8	外面に縦方向の粗いナデ、内面には縦方向の工具ナデ調整。胎土には、7mm以下の灰白色の小石、2mm以下の透明光沢粒、微細な白色粒を含む。穿孔された内面は被熱の影響で褐色に変色している。
111	SC7-括	土鍾	2.8	1.05	1.1	2.5	孔の径3mm
120	H5Ⅱ	土鍾	4.55	1.35	1.3	6.8	孔の径4mm

第9表 岡遺跡第9次調査区 近世石器計測表

No.	出土地点(グリッド)	層	器種	石材	法量			
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
171	K3	Ⅱ	火打ち石	チャート	3.7	2.2	1.9	15.08
172	G6	Ⅱ	火打ち石	チャート	2.3	2.85	2.1	12.37
173	G6	Ⅱ	火打ち石	チャート	2.5	2.35	1.7	8.93
174	3	Ⅱ	火打ち石	チャート	1.45	1.75	1.8	4.64
175	SE1		火打ち石	チャート	1.9	2.05	1.4	5.78
176	K3	Ⅱ	火打ち石	チャート	2.25	1.9	1.6	7.06
177	G6	Ⅱ	火打ち石	チャート	2.05	1.2	1.05	3.17
178	J4	Ⅱ	火打ち石	チャート	1.55	1.35	0.95	2.2
179	3	Ⅱ	砥石	頁岩	7.9	3.2	2.6	71.49
180	一括		砥石	頁岩	5.35	3.15	1.2	26.95

第5節 その他の時代の遺構と遺物

この節では、帰属年代が特定しづらい遺構や遺物、前節で報告した時代以外の遺物について報告する。

5-1. 遺構（第37図、図版4）

SX2（第37図）

調査区の2段目、K2Grに位置しV層上面で検出した。主軸を北東方向にとり、西側の長く配置された石列に2本の短い石列が直行するように配石されている。西側の石列は、斜めに差し込むように面をそろえて据えられており、直行する2本も同じように据えてある。石材には尾鈴山凝結凝灰岩や砂岩を利用している。また、精査では掘り込みプランが確認出来なかったため、サブトレンチを入れて確認を行ったが、地山と埋土の差が明瞭でなく、掘り込みのプランを確認することが出来なかった。

舟形配石炉や石棺墓などの可能性を考えたが、石に赤化した痕跡は確認出来ず、また、遺構の規模が小さく、等高線とほぼ平行にあるため墓としては考えづらい。用途は不明であるが、明らかに人為的に石が配石してあるため遺構として報告する。遺構外から75・93が出土している。

SC3（図版4）

調査区の1段目、K4Grに位置しIV層で検出した。一辺が約1.6mの不整形形で、埋土中からは拳大の礫が大量に混入していた。埋土中からは礫と共に、青磁碗や染付碗、土瓶の蓋、瓦、銃弾等が出土している。石垣裏込めに詰められた礫と同規模の礫が多量に混入し、多数の遺物が混入していることから、廃棄土坑としての目的があったのではないかと判断している。

5-2. 遺物（第38・39図184～197、図版10）

SC3（第38図184～191）

184は青磁碗で見込みには印花文が花卉状に施される。施釉後高台内途中まで釉剥ぎするが、一部高台内面に釉が付着している。端反碗であると考えられ15～16世紀の所産であると考えられる。185・186は染付碗の高台部分で、見込みに斜格子文が描かれている。186には焼き継ぎの跡があり、高台内面に文字が書かれているが詳細は不明である。共に19世紀の様相を呈している。189は関西

系土瓶の蓋の可能性がある。190は甕の胴部片でSC2とK4Gr石垣裏込めの接合資料である。外内面には、粗い格子目タタキがみられる。191は瓦質の羽釜である。図化していないが、刀子も1点出土している。187は鉄砲の弾丸で、鉛玉で鑄張りとみられる凸線が一周している。188は西南戦争関連の鉄製銃弾であると考えられる。X線写真で施条が確認できないことから、施条による回転が得られず、また銅製よりも軽量であることから、有効な攻撃は出来なかったと考えられる。

弥生時代～古墳時代の土器（第39図192～194）

192と193は甕で、192は胎土に褐色の小石を多量に含み、土器の胎土や器形からSC2の107と同一個体であるとされる。193は口縁部の付け根部分が肥大している。風化が激しい。194は頸部に貼付刻目突帯を施す。

瓦（第38図195・196）

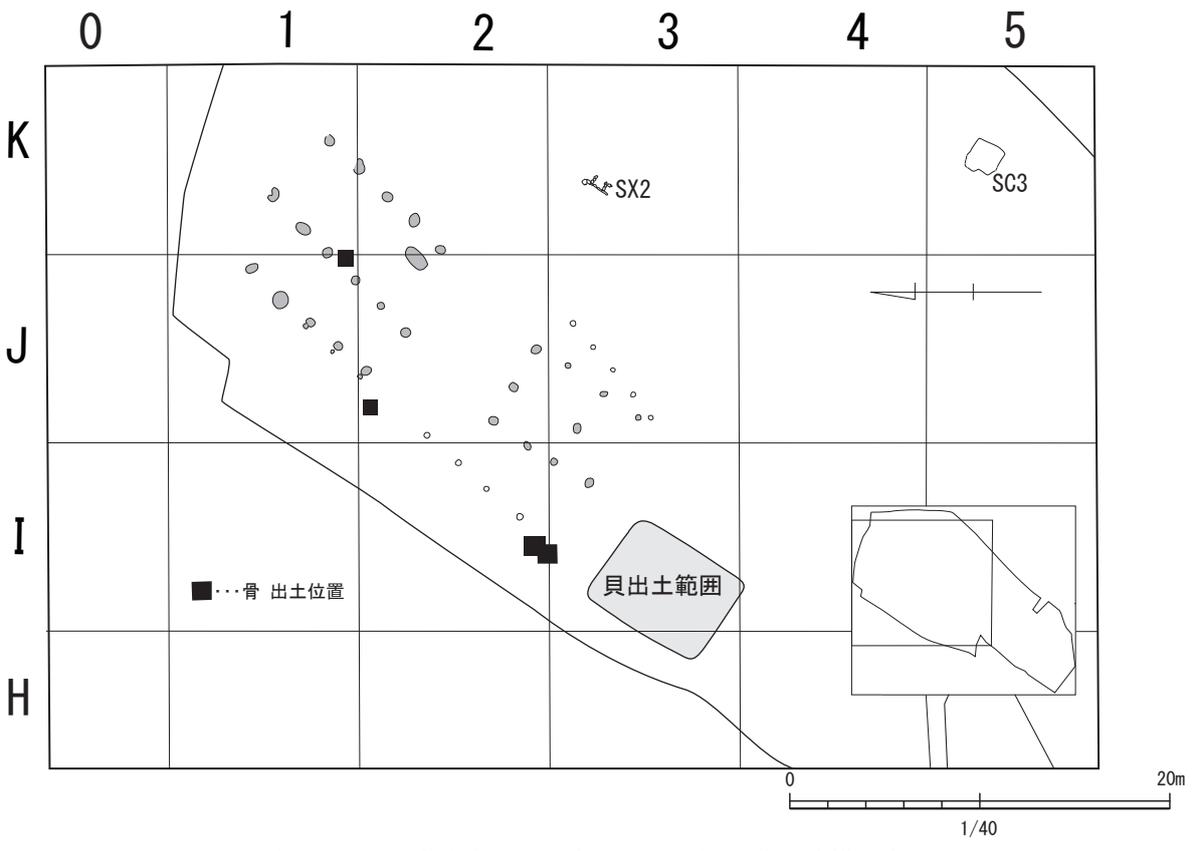
瓦は2点出土しているが、明確な年代が断定できないためここで報告する。

195・196共に内面に布目がみられる。195は粗い造りで、古代瓦の雰囲気もある。風化が激しく判然としないが、おそらく中世の範疇に収まると思われる。196は近世の瓦と考えられ、瓦を固定する釘穴が確認できる。

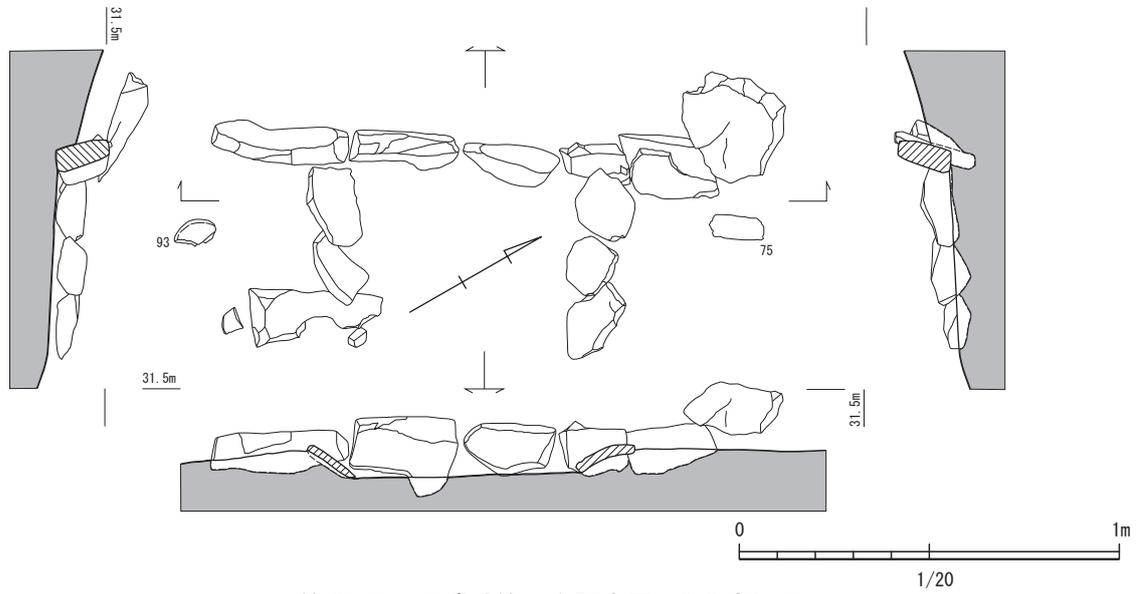
貝（図版11）

調査区の西側I2Gr周辺で確認した。貝層は掘立柱建物跡のおよそ南側に位置し、南側から北側に向かって傾斜するように貝類が堆積していたことから、建物に関連するものとも考えられる。貝層の中には近世陶磁器が混入しており、骨も同じ層位から検出された。しかし、表土剥ぎの際に貝層を検出したため、大部分を削り取ってしまった。

化石化していない現世の貝で、形状や個体の特徴から25種類の貝に分けられた。多くの貝が破片となっているが、大部分を剥いでしまったため、総重量数ではなく、巻貝は殻頂部分が残存しているものを一個体とし、二枚貝の場合も殻頂部分を1枚とカウントし、その合計を2で割って得られた数値を○個体数以上というように掲載する。今回の貝類の同定にあたっては、図鑑類に記載してある貝類の特徴とともに、宮崎県環境保全アドバイザーの西邦夫氏のご指導を得た。



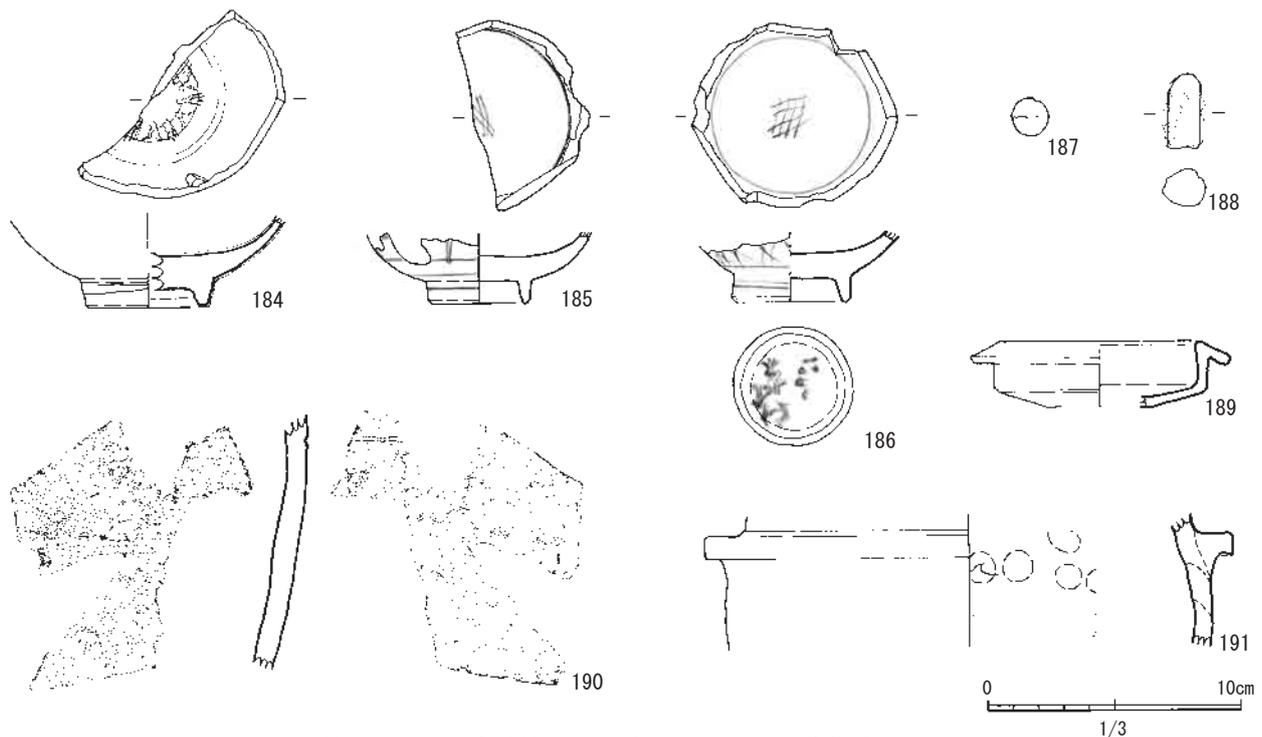
第36図 岡遺跡第9次調査区 その他の時代遺構分布図



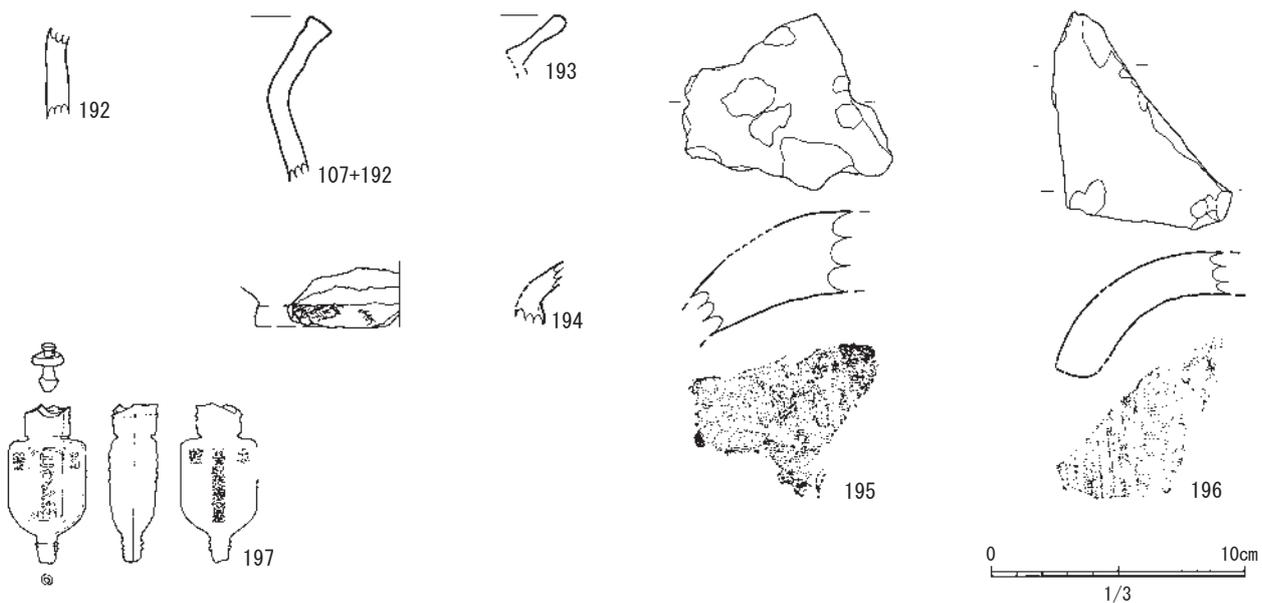
第37図 岡遺跡第9次調査区 SX2 実測図

貝の中には食用でない陸貝のものも含まれるが、現在も食されているものも確認できる。その中でも圧倒的な数を占めたのがシオフキガイで全体の約 58% (809 枚)、次いでチョウセンハマグリが約 22% (306 枚) を占める。シオフキガイは小さいものは 1.6cm、大きいものは 4.5cm

となり、ハマグリは 3～11cm と大小関係なく同種のも的大量に出土した。このことから、海から選んで捕食してきたことがわかる。キクスズメガイは 1 点の出土であるが、この貝の特徴として中国産や台湾産などのハマグリには付着していないことがあげられ、ハマグリが国産の



第 38 図 岡遺跡第 9 次調査区 SC3 出土遺物実測図



第 39 図 岡遺跡第 9 次調査区 その他の時代遺物実測図

ものであることが推察できる。また、河口付近の塩分の少ない汽水を好むシジミやアサリが出土していないことからその付近では採取を行っていないこともわかる。アメフラシの貝を 1 点確認しているが、中国地方では食している地域もあるが、日向地域においてアメフラシを食べていたかは不明である。

歯 (図版 11)

歯は調査区の 4 段目で 4 箇所と G6Gr 部分で 1 箇所検出した。4 段目では掘り込み等は確認できなかった。いずれも牛または馬の歯であると考えられ、これらは表土を剥ぐとすぐに検出された。

第10表 岡遺跡第9次調査区 SC3 出土陶磁器観察表

No.	出土地点	種別	器種	部位	法量			文様・調整の特徴		焼成	色調		胎土	備考	分類
					口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面			
184	SC1	磁器	碗	底部 ~高台	-	(4.7)	-	圏線 高台内まで施釉	印花文/圏線	堅 緻	釉: オリーブ灰 5GY6/1	胎土: 灰白 N7	精	貫入: 無	龍泉窯系 D-II
185	SC1	染付	碗	体部 ~高台	-	(3.7)	-	二重格子文/圏線	見込み: 斜格子文/圏線	堅 密	釉: 灰白 10Y8/1	胎土: 灰黄 2.5Y7/2	良		
186	SC1	染付	碗	体部 ~高台	-	4.7	-	斜格子文/圏線	見込み: 斜格子文/圏線	堅 密	釉: 灰白 5GY8/1	胎土: 灰白 5Y8/1	良	焼き付き資料: 高台内に文字 が見える、19世紀	
189	SC1	陶器	蓋	口縁 ~底部	(10.3)	(4.0)	2.65	鉄釉?		堅 密	釉: 灰オリーブ 7.5Y5/2	胎土: 灰黄 2.5Y6/2	良	土瓶の蓋、関西系	
190	SC1+ K4ウラゴメ	陶器	甕	胴部	-	-	-	格子目タタキ/回転ナデ /施釉	短い格子目タタキ/回転 ナデ/施釉	良	灰赤 2.5YR4/2	胎土: にふい黄橙 10YR7/3		にふい黄橙色と褐灰色の粘土 がマーブル状を呈する	
191	SC1	瓦質 土器	羽釜	胴部	-	-	-	回転ナデ/耳付き	横方向の工具ナデ後指 ナデ/指押さえ	良	灰白 N7	灰白 N8	5mm以下の灰白・白色粒多	19世紀	

第11表 岡遺跡第9次調査区 その他の時代土器観察表

No.	出土地点	器種	部位	法量			手法・調整・文様ほか		色調		胎土	焼成	備考
				口径	底径	器高	外	内	外面	内面			
192	J4 IV	甕	頸部~ 胴部	-	-	-	横方向のナデ	横方向のナデ	にふい黄橙 10YR7/2	にふい黄橙 10YR7/2	5mm以下の褐色粒を多量、2mm以下の灰白粒	良	107と同一個体
193	J5 II	甕	口縁部	-	-	-	横方向のナデ	横方向のナデ	にふい黄橙 10YR7/4	にふい黄橙 10YR6/3	微細な灰白・乳白粒、3mm以下の黒色柱状光沢粒	良	
194	H6 II	壺	頸部	-	-	-	横方向のナデ 刻目突帯	横方向のナデ	にふい黄橙 10YR7/3	にふい黄橙 10YR7/3	1mm以下の灰白粒多量、3mm以下の黒色柱状光沢粒	良	

第12表 岡遺跡第9次調査区 その他の時代土製品・金属製品・ガラス製品類観察表

No.	出土地点	種別	種類	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
187	SC1	-	銃弾	小銃弾	3	1.7	1.4	24.35	鉄製の銃弾で、サビにより変形が激しい
188	SC1	-	銃弾	和銃	1.5	1.5	1.5	17.64	直径1.5cmの球体で、中央にはつなぎ目が確認できる
195	I4表土	土製品	瓦	丸瓦	7.0	8.0	3.3	176.8	粗なつくりで、内面に布目有り
196	J5ウラゴメ	瓦質	瓦	丸瓦	7.9	6.6	1.9	107.2	内面に布目有り
197	表土	ガラス	瓶	薬瓶	6.3	3.05	1.9	13.2	表: 目薬、ヒウン水 裏: 本舗、田原製薬会社

第13表 岡遺跡第9次調査区 貝類一覧表

網	目	科	和名	数量	個体数	生息地	
二枚貝網	マルスダレガイ目	マルスダレガイ科	チョウセンハマグリ	306	153	内湾の潮間帯や浅海の砂泥底	
		トマヤガイ科	トマヤガイ科	1	1	内湾の水深約10mの岩礁	
		バカガイ科	シオフキガイ	809	404	内湾の潮間帯の砂泥底	
	イガイ目	フネガイ科	フネガイ科	エガイ?	3	1	潮間帯~浅海の岩礁
			エリガネエガイ?	1	0	河口干潟~前浜干潟の転石地や護岸	
			ムラサキインコガイ	35	17	岩礁の隙間	
腹足網 巻貝	原始腹足目	ユキノカサガイ科	ウノアシガイ	1	1	潮間帯の高い場所	
		サザエ	4	4	潮間帯下の岩礁底		
		リュウテンサザエ科	スガイ	31	31	潮間帯の岩の隙間や岩礁底	
		コシダカサザエ	1	1	潮間帯のタイドプールなど		
		ニシキウスガイ科	イシダタミガイ	51	51	潮間帯の岩の隙間や岩礁底	
		ヒメクボガイ	8	8	潮間帯から浅い水深の岩礁地帯		
		アマオブネガイ科	アマオブネガイ	1	1	潮間帯の岩の隙間	
		クノコガイ	1	1	潮間帯の水深約5mまでの浅海や岩礁底		
	中腹足目	ヤマタニシ科	ヤマタニシ	1	1	山林の落ち葉の間	
			レイシガイ	94	94	潮間帯から水深10mくらいまでの岩礁底	
			アクキガイ科	アカニシ	1	1	内海の潮間帯より水深5~20mの砂泥底
			不明種	1	1	-	
新腹足目	エゾバイ科	イソノナ	5	5	潮間帯の岩や岩礁下		
		キクスズメガイ	1	1	アワビやトコブシなどに付着		
腹足網後鰓亜網	アメフラシ目	アメフラシ科	不明種	1	1	海岸の潮溜まり、沿岸の岩礁域の転石帯	
合計				1,396以上	799以上		

第6節 小結

岡遺跡第9次調査区は、第6次調査区と、平成24年度に調査が行われた第16次調査区と隣接しており、出土する遺構・遺物や立地等から一連の遺跡であると考えられる。ここでは第9次調査区で確認された旧石器時代や縄文時代、古代、中世～近世の遺構・遺物について述べ小結とする。

旧石器時代は、AT層を境に2時期の遺物が確認され、AT層上位において礫群を1基検出した。遺物出土数は多くないが、石核や剥片の出土がみられることから、本遺跡が当該時期において、石器製作や生活の場として利用されていたことがうかがえる。

石器石材では、珪質頁岩が全体の約42%を占め、五ヶ瀬川流域の白色流紋岩等も見られた。しかし、石核・剥片等が出土したが接合できるものは少ない。

縄文時代は、集石遺構7基、炉穴3基が検出された。集石遺構は上部の充填礫の流出が激しく、原形を留めていなかったが、7基の集石遺構からは明確な配石が確認された。これは第6次調査区で確認された配石を伴わない集石遺構と大きく異なる。集石遺構は調査区の西側の標高がやや高い位置に作られているのに対し、炉穴はやや標高の低い調査区1段目のみ見られた。調査区の南側ではⅢ層に礫が多く混入しており、その礫層を取り除くと集石遺構(SI7)と炉穴(SP1・2)が検出された。SP1・2の東側にSI7が存在するが、集石遺構と炉穴の検出面が浅かったため、切り合い等は確認できなかった。しかし、年代測定の結果SI5のみ時期差はあるものの、他の遺構に関してはBC8740～8270の年代で収まり、時期的にも変わらない。

石器石材では、旧石器時代に見られた珪質頁岩の他に、流紋岩やホルンフェルスなど石材の種類と出土数が増加する。製品ではないものの姫島産黒曜石が偏って出土する傾向も見られた。また、1点の出土であるが日東産の黒曜石も出土している。

遺物の特徴や遺構数も第6次調査区と共に増加することから、本遺跡周辺が狩場・漁業・食物採集地として利用され、そのピークが縄文時代早期にあったと考えられる。

古代は、調査区全体からの遺物の出土はほとんど見られなかったが、1基の陥し穴状遺構を検出した。陥し穴状遺構は検出面が浅く、調査地が畑として利

用されていたことから削平された可能性が考えられる。遺構の形状や遺構内出土遺物、埋土が第6・7次調査区の二次堆積アカホヤ火山灰層に相当すると考えられることから、古代以降の所産であると考えられる。

中世～近世は、掘立柱建物跡2棟と石組遺構1基、土坑1基が検出され、陶磁器が多数出土している。

石組遺構と土坑は年代測定からAD1300～1370の同一年代が出ており、同時期に存在していた可能性が考えられる。土坑埋土から炭化物と焼土粒が検出されたが、それらは層での堆積ではなく、土坑内にまばらに堆積していた。土坑内で火を焚いたとは考えづらく、用途が不明な土坑である。また、石組遺構では下層に炭化物や焼土が遺構内一面に堆積している状況にあり、石組にも赤化が見られたため、内部で火を焚いたと想定される。このような遺構は宮崎県内でも新富町竹淵C遺跡、川南町前ノ田村上第1遺跡、都城市鶴喰遺跡など多数の出土例はあるが、その性格や機能など詳細は不明である。

遺物の多くが掘立柱建物跡近くのⅡ層から出土しており、そのほとんどが原位置を留めていない。遺物の内容は、15～16世紀頃の貿易陶磁器(白磁・青磁・青花・褐釉陶器)や備前焼などの国産陶器が出土し、それに続くように17～19世紀代の貿易陶磁器や国産陶磁器(備前・肥前・薩摩・荒焼)も多く出土している。出土遺物は食膳具が多数を占め、調理具では備前焼の播鉢、瓦質土器等の鍋や羽釜、貯蔵具では備前焼や壺屋焼の甕等が少量出土している。

また掘立柱建物跡の南側から出土した貝は、層の中から近世の陶磁器が出土していることから、近世の所産であると考えられる。層からは貝のみで魚等の骨は検出されなかった。出土した貝は全て日向灘の沖合で採れる貝で、現在でも食されている種が多く見られる。公家・武家屋敷からは町屋敷よりも大きなマダイやハマグリが出土するなど社会階級によって食物に違いがあることが指摘されているが、その中で大型のハマグリが出土したことは基石の生産地であるこの地域ならではであろう。また、出土した歯についても同じ層から出土している。

これらのことから、掘立柱建物が住居としての役割があったことが考えられる。

第三章 岡遺跡第13次調査の成果

第1節 調査の方法と経過

1-1. 発掘調査の方法と経過

岡遺跡第13次調査は、平成23年8月29日から調査に着手した。調査対象面積は1,230 m²である。

本調査区は、近年まで宅地や畑等に使用されており、調査着手時には石垣によって2段の段差のある地形を呈していた。しかし、調査の結果、本来の地形は、緩やかな斜面地であり、斜面を切って平坦に造成したことが明らかになった。

調査は、表土であるI層を重機で除去した後、二次堆積の鬼界アカホヤ火山灰層であるII層～IV層上面にて、遺構検出作業を行った。精査の結果、古墳時代の竪穴建物跡1軒、近世の掘立柱建物跡2棟、土坑2基を検出した。

掘削を進めるにあたっては、排土置場との兼ね合い等もあり、調査区の上段である南半部分から掘削を進めたのちに、下段部分の調査に移行していった。まず、調査区南端部にトレンチを設定し(第40図)、遺物包含層であるII層の堆積状況を確認した後に掘削を行っていった。II層からは縄文時代晩期の遺物が数多く出土した。II層の掘削の後、再度トレンチを設定し、重機及び人力による掘削により調査を行ったが、遺構・遺物の確認はなく、11月28日に全ての調査を終了した。

遺物包含層中の遺物は、トータルステーションにより位置を記録して取り上げたほか、グリッド一括等によって取り上げた。遺構内の遺物は、遺物出土状況図として記録して取り上げたほか、埋土一括で取り上げた。

遺構実測図は、遺構ごとに1/10または1/20で記録し、写真記録は主として35mmモノクローム・リバーサル写真およびデジタルカメラを併用し記録した。

なお、発掘調査の詳細については調査日誌抄に代える。

日誌抄

H23(2011)年度

- 0829 重機による表土剥ぎを開始。II層上面においてピットを数基確認。
- 0831 事務所・作業員棟・トイレ等の設置。
- 0905 作業員投入(14名)。調査区内や周囲の安全対策および環境整備等を行う。
- 0906 グリッド杭の設置。
- 0907 調査区南端部に、東西方向にトレンチ(Tr1)を設定し掘削。II～IV層上面での精査作業により竪穴建物跡1軒と掘立柱建物跡1棟及び土坑2基を検出。
- 0909 台風14号接近のため耐風養生を行う。
- 0913 遺構検出状況を写真撮影。
- 0922 竪穴建物跡の検出写真を撮影、サブトレンチを設定し掘削を開始。
- 1002 現地説明会(第9次・第13次調査区)を実施する(参加者64名)。
- 1003 調査区の中央部にトレンチ(Tr2・3)を2箇所設定し掘削。土坑の完掘写真の撮影。
- 1012 掘立柱建物跡を完掘。柱穴の一つから近世の陶磁器が出土。
- 1013 竪穴建物跡のベルトの土層断面実測。また、床面より須恵器が出土。掘立柱建物跡の完掘写真撮影。
- 1019 掘立柱建物跡の実測。
- 1021 豪雨により作業中止。
- 1025 竪穴建物跡の写真撮影。
- 1108 土層断面図の実測(Tr1)。
- 1109 重機による掘削作業の実施。調査区の北側部分にトレンチ(Tr4・5)2箇所を設定し調査するが、遺構・遺物は確認できず。
- 1110 調査区内の自然流路について実測。
- 1116 土層断面図の実測(Tr4・5)
- 1122 調査区の地形図作成完了。
- 1125 撤収作業。
- 1128 器材運搬。調査終了。

1-2. 整理作業及び報告書作成

平成 24 年 1 月～平成 24 年 8 月の期間で整理作業を行った。水洗、注記、選別、計測等の作業を行った後、遺物台帳を作成した。平成 24 年 2 月から接合作業を行い、4 月に遺物実測作業に入った。一部の遺物は拓本作業を行い、遺物実測図および現場実測図はトレース作業を経て、レイアウト、版下作成を行った。

報告書作成にあたっては、宮崎県埋蔵文化財センター報告書マニュアルに則って作成した。



整理作業風景（実測）



整理作業風景（拓本）

1-3. 基本層序

岡遺跡第 13 次調査区は、北に第 9 次調査区、南に高森川と隣接し、西から東へと傾く緩やかな傾斜地に位置している。本調査区内では、土層の堆積状況についても同様に、緩やかに東に傾斜していることが確認された。また、調査区の北部と南部では堆積状況に違いがみられたが、詳しくは第 41 図に示すとおりである。

土層断面作成箇所は、第 40 図で示している調

査区南端に設定したトレンチ 1 の南壁、及び調査区北部～中央部に設定したトレンチ 4、5 の北壁である。以下、層位ごとに特徴を記す。

I 層は、黒褐色（7.5YR3/2）で、炭化物の粒や 1 cm 以下の橙色・白色岩片、瓦礫等を含み、部分的に樹痕等による攪乱も多くみられる。I 層は、表土・客土層であり、近年まで宅地や畑地等に利用されていたようである。この土層中からは、耕作等の影響であろうが、縄文～近世の様々な時代の遺物が混在して出土した。

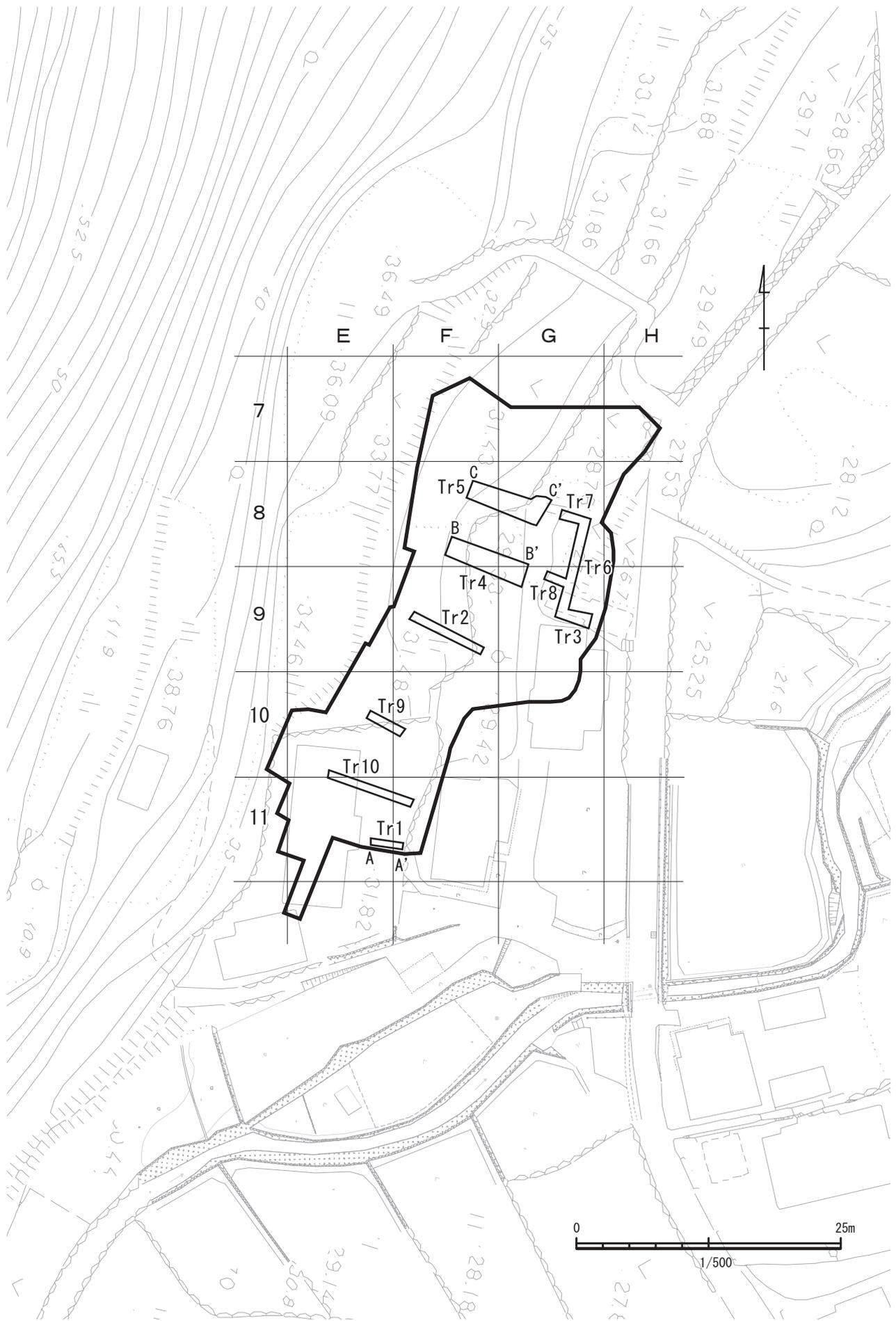
II 層は、鬼界アカホヤ火山灰の二次堆積で、主に縄文時代～古墳時代の遺物を含む遺物包含層であった。II 層の堆積状況については、調査区の南東部では特に良好に堆積していた。また、調査区内で自然流路だったと想定される範囲では、かなり厚く堆積していることが確認できた。しかし、調査区西部や北部においては、造成等によって削平された影響だと思われるが、堆積は全くみられなかった。II 層は、II a 層、II b 層に細分できた。II a 層は、にぶい褐色（7.5YR5/4）で、アカホヤ火山灰の純度はあまり高くはない。II b 層と比較すると暗く濁っており、樹痕等による攪乱が多くみられる。この層から縄文時代晩期の遺物を中心に、多くの遺物が出土した。II b 層は褐色（7.5YR6/8）で、色調的には一次堆積に近いものである。II b 層からの遺物の出土はほとんどみられなかった。

III 層は、暗褐色（7.5YR3/3）で、粘性があり、しまりもある。1 cm 以下の白色、橙色の岩片を含み、拳大の礫をわずかに含む。第 9 次調査区の IV 層に類似している。

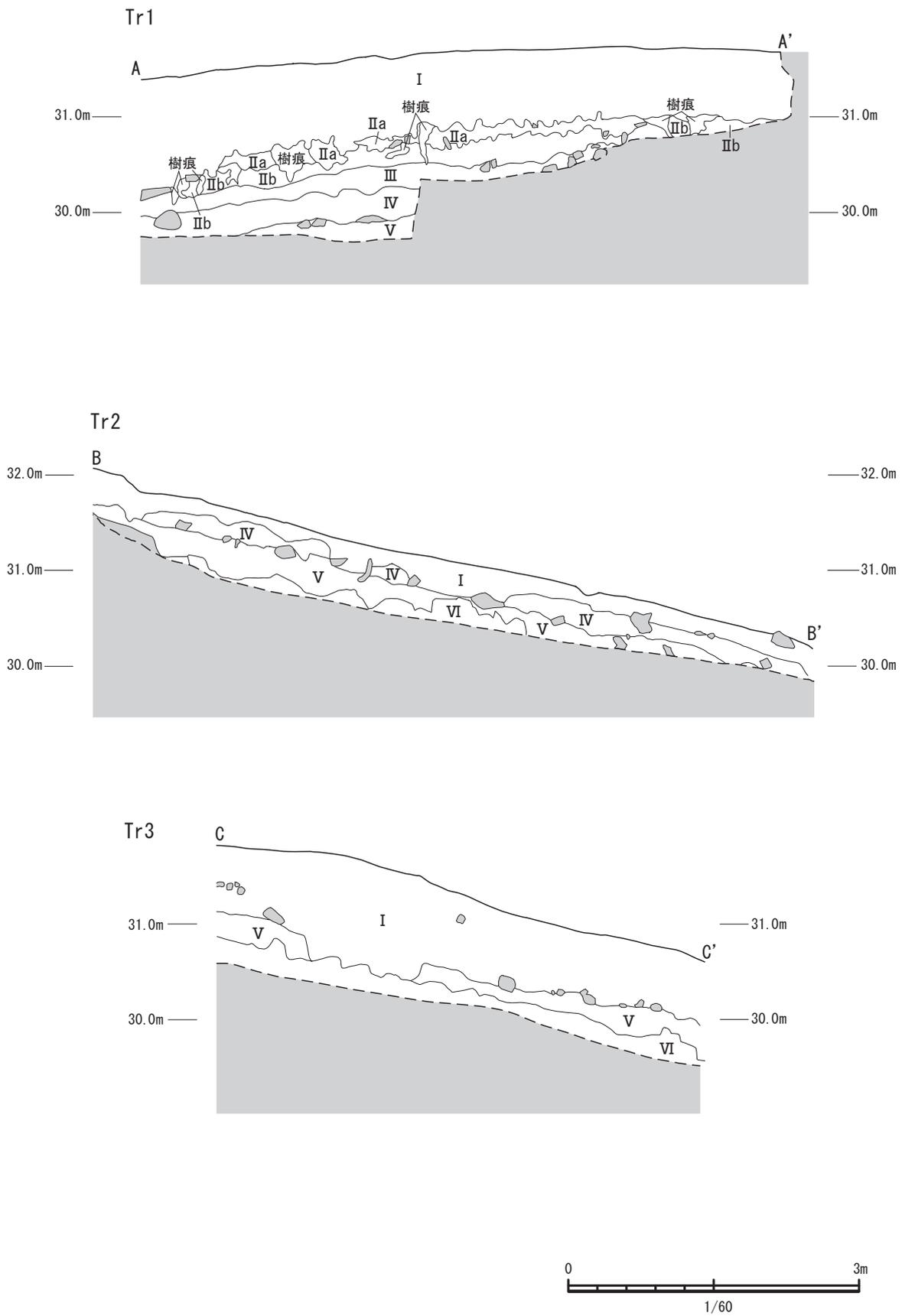
IV 層は、黒褐色（7.5YR3/2）で、粘性があり、しまりは III 層より強い。5～10 cm 程度の礫を多く含んでおり、第 9 次調査区の V 層に類似している。

V 層は、黒褐色（7.5YR3/1）で、粘性がありしまりは IV 層よりも強い。20 cm 大の礫を少量含んでおり、第 9 次調査区の VI 層に類似している。

VI 層は、明黄褐色（10YR6/6）で下部に柱状節理のみられる岩盤である。第 9 次調査区の XI 層に類似している。



第40図 岡遺跡第13次調査区 調査区周辺地形・トレンチ配置・グリッド図



第 41 図 岡遺跡第 13 次調査区 土層断面図

第2節 縄文時代の遺物

第13次調査区においては、縄文時代の遺構は検出されなかったが、遺物包含層であるⅡ層より縄文時代早期および晩期の遺物が出土している。これらの遺物は、Ⅱ層が良好に堆積していた調査区南東部のF10、F11グリッド等からの出土が非常に多かった。削平によってⅡ層の堆積が確認されなかった調査区北部や西部からは縄文時代の遺物の出土はなかった。

2-1. 土器

縄文土器に関しては、早期の土器片が2点出土している他は、晩期の土器が出土数のほとんどを占めていた。その中でも、突帯文土器片と精製土器片の出土点数が多かった。

早期土器（第43図1・2）

押型文土器（第43図1）

1は外面に径8mm幅の楕円押型文を施し、内面には横方向のナデ調整が見られる。

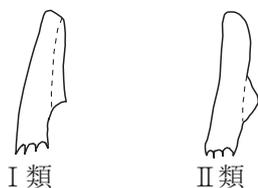
その他の土器（第43図2）

2は外面に工具による棒状の縦方向短凹線を横位並列させた文様を施し、内面は横方向の貝殻条痕が見られる。

晩期土器（第43～46図3～91）

突帯文土器（第43～44図3～36）

本調査で出土した突帯文土器は、すべて無刻目突帯文土器である。土器の部位は口縁部片が多数であり、突帯の形状により大きく2つに分類し、それぞれⅠ類、Ⅱ類と区分した。



第42図 突帯文土器分類図

Ⅰ類（第43図3～23）

口縁部に粘土紐を貼付けた後に継目をナデて、口縁部全体に厚みをもたせた肥厚口縁の土器をⅠ類とする。口唇部はナデて丸みを帯びている傾向にあるものが多い。全体の器面調整はナデもしくは

は貝殻条痕によるものが多くを占めている。

3は突帯下部を強くナデることによって突帯のすぐ下に凹部が巡らされている。4・7・15・16・23は口縁部が緩やかに外反しており、突帯は口縁端から突帯頂部まで続いている。7は突帯頂部の突出が少なく突帯が目立たない形状を呈している。5・9・13・20は突帯が口縁端から突帯頂部まで直線的に続くような形状を呈している。5は外面に煤の付着も認められる。6は他の土器と比較して器厚がやや厚い。8は突帯頂部の突出があまりなく突帯が目立たない。10は胎土が他の土器片と異なり5mmを超える粒を含み、表面がやや粗い作りになっている。

Ⅱ類（第43～44図24～36）

口縁部に粘土紐を貼付けた刻み目のない突帯をⅡ類とする。突帯は頂部が大きく突出しているものとあまり突出しておらず、頂部の高さが低いタイプに二分される。突帯部断面の形状は三角形が多数であるが、頂部が緩やかで半円形を呈しているタイプもみられる。また、突帯の幅はⅠ類と比較すると狭い形状を呈している。口唇部はナデて丸みを帯びている傾向にあり、器面調整は、内外面ともにナデもしくは貝殻条痕によるものがほとんどである。

24・30はⅡ類の他の口縁部と異なり、突帯の断面が頂部で緩やかになって半円状の形態を呈している。内面はミガキ調整である。25は突帯付近に指ナデによる指頭痕があり、口唇部をナデて平らにしている。26は口唇部から突帯付近に指ナデ痕がある。27・28は突帯頂部が低く、突帯部の幅も広くない。29はⅡ類の他の口縁部片と比較して突帯の頂部が低く、口唇部が平らであり先端部が外反している。31はわずかに内湾気味である。口唇部をナデて平らにしており、内面には指頭痕がみられる。36は胴部付近であり、胴部屈曲部から口縁部にかけての中程に突帯をもつ。外面には指押え痕がみられる。

孔列文土器（第44図37・38）

無刻目突帯をもつ孔列文土器の口縁部片が2点出土した。突帯部の形状は前述のⅡ類に近い。器面調整はいずれも、内外面ともに貝殻条痕によるものである。37は突帯のすぐ下の位置に3つの穿

孔が確認でき、貫通している穿孔が1つと未貫通の穿孔が2つ認められる。穿孔の間隔は約 1.5 cm のほぼ等間隔である。38 は穿孔の一部が欠けているものの、未貫通の穿孔が2箇所確認できる。穿孔は突帯のすぐ下に位置している。口唇部がやや膨らんだ形状をしている。

精製土器（第 44～45 図 39～67）

出土した精製土器の多くが浅鉢である。部位が特定できないような小片の出土も多くみられたが、比較的形状が把握しやすい口縁部片や胴部片について報告する。

39～47 は浅鉢の口縁部片である。39～44 はいずれも玉縁状口縁を呈しており、玉縁の断面の形状はほぼ円形に近いものが多くみられる。外面には沈線が施されている。39 は小さい鱗状の突起を有しており、やや内湾している。41 はやや内湾している。45～47 は玉縁状口縁を呈しており、玉縁の断面は半円形に近い形状のものが多い。外面には沈線がみられないタイプである。48～51 は浅鉢の口縁部から胴部にかけての部位である。胴部が丸く張り、頸部で屈曲し外反する口縁部をもつものであり、いずれも口縁部径よりも胴部径が大きいという特徴がある。口縁部はやや長く、玉縁状の口縁を呈している。49 は口縁端部が平らに整えられている。51 は鱗状の突起を有している。52～57 はいずれも口縁部が短く、強く外に屈曲する浅鉢で、口縁部内面に沈線を施したタイプと沈線が認められないタイプがある。52～54 は内面に沈線をもつものである。54 は器壁がやや厚い。55～57 は沈線をもたないものである。55 は器壁がやや厚い。56 は胴部が緩やかに湾曲しており、外面の一部と口唇部に黒変している部分が認められる。57 は器壁がやや薄い。58～61 は他に比べると口縁部の長さが比較的長いものである。58 はほぼ直線的に外傾しており、精製の深鉢の可能性もある。59 は口唇部に向けて緩やかに外反している。61 は目立たないが口縁帯がみられる。62～67 は浅鉢の胴部である。62～64 は胴部が湾曲しているタイプである。湾曲した部分の形状が 48～51 と類似しており、同じような口縁をもつことも推測される。62 は縦幅 1.9 cm、横幅 2.2 cm 程度のリボン状の突起を有する。65～67 は屈曲し

た胴部をもつタイプである。

粗製浅鉢（第 45 図 68）

68 は胴部片であり湾曲した形状である。外面をミガキに近いナデ、内面には横ナデを施している。

組織痕土器（第 45 図 69・70）

69 は外面の底部付近に組織痕がみられる。胴部付近には煤の付着が認められる。70 は浅鉢の底部であり、網代痕をもつ。

無文土器（第 45～46 図 71～91）

71～73 は口縁部片であり、器面調整はいずれも内外面ともに貝殻条痕である。72 は口唇部に刻目を施している。79 は口縁部片である。内外面ともに横方向のナデが施されており、外面には煤が付着している。80～84 は胴部片である。82 は外面に煤の付着がみられ、器面調整は内外面とも貝殻条痕が施されている。85 は底部で、内外面に鉄分凝着がみられる。91 は底部であり内外面ともに工具によるナデを施している。

2-2. 石器

本調査では、石器の出土数は 94 点で、その内訳は石鏃 8 点、スクレイパー 1 点、蛤形剥片石器 7 点、二次加工剥片 10 点、微細剥離剥片 2 点、剥片 33 点、石核 3 点、石斧 13 点、石錘 12 点、磨石 2 点、敲石 3 点である。このうち 41 点について、ここで報告する。大半が遺物包含層であるⅡ層からの出土であるが、表土出土の石器もある。石器石材は色調、礫面の特徴、手触り、風化の状況などから分類を行った。なお図化した石器は、石鏃 8 点、スクレイパー 1 点、蛤形剥片石器 4 点、二次加工剥片 1 点、微細剥離剥片 1 点、剥片 1 点、石核 1 点、石斧 11 点、石錘 10 点、磨石 2 点、敲石 1 点である。

石鏃（第 47 図 92～99）

出土した石鏃は 8 点である。石材別に分けると 92 がチャート製、93 が姫島産黒曜石製、94～99 の 6 点が安山岩製である。出土した石鏃は、形態的にはすべて無茎鏃であり、凹基無茎鏃と平基無茎鏃がそれぞれ 4 点ずつであり、凹基無茎鏃をⅠ類、平基無茎鏃をⅡ類と区分した。

Ⅰ類（第 47 図 92～95）

92 は石器基部に U 字形のやや深い抉りをもつ。93 も基部に大きな抉りをもつが、92 よりもやや

開いた抉りになっている。94 は基部にごく浅い抉りを持ち、正面および裏面の中央部に平坦面を作り出している局部磨製石鏃である。95 も基部に浅い抉りをもつ。両側縁の中央付近には稜を持ち、形状は細長で五角形に近く、長幅比が2:1と他の石鏃に比べて長身である。

Ⅱ類 (第47図96～99)

96 は基部が平基であり、平面形が三角形に近い形状である。97 は基部が平基であり、全体の形状は五角形に近い。98 は基部が平基で形状は左右非対称である。99 は基部が平基で両側縁の上部に稜を持ち、形状は細長の五角形に近い。長幅比が2:1であり、長身の石鏃という点では95と類似したつくりである。

スクレイパー (第47図100)

珪質頁岩製のスクレイパーである。表面に自然面を残し、刃部を比較的広く形成している。

蛤形剥片石器 (第47図101～104)

石材は101・102・104が砂岩製、103が尾鈴山溶結凝灰岩製である。

二次加工剥片 (第48図105)

安山岩を素材とし、下部に僅かな加工が認められる。

微細剥離剥片 (第48図106)

石材は珪質頁岩であり、左側縁および右側縁上部に微細剥離痕を有する。

剥片 (第48図107)

流紋岩製の縦長剥片である。

石核 (第48図108)

チャート製の石核である。自然面がなく全ての面に剥離痕がみられる。

石斧 (第48～49図109～119)

出土した石斧11点中、打製石斧が9点、磨製石斧が2点である。打製石斧の石材は109～116が砂岩、117が尾鈴山溶結凝灰岩である。打製石斧は大きく2つに分類し、基部に抉りを有するものをⅠ類とし、基部に抉りを有さないものをⅡ類と区分した。

Ⅰ類 (第48図109・110)

109 は完形品であり、抉り部の幅は約4cmである。刃部幅に対して長軸方向に長いスマートな形状を呈している。110 は欠損品であるが、抉り部

は残存しており抉り部の幅は4cm程度である。

Ⅱ類 (第48～49図111～117)

111～114については、欠損がみられるものの側縁の形状から抉りを有さない一群とみなした。116は他の完形の石斧と比較すると、やや小ぶりな作りをしているが、破損した部分を再加工して形を整えた後に再利用したとも考えられる。117は最大長18.2cm、最大厚4.3cmであり、重量が854.5gと比較的大きなつくりである。裏面のほぼ全体には自然面を残し加工がみられない。

磨製石斧 (第49図118・119)

蛇紋岩製の磨製石斧である。118は全長が5.9cmとやや小ぶりなつくりであり、使用したと考えられる刃こぼれや欠け等がほとんど認められない。119は基部付近の一部が残る欠損品である。

石錘 (第49～50図120～129)

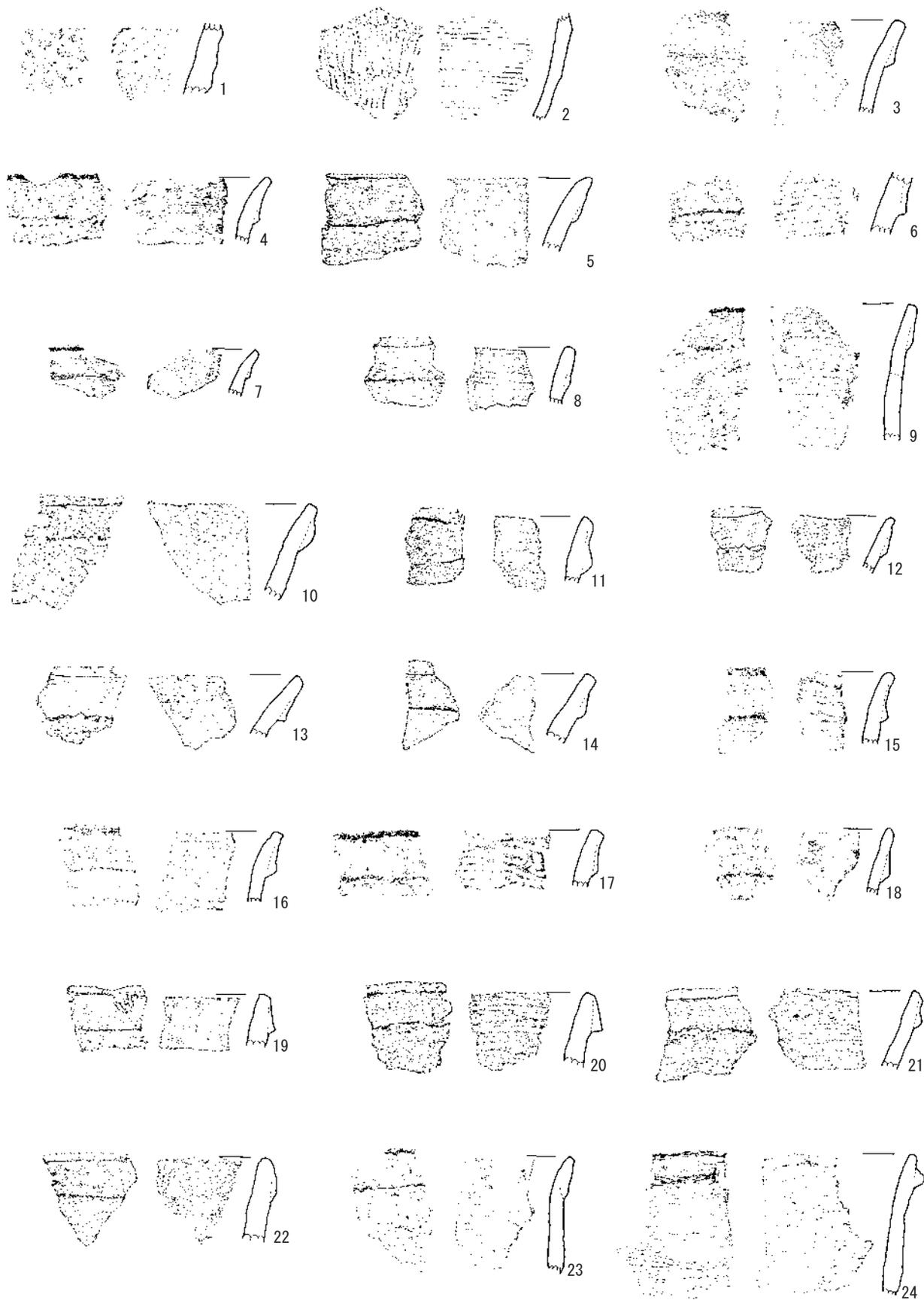
120～125は砂岩、126・127は尾鈴山溶結凝灰岩の打欠石錘である。多くは扁平礫の長軸上の2側面を打ち欠いて抉りを作っている。重量でみると小ぶりの100g未満のもの、500gを超えて重量のある大きなもの、その両者の間の100～200g程度のものの3タイプに分かれる。124・125はかなり小さなつくりで重量はどちらも50g未満である。126・127は調査で出土した石錘の中では特に大型であり、126は700gを、127は550gを超える重量である。128・129は尾鈴山溶結凝灰岩の有溝石錘である。溝の幅はどちらも1.5cm程度であり、溝自体は深くはない。礫の大きさは129が128よりやや小型ではあるが、ほぼ似通ったつくりをしている。これまでの岡遺跡の発掘調査における有溝石錘の出土は、この2点のみである。

磨石 (第50図130・131)

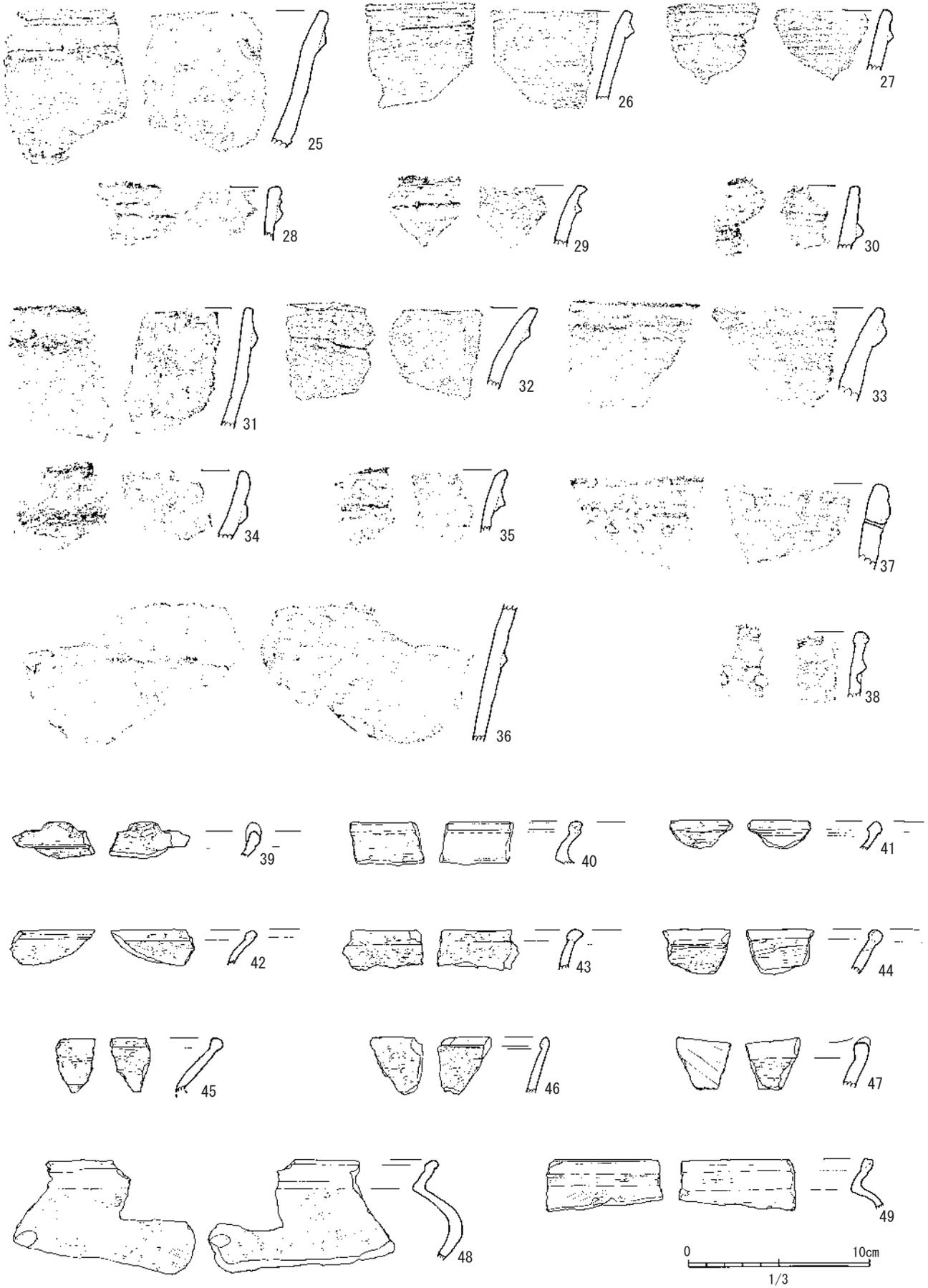
130・131は尾鈴山溶結凝灰岩である。扁平礫の両面に磨面がみられる。

敲石 (第50図132)

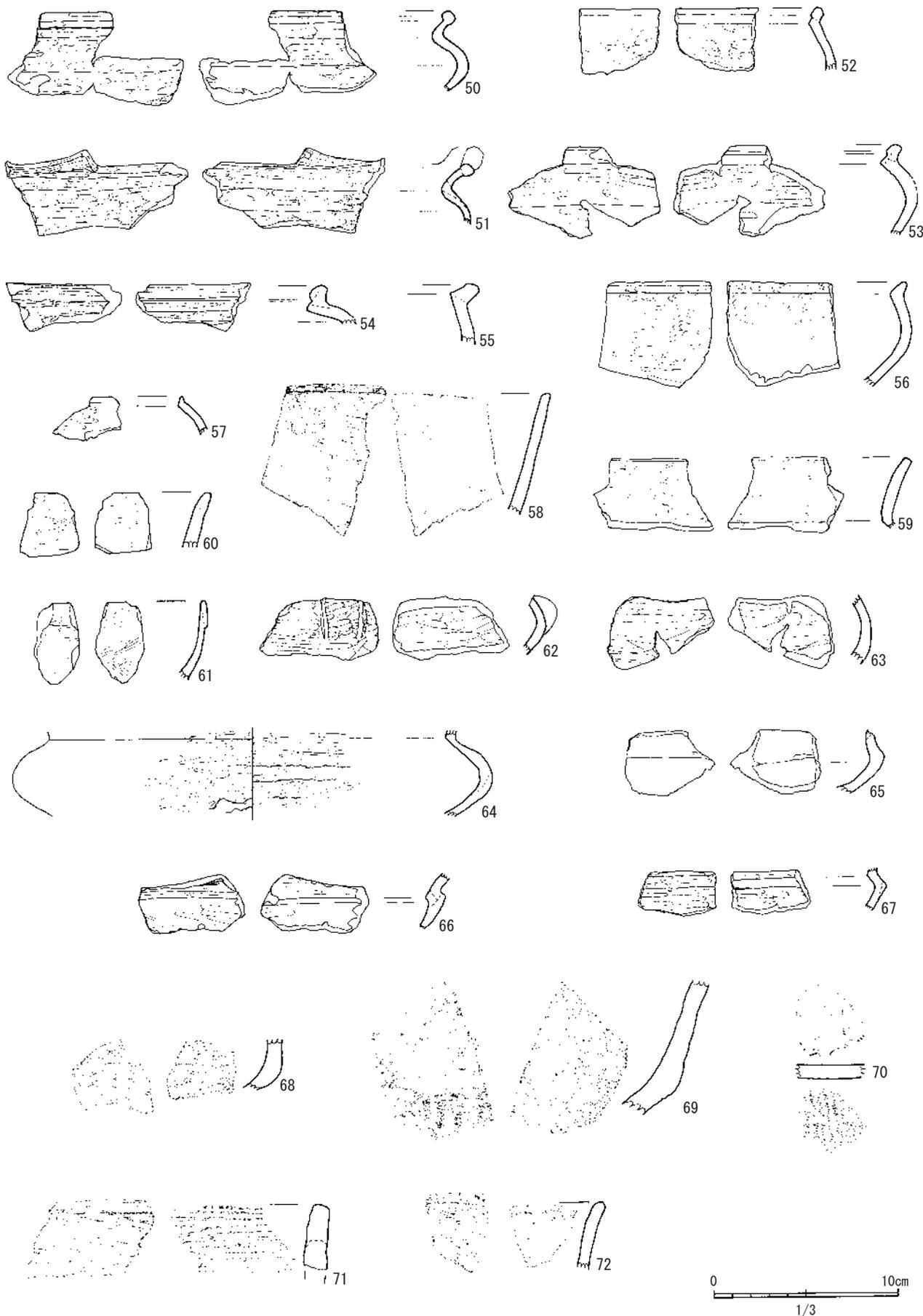
砂岩製の敲石である。底面に敲打痕は多いが、側面にも僅かにみられる。



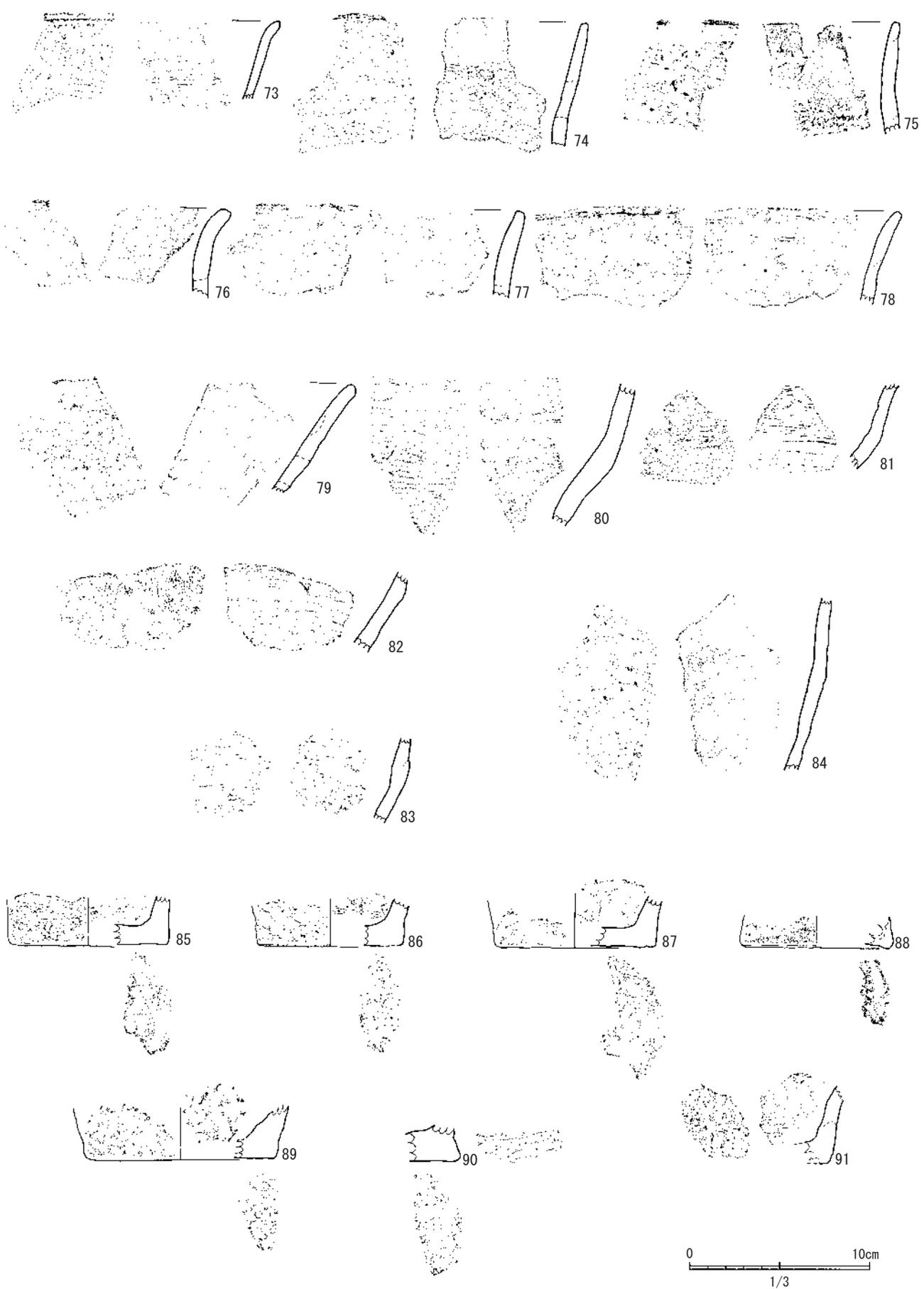
第 43 図 岡遺跡第 13 次調査区 縄文時代早期・晩期土器実測図



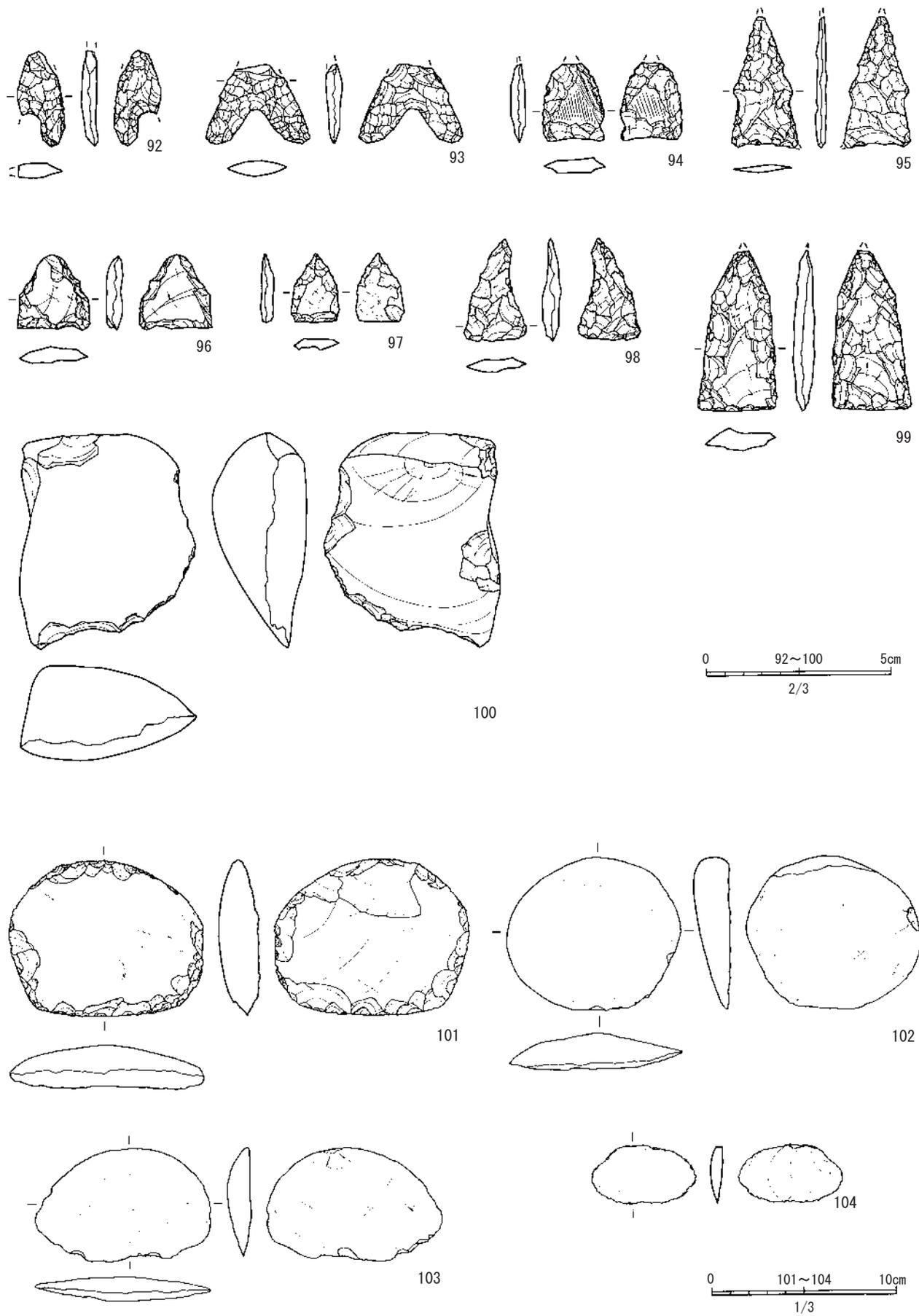
第44図 岡遺跡第13次調査区 縄文時代晩期土器実測図(1)



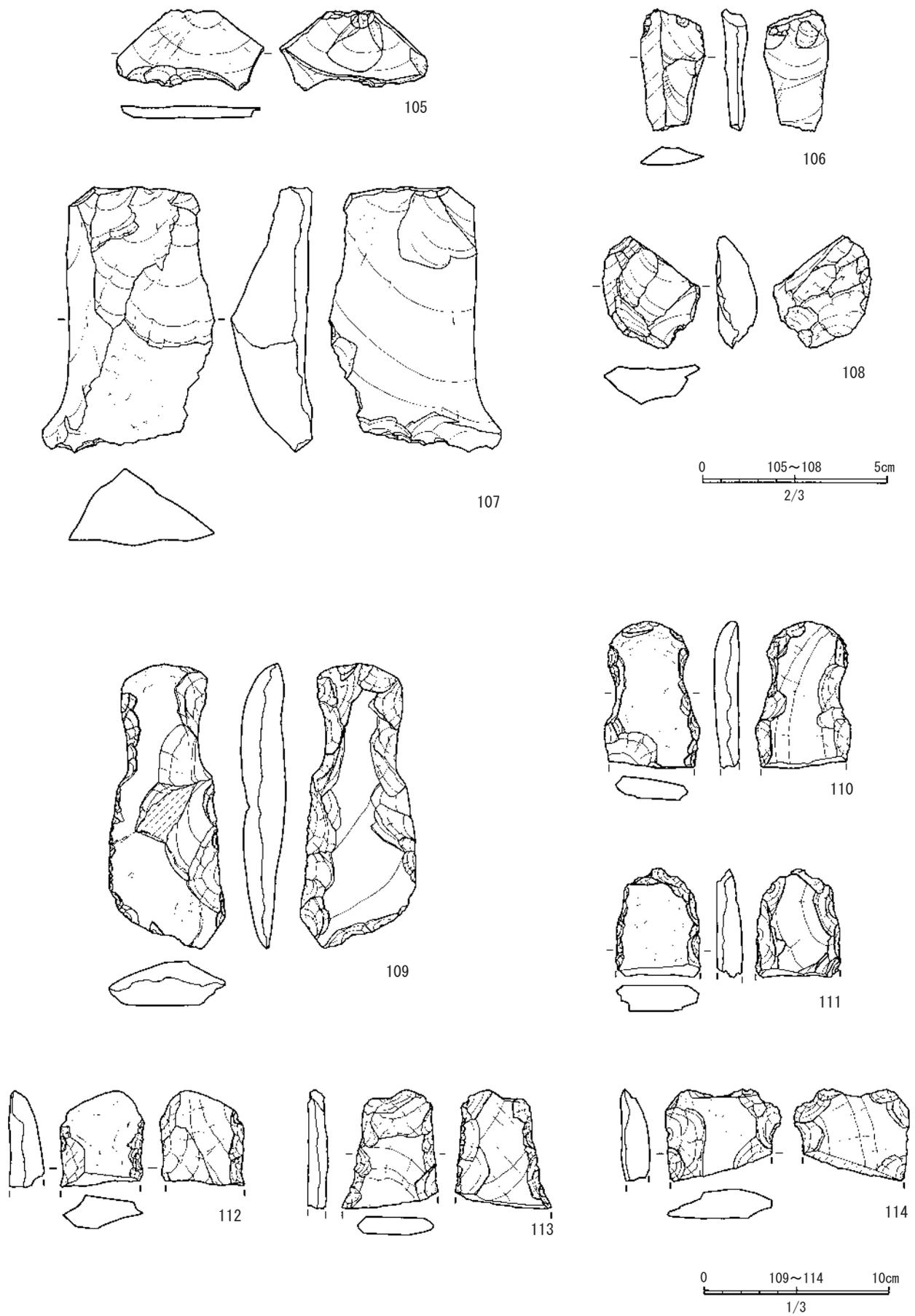
第45図 岡遺跡第13次調査区 縄文時代晩期土器実測図(2)



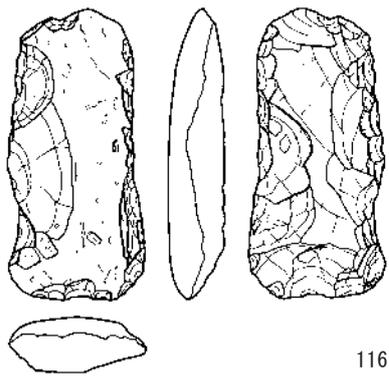
第46図 岡遺跡第13次調査区 縄文時代晩期土器実測図(3)



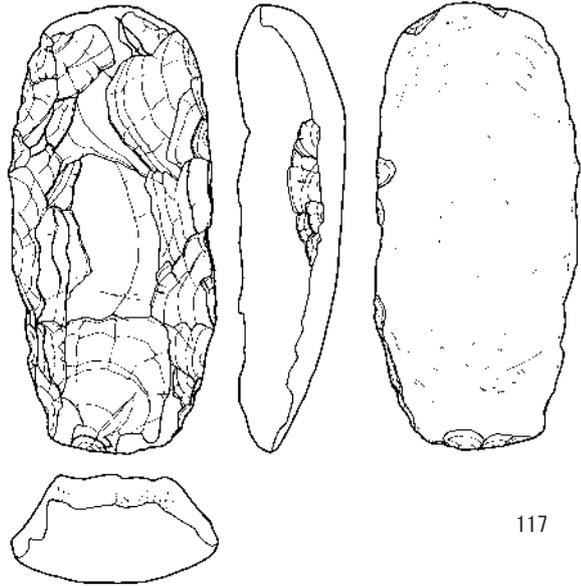
第 47 図 岡遺跡第 13 次調査区 縄文時代石器実測図 (1)



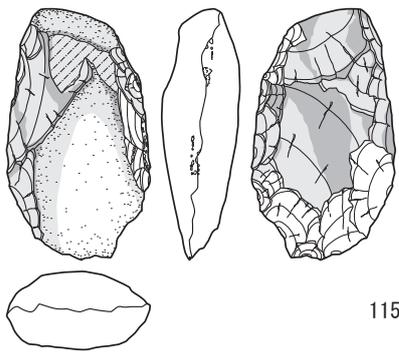
第 48 図 岡遺跡第 13 次調査区 縄文時代石器実測図 (2)



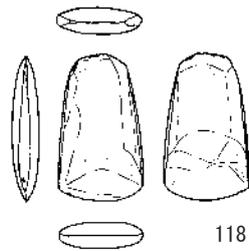
116



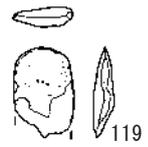
117



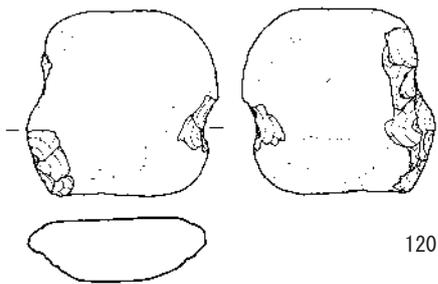
115



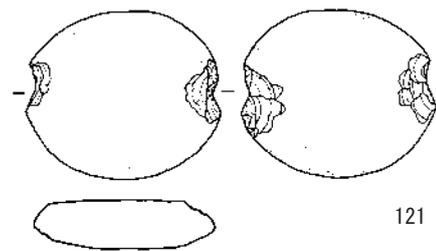
118



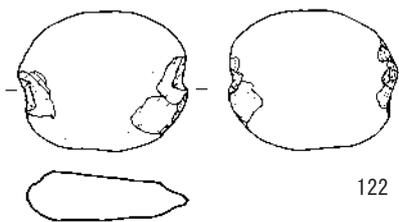
119



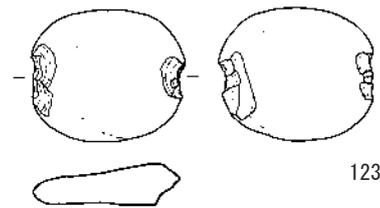
120



121



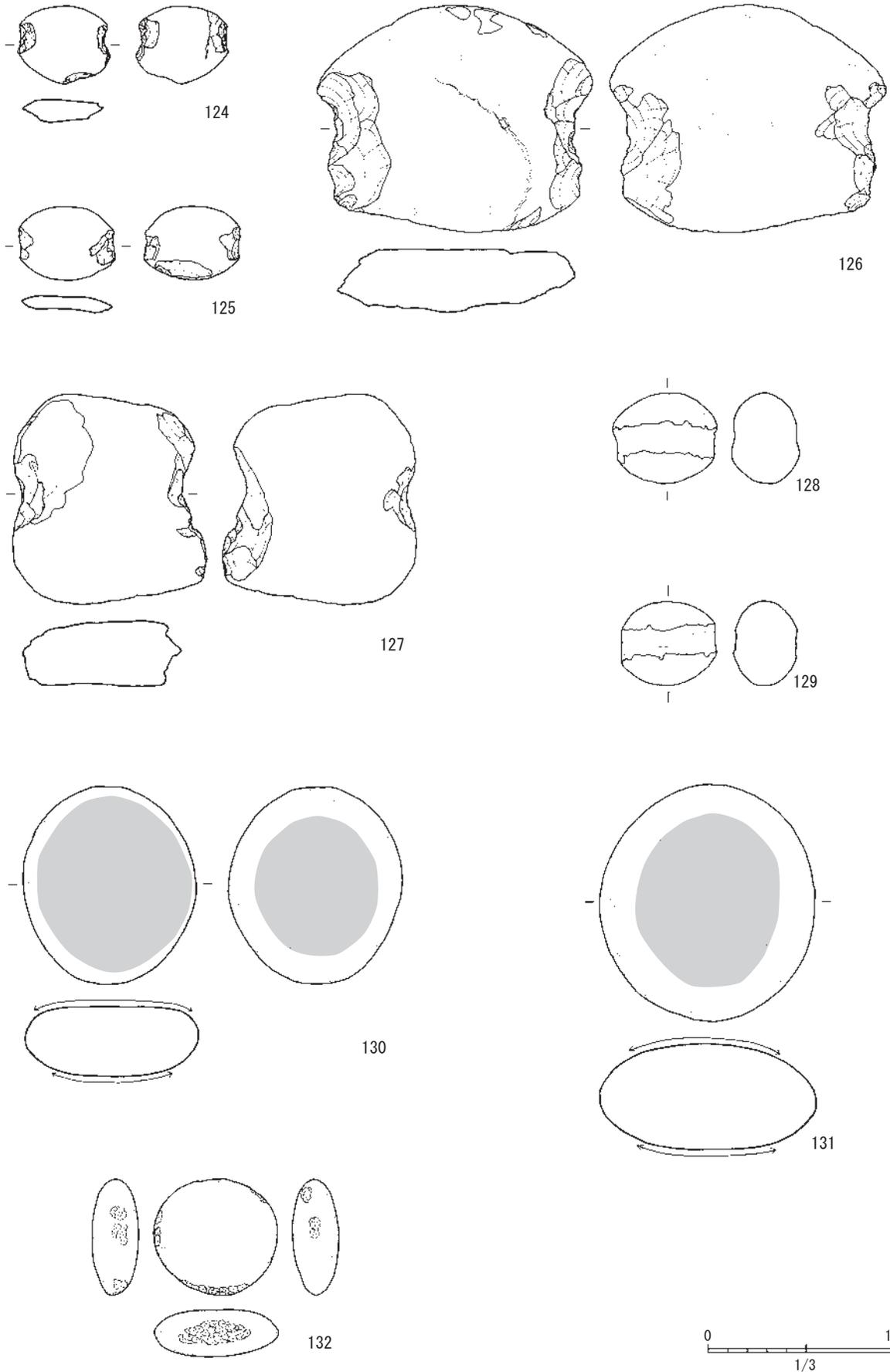
122



123



第 49 図 岡遺跡第 13 次調査区 縄文時代石器実測図 (3)



第 50 図 岡遺跡第 13 次調査区 縄文時代石器実測図 (4)

第14表 岡遺跡第13次調査区 縄文時代早期土器観察表

No.	出土地点	器種	部位	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
1	F10 II	深鉢	胴部	-	-	-	楕円押型文	横ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	2mm以下の褐灰粒、黒色・透明光沢粒を多く含む	
2	II-177	-	胴部	-	-	-	棒状の工具による縦位の短冊状文を縦位に並列させ文様としている	横位の貝殻条痕	明赤褐 (5YR5/6)	褐 (7.5YR4/3)	4mm以下の灰褐・灰白粒、2mm以下の白色光沢粒、微細な透明光沢粒を含む	

第15表 岡遺跡第13次調査区 縄文時代晚期土器観察表 (1)

No.	出土地点	器種	部位	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
3	F11 II	深鉢	口縁部	-	-	-	横方向のナデ、肥厚口縁	ナデ	浅黄 (2.5YR7/3)	黄褐 (2.5YR5/3)	4mm以下の灰白・にぶい黄橙・灰黄・黒色光沢粒を含む	
4	II-32	深鉢	口縁部	-	-	-	横方向のナデ、肥厚口縁	斜・横方向の貝殻条痕のちナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	黄褐 (2.5YR5/3)	3mm以下の明褐粒、2mm以下の灰白・浅黄橙粒を含む	
5	-	深鉢	口縁部	-	-	-	横方向のナデ、肥厚口縁(ス・鉄分付着)	横方向のナデ	にぶい黄橙 (10YR6/3)	黒褐 (10YR3/1)	2mm以下の浅黄橙・灰白・透明光沢粒を含む	
6	SA1 SE	深鉢	口縁部	-	-	-	横方向の貝殻条痕のちナデ、肥厚口縁	横方向の貝殻条痕	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	4mm以下の黒褐・灰白粒を含む	
7	E11 II	深鉢	口縁部	-	-	-	横方向のナデ(スス付着)、肥厚口縁	横方向のナデ(スス付着)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	褐灰 (10YR4/1)	4mm以下の透明光沢粒、2mm以下の橙粒を多く、1mm以下の灰白粒を少し含む	
8	SA1 NE	深鉢	口縁部	-	-	-	横方向のナデ、肥厚口縁	横方向の貝殻条痕のちナデ	にぶい黄褐 (10YR5/3)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	3mm以下の黄橙粒、2mm以下のにぶい褐色・灰白粒を少量、2~1mm以下の透明・黒色光沢粒を多く含む	
9	F10 II + SA1 SE	深鉢	口縁部	-	-	-	横方向のナデ、肥厚口縁	横方向の貝殻条痕	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄褐 (10YR5/3)	7mm以下の淡黄橙、2mm以下の灰褐・黒・透明光沢粒を含む	
10	SA1	深鉢	口縁部	-	-	-	横方向のナデ、肥厚口縁	横方向の貝殻条痕のちナデ	橙 (5YR6/8)	黄橙 (10YR6/6)	6mm以下のにぶい褐粒、4mm以下の褐灰粒、3mm以下の灰白粒、微細な黒色光沢・透明光沢粒を含む	
11	F10 II	深鉢	口縁部	-	-	-	横方向のナデ、肥厚口縁	横方向の貝殻条痕のちナデ	明黄褐 (10YR6/6)	明黄褐 (10YR6/6)	3mm以下の灰白粒、2mm以下の明黄褐粒を多く、1mm以下の黒粒を少し含む	
12	F11 II	深鉢	口縁部	-	-	-	横方向のナデ、肥厚口縁	横方向のナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	橙 (5YR6/6)	3mm以下の黄橙粒、2mm以下の橙・灰・灰白・黒粒、1mm以下の透明光沢粒を含む	
13	SA1	深鉢	口縁部	-	-	-	横方向の貝殻条痕のちナデ、肥厚口縁	横方向の貝殻条痕	にぶい黄橙 (10YR6/4)	橙 (5YR6/6)	3mm以下の透明光沢粒、2mm以下の灰白・黒粒を含み、1mm以下の黄橙・明赤褐粒を少し含む	
14	II-91	深鉢	口縁部	-	-	-	横方向の工具ナデ、肥厚口縁(スス付着)	横方向の貝殻条痕のちナデ	にぶい黄褐 (10YR5/4)	橙 (2.5YR6/8)	3mm以下の灰粒、2mm以下の浅黄橙・透明光沢粒、1mm以下の黒粒を含む	
15	SA1 SE	深鉢	口縁部	-	-	-	横方向のナデ、肥厚口縁	横方向の貝殻条痕	橙 (7.5YR6/6)	にぶい黄褐 (10YR5/3)	2mm以下の灰黄・灰白粒を含む	
16	SA1 SW	深鉢	口縁部	-	-	-	横方向のナデ、肥厚口縁(スス付着)	貝殻条痕	灰黄褐 (10YR6/2)	にぶい黄 (2.5YR6/4)	2mm以下のにぶい橙・灰白・黒色光沢粒を含む	
17	SA1 NE	深鉢	口縁部	-	-	-	横方向のナデ、肥厚口縁	斜・横方向の貝殻条痕のちナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	3mm以下の褐灰、2mm以下の灰白・黒褐粒を含む	
18	F11 II	深鉢	口縁部	-	-	-	横方向の貝殻条痕のちナデ、肥厚口縁	横方向の貝殻条痕のちナデ	明赤褐 (5YR5/6)	明褐 (7.5YR5/6)	3mm以下の灰白粒を多く、2mm以下の褐灰粒を含む	
19	E11 II	深鉢	口縁部	-	-	-	横方向のナデ、肥厚口縁	横方向のナデ	橙 (5YR6/6)	灰黄褐 (10YR4/2)	2mm以下の浅黄橙・灰白粒・黒・橙粒、1mm以下の透明光沢粒を含む	
20	SA1 SE	深鉢	口縁部	-	-	-	横方向のナデ、肥厚口縁	横方向の貝殻条痕	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	3mm以下の透明光沢粒、2mm以下	
21	SA1	深鉢	口縁部	-	-	-	横方向のナデ、横方向の貝殻条痕のちナデ、肥厚口縁	横方向の貝殻条痕のちナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR6/6)	3mm以下の褐灰粒、2mm以下の灰白・黒褐粒を含む	
22	F10 II	深鉢	口縁部	-	-	-	横方向のナデ、肥厚口縁	横方向のナデ	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/8)	2mm以下の灰白・黒褐・透明光沢粒を含む	
23	II-102 + II-145	深鉢	口縁部	-	-	-	横方向のナデ、肥厚口縁(スス付着)	横方向の貝殻条痕のちナデ	明赤褐 (5YR5/6)	明赤褐 (5YR5/6)	3mm以下の浅黄橙、2mm以下の明赤褐・透明光沢・褐灰粒を含む	
24	SA1 NW + SA1	深鉢	口縁～胴部	-	-	-	横方向の貝殻条痕、口唇部のナデ(スス付着)、貼付突帯	ミガキ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	2mm以下の浅黄橙・灰白粒、1mm以下の透明光沢粒を含む	
25	F10 II	深鉢	口縁～胴部	-	-	-	貝殻条痕、口唇部のナデ、貼付突帯、突帯付近に指ナデの指頭痕あり(スス付着)	貝殻条痕のちナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR5/4)	2.5mm以下の灰白・灰黄・黒色光沢粒を含む	
26	E11 II	深鉢	口縁部	-	-	-	横方向の貝殻条痕、貼付突帯、口唇部から突帯付近は指ナデ(スス付着)	横方向の貝殻条痕	灰褐 (7.5YR6/2)	褐灰 (7.5YR5/1)	1mm以下の灰白・黒色光沢粒を含む	
27	F11 II	深鉢	口縁部	-	-	-	横方向の貝殻条痕のちナデ、貼付突帯	横方向の貝殻条痕	にぶい黄褐 (10YR5/4)	橙 (7.5YR6/6)	2mm以下の黒色光沢粒を多く、灰白・黒褐粒を含む	
28	-	深鉢	口縁部	-	-	-	横方向の貝殻条痕、口唇部は指ナデ、貼付突帯	横方向の貝殻条痕	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい黄褐 (10YR5/3)	3mm以下の灰白粒、2mm以下の黒褐粒、1mm以下の透明光沢・黒色光沢粒を含む	
29	-	深鉢	口縁部	-	-	-	横方向のナデ、指ナデ、貼付突帯	横方向の貝殻条痕	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	2mm以下の灰黄褐・灰白・透明光沢粒を含む	
30	SA1	深鉢	口縁部	-	-	-	横方向の貝殻条痕、ナデ、貼付突帯	横方向の貝殻条痕	にぶい黄橙 (10YR6/3)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	2mm以下の灰黄・灰白粒を含む	
31	-	深鉢	口縁部	-	-	-	横方向のナデ、貼付突帯(スス付着)	ナデ、一部指ナデ(指頭痕あり)	にぶい黄褐 (10YR5/3)	にぶい黄褐 (10YR5/3)	6mm以下の灰褐・灰白・灰黄粒を含む	
32	SA1 SW	深鉢	口縁部	-	-	-	横方向の貝殻条痕、貼付突帯、(スス付着)	横方向の貝殻条痕	橙 (5YR6/6)	にぶい橙 (7.5YR5/4)	4mm以下の黒褐粒、3mm以下の黒色光沢粒、2mm以下の赤褐・灰白粒を含む	
33	II-35	深鉢	口縁部	-	-	-	横方向の貝殻条痕、ナデ、貼付突帯	横方向の貝殻条痕	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい黄褐 (10YR5/3)	3mm以下の灰黄・灰白・黒色光沢粒を含む	
34	F10 II	深鉢	口縁部	-	-	-	横方向のナデ、貼付突帯	横方向の貝殻条痕のナデ	にぶい褐 (7.5YR5/4)	暗灰黄 (2.5Y5/2)	1mm以下の灰褐・灰黄粒を含む	
35	-	深鉢	口縁部	-	-	-	横方向のナデ、貼付突帯	ナデ	にぶい褐 (7.5YR5/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	2mm以下の灰黄・灰白粒を含む	
36	II-124 + 168	深鉢	胴部	-	-	-	斜方向のナデ、指押え痕、貼付突帯	横方向の貝殻条痕	にぶい赤褐 (7.5YR4/4)	黒褐 (10YR3/2)	2mm以下の灰白粒を多く、2mm以下の黒色光沢粒、微細な透明光沢粒を少し含む	
37	SA1 NW	深鉢	口縁部	-	-	-	横方向の貝殻条痕、貼付突帯、孔列文(貫通、未貫通あり)	横方向の貝殻条痕	橙 (7.5YR6/6)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	1mm以下の灰黄・透明光沢粒を含む	

岡
第
13
次

第 15 表 岡遺跡第 13 次調査区 縄文時代晩期土器観察表 (2)

No.	出土地点	器種	部位	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
38	E11 II	深鉢	口縁部	-	-	-	横方向の貝殻条痕、ナデ、貼付突帯、孔列文(未貫通)	横方向の貝殻条痕	にぶい黄褐 (10YR5/4)	暗褐黄 (2.5YR4/2)	2mm以下の透明光沢、灰白粒を含む	
39	F10 II	浅鉢	口縁部	-	-	-	ミガキ、沈線あり	ミガキ	橙 (5YR6/6)	にぶい橙 (5YR6/4)	1mm以下の黒色の粒を含む	
40	SA1	浅鉢	口縁部	-	-	-	ミガキ(風化により不明瞭)	ミガキ	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙(10YR8/3) 黄灰(2.5YR5/1)	3mm以下の浅黄橙・2mm以下の灰白粒を含み、微細な透明光沢粒を多く含む	
41	G10 II	浅鉢	口縁部	-	-	-	ミガキ(風化により不明瞭)	ナデ(風化により不明瞭)	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	1mm以下の灰白・黒・橙粒、微細な黒色光沢粒を少し含む	
42	SA1-9	浅鉢	口縁部	-	-	-	ミガキ(風化により不明瞭)	ミガキ(風化により不明瞭)	にぶい黄橙 (7.5YR7/4) 黄灰(2.5YR4/1)	黄灰 (2.5YR5/1)	1mm以下の黒褐・光沢粒を多く含む	
43	F9 II	浅鉢	口縁部	-	-	-	ミガキ	ミガキ	黒褐 (10YR3/1)	黒褐 (10YR3/1)	2mm以下の灰白色粒を少し、1mm以下の黒褐粒を含む	
44	-	浅鉢	口縁部	-	-	-	ミガキ、口唇部のみミガキのうち横方向のナデ	ミガキ、口唇部のみミガキのうち横方向のナデ	灰黄褐 (10YR5/2)	褐灰 (10YR4/1)	2mm以下の橙・灰白粒を少し、1mm以下の赤褐粒、微細な黒色光沢粒を含む	
45	F11 II	浅鉢	口縁部	-	-	-	ミガキ	ミガキ	暗赤灰 (2.5YR3/1)	暗赤灰 (2.5YR3/1)	3mm以下の赤褐粒、2mm以下の黒褐粒を少し含む	
46	F10 II	浅鉢	口縁部	-	-	-	ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	1mm以下の明褐・黒褐粒を含む	
47	E11 II	浅鉢	口縁部	-	-	-	ミガキ、口縁部のみナデ	ミガキ、口縁部のみナデ	にぶい黄褐 (10YR5/3)	にぶい黄褐 (10YR5/3)	2mm以下の黄橙・透明光沢粒、1mm以下の黒色光沢粒を含む	
48	II-151	浅鉢	口縁～胴部	-	-	-	ミガキ、口唇部に沈線あり	ミガキ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	2mm以下の赤褐粒を少し、1mm以下の灰白粒、微細な黒色光沢・透明光沢粒を少し含む	
49	SA1-SW+SE+NW	浅鉢	口縁～胴部	-	-	-	ミガキ(風化により不明瞭)、口唇付近に沈線あり	ミガキ(風化により不明瞭)	褐灰 (10YR5/1)	褐灰 (10YR5/1)	2mm以下の灰白・黒色光沢粒を含む	
50	SA1-156+NW+SW+SA1	浅鉢	口縁～胴部	-	-	-	ミガキ(風化により不明瞭)	ミガキ(風化により不明瞭)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	2mm以下の灰白粒、1mm以下の淡黄・透明光沢粒を含む	
51	II-144	浅鉢	口縁～胴部	-	-	-	ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙 (10YR6/3)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	3mm以下の黄橙粒、2mm以下のにぶい褐色・灰白粒を少量、2～1mm以下の透明・黒色光沢粒を多く含む	
52	F11 II	浅鉢	口縁～胴部	-	-	-	ミガキ、口唇部のみ横方向のナデ	ミガキ、口唇部のみ横方向のナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	3mm以下の白粒を少し、2mm以下の黒褐粒、1mm以下の灰白粒を含む	
53	F9 II + G10 II	浅鉢	口縁～胴部	-	-	-	ミガキ、口唇部のみミガキのうち横方向のナデ	ミガキ、口唇部のみミガキのうち横方向のナデ	褐白 (10YR5/1)	褐白 (10YR5/1)	1mm以下の灰白・透明光沢粒を含む	
54	E11 II	浅鉢	口縁～胴部	-	-	-	ミガキ	ミガキに近いナデ、口唇部のみミガキ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR6/3)	3mm以下の灰白粒、微細な透明光沢粒を含む	
55	SA1 SW	浅鉢	口縁～胴部	-	-	-	ナデのうちミガキ(風化により不明瞭)	ナデのうちミガキ(風化により不明瞭)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	3mm以下の灰白粒を多く、2mm以下の橙粒を少し、2mm以下の透明光沢粒を微量に含む	
56	II-160	浅鉢	口縁～胴部	-	-	-	ミガキ	ミガキ(摩耗)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	1mm以下の黒色粒を含み、2mm以下の明黄褐粒を少し含む	
57	F11 II	浅鉢	口縁～胴部	-	-	-	ナデのうちミガキ	ナデ(風化により不明瞭)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	2mm以下の黒色・明褐粒、1mm以下の透明粒を含む	
58	II-146	鉢	口縁部	-	-	-	横方向のナデ	横方向のナデ	にぶい黄褐 (10YR5/4)	にぶい黄褐 (10YR5/4)	3mm以下の乳白粒を少し含む	
59	II-75+E11 II	鉢	口縁部	-	-	-	ミガキ(風化により不明瞭)	ミガキ(風化により不明瞭)	灰黄褐 (10YR5/2)	褐灰 (10YR4/1)	1mm以下の灰白の粒を含む	
60	G10 II	鉢	口縁部	-	-	-	ミガキ(風化により不明瞭)	ミガキ(風化により不明瞭)	にぶい黄橙 (10YR7/2)	褐灰 (10YR5/1)	1mm以下の灰白の粒を含む	
61	E11 II	鉢	口縁部	-	-	-	ミガキ(風化により不明瞭)	ミガキ(風化により不明瞭)	灰(10Y5/1) 灰黄(2.5YR6/2)	灰黄 (2.5YR6/2)	1mm以下の灰白の粒を含む	
62	SA1	浅鉢	胴部	-	-	-	ミガキ、リボン型の突起付	ミガキのナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	暗黄灰 (2.5YR5/2)	3mm以下の黒色光沢粒を多く、1mm以下の橙・浅黄橙・透明光沢粒を含む	
63	E11 II + F11 II	浅鉢	胴部	-	-	-	ミガキ	ミガキに近いナデ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	褐灰 (10YR4/1)	2mm以下の灰白粒を含み、微細な透明光沢粒を多く含む	
64	II-94+II-150	浅鉢	頸～胴部	-	-	-	ミガキ(スス付着)	ナデのうち粗いミガキ、頸部付近のみナデ	褐灰 (10YR4/1)	暗黄灰(2.5YR5/2) 黄灰(2.5YR4/1)	1mm以下の白・灰色の粒を含む	
65	II-57+F10 II	浅鉢	頸～胴部	-	-	-	ミガキ(摩耗により不明瞭)	ナデ(風化により不明瞭)	黄灰 (2.5Y4/1)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	1mm以下の浅黄橙・灰粒、透明光沢粒を含む	
66	SA1 SW	浅鉢	頸～胴部	-	-	-	ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	2mm以下の浅黄橙・灰白粒、1mm以下の透明光沢粒を含む	
67	SA1 SE	浅鉢	頸～胴部	-	-	-	ナデのうちミガキ	ナデのうちミガキ	橙 (5YR6/6)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	2mm以下の明赤褐・褐灰粒、1mm以下のにぶい橙の粒を含む	
68	-	浅鉢	胴部	-	-	-	ミガキに近いナデ	横ナデ	にぶい黄褐 (10YR4/3)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	2mm以下の浅黄橙・灰白粒、黒色・透明光沢粒を含む	
69	E11-II	浅鉢	胴部～底部付近	-	-	-	横方向のナデ、底部付近に組織痕(胴部に煤付着)	ナデ	にぶい黄褐 (10YR5/3) 橙(5YR6/6)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	3mm以下の黄橙粒、2mm以下のにぶい褐色・灰白粒を少し、2～1mm以下の透明・黒色光沢粒を多く含む	組織痕
70	SA1 SE	浅鉢	底部	-	-	-	組織痕	ナデ	明黄褐 (10YR7/6)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	2mm以下の灰白粒、1mm以下の黄橙粒を含む	
71	SA1 NW	深鉢	口縁部	-	-	-	横方向の貝殻条痕	横方向の貝殻条痕	にぶい黄橙 (10YR6/4)	黄褐 (2.5Y5/3)	1mm以下の白粒を少し含む	
72	F11 II	深鉢	口縁部	-	-	-	横方向の貝殻条痕ナデ、口唇部のみ刻目	横方向の貝殻条痕ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	2mm以下の灰白粒を含み、明黄褐・黒褐粒を多く含む	
73	E11 II	深鉢	口縁部	-	-	-	横方向の貝殻条痕の工具ナデ	横方向の貝殻条痕	褐色 (7.5YR4/3)	明赤褐 (5YR5/6)	2mm以下の褐灰・にぶい黄橙粒を含み、1mm以下の灰白粒を多く含む	
74	F10 II	深鉢	口縁部	-	-	-	横・斜方向のナデ	横方向のナデ	明褐 (7.5YR5/6)	黄褐 (2.5Y5/3)	1mm以下の白粒を少し含む	
75	SA1	深鉢	口縁部	-	-	-	横方向のナデ	ナデ(風化により剥落気味)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	橙(7.5YR6/4) にぶい黄橙 (10YR6/4)	1mm以下の黒粒をわずかに含む	
76	G9 II	深鉢	口縁部	-	-	-	横方向のナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	1mm以下の白粒を含む	
77	-	深鉢	口縁部	-	-	-	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR6/6)	明黄褐 (10YR6/6)	1mm以下の白粒を含む	

第 15 表 岡遺跡第 13 次調査区 縄文時代晩期土器観察表 (3)

No.	出土地点	器種	部位	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
78	II-28	深鉢	口縁部	-	-	-	横方向のナデ	貝殻条痕もしくは工具ナデの横方向のナデ	橙 (7.5YR7/6)	明赤褐 (5YR5/6)	4mm以下の黒褐粒を含み、3mm以下の明褐粒を少量、にぶい褐粒を含む	
79	F10II	深鉢	口縁部	-	-	-	横方向のナデ、ス付着	横方向のナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	1mm以下の白粒少し含む	
80	E11II	-	胴部	-	-	-	横方向の貝殻条痕(煤付着)	横方向のナデもしくは貝殻条痕(風化のため不明瞭)	橙 (5YR6/6)	にぶい黄橙 (10YR6/6)	2mm以下の灰白・黒褐粒、微細な透明光沢粒を含む	
81	SA1	-	胴部	-	-	-	粗いナデ	貝殻条痕	にぶい黄橙 (10YR6/4) 橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	2mm以下の灰白・透明光沢粒、1mm以下の赤褐粒を含む	
82	F10II	-	胴部	-	-	-	縦方向の粗いナデ	横方向の貝殻条痕	にぶい赤褐 (5YR5/4)	にぶい赤褐 (5YR5/4)	2mm以下の灰白粒、黒色光沢粒を含む	
83	II-97	-	胴部～底部付近	-	-	-	工具ナデ	横ナデ	明赤褐 (5YR5/6)	橙 (5YR6/6)	4mm以下の明赤褐粒、2mm以下の褐灰粒を含む	
84	II-163+E11II	-	胴部	-	-	-	貝殻条痕?のちナデ	ナデ	橙 (5YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)	3mm以下の灰白・橙粒、1mm以下の透明光沢粒・黒色光沢粒を含む	
85	II-71	深鉢	底部	-	8.7	-	粗いナデ(底以外に鉄分凝着)	粗いナデ(鉄分凝着)	橙 (7.5YR6/8)	灰黄褐 (10YR5/2)	3mm以下の透明光沢粒、2mm以下の浅黄橙・灰粒を含む	突帯文土器の底部の可能性もあり
86	II-167	深鉢	底部	-	8.1	-	ナデ(風化により不明瞭)	ナデ	にぶい橙 (5YR6/4)	にぶい赤褐 (5YR5/4)	2mm以下の灰白・橙粒、透明光沢粒、1mm以下の黒粒を含む	突帯文土器の底部の可能性もあり
87	SA1+SANW	深鉢	底部	-	8.8	-	ナデ	ナデ	にぶい橙 (5YR6/4)	橙 (5YR6/6)	2mm以下の灰白・赤褐粒、黒色・透明光沢粒を含む	突帯文土器の底部の可能性もあり
88	II-154	深鉢	底部(8.4cm)	-	8.4	-	ナデ	風化が著しいため不明瞭	橙 (7.5YR6/6)	-	3mm以下の白粒、2mm以下の灰白・灰粒を含む	突帯文土器の底部の可能性もあり
89	SA1	深鉢	底部	-	10.4	-	ナデ、底部に圧痕	ナデ(風化により不明瞭)	橙 (5YR6/6)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	5mm以下の褐灰粒、2mm以下の黒色光沢粒、1mm以下の橙粒を含む	突帯文土器の底部の可能性もあり
90	II-141	深鉢	底部	-	-	-	粗いナデ	ナデ(風化により不明瞭)	橙 (7.5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	3mm以下の灰白・黒褐粒、2mm以下の橙粒を含む	突帯文土器の底部の可能性もあり
91	II-133	深鉢	底部	-	-	-	工具ナデ	工具ナデ	橙 (5YR6/6)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	4mm以下の透明光沢粒、2mm以下の黒・にぶい黄橙・灰粒を含む	突帯文土器の底部の可能性もあり

第 16 表 岡遺跡第 13 次調査区 縄文時代石器計測表

No.	出土地点 (グリッド)	層	器種	石材	法量			
					縦 (cm)	横 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)
92	F9	III	石鏃	チャート	2.50	1.30	0.50	1.2
93	F11	II	石鏃	姫島産黒曜石	2.10	2.80	0.40	1.6
94	E11	II	石鏃	安山岩	2.10	1.70	0.40	1.4
95	E11	II	石鏃	安山岩	3.60	1.80	0.30	1.6
96	F10	-	石鏃	安山岩	2.00	1.90	0.50	1.7
97	F10	-	石鏃	安山岩	1.85	1.30	0.40	0.8
98	F10	-	石鏃	安山岩	2.80	1.70	0.50	1.4
99	F10	-	石鏃	安山岩	4.40	2.10	0.60	4.2
100	F11	II	スクレイパー	珪質頁岩	5.80	4.80	2.60	74.5
101	F10	II	蛤形剥片石器	砂岩	8.50	10.50	2.25	263.4
102	-	I	蛤形剥片石器	砂岩	8.30	9.40	2.00	188.3
103	F10	-	蛤形剥片石器	尾鈴山溶結凝灰岩	6.25	9.50	1.30	82.2
104	F11	II	蛤形剥片石器	砂岩	3.15	5.65	0.65	11.7
105	F10	-	二次加工剥片	安山岩	2.20	4.00	0.30	3.9
106	G9	-	微細剥離剥片	珪質頁岩	3.30	1.80	0.50	3.1
107	G10	II	剥片	流紋岩	7.70	4.20	3.20	57.6
108	F11	II	石核	チャート	3.10	2.60	1.10	7.3
109	F10	II	石斧	砂岩	15.50	6.30	2.40	249.0
110	F11	II	石斧	砂岩	8.00	5.20	1.40	70.6
111	E11	II	石斧	砂岩	5.90	4.60	1.40	50.9
112	E11	II	石斧	砂岩	5.20	4.60	1.90	51.0
113	F11	II	石斧	砂岩	6.50	5.30	1.10	48.7
114	E11	II	石斧	砂岩	5.00	6.30	1.60	53.7
115	F10	-	石斧	砂岩	11.60	5.50	2.20	177.5
116	-	-	石斧	砂岩	9.90	5.70	3.10	205.0
117	E11	II	石斧	尾鈴山溶結凝灰岩	17.80	8.20	4.30	854.5
118	E11	II	磨製石斧	蛇紋岩	5.85	3.35	1.05	32.1
119	F10	III	磨製石斧	蛇紋岩	3.60	2.35	0.85	8.1
120	F11	II	石錘	砂岩	7.40	7.55	2.55	223.6
121	-	-	石錘	砂岩	6.70	7.60	1.95	153.4
122	E11	II	石錘	砂岩	5.60	6.70	2.00	106.7
123	E11	II	石錘	砂岩	5.30	6.05	1.60	80.9
124	F10	-	石錘	砂岩	4.10	4.75	1.20	33.1
125	-	-	石錘	砂岩	3.80	4.90	0.70	26.3
126	E11	II	石錘	尾鈴山溶結凝灰岩	11.70	14.10	3.30	716.8
127	E11	II	石錘	尾鈴山溶結凝灰岩	10.80	9.90	3.40	550.3
128	E11	II	有溝石錘	尾鈴山溶結凝灰岩	4.65	5.30	3.40	114.7
129	E11	II	有溝石錘	尾鈴山溶結凝灰岩	4.30	4.85	3.20	94.8
130	F11	II	磨石	尾鈴山溶結凝灰岩	10.10	8.80	3.60	508.7
131	F11	II	磨石	尾鈴山溶結凝灰岩	12.10	11.00	5.45	1109.8
132	-	-	敲石	砂岩	6.00	6.30	2.40	140.7

第3節 古墳時代の遺構と遺物

第13次調査区において、古墳時代の遺構は竪穴建物跡1軒(SA1)のみが検出された(第51図)。遺物は、SA1の埋土中やII層中からの出土がみられたが、縄文時代晩期と比較すると遺物量は僅かである。出土遺物は須恵器が2点出土したほかは、ほとんどの遺物が土師器である。なお、接合できた遺物は僅かで遺構の埋土中から出土した遺物についても同様である。

3-1. 遺構

SA1 (第52図)

SA1は、調査区の中央部よりやや南のF10グリッドのII層上面で検出された。SA1の西側はプランがはっきりと確認できたものの、検出当初は建物跡の東側にいくにしたがって、プランが不鮮明であった。このため、立ち上がりが明確に確認できたSA1の西側部分から東側へと複数のサブトレンチを設定して徐々に調査を進め、遺構の立ち上がりの状況を把握しながら掘削を行った。その結果、規模は長辺(東西方向)4.1m、短辺(南北方向)3.7mの方形であることが確認された。床面積は15.2㎡であり、主軸方位はN-45°-Wである。建物跡南西部の隅の一部分は後世のピットによって切られている。検出面からの深さは42cm~62cmを測る。埋土は一層のみの暗褐色土であり、貼床面が認められた。埋土には、縄文時代晩期の土器片が混入していたが、床面直上から須恵器片が出土し古墳時代の建物跡と判断した。貼床面は、竪穴建物跡の東側に向けて傾斜に沿うようなかたちで、次第に下がり気味になっている。また、建物跡中央部付近においては、炭化材を含む焼土面がみられ炉と想定される。なお、ピットはいくつか検出されたものの、明らかな主柱穴の確認はできなかった。建物跡の東側にある2つのピットについては、4本の主柱穴があったと想定した場合、そのうちの2本であったとも考えられる。

3-2. SA1 出土遺物

土師器 (第53図 133~139)

いずれの遺物もSA1の床面より浮いた状態で出土した。133は残存部が少ないが、形状から鉢の口縁部と考えられる。134~139は甕である。

134は口縁部片で、ほぼ直線的に外傾している。口唇部付近には横方向の工具ナデが施されている。135は胴部片である。内面には工具によるナデ、外面にタタキ痕がみられる。137は底部付近であり、外面は工具ナデが施され一部にケズリが、内面には指押さえ痕がみられる。138は胴部から底部付近である。内外面ともに、やや風化気味ではあるが、内面には斜め方向の工具ナデが施されており、粘土の継目もはっきりと残る。器面の一部には煤の付着も認められる。139は厚みのある平底の底部である。外面に粘土のかえりがみられ、底面の部分には明瞭な葉脈痕が観察できる。

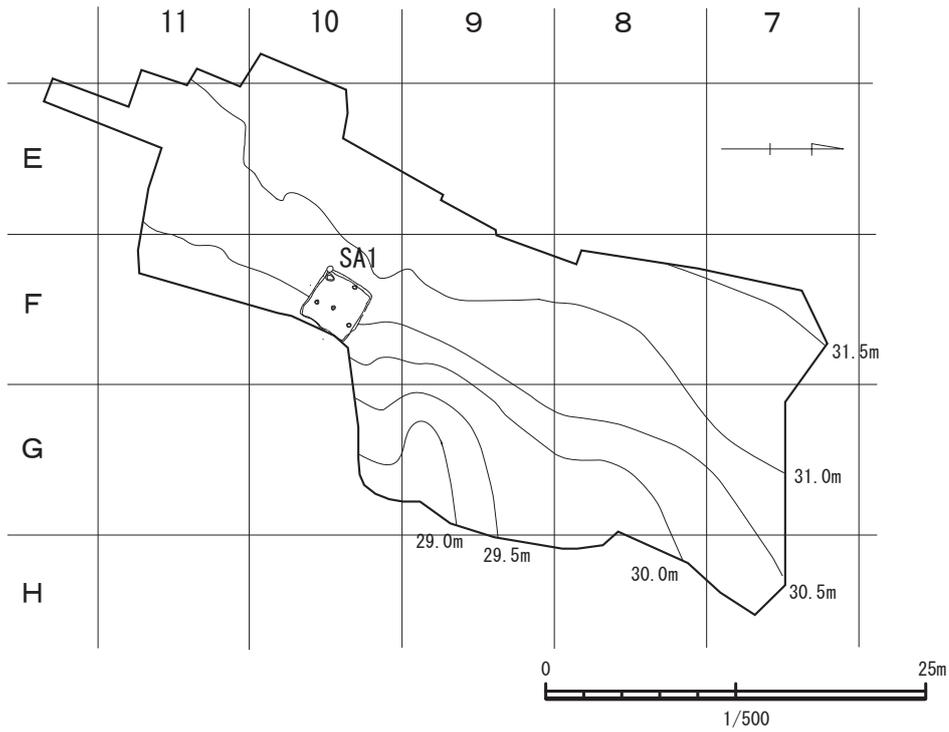
須恵器 (第53図 140・141)

140は坏蓋である。SA1の西壁沿い中央付近の床面上から口縁部が上を向いた状態で出土した。蓋のおよそ半分が残存しており、口径は12.0cmを測る。器高は比較的高く、天井部と口縁部の境には明確な稜をもつ。形態的には陶邑窯跡編年のTK47~MT15型式の中で考えられる。141は甕の口縁部から頸部にかけての部位である。SA1の南東部隅の床面上から口縁部が下を向いた状態で出土した。口径は18.2cmである。内外面ともに回転ナデ調整で、内面には指頭痕が認められる。

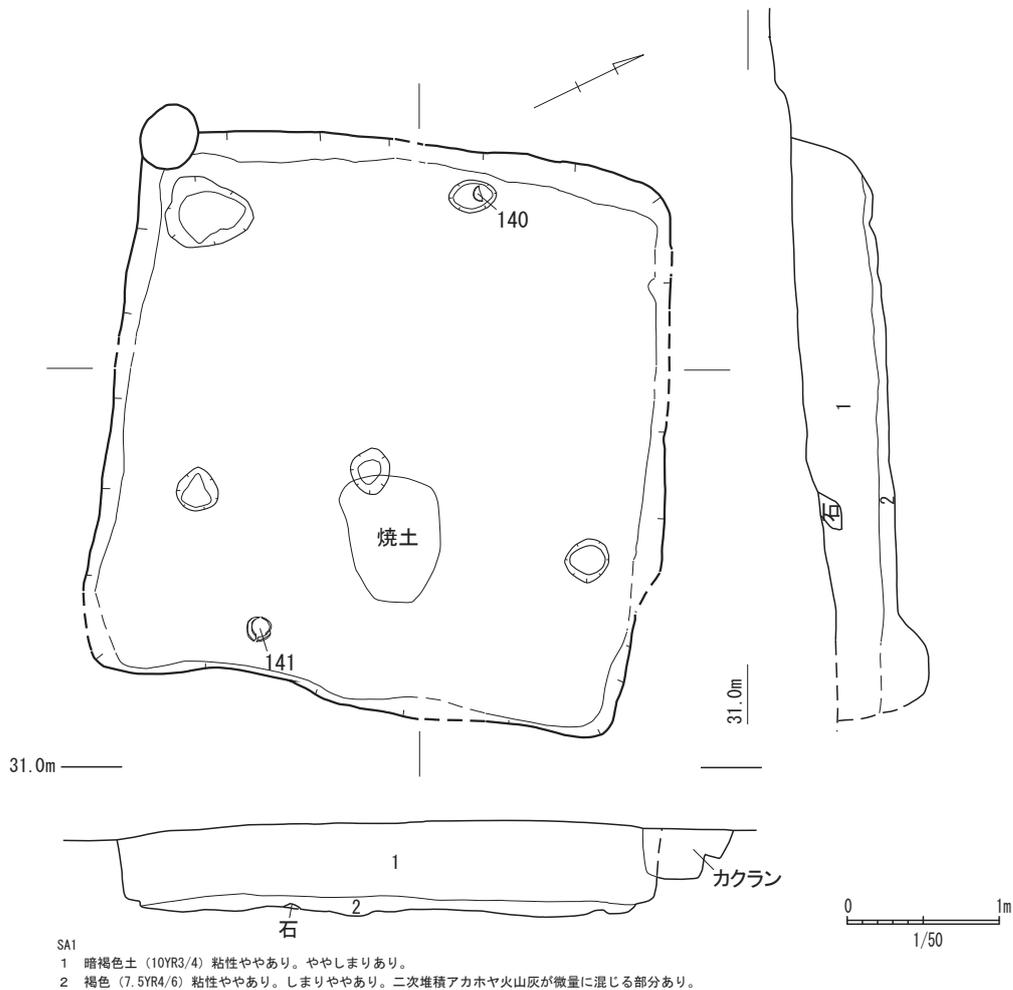
3-3. 包含層出土の古墳時代遺物

土師器 (第54図 142~148)

142~145は甕である。142は胴部から口縁部にかけて緩やかにカーブしており、口径が胴部最大径をわずかに上回る。外面には粘土の継目が目立ち、煤の付着もみられる。内面は工具によるナデの後、丁寧なナデを施している。143は口縁部片で、緩やかに外反しながら、器厚は口唇部にむけてやや先細りしている。145は底部付近であり、内・外面ともに工具によるナデを施している。外面には指押さえ痕も観察できる。146は高坏の脚部である。外面はナデの後に粗いミガキを、内面はナデを施している。147は高坏の坏部であり内面を工具ナデの後、一部にミガキを施している。148は坏の底部付近の一部であるが風化が著しい。

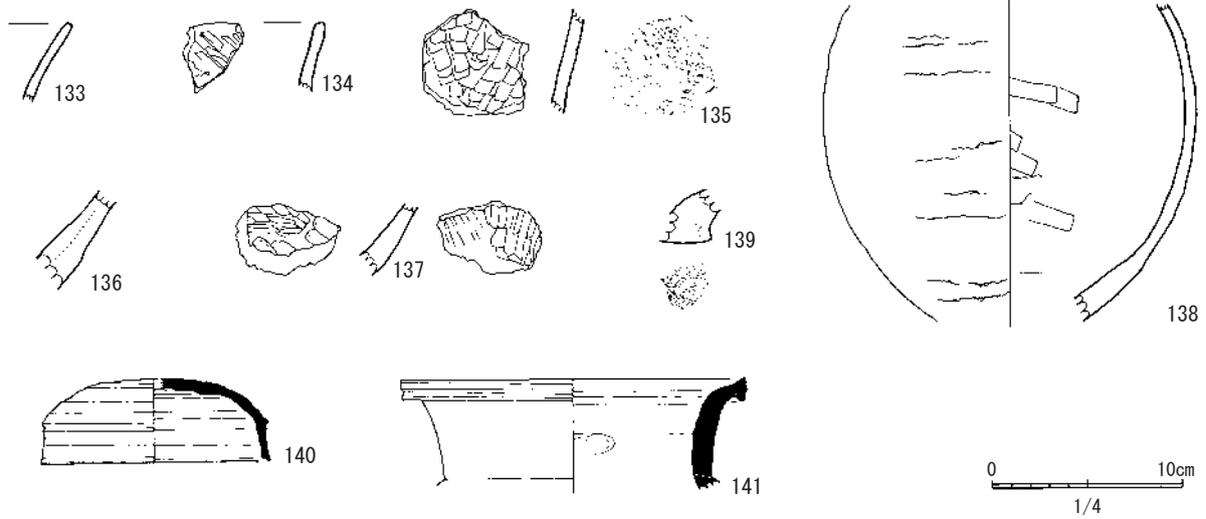


第 51 図 岡遺跡第 13 次調査区 古墳時代遺構分布図

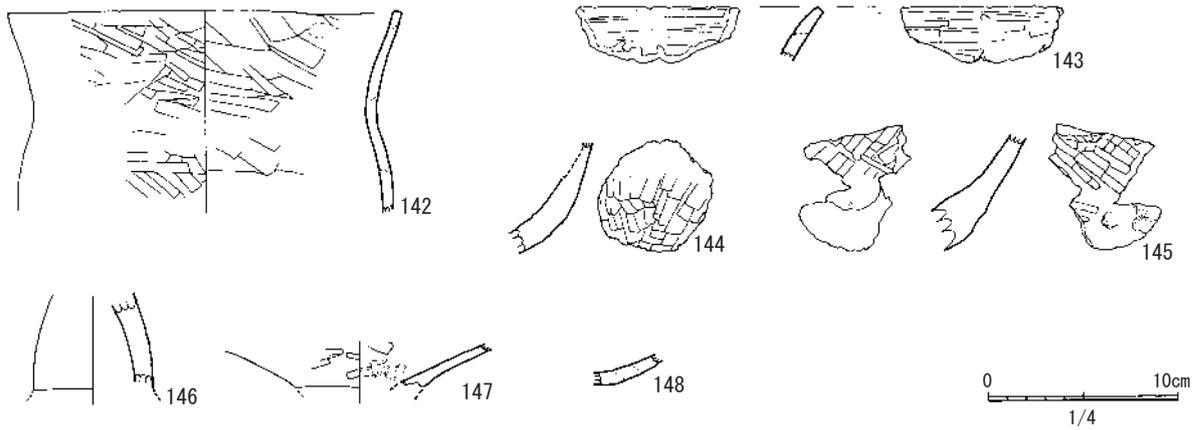


- SA1
 1 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性ややあり。ややしまりあり。
 2 褐色 (7.5YR4/6) 粘性ややあり。しまりややあり。二次堆積アカホヤ火山灰が微量に混じる部分あり。

第 52 図 岡遺跡第 13 次調査区 SA1 実測図および遺物出土状況図



第 53 図 岡遺跡第 13 次調査区 SA1 出土土器実測図



第 54 図 岡遺跡第 13 次調査区 古墳時代土器実測図

第 17 表 岡遺跡第 13 次調査区 SA1 出土土器観察表

No.	出土地点	種別	部位	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
133	SA1-3	鉢?	口縁部	-	-	-	風化により不明瞭	風化により不明瞭	橙 (7.5YR7/6)	橙 (5YR7/8)	2mm以下の灰白粒・透明光沢粒、1mm以下の赤褐粒を含む	
134	SA1	甕	口縁部	-	-	-	ナデ	工具ナデ	橙 (5YR7/6)	橙 (5YR7/6)	3mm以下の灰白粒、2mm以下の赤褐・褐灰粒を少し、微細な黒色光沢・透明光沢粒を含む	
135	SA1-5	甕	胴部	-	-	-	タタキ痕	工具ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	灰 (7.5Y5/1)	2mm以下のにぶい褐・灰褐・灰白粒を含む	
136	SA1-4	甕	底部付近	-	-	-	工具ナデ	工具ナデ(風化により不明瞭)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	橙 (5YR6/6)	4mm以下の灰白・黒褐・淡黄粒を含む	
137	SA1 SE	甕	底部付近	-	-	-	工具ナデ、一部ケズリ	工具ナデ、指押さえ痕あり	にぶい橙 (7.5YR6/4)	橙 (7.5YR6/6)	4mm以下の褐、3mm以下の褐灰、2mm以下の黒粒を含む	
138	SA1-18SA1-19SA1-18SA1-F10E	甕	胴部~底部付近	-	-	-	ナデ	斜方向の工具ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	淡黄橙 (7.5YR6/4) にぶい橙 (7.5YR7/4)	5mm以下の灰褐・にぶい褐・淡黄粒を含む	粘土の織目が目立つ 推定胴部径19.6cm
139	SA1	甕	底部	-	-	-	ナデ、粘土の返りあり、底面には明瞭な葉脈痕	ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	黒褐 (10YR3/1)	3mm以下の灰褐、2mm以下の灰白粒を含む	
140	SA1-2	坏蓋	口縁~天井部	12.0	-	-	回転ナデ、ヘラ削り、ナデ	回転ナデ	オリーブ灰 (5G6/1)	灰 (10Y6/1)	6mm以下の灰・灰白・暗赤灰粒を含む	須恵器 TK47~MT15に類似
141	SA1-7	甕	口縁部~頸部	18.2	-	-	回転ナデ	回転ナデ、指頭痕あり	灰 (5Y6/1)	灰オリーブ (5Y6/2)	3mm以下の灰・灰黄褐・灰白・灰褐粒を含む	須恵器

第 18 表 岡遺跡第 13 次調査区 古墳時代土器観察表

No.	出土地点	器種	部位	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
142	F11 II	甕	口縁～胴部	20.6	-	-	多方向の工具ナデのちナデ (スス付着)	工具ナデのち丁寧なナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	明黄褐 (10YR6/6)	3mm以下の明赤褐・にぶい褐、2mm以下の褐灰・灰白、微細な透明光沢粒を含む	胎土の雜目が目立つ推定胴部径19.6cm
143	II-74+ F11 II	甕	口縁部	-	-	-	工具ナデのちナデ	工具ナデのちナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	3mm以下の明褐粒を多く、2mm以下の明赤褐・灰粒、微細な透明光沢粒を含む	
144	E11 II	甕	胴部～底部付近	-	-	-	工具ナデ	横方向の工具ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	4mm以下のにぶい橙。3mm以下の灰褐、2mm以下の灰白粒を含む	
145	F11 II	甕	底部付近	-	-	-	工具ナデ、指押さえ痕あり	工具ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/3)	黒褐 (10YR3/1)	3mm以下の黒褐、2mm以下の黒粒を含む	
146	II-65	高坏	脚部	-	-	6.0	ナデのち粗いミガキ	ナデ	橙 (5YR7/6)	橙 (5YR6/6)	2mm以下の灰白・黒褐・黒色光沢粒を含む	
147	F11 II + G10 II	高坏	坏部	-	-	6.7	工具ナデのちナデ	工具ナデ、一部ミガキ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	2mm以下の褐・灰白粒を含む	
148	F11 II	坏	底部付近	-	-	-	風化により不明瞭	風化により不明瞭	橙 (5YR7/6)	灰黄褐 (5YR7/8)	3mm以下の褐灰、2mm以下の灰白粒を含む	

第 4 節 中世～近世の遺構と遺物

第 13 次調査区においては、中世の遺構は検出されなかった。また、遺物に関しては青磁片 1 点のみの出土となった。

近世においては、遺構は掘立柱建物跡 2 棟が検出された (第 55 図)。遺物は、点数は少ないものの陶磁器の出土がみられた。また、時期は不明の遺構であるが、土坑 2 基が検出された。

4-1. 中世の遺物

青磁 (第 59 図 149)

149 は青磁片の皿である。外面・内面ともに施釉、貫入が見られる。内面には陰刻による文様が観察できるが、残存部分がわずかであるため文様の判別はできない。

4-2. 近世の遺構

調査区中央部から南端にかけての II 層から IV 層上面で掘立柱建物跡を 2 棟検出した。

SB1 (第 56 図)

調査区南半に位置し、SB 2 の南側に隣接している。12 の柱穴のうち、P 1～P 6 は II 層上面で、P 7～P 12 は IV 層上面で検出された。梁間 1 間 (約 4.8m)、桁行 5 間 (約 10.5m) で、梁間柱間は 4.8m、桁行柱間は 1.8～2.3m である。梁行が比較的長く、2 間であるとも考えられたが、中間付近に柱穴らしいピットは確認できなかった。

柱穴掘方は、長径平均 56 cm、短径平均 51 cm の

ほぼ円形を呈しているが、P 9 のみ長径 60 cm、短径 48 cm の楕円形である。また、P 10 の柱穴は途中に三日月状のテラスを有する 2 段ピットであることが確認された。

主軸は N-20°-E で、等高線にほぼ並行に建てられている。身舎面積は約 50.5 m² を測り、本調査区の掘立柱建物跡では最大である。

SB2 (第 57 図)

調査区の中央付近に位置している。P 1～P 4 は II 層上面で検出された。攪乱により、P 2 と P 3 に対応する柱穴、および、P 5 と P 6 の間の柱穴は確認されなかったが、梁間 2 間 (約 3.8m)、桁行 3 間 (約 6.9m) の総柱建物跡であった可能性も考えられる。梁間柱間は 1.7～2.0m、桁行柱間は 2.2～2.3m である。

柱穴掘方は、長径平均 34 cm、短径平均 31 cm のほぼ円形を呈しているが、P 1 および P 3 のみ長径平均 50 cm、短径平均 38 cm の楕円形である。

主軸は N-19°-E で、SB 1 とほとんど同じ向きであり、等高線にほぼ並行に建てられている。身舎面積は、約 27.8 m² を測る。

4-3. その他の遺構

調査区南部のⅡ層上面で土坑を2基検出した。2基ともに長軸が等高線にほぼ並行になるように掘り込まれていた。

SC1 (第58図)

調査区の南半、E10グリッドにおいてⅡ層上面から検出された。長軸は約1.2m、短軸は約0.7mで長方形に近い。検出面からの深さは、5～10cm程度であり、ごく浅い。埋土は一層であり、アカホヤや炭化物が少量混じっていた。検出された位置は、SB1の内側であるが、SB1に附帯するものかどうかははっきりしない。

SC2 (第58図)

調査区の南半、SC1に並ぶような位置でⅡ層上面より検出された。長軸は約1.3m、短軸は約1.2mでほぼ方形である。検出面からの深さは、5～15cm程度である。埋土は一層であり、アカホヤが少量混じっていた。SC1と同様にSB1の内側で検出されたが、SB1に附帯するものかどうかははっきりしない。

4-4. 近世の遺物

出土した多くの遺物がⅠ層からの出土である。

磁器 (第59図 150～154)

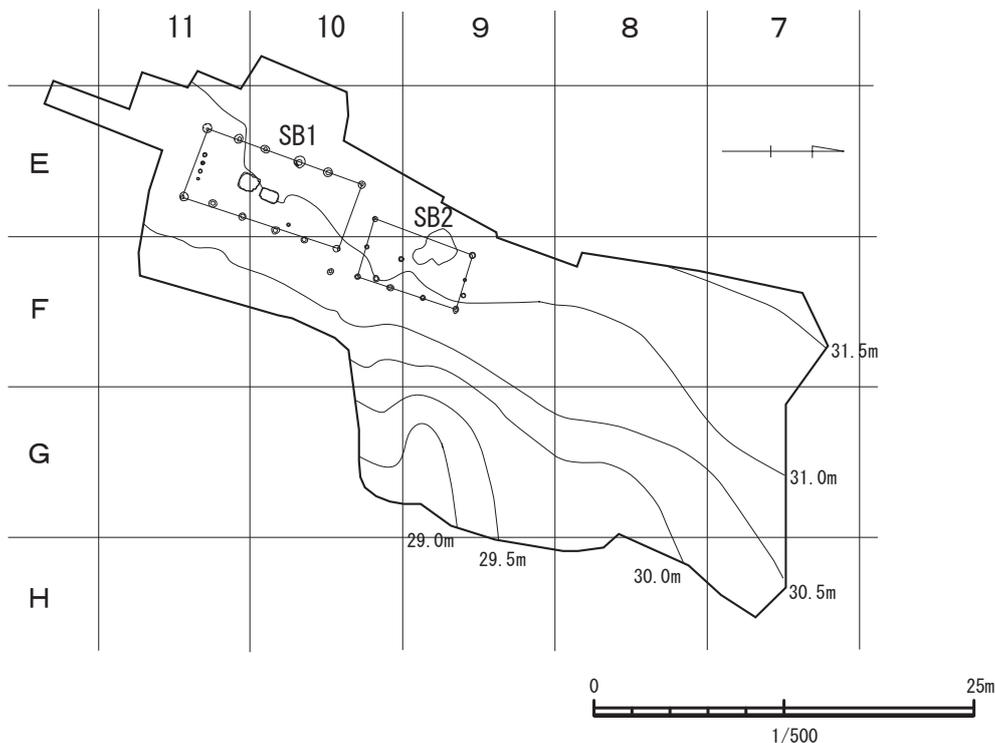
150は碗、151は瓶の染付である。

陶器 (第59図 155～157)

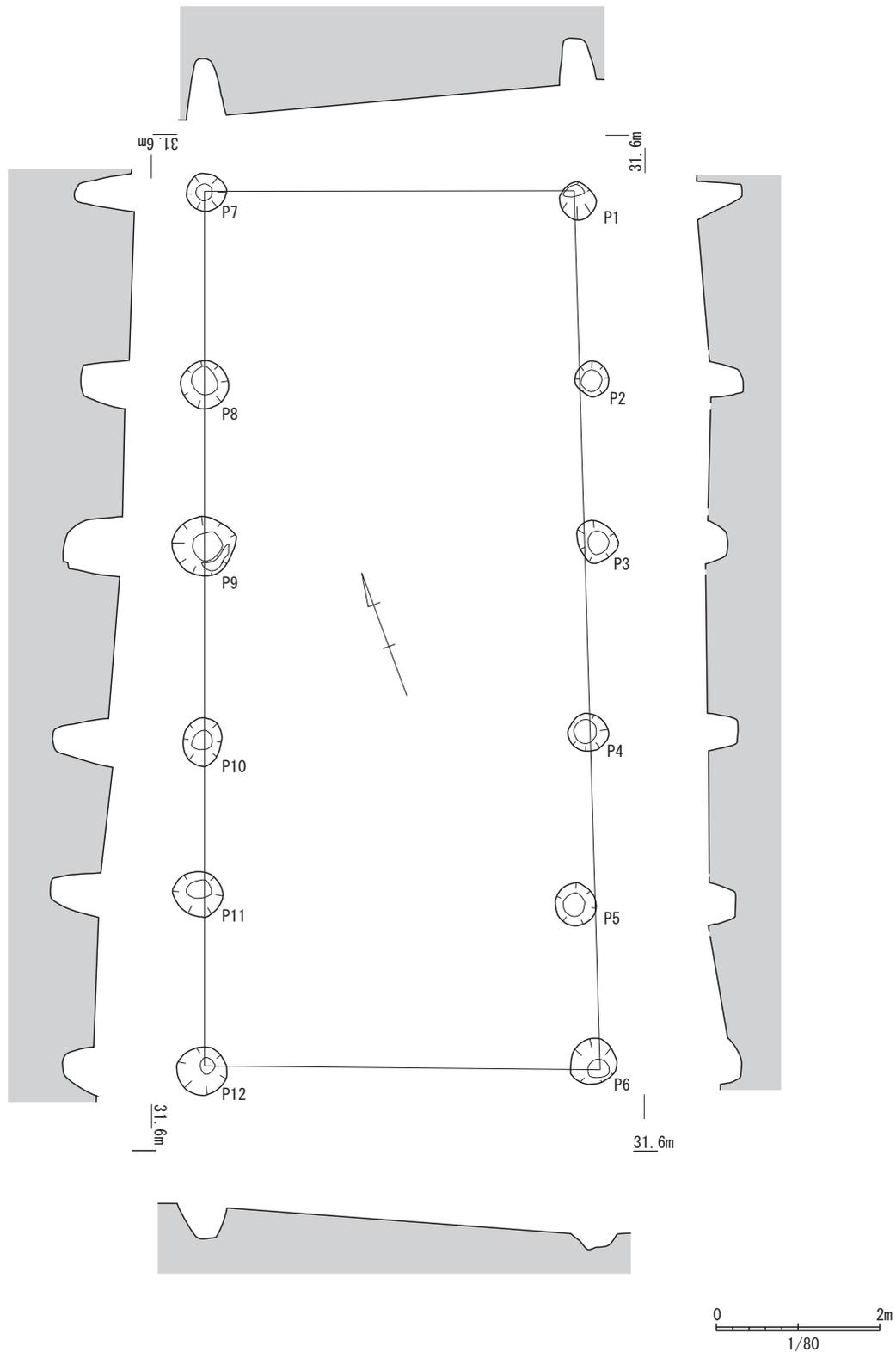
155・156は備前焼の甕である。156は内・外面に施釉、回転ナデの技法が観察できる。156は内・外面に横・斜方向のナデが観察できる。157は播鉢で13条の播目を有す。口唇部のみ施釉する。

硯・砥石 (第59図 158・159)

Ⅰ層から出土の遺物であり、いずれも小片のために全体の大きさは不明である。158は頁岩製の硯であり縁と陸の一部分である。159は珪質頁岩を石材とする薄い砥石である。



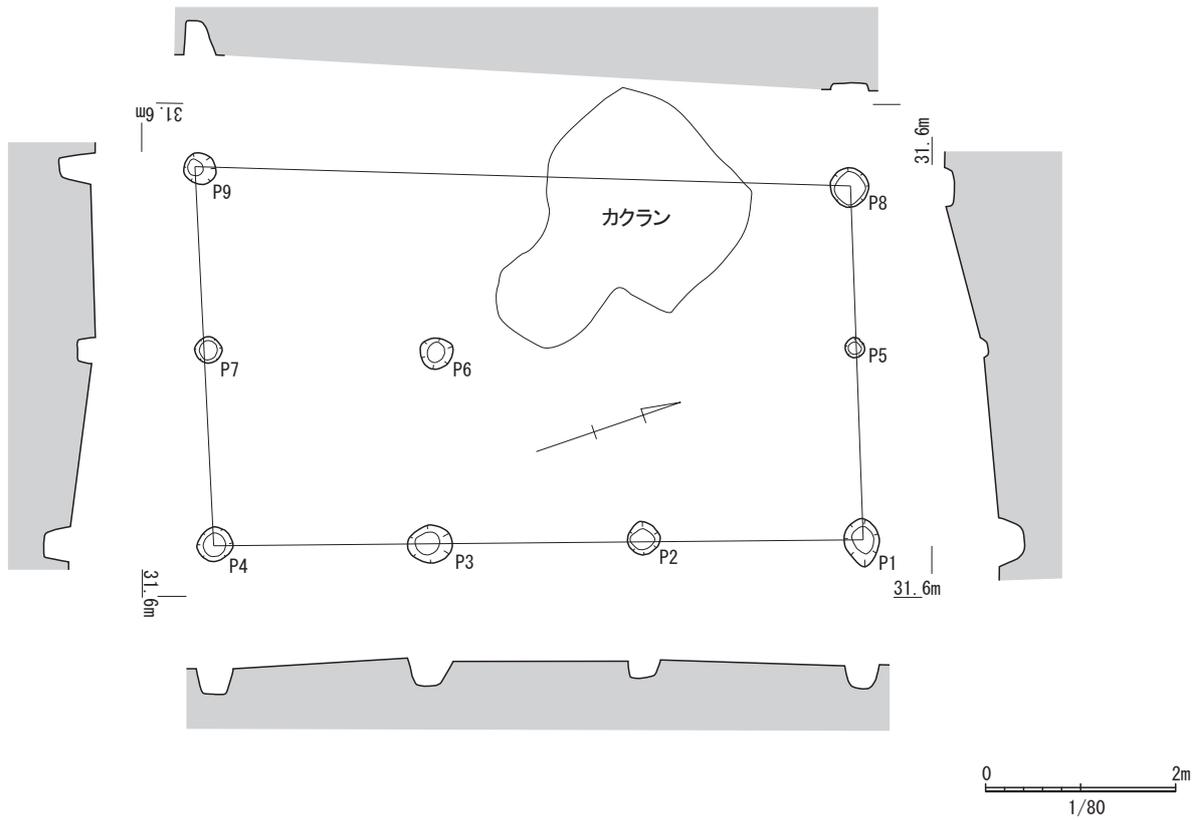
第55図 岡遺跡第13次調査区 近世遺構分布図



第56図 岡遺跡第13次調査区 SB1 実測図

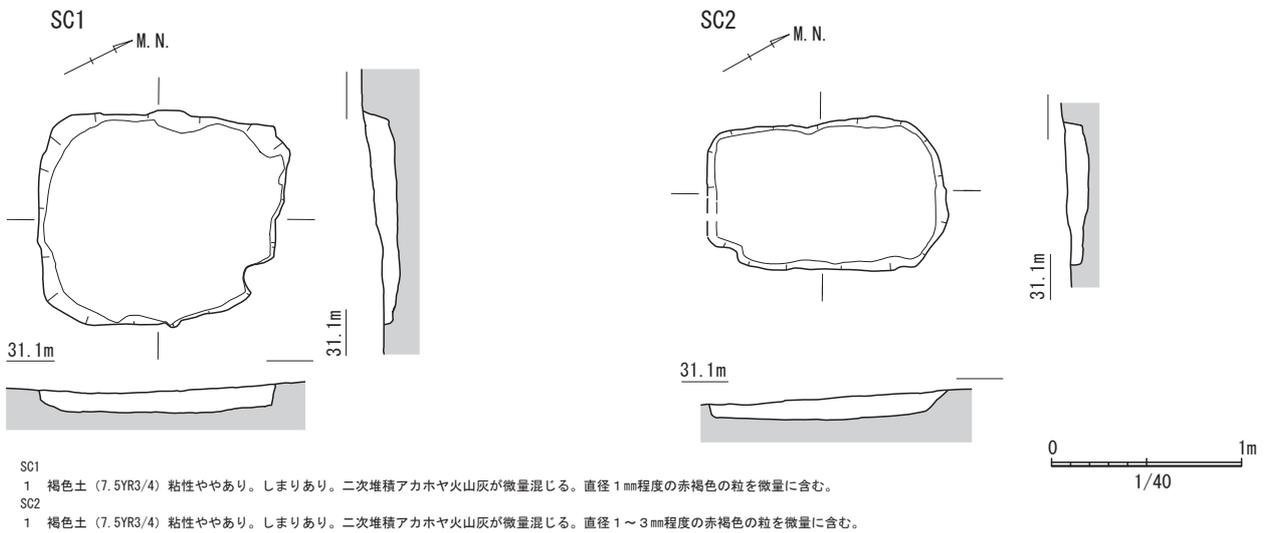
第19表 岡遺跡第13次調査区 掘立柱建物跡一覧表

遺構	位置 (グリッド)	方位	身舎面積 (㎡)	梁			桁			柱穴		出土遺物
				規格(間)	梁行(m)	平均柱間(m)	規格(間)	桁行(m)	平均柱間(m)	柱数	柱径(cm)	
SB1	E10, E11	N 20° E	50.5	1	4.8	4.8	5	10.5	2.1	12	56	149, 153, 157
SB2	F9, F10	N 19° E	27.8	2	3.8	1.9	3	6.9	2.3	9	34	

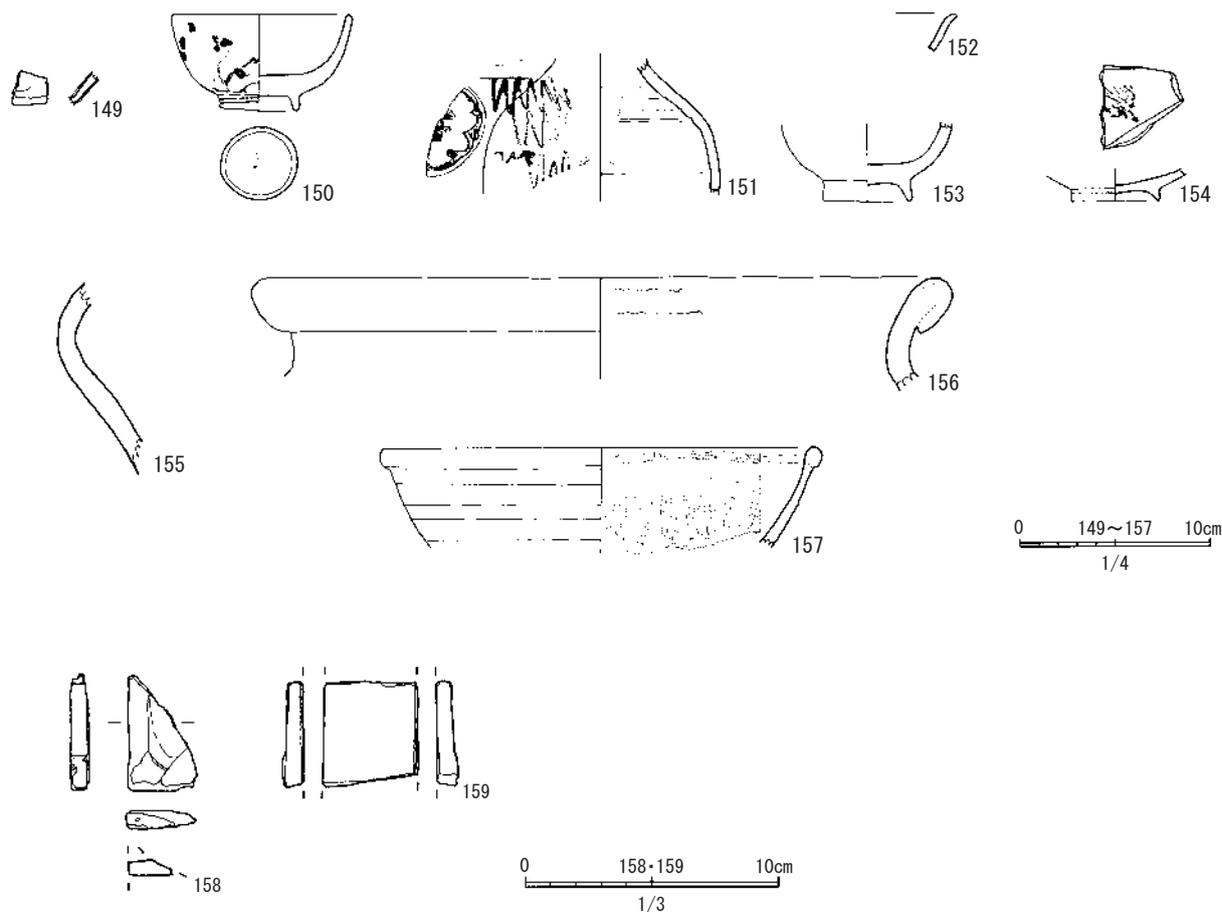


第 57 図 岡遺跡第 13 次調査区 SB2 実測図

岡
第
13
次



第 58 図 岡遺跡第 13 次調査区 土坑実測図



第59図 岡遺跡第13次調査区 中世～近世遺物実測図

第20表 岡遺跡第13次調査区 中世～近世陶磁器観察表

No.	出土地点	種別	器種	部位	法量			文様・調整の特徴		焼成	色調		胎土	備考	
					口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面			
149	SB1 P5	青磁	皿	底部付近	-	-	-	施釉、貫入あり	施釉、文様、貫入あり	堅緻	オリーブ灰 (7.5GY6/1)	オリーブ灰 (7.5GY6/1)	精良 灰黄 (2.5Y6/2)	輪花皿か	
150	-	染付	碗	口縁～底部	(9.2)	4.1	-	施釉、雪輪梅花文、裏銘は大明年製くずれ	施釉	堅緻	灰白 (5GY8/1)	灰白 (2.5GY8/1)	精良 灰白 (5Y8/1)	18C後半、肥前系	
151	-	染付	瓶	体部	-	-	-	施釉、花文、鋸歯文	施釉、回転ナデ、釉だれあり	堅緻	灰白 (10Y7/2)	灰白 (10Y7/2)	1mm以下の黒・灰粒を含む		
152	F10 II	磁器	碗	口縁部	-	-	-	施釉、貫入あり	施釉、貫入あり	堅緻	灰白 (5Y8/1)	灰白 (5Y8/1)	精良 浅黄橙 (10YR8/4)		
153	SB1 P9	磁器	碗	腰～底部	-	(4.8)	-	施釉、貫入あり、墨付釉剥ぎ	施釉、貫入あり	堅緻	浅黄 (2.5Y7/3)	浅黄 (2.5Y7/3)	精良 にぶい黄橙 (10YR7/4)	17C後半、唐津	
154	-	磁器	碗	腰～底部	-	(4.7)	-	施釉、高台に圏線あり	施釉、文様あり	堅緻	灰白 (5GYR8/1)	灰白 (5GYR8/1)	精良 白 (N8)	瀬戸美濃?	
155	F10	陶器	壺	頸～胴部	-	-	-	横・斜方向のナデ	横・斜方向のナデ	良好	にぶい赤褐 (5YR5/4)	にぶい赤褐 (5YR5/4)	5mm以下の灰白粒を多く含む	備前	
156	F10	陶器	壺	口縁部	(35.3)	-	-	施釉、回転ナデ	施釉、回転ナデ	精良	にぶい赤褐 (5YR5/3) 褐灰 (2.5Y6/2)	にぶい褐 (7.5YR5/3) 褐灰 (2.5Y6/2)	2.5mm以下の灰白・淡黄・灰褐粒を含む	灰黄 (2.5Y6/2)	備前
157	SB1 P9	陶器	播鉢	口縁～体部	(22.8)	-	-	口唇部に施釉、回転ナデ	口唇部に施釉、回転ナデ、ハケ目13条の播目	精良	灰褐 (5YR5/2) 褐灰 (5Y4/1)	灰褐 (5YR4/2) 褐灰 (5Y4/1)	1mm以下の灰白粒を含む	肥前	

第21表 岡遺跡第13次調査区 近世遺物計測表

No.	出土地点 (グリッド)	層	器種	石材	法量			
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
158		I	硯	頁岩	4.6	2.8	0.7	9.0
159		I	砥石	珪質頁岩	4.0	3.7	0.8	21.1

第5節 小結

第13次調査区においては、縄文時代早期・晩期、古墳時代、中世～近世と大きく4時期の遺構・遺物を確認した。今回の調査で得られた成果を検討し、時期ごとに遺跡の様相をまとめる。

5-1. 縄文時代

【早期】

本調査区では当該時期の遺構は確認されなかった。隣接する第9次調査区や第6次調査区では、集石遺構や炉穴等も検出され、早期の遺物も出土しているが、本調査区では、鬼界アカホヤ火山灰の二次堆積層であるⅡ層から土器片が2点出土したのみである。早期に相当する遺物包含層も確認されていない。遺物が流れ込んできたと想定すると、調査区より標高の高い西側に当時の生活の痕跡があった可能性もある。

【晩期】

本調査区では当該時期の遺構は確認されなかったが、Ⅱ層より突帯文土器、精製土器等が一定量出土した。本調査で出土した突帯文土器は、すべて無刻目突帯文土器であり、口縁部に粘土紐を貼付けた後に継目をナデて、口縁部全体に厚みをもたせたタイプと口縁部に刻み目のない突帯をもつタイプである。精製土器はほとんどが浅鉢であったが、口縁部に鱗状の突起や胴部にリボン状の突起をもつものがみられた。その他、組織痕土器、孔列文土器等の無刻目突帯文期の遺物が出土したが、これらの出土遺物は、第6次調査区と類似した傾向がみられる。

次に石器についてこれまでの岡遺跡の調査の中で本調査区の特徴的な事柄を2点述べる。まず1点は、石鏃の石材が安山岩の割合が高い傾向があったことである。石鏃の出土は8点と点数は少ないが安山岩製は6点を数える。他の調査区が主にチャート製や姫島産黒曜石製が多いのとは異なる。2点目は岡遺跡でこれまで出土していなかった有溝石錘が出土したことである。本調査区の川向かいにある第7次調査では石錘が38点出土しており、そのすべてが打欠石錘であるが、本調査区では10点の石錘のうち2点が有溝石錘である。両調査区の間を高森川を挟んでいることが影響している可能性もあると思われるが、明確な時期差

を検討するには至らなかった。

5-2. 古墳時代

遺構は古墳時代中期の竪穴建物跡が1軒検出された。床面直上からは須恵器の坏蓋が出土し、形態的には陶器窯跡編年のTK47～MT15型式に類似していることから古墳時代中期後半と思われる。岡遺跡では他の調査区から古墳時代の遺物は出土しているものの、竪穴建物跡の検出はこの1軒以外にはない。日向市域では、板平遺跡から古墳時代の住居跡が25軒検出されており、遺構出土の遺物から概ね古墳時代の前期～中期の時期であると報告されている。板平遺跡は長辺が7mを超える住居が確認されているが、今回検出された建物跡は板平遺跡のものと比較すると規模が小さいといえる。

3 近世

近世と想定される掘立柱建物跡が2棟検出された。SB1からは17世紀後半と思われる唐津焼の碗が出土している。建物の規模は、SB1の身舎面積が50㎡を超えており、岡遺跡の中でも規模が大きい。隣接する第9次調査区でも40㎡を超えるものが検出されている。SB2は遺物の出土がないため、時期ははっきりしないものの、主軸の向きがSB1とほぼ同じであるため、2棟の時期が近い可能性もある。しかし、地形的に立地に適した場所が乏しく、主軸の向きが制約されて同じ主軸の向きになったことも否定できない。第7次調査で検出された5棟は身舎面積が約5㎡～24㎡と比較的小さい。第7次調査区の掘立柱建物跡は中世末～近世初頭と報告されているが、SB2の身舎面積は27.8㎡であり第7次調査の身舎面積に近い。SB1よりも時期的に遡る可能性もある。

〈参考文献〉

- 堂込秀人 1997「南九州縄文晩期土器の再検討－入佐式と黒川式の細分」『鹿児島考古』第31号 鹿児島県考古学会
- 日向市史編さん委員会 2010『日向市史 通史編』日向市
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2012『岡遺跡（第6・7次調査）・坂元第2遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第212集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2011『板平遺跡（第3・4次調査）』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第199集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2006『下耳切第3遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第125集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2008『市納上第2遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第170集
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2007『上水流遺跡1 縄文時代中期後半から弥生時代編』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（113）

第IV章 岡遺跡第15次調査の成果

第1節 調査の方法と経過

1-1. 発掘調査の方法と経過

本調査区は、平成22年度に発掘調査を実施した第7次調査区(平成22年7月20日～11月19日)の東側に隣接しており、遺構、出土遺物及び土層堆積状況がほぼ同じと想定された。調査は、遺跡の内容を把握するために、第12次調査(平成23年8月1～3日)としてトレンチを設定し、出土遺物や土層堆積状況の確認を行った。

第7次調査と第12次調査の結果を参考に第15次調査区を絞り込み、平成23年9月26日～12月27日まで(調査実日数50日)調査を実施することにした(第60図)。

調査は、まず重機による表土除去を行った後、人力により精査を行った。そして、調査区北側と東側に土層観察用の先行トレンチを設定し、基本層序を把握して、I層からIX層に分層した。それから、人力による掘削を行い、調査を進めていった。

遺構は、調査区南西部の縄文時代早期の層としたIV層に赤化した礫の集中箇所が確認され、サブトレンチを設定して調査を行った結果、配石や掘込が確認され、集石遺構(SII)として調査を進めた。SI1の検出面及び、近辺から楕円押型文土器とチャート製剥片、炭化物の混じった埋土から貝殻条痕文土器が出土した。SI1は実測図を作成し、検出状況や完掘状況等の写真撮影を行った。

調査区西側から、約2m間隔のピット群が検出されたが、埋土から鉄芯やビニール紐等が確認されたため、以前あったビニールハウスのものと判断し、調査を終了した。

調査区北東部のIII層上面で、同一個体の土器片が数点出土した。掘削を進めていくと、さらに口縁部や胴部から底部にかけて組織痕のある土器片が、集中して出土した。すぐそばに重なるように、長さ約20cmの尾鈴山溶結凝灰岩製打製石斧が出土していたこともあり、サブトレンチを設定し調査を進めていったが、明確な掘込等は確認されなかった。

遺物は、II層で縄文時代から近世の遺物(縄文

土器、弥生時代から古墳時代の土器、土師器、須恵器、石器、中世から近世の陶磁器等)が出土した。III層は、鬼界アカホヤ火山灰が二次的に堆積した遺物包含層で、縄文時代晩期の土器(組織痕、孔列文、突帯文等)や石器(石鏃、石錘、石斧、剥片等)が出土した。

IV・V層も遺物包含層で、縄文時代早期の土器(押型文、貝殻文等)や石器(礫器、剥片等)が出土した。

VI層以下は、調査の結果、遺構・遺物ともに確認できなかった。

II層の遺物は一括取り上げ、III・IV・V層の遺物はトータルステーションによる点上げを行った。また、調査中に空中写真撮影とテフラ採取及び分析を業者に委託した。

発掘調査の経過は以下のとおりである。

0926 調査開始。表土除去。

0927～0930

表土除去。環境整備。

1003 作業員投入。環境整備。

1004 環境整備。

1006 環境整備。西側精査。

1007 東側精査。南側II層掘削。

1011 南側II層掘削。北部先行トレンチ(Tr1)設定。東部先行トレンチ(Tr2)設定。

1012 南側II層掘削。Tr1・Tr2掘削。

1013 南側II層掘削。Tr1・Tr2掘削。

1017 南側II層掘削。Tr1・Tr2掘削。

1018 南側II層掘削。Tr1・Tr2掘削。

1019 南側II層掘削。

1020 南側II層掘削。中央部散礫精査。

1024 全面精査。西側II層掘削。中央部散礫精査。中央部西サブトレンチ(Tr3)設定。

1025 東側II層掘削。Tr3掘削。Tr3東端サブトレンチ(Tr4)設定。北西部サブトレンチ(Tr5)設定。

1026 東側II層掘削。Tr3・Tr4・Tr5掘削。

1027 全面精査。

1028 北東側II層掘削。

- 1101 全面精査。
- 1102 東壁面分層。環境整備。
- 1107 全面精査。Ⅲ層上面写真撮影。
- 1108 全面精査。Ⅲ層上面遺物検出状況写真撮影。
- 1109 測量杭設定。Tr2 掘削。西側精査。
- 1114 全面精査。環境整備。
- 1115 西側精査。西部ピット群検出状況写真撮影。遺物点上げ。東側Ⅲ層掘削。
- 1116 遺物点上げ。東側Ⅲ層掘削。北壁面分層。
- 1117 遺物点上げ。西側精査。北西部調査区拡張。西部ピット群調査。南西部礫集中箇所精査。
- 1121 全面精査。北西部拡張部分掘削。南西部礫集中箇所精査。Tr2 南端掘削。
- 1122 東側Ⅲ層掘削。西部ピット群調査。南西部礫集中箇所精査。北東部土器片集中箇所精査。
- 1124 遺物点上げ。東側Ⅲ層掘削。
- 1125 西部ピット群半截状況写真撮影。西部ピット群調査。東側Ⅲ層掘削。
- 1129 遺物点上げ。東側Ⅲ層掘削。西部ピット群完掘状況写真撮影。
- 1201 西側Ⅲ層掘削。南西部礫集中箇所精査・検出状況写真撮影・サブトレンチ設定・調査。北東部土器片集中箇所精査・出土状況写真撮影・サブトレンチ設定・調査。
- 1205 北東部土器片集中箇所調査。南西部礫集中箇所調査。全体精査。北壁面・東壁面分層。
- 1206 空中撮影実施。北壁面土層堆積状況図作成。北東部土器片集中箇所出土状況図作成。北側Ⅲ層掘削。
- 1207 北壁面土層堆積状況図作成。北東部土器片集中箇所出土状況図作成。北側Ⅲ層掘削。遺物点上げ。
- 1208 環境整備。遺物整理。
- 1209 北東側Ⅳ層掘削。南東部サブトレンチ(Tr6)設定。コンタライン(等高線)図作成。東壁面土層堆積状況図作成。
- 1212 北東側Ⅳ層掘削。Tr6 掘削。遺物点上げ。コンタライン(等高線)図作成。SII 実測図作成。
- 1213 北東側Ⅳ層掘削。Tr6 掘削。遺物点上げ。SII 実測。東壁面土層堆積状況図作成。
- 1214 南東側Ⅳ層掘削。遺物点上げ。SII 実測。

東壁面土層堆積状況図作成。

- 1215 南東側Ⅳ・Ⅴ層掘削。東壁面土層堆積状況図作成。テフラ分析サンプリング採取。

- 1216 南東側Ⅴ層掘削。SII 完掘状況写真撮影。

- 1219 南東側Ⅴ層掘削。遺物点上げ。

- 1220～1221 埋め戻し。

- 1227 撤収。調査終了

1-2. 整理作業及び報告書作成

平成24年1月から9月まで、整理作業を行った。

遺物の実測は、石器 53 点を業者に委託し、それ以外の石器 38 点及び土器・陶磁器 68 点は宮崎県埋蔵文化財センター(以下センター)で整理作業員及びセンター職員が行った。

また、1号集石遺構(SII)の埋土から検出された炭化材1点の放射性炭素年代測定を業者に委託した。



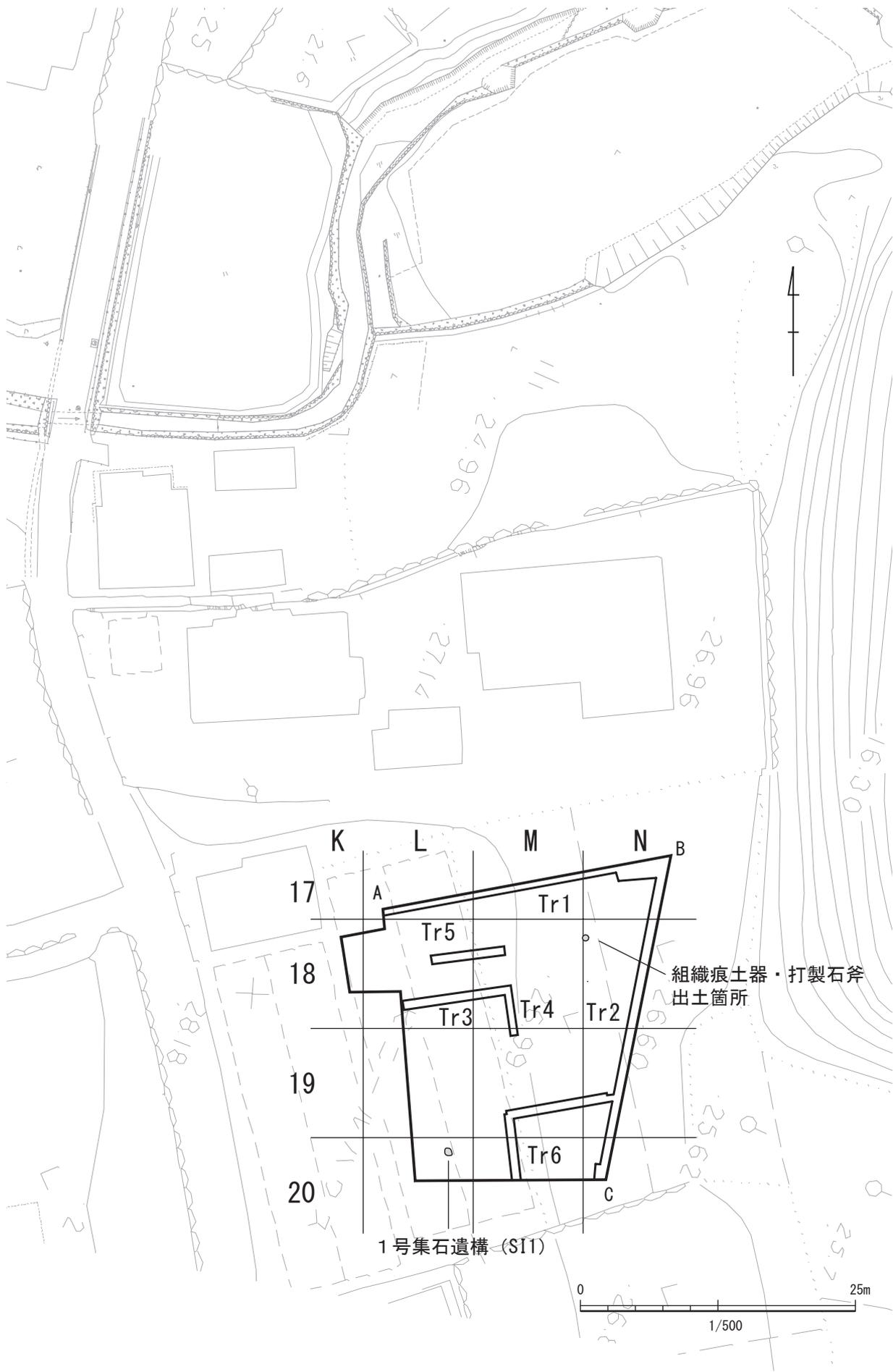
調査前風景(北西から)



発掘現場作業風景



整理作業風景



第60図 岡遺跡第15次調査区 調査区周辺地形・遺構分布・トレンチ配置・グリッド図

1-3. 基本層序

本調査区はほぼ平坦地であったが、調査区北側と東側に先行トレンチを設定して調査を進めたところ、調査区北側に高森川が流れ、西側が急斜面地になっていることから、旧地形は南側から北側、西側から東側に向けて緩やかに傾斜していた。調査区東側の土層堆積状況が良好なことから、これをもとに基本層序をⅠ層からⅨ層に分けた。

調査区は以前ビニールハウス及び畑地として利用されていたため、全体に耕作土が広がっていた。厚さは20cm程度で、これをⅠ層（表土）とした。

Ⅱ層からは縄文時代から近世に至るまでの遺物が出土した。調査区東側では耕作土の下に客土を行い、平坦に造成している場所があった。旧耕作土の可能性はある。

Ⅲ層は二次堆積鬼界アカホヤ火山灰が混在する層である。縄文時代晩期を中心とした遺物が出土する、遺物包含層である。風倒木の影響や窪地や

流路への堆積により、土色の濃淡があった。調査区北側には土石流によるものと考えられる礫が散在していた。

Ⅳ層からは1基の集石遺構（SII）が検出され、Ⅴ層とともに縄文時代早期を中心とした遺物が出土する遺物包含層である。場所によっては鬼界アカホヤ火山灰が混在していた。Ⅳ層とⅤ層はよく似ているが、土色や混在礫の特徴により、違う時期に堆積したと考えられ、分層した。

Ⅵ層からⅨ層は無遺物層であった。Ⅵ・Ⅶ層にはテフラ分析の結果（第Ⅴ章参照）、微量ではあるが、始良 Tn 火山灰に由来する火山ガラスが混在することがわかった。Ⅵ層は硬くて砂質が強く、水の影響を受けている可能性がある。Ⅶ・Ⅷ層は水性堆積の可能性はある。Ⅸ層は岩盤層であった。

基本層序（土層柱状図）は下記、土層断面図及び各層の土色や特徴は第61図のとおりである。

基本層序（土層柱状図）

層	土色	土色番号	注記
Ⅰ	暗褐色土層	10YR3/3	表土（耕作土）
Ⅱ	にぶい黄褐色土層	10YR4/3	旧耕作土の可能性。造成土混在。縄文時代～近世の遺物混在
Ⅲ	褐色土層	10YR4/6	二次堆積鬼界アカホヤ火山灰混在。縄文時代晩期遺物包含層
Ⅳ	黒褐色土層	10YR3/1	縄文時代早期遺物包含層
Ⅴ	黒褐色土層	10YR3/2	縄文時代早期遺物包含層
Ⅵ	にぶい黄褐色土層	10YR5/3	始良 Tn 火山灰がわずかに混在。無遺物層。砂質強
Ⅶ	にぶい黄橙色土層	10YR6/3	始良 Tn 火山灰がわずかに混在。無遺物層。水性堆積の可能性
Ⅷ	灰黄褐色土層	10YR5/2	無遺物層。水性堆積の可能性
Ⅸ	にぶい黄橙色土層	10YR7/2	岩盤層。無遺物層

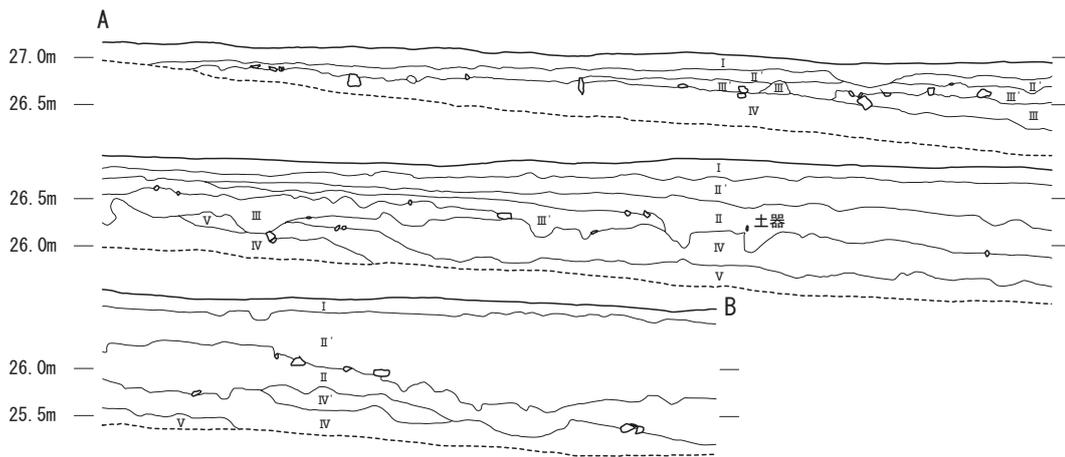


Tr1（北壁面）土層堆積状況（南西から）

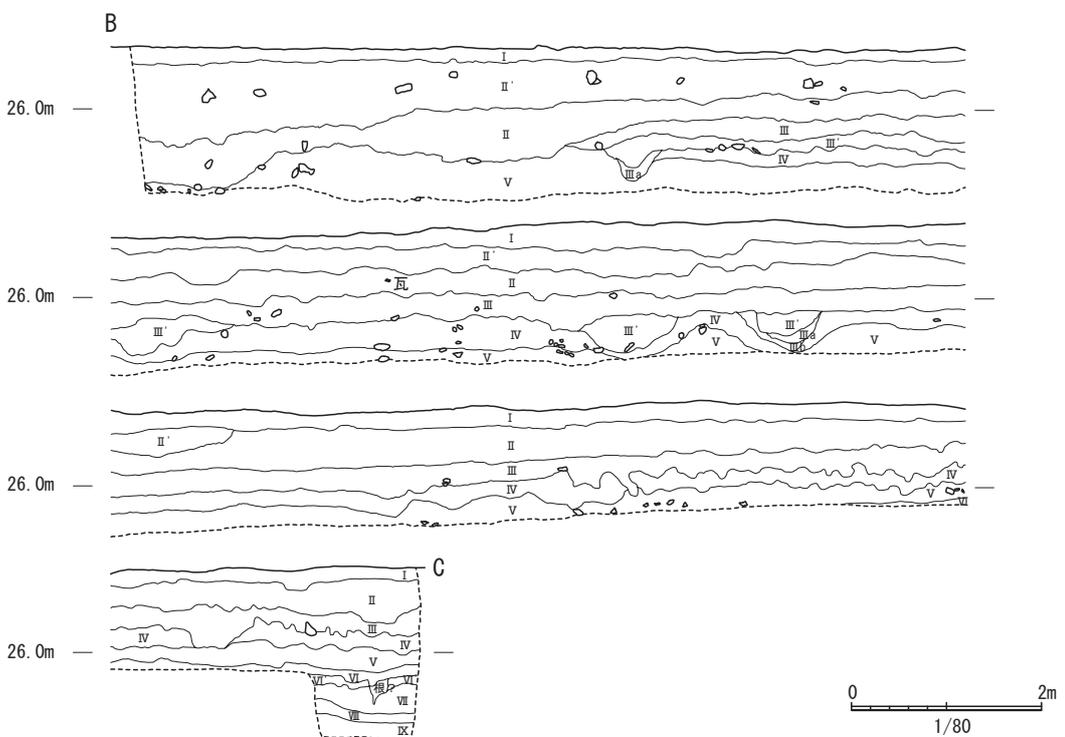


Tr2（東壁面）土層堆積状況（南西から）

Tr1 (北壁面)



Tr2 (東壁面)



層	土色	土色番号	注 記
I 層	暗褐色土	10YR3/3	表土。調査前までの耕作土。
II 層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	旧耕作土か。
II' 層			黄褐色粘質土や暗褐色土が互層を成す。造成土。
III 層	褐色土	10YR4/6	二次堆積したK-Ah(※)を多く含むが、暗く濁っている。遺物包含層。
III' 層	明黄褐色土	10YR6/8	二次堆積したK-Ah(※)を多く含むが、暗く濁っている。遺物包含層。III層よりも純度が高い。
III a 層			共に色調はIII'層に近く、III層とIV層の混合土。風倒木や窪地・流路と考えられる箇所がある。
III b 層			
IV 層	黒褐色土	10YR3/1	直径1cm程度の明黄褐色岩片(尾鈴山溶結凝灰岩)を含む。縄文時代早期相当か。
IV' 層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	色調はIV層に近いが、やや二次堆積K-Ah(※)を含み、岩片の混じりが少ない。
V 層	黒褐色土	10YR3/2	直径5cm程度以下の明黄褐色岩片(尾鈴山溶結凝灰岩)を多量に含む。10cm大程度の礫も含む。
VI 層	にぶい黄褐色土	10YR5/3	直径5mm以下の白色、黄褐色岩片(尾鈴山溶結凝灰岩)か、微細な砂粒を多く含む。砂質が強い。水の影響によるものか。
VI' 層	にぶい黄褐色土	10YR7/3	直径5mm以下の白色、黄褐色岩片(尾鈴山溶結凝灰岩)か、微細な砂粒を多く含む。砂質が強い。水の影響によるものか。
VII 層	にぶい黄褐色土	10YR6/3	直径2mm以下の白色、黄褐色岩片(尾鈴山溶結凝灰岩)をわずかに含む。やや砂質味を帯びるが、キメが細かくシルト質。
VIII 層	灰黄褐色土	10YR5/2	微細白色岩片をわずかに含む。VII層よりもさらにキメ細かく、シルト質。水性堆積か。
IX 層	にぶい黄褐色土	10YR7/2	直径5cm大程度の白色礫(尾鈴山溶結凝灰岩)を多く含む砂質土。岩盤層。

※ K-Ah…鬼界アカホヤ火山灰

第 61 図 岡遺跡第 15 次調査区 Tr1 (北壁面)・Tr2 (東壁面) 土層断面図

第2節 縄文時代の遺構と遺物

2-1. 縄文時代の遺構

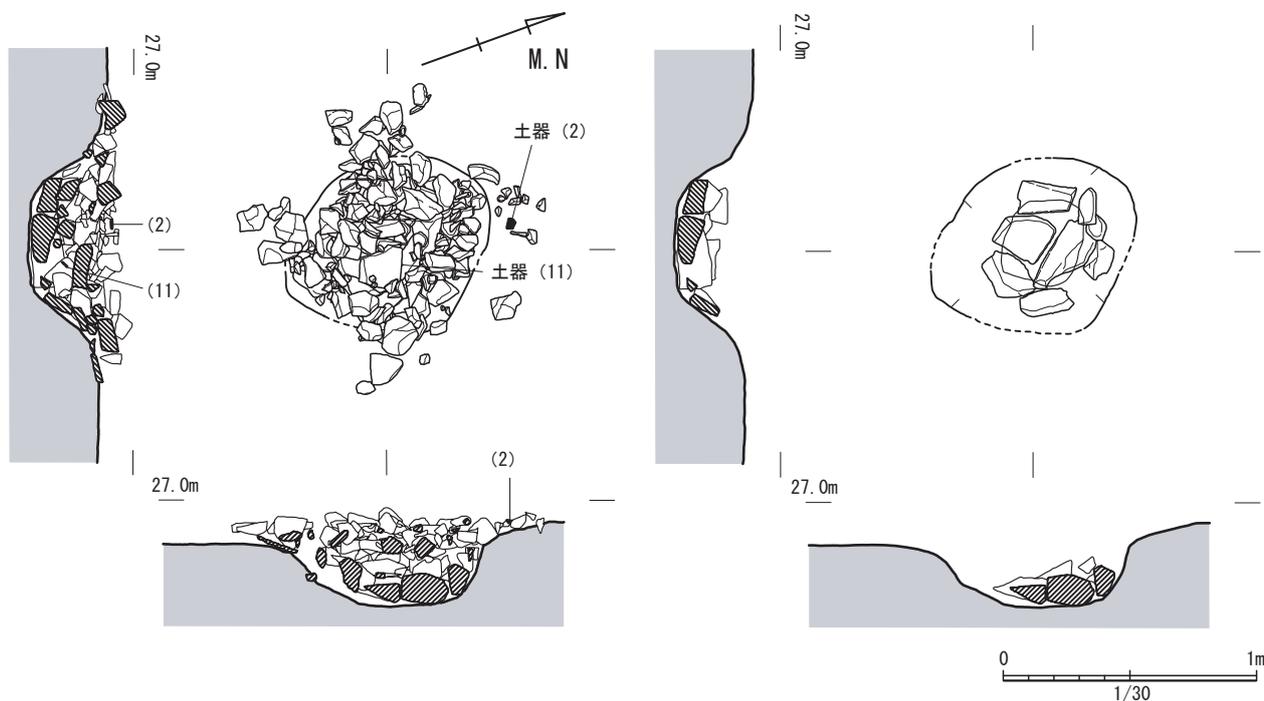
(1) SI1 (1号集石遺構) (第62・63図)

SI1は、IV層から検出されており、遺構検出面から楕円押型文土器(2)が1点、埋土中から貝殻条痕文土器(11)が1点出土した。

SI1は、直径約120cmの範囲で礫が見られ、掘り込みを有していた。掘り込みは、長軸約100cm、短軸約80cm、深さ約30cmの規模で、楕円形を呈していた。

構成礫は全て尾鈴山溶結凝灰岩で、密度は薄かった。各礫は接合を行い、総個数203個、総重量89,300gであった。重量は全体の約80%が500g以下で、うち約60%は100g以下であった。最大のものでは8,000gを超えるものがあった。円磨度は全体の約70%が破碎礫であった。赤化度は全体の約70%が赤化しており、うち約40%が強く赤化していた。

配石は10個程度で構成されていた。礫の大きさは約10~40cmで、重量は約500~8,000gであった。



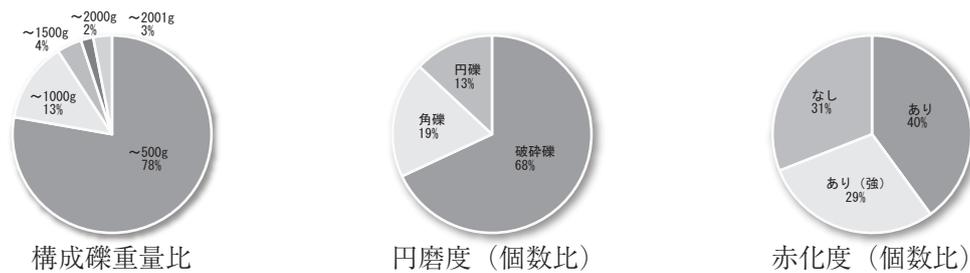
第62図 岡遺跡第15次調査区 SI1実測図



SI1 検出状況 (北西から)



SI1 配石検出状況 (南西から)



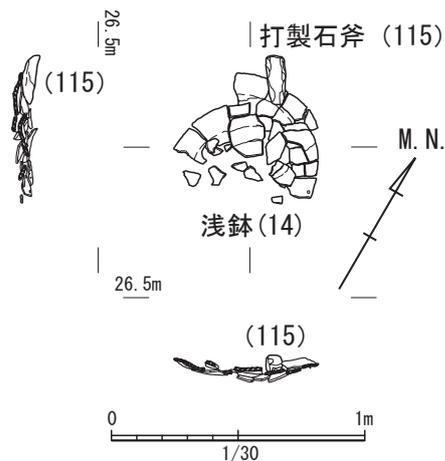
第 63 図 岡遺跡第 15 次調査区 SI1 構成礫データ

(2) その他 (第 64 図)

調査区北東部のⅢ層上面で、同一個体の土器片が数点出土した。掘削を進めていくと、さらに口縁部や胴部から底部にかけて組織痕のある土器片が、集中して出土した。すぐそばに重なるように、長さ約 20cm の尾鈴山溶結凝灰岩製打製石斧が出土していたこともあり、サブトレンチを設定し調査を進めていったが、明確な掘込等は確認されな

かった。

これらの土器片を接合した結果、直径約 45cm、高さ約 20cm の浅鉢 (14) になった。口縁部付近には突帯文と直径約 1 cm の穿孔が 2 つ、胴部の中央部から底部にかけて組織痕がある。土器片から、土器製作は、組織痕がある箇所は型に貼り付け、その上部は粘土紐によるものであることが分かった。



浅鉢 (14) 接合前展開写真

(口縁部と組織痕のある胴部は、その境で割れているのが観察できる)

第 64 図 岡遺跡第 15 次調査区 組織痕土器・打製石斧出土状況実測図



組織痕土器・打製石斧出土状況 (上) (南から)



組織痕土器・打製石斧出土状況 (下) (東から)

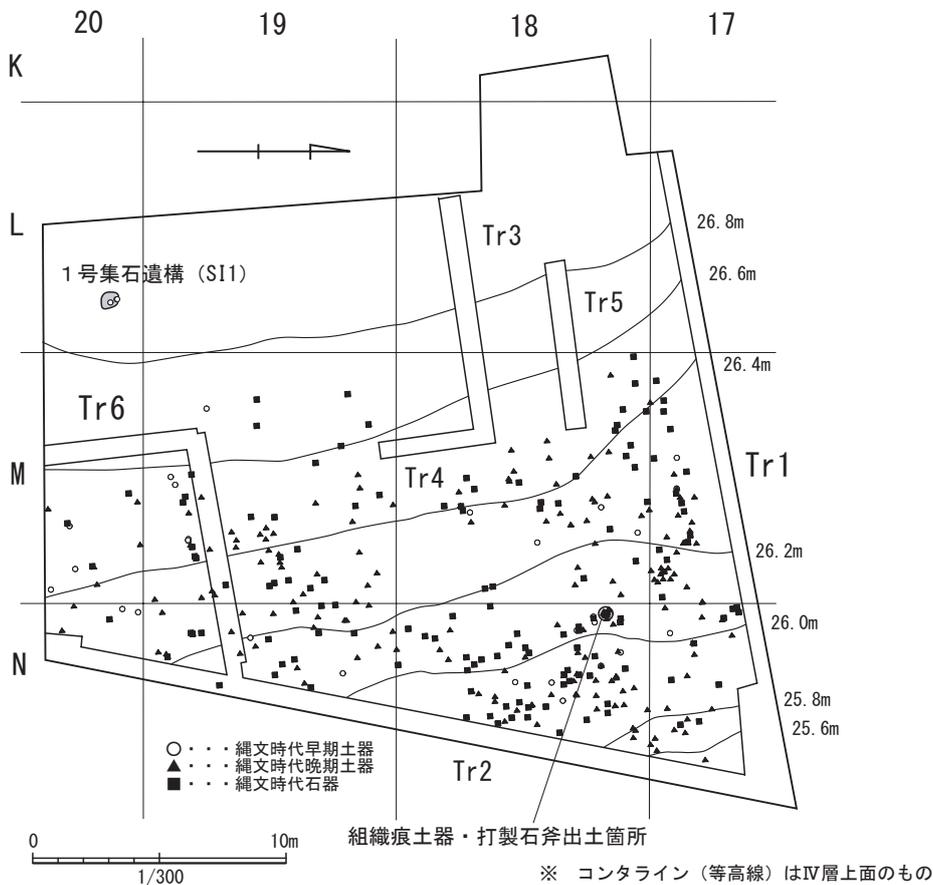
2-2. 縄文時代の遺物

(1) 縄文時代早期の土器 (第 65・66 図 1～13)
 押型文土器 (第 66 図 1～8)

1は深鉢の口縁部である。口唇部に丁寧なナデ調整が見られる。外面は風化気味で、5 mm 程度の縦長のネガ楕円押型文が施されている。内面上部はナデ調整の後、下から上に向けて縦方向の貝殻条痕文が見られ、下部は8 mm 程度の横長のネガ楕円押型文を施した後、貝殻条痕文が見られる。2は深鉢の口縁部である。1号集石遺構のすぐ傍で出土した。外面にネガ楕円押型文がある。内外ともに風化気味である。口唇部にナデ調整が見られる。3は深鉢の胴部である。外面に5 mm 程度の横長のネガ楕円押型文が施されている。4は深鉢の胴部である。外面上部に、8 mm 程度の円形に近いネガ楕円押型文が施され、下部にも一部見られる。内面上部は粗いナデ調整が見られる。5は深鉢の胴部である。接合はできなかったが、4と同一個体と考えられる。外面に一部、8 mm 程度の円形に近いネガ楕円押型文が施されている。

内面は特にひび割れが激しい。6は深鉢の胴部である。外面に5 mm 程度の横長のネガ楕円押型文が施されているが、下部は風化が著しい。内面下部に横方向のナデ調整が見られる。7は深鉢の口縁部である。全体的にかなり風化が著しい。外面上部に一部、山形押型文が施されているのが見える。口縁端部から約4 cm のところに、直径1.5cm の両側穿孔がある。8は深鉢の胴部である。外面の風化が著しい。山形押型文が施されている。
貝殻文土器 (第 66 図 9～13)

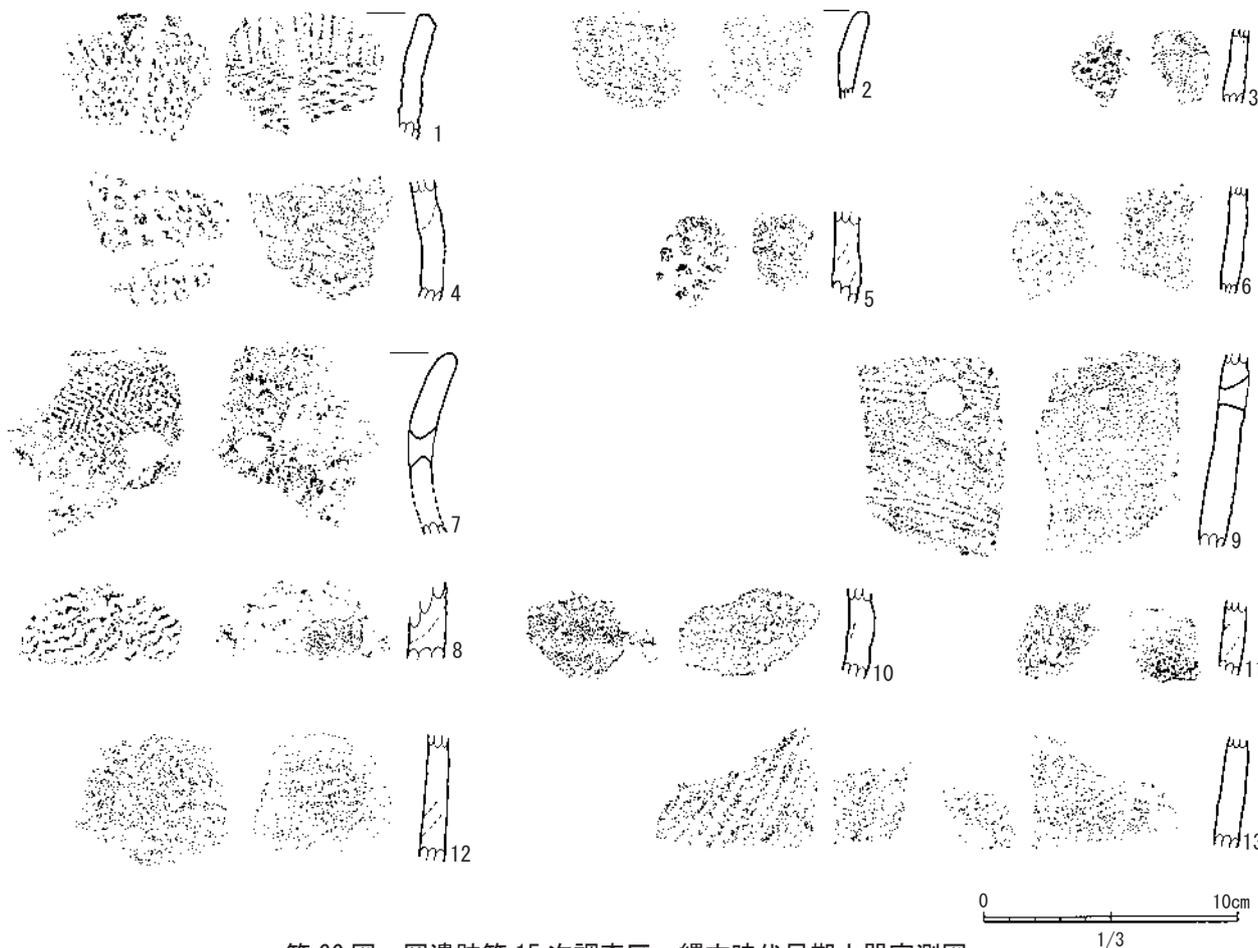
9は深鉢の口縁部付近である。最上部から約1.5cm のところに、直径外面約1.5cm、内面約0.5cm の片側穿孔がある。10は深鉢の胴部である。外面上部に刺突文帯をもつ。内面には、口縁端部から約2 cm のところに、直径5 mm 程度の石が剥がれたと思われる痕跡がある。11は深鉢の胴部である。SI1 の埋土中から出土した。外面は風化気味である。12は深鉢の胴部である。外面は、風化が著しいため調整は不明であるが、全体に幾何学状沈線文が施されている。内面上部は横方向の



第 65 図 岡遺跡第 15 次調査区 縄文時代遺物分布図

粗いナデ調整、下部は斜方向の粗いナデ調整が見られる。13は深鉢の胴部である。外面は風化が著しいため調整は不明であるが、幅2mm程度の沈線文が施されている。内面下部は粗いナデ調整が

見られる。12・13は胴部のごく一部しか残存していないが、文様等から塞ノ神式土器の可能性が考えられる。



第 66 図 岡遺跡第 15 次調査区 縄文時代早期土器実測図

第 22 表 岡遺跡第 15 次調査区 縄文時代早期土器観察表

No.	出土地点・取上番号	器種	部位	法量 (cm)			手法・調整等		色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
1	N18IV420	深鉢	口縁部	(21.0)	-	-	楕円押型文	ナデ、縦方向の貝殻条痕文と楕円押型文の後、貝殻条痕文	にぶい赤褐色 5YR4/4	明赤褐色 5YR5/6	2mm以下の白・黄・茶色の粒を少し含む。	貝殻条痕文、楕円押型文
2	II	深鉢	口縁部	(14.3)	-	-	工具ナデの後、楕円押型文	ほぼ剥離しているため不明	明黄褐色 10YR6/6	明黄褐色 10YR6/6	4mm以下の灰色の粒をわずかに含む。2mm以下の透明光沢の粒をわずかに含む。	楕円押型文
3	M18III374	深鉢	胴部	-	-	-	楕円押型文	ナデ	橙色 5YR6/6	にぶい褐色 7.5YR5/4	3mm以下の白・黒・茶色の粒を含む。	楕円押型文
4	M20IV405	深鉢	胴部	-	-	-	楕円押型文	横方向の工具ナデの後、粗いナデ	にぶい黄褐色 10YR7/4	にぶい黄褐色 10YR7/4	6mm以下の白色の粒を含む。	楕円押型文
5	II	深鉢	胴部	-	-	-	楕円押型文	ナデ	にぶい黄褐色 10YR7/4	淡黄褐色 10YR8/4	4mm以下の白・灰色の粒を多く含む。	楕円押型文
6	II	深鉢	胴部	-	-	-	楕円押型文	風化が著しいため不明	明黄褐色 10YR7/6	にぶい黄褐色 10YR5/4	1mm以下の白色の粒を多く含む。1mm以下の黒色鏡光沢で角錐状の粒を含む。	楕円押型文
7	II	深鉢	口縁部	(23.6)	-	-	山形押型文	風化が著しいため不明	にぶい黄褐色 10YR6/3	にぶい黄褐色 10YR6/3	5mm以下の白色の粒を少し含む。	山形押型文、穿孔
8	M18III355	深鉢	胴部	-	-	-	山形押型文	ナデ	橙色 5YR6/8	にぶい黄褐色 10YR7/4	6mm以下の白・黒色の粒を含む。1mm以下の黒色の光沢の粒を含む。	山形押型文
9	M18III172	深鉢	口縁部付近	-	-	-	横・斜方向の貝殻条痕文の後、斜方向の工具ナデ	横方向の工具ナデの後、丁寧なナデ	橙色 7.5YR6/6	明黄褐色 10YR6/6	2mm以下の白色の粒を含む。2mm以下の透明光沢の粒をわずかに含む。	貝殻条痕文、穿孔
10	N18III210	深鉢	胴部	-	-	-	斜めの刺突文と横方向の貝殻条痕文の後、多方向のナデ	横・斜方向の貝殻条痕文の後、粗いナデ	明赤褐色 5YR5/6	明黄褐色 10YR7/6	4mm以下の白・灰・黒・茶色の粒を多く含む。2mm以下の黒色鏡光沢、無色透明の粒を多く含む。	刺突文、貝殻条痕文
11	SI1	深鉢	胴部	-	-	-	横方向の貝殻条痕文の後、粗いナデ	風化が著しいため不明	橙色 5YR6/8	にぶい黄褐色 10YR6/3	4mm以下の白・灰色の粒を含む。1mm以下の黒色鏡光沢、鈍光沢の粒を多く含む。	貝殻条痕文
12	M20IV305	深鉢	胴部	-	-	-	貝殻条痕文	斜方向の貝殻条痕文の後、横・斜方向の粗いナデ	明赤褐色 5YR5/6	橙色 5YR6/6	1mm未満の白色、無色透明な光沢の粒を多く含む。	貝殻条痕文、塞ノ神式か
13	N18III344・II	深鉢	胴部	-	-	-	斜方向の貝殻条痕文	斜方向の貝殻条痕文の後、同方向のナデ	にぶい褐色 7.5YR5/4	橙色 7.5YR6/6	1mm未満の白色の粒を多く含む。1mm以下の無色透明の粒を含む。	貝殻条痕文、塞ノ神式か

※ 法量の () は推定

(2) 縄文時代晩期の土器 (第 65・67・68 図 14 ~ 51)
突帯文土器 (第 67 図 14 ~ 24)

14 は浅鉢である。口縁部が約 90% 残存しており、口縁端部から約 4 cm のところに貼付突帯文を巡らせている。口縁部は外反している。口縁部から胴部にかけて煤が付着しており、斜方向の貝殻条痕文や、横方向の工具ナデ調整が見られる。胴部から底部にかけて繊維による組織痕が見られる。底部付近では、多方向の丁寧な工具ナデ調整が行われており、組織痕が消されている。内面はナデ調整や貝殻条痕文を施した後に、工具ナデ調整が見られる。特に下部は丁寧な工具ナデ調整が行われ、貝殻条痕文が消されている。突帯文が貼り付けてあるところに直径約 2 cm の穿孔が 2 つある。底部は型に貼り付け、組織痕の上部から粘土紐による製作に変わる。15 は深鉢の口縁部から胴部である。口縁端部から約 2 cm のところに突帯文があり、肥厚口縁になっている。胴部には煤が付着している。底部に近い部分は斜めに、胴部から口縁部にかけては垂直に立ち上がる。外面上部は横方向、中部は横・斜方向、下部は縦方向の貝殻条痕文が施されている。内面全体は、横方向の貝殻条痕文が施されている。16 は深鉢の口縁部である。口縁端部から約 2.5cm のところに貼付突帯文がある。口縁部が外反しており、口唇部にナデ調整が見られる。17 は深鉢の口縁部付近である。口唇部が欠損している。外面上部に貼付突帯文があり、煤が付着している。18 は深鉢の口縁部である。口縁端部から約 1.5cm のところに貼付突帯文がある。口縁部が外反しており、口唇部に横方向のナデ調整が見られる。外面全体に横方向の貝殻条痕文が施されている。全体的に煤が付着しており、口縁部に幅約 1 cm の半円形の穿孔らしきものが見られる。19 は鉢の口縁部である。口縁端部から約 3 cm のところに貼付突帯文がある。口縁部が外反しており、口唇部に沿って貝殻条痕文を施した後、ナデ調整が見られる。外面上部、突帯文より上の部分に、斜方向の貝殻押圧文が見られる。突帯文より下の部分に、横・斜方向の貝殻条痕文が施されている。内面全体に、横・斜方向の貝殻条痕文が施されている。外面上部と突帯文下に煤が付着している。20 は深鉢の口縁部である。口縁端部から約 1.5cm のところに突帯文があり、肥厚口縁になっている。口縁部が外反していて、指押

さえの痕があり、口唇部に横方向のナデ調整が見られ、煤が付着している。21 は、深鉢の口縁部から胴部である。口縁端部から約 2 cm のところに貼付突帯文がある。口縁部が外反しており、口唇部に横方向のナデ調整が見られる。外面全体に、横・斜方向の貝殻条痕文が施されている。口唇部から外面上部にかけて、煤が付着している。22 は深鉢の口縁部から胴部である。口縁端部から約 3 cm のところに貼付突帯文がある。波状口縁で、口唇部に横方向のナデ調整が見られる。外面上部や口唇部、内面全体に煤が付着している。23 は深鉢の口縁部から胴部である。口縁端部から約 2 cm のところに貼付突帯文がある。口縁部が外反しており、外面上部や口唇部、内面上部に煤が付着している。24 は深鉢の口縁部から胴部である。口縁端部から約 2 cm のところに突帯文があり、肥厚口縁になっている。口縁部が外反しており、口唇部に横方向のナデ調整が見られる。外面全体に横方向の貝殻条痕文が施されている。

孔列文土器 (第 68 図 25 ~ 27)

25 は深鉢の口縁部である。口縁端部から約 1.5cm のところに貼付突帯文がある。突帯文の下部に、直径約 5 mm の未貫通の孔が 2 つあるが、口唇部に対して平行ではない。孔の間隔は約 2 cm である。口縁部は外反しており、口唇部に沿って貝殻条痕文が施された後、ナデ調整が見られる。外面上部と下部、内面全体に横方向の貝殻条痕文が施されている。26 は鉢の口縁部である。口縁端部から約 1.5cm のところに貼付突帯文がある。突帯文は下部が欠損しているが、1 cm 以上の厚みがあり、段をつけ、貝殻条痕文を施した後、ナデ調整が見られる。突帯文の下部に、直径約 3 mm の未貫通の孔が 2 つあるが、口唇部に対して平行ではない。孔の間隔は約 1 cm である。口唇部は、波状にも見える。口唇部に沿って貝殻条痕文を施した後、ナデ調整が見られる。外面上部、内面全体に横方向の貝殻条痕文が施されている。27 は深鉢の口縁部である。口縁端部から約 1.5cm のところに、直径約 4 mm の未貫通の孔が 4 つ、口唇部に対してほぼ平行に並んでいる。それぞれの間隔は約 1 cm である。口縁部は外反しており、口唇部に沿って貝殻条痕文が施された後、ナデ調整が見られる。外面上部は横方向、それに対して下部は、縦方向の貝殻条痕文を施している。内面に横方向の

貝殻条痕文が施されている。外面全体に煤が付着している。

精製土器（第 68 図 28～31）

28 は浅鉢の口縁部から胴部である。口縁部が外反しており、玉縁状口縁になっている。外面全体にミガキ、内面全体に工具ナデ調整が見られる。口縁端部から約 2 cm のところに未貫通、約 7.5cm のところに貫通した直径約 5 mm の穿孔が縦に並んである。外面頸部の段の上部と内面全体に、煤を付けて磨きをかけている（黒色磨研）。29 は鉢の口縁部である。口縁部が外反している。外面・内面全体ともに工具ナデ調整が行われ、一部ハケ目が見られる。30 は浅鉢の口縁部である。頸部は外曲し、口唇部が外反する。外面・内面全体ともに工具ナデ調整の後、ミガキが見られる。口唇部に煤が付着している。31 は浅鉢の口縁部である。口縁部が外反しており、内面の最上部から約 1 cm のところに沈線を入れ、玉縁状口縁に近い形状にしている。口唇部に横方向のナデ調整が見られる。外面全体に、工具ナデ調整の後ミガキ、内面全体に工具ナデ調整が見られる。外面に約 1 cm 間隔の粘土紐痕が見られ、一部、煤が付着している。

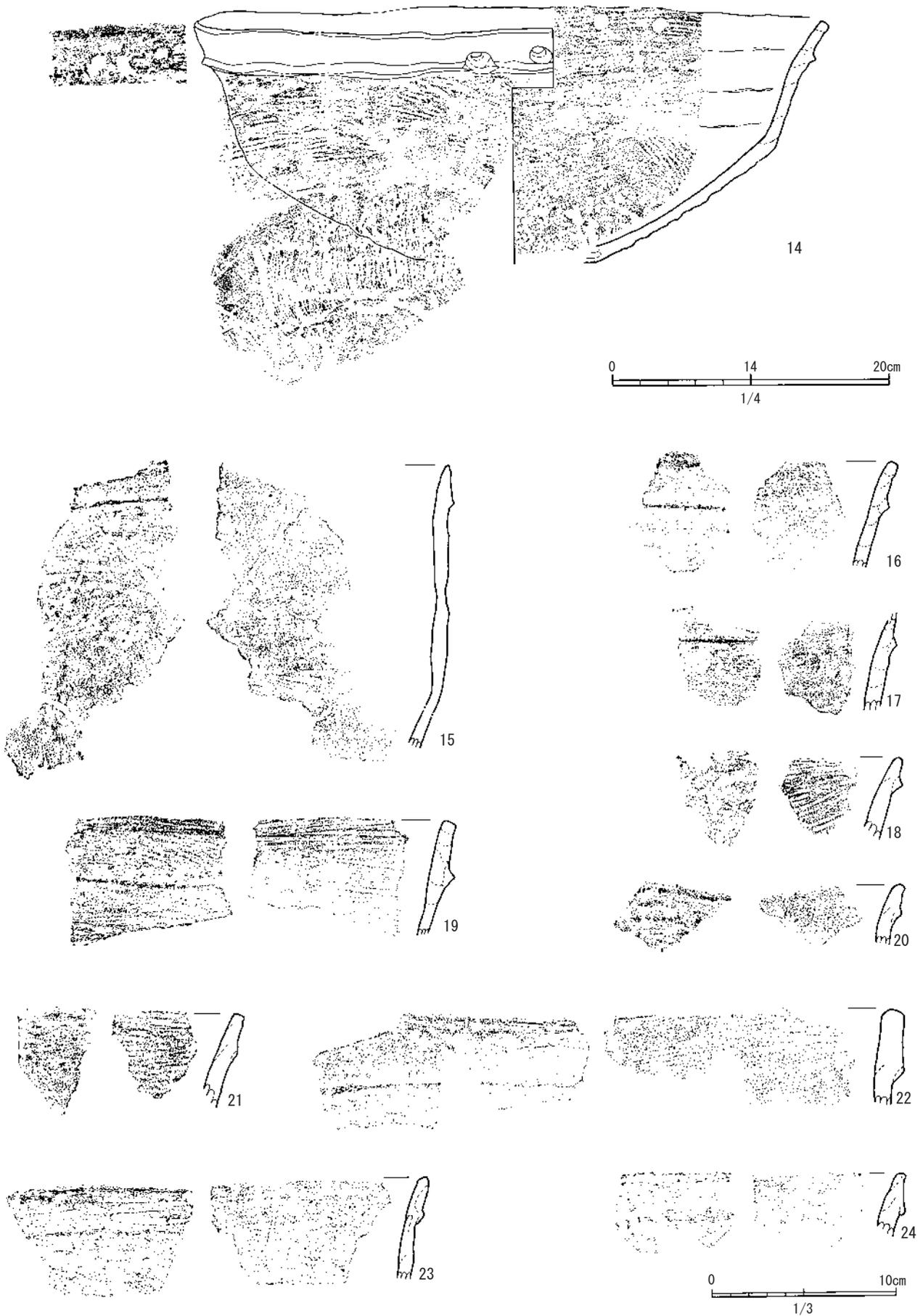
貝殻文土器（第 68 図 34～44・48）

34 は浅鉢の口縁部である。口縁部が外反しており、口唇部にナデ調整が見られる。外面全体に横方向の貝殻条痕文が施され、一部、斜方向の貝殻押圧文が見られる。内面全体に横方向の貝殻条痕文が施されている。外面のほぼ全体と内面上部に煤の付着が見られる。35 は鉢の口縁部である。口縁部が外反しており、それに沿って貝殻条痕文を施した後、工具ナデ調整が見られる。外面・内面全体に横方向の貝殻条痕文が施されている。外面ほぼ全体と内面右上に煤の付着が見られる。36 は鉢の口縁部である。口縁部が外反しており、口唇部には、ナデ調整の後に、縦方向に数 mm 間隔で刻目が入っている。口縁端部から約 5 mm のところに口唇部に平行な幅約 2 mm の沈線が施されている。その下に斜方向の貝殻条痕文が施され、右上には交差するように施されているものがある。37 は鉢の胴部である。外面に横・斜方向の貝殻条痕文が施されている。38 は鉢の胴部である。外面・内面全体ともに横方向の貝殻条痕文が施されている。内面は風化気味である。39 は

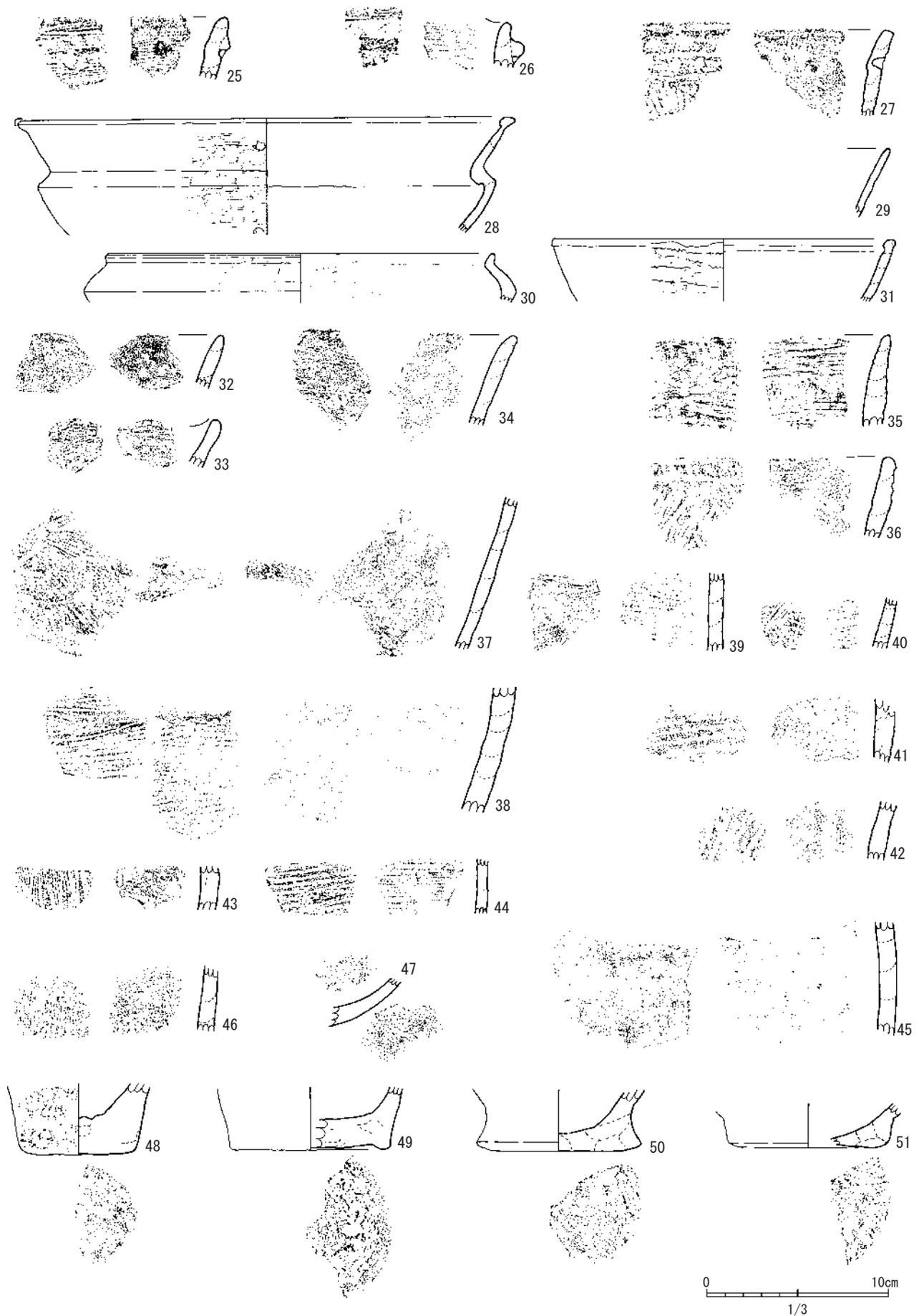
鉢の胴部である。外面全体に横・斜方向、内面全体に横方向の貝殻条痕文が施されている。内面全体に煤が付着している。40 は鉢の胴部である。外面全体に交差するような斜方向、内面全体に横・斜方向の貝殻条痕文が施されている。41 は深鉢の胴部である。外面に貝殻腹縁押引文が施されている。内面全体に煤が付着している。42 は深鉢の胴部である。若干外反している。外面に貝殻腹縁押引文が施されており、内面上部に指押さえの痕が見られる。43 は深鉢の胴部である。外面全体に縦方向、内面全体に斜方向の貝殻条痕文が施されている。44 は鉢の胴部である。外面・内面全体ともに横方向の貝殻条痕文が施されている。48 は鉢の底部で、平底である。若干外反しながら立ち上がる。外面に横・斜方向の貝殻条痕文が施されている。また、不規則な沈線文や刺突文が施されている。内面は工具ナデ調整の後、指押さえの痕が見られる。

その他の土器（第 68 図 32・33・45～47・49～51）

32 は浅鉢の口縁部である。口縁部が外反しており、口唇部にナデ調整が見られる。33 は浅鉢の口縁部である。口縁部が外反しており、波状口縁部になっている。口唇部に丁寧なナデ調整が見られる。外面全体及び内面の上部に煤の付着が見られる。45 は鉢の胴部である。無文土器と考えられる。46 は鉢の底部付近である。外面に繊維による組織痕が見られる。47 は鉢の底部付近である。外面・内面全体ともに工具ナデ調整が見られる。49 は鉢の底部で、上底になっていて、凹凸がある。若干外反しながら立ち上がる。外面は横・斜方向、内面は横方向の工具ナデ調整が見られる。内面はさらに、指押さえ痕が見られる。50 は鉢の底部で、平底である。底部から内曲し、約 2 cm のところから外反する。外面上部は、横方向後、縦方向の工具ナデ調整、外面下部は、横方向の工具ナデ調整の後、丁寧なナデ調整が見られる。内面は、斜方向の工具ナデの後、指押さえの痕が見られる。底面に工具ナデ調整の後、丁寧なナデ調整が見られる。内面全体に煤が付着している。51 は鉢の底部で、平底になっていて、凹凸がある。ほぼ垂直に立ち上がり、約 1.5cm のところから外反する。外面・内面全体ともに横方向の工具ナデ調整が見られる。底面に工具ナデ調整の後、ナデ調整が見られる。



第 67 図 岡遺跡第 15 次調査区 縄文時代晩期土器実測図 (1)



第 68 図 岡遺跡第 15 次調査区 縄文時代晩期土器実測図 (2)

第23表 岡遺跡第15次調査区 縄文時代晩期土器観察表

No.	出土地点・取上番号	器種	部位	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
14	トキ1-9-N18Ⅲ 35-39-40-45- 112-113-392	浅鉢	口縁～ 底部付近	45.2	-	-	ナデ、横・斜方向の貝殻条痕文 の後、横方向の工具ナデ	ナデ、横方向の貝殻条痕文の 後、同方向の工具ナデ	明褐色 7.5YR5/6	明褐色 7.5YR5/6	3mm以下の白・黄・灰・茶色の粒を含む。	突帯文、貝殻 条痕文、組織 痕、穿孔
15	M18Ⅲ7 218-219-220	深鉢	口縁～胴部	-	-	-	多方向の貝殻条痕文の後、粗い ナデ	横方向の貝殻条痕文の後、一部 丁寧なナデ	橙色 5YR6/6	にぶい赤褐色 5YR5/4	2mm以下の白・黒・茶色の粒を多く含む。	突帯文、貝殻 条痕文
16	Ⅱ	深鉢	口縁部	(24.4)	-	-	ナデ、横方向の工具ナデの後、 ナデ	ナデ、横方向の工具ナデの後、 ナデ	にぶい褐色 7.5YR5/4	にぶい黄褐色 10YR6/4	1mm以下の黒・白・透明光沢の粒を含む。3 mm以下の白色の粒をわずかに含む。	突帯文
17	N18Ⅲ284	深鉢	口縁部付近	(21.0)	-	-	ナデ、横方向の工具ナデの後、 ナデ	ナデ、横方向の工具ナデの後、 ナデ	にぶい褐色 7.5YR5/3	黒褐色 7.5YR3/1	2mm以下の白・黒色、透明光沢の粒をわずかに 含む。3mm以下の黒・黄色の粒をわずかに含む。	突帯文
18	M18Ⅲ28	深鉢	口縁部	-	-	-	横方向の貝殻条痕文の後、同方 向のナデ	横・斜方向の工具ナデの後、横 方向のナデ	浅黄色 2.5Y7/3	黒褐色 2.5Y3/1	2mm以下の白・灰・黒色の粒を含む。1mm以下 の無色透明・黒色光沢の粒を多く含む。	突帯文、貝殻 条痕文
19	Ⅱ	鉢	口縁部	(31.4)	-	-	ナデ、横・斜方向の貝殻条痕文 の後、工具ナデ	横・斜方向の貝殻条痕文の後、 ナデ	橙色 5YR6/6	褐色 5YR6/6	2mm以下の黒・赤・白色の粒を含む。1mm以下 の透明・黒色光沢の粒を含む。	突帯文、貝殻 条痕文、貝殻 押圧文
20	Ⅱ	深鉢	口縁部	-	-	-	横方向の工具ナデの後、ナデ	横・斜方向の工具ナデの後、横 方向のナデ	にぶい黄褐色 10YR7/4	明黄褐色 10YR7/6	4mm以下の白・茶色の粒を多く含む。2mm以下 の黒色光沢・無色透明の粒を多く含む。	突帯文
21	Ⅱ	深鉢	口縁～胴部	-	-	-	横・斜方向の貝殻条痕文の後、 粗いナデ	横方向の深めの工具ナデの後、 ナデ	褐色 7.5YR6/6	にぶい黄褐色 10YR6/4	2mm以下の白・茶色の粒を含む。2mm以下の 無色透明の粒を多く含む。	突帯文、貝殻 条痕文
22	ET(Tr2)	深鉢	口縁～胴部	-	-	-	横・斜方向の工具ナデの後、丁 寧なナデ	横・斜方向の工具ナデの後、丁 寧なナデ	にぶい黄褐色 10YR7/4	暗灰黄色 2.5Y5/2	3mm以下の白・茶色の粒を多く含む。黒色光沢 の粒を多く含む。	突帯文、波状 口縁
23	M18Ⅲ20	深鉢	口縁～胴部	-	-	-	横方向の強い工具ナデの後、粗 いナデ	横方向の工具ナデの後、同方向 の粗いナデ	明黄褐色 10YR7/6	にぶい黄褐色 10YR6/4	5mm以下の白・灰・黒・茶色の粒を多く含む。1 mm以下の無色透明・黒色光沢の粒を少し含む。	突帯文
24	N18Ⅲ66+Ⅱ	深鉢	口縁～胴部	-	-	-	横方向の貝殻条痕文の後、同方 向の粗いナデ	横方向の工具ナデの後、同方向 のナデ	明赤褐色 5YR5/6	にぶい黄褐色 10YR6/4	2mm以下の白・茶色の粒を含む。1mm未満の 無色透明の粒を含む。	突帯文、貝殻 条痕文
25	Ⅱ	深鉢	口縁部	(19.8)	-	-	横方向の貝殻条痕文の後、同方 向の工具ナデ	横方向の貝殻条痕文の後、同方 向の工具ナデ	にぶい赤褐色 5YR5/4	明赤褐色 5YR5/6	3mm以下の白・黄色の粒を多く含む。	突帯文、孔列 文、貝殻条痕 文
26	N19Ⅲ186	鉢	口縁部	(23.8)	-	-	横方向の貝殻条痕文の後、ナデ	ナデ、横方向の貝殻条痕文の 後、ナデ	にぶい黄褐色 10YR5/3	にぶい黄褐色 10YR5/3	2mm以下の白・黄・透明・黒色光沢の粒を含 む。	突帯文、孔列 文、貝殻条痕 文
27	Ⅱ	深鉢	口縁部	(23.6)	-	-	縦・横方向の貝殻条痕文、工具 ナデの後、ナデ	横方向の貝殻条痕文の後、同方 向の工具ナデ	にぶい黄褐色 10YR5/3	にぶい黄褐色 10YR6/4	2mm以下の白色の粒をわずかに含む。	孔列文、貝殻 条痕文
28	N18Ⅲ141	浅鉢	口縁～胴部	(26.4)	-	-	ナデの後、横方向のミガキ	ナデ、横方向の工具ナデの後、 ナデ	褐灰 7.5YR4/1	橙 7.5YR6/6	2mm以下の灰色、黒色光沢の粒を含む。	精製土器、穿 孔
29	Ⅱ	鉢	口縁部	-	-	-	横方向の工具ナデの後、ナデ。 一部ハケ目	横方向の工具ナデの後、ナデ。 一部ハケ目	にぶい黄褐色 10YR6/4	浅黄色 2.5Y7/3	微細な白色、無色透明・黒色光沢の粒を含む。	精製土器
30	Ⅱ	浅鉢	口縁部	(21.1)	-	-	横方向の工具ナデの後、同方向 のミガキ	横方向の深めの工具ナデの後、 同方向のミガキ	にぶい黄褐色 10YR7/4	浅黄色 2.5Y7/3	微細な白・茶・黒色、無色透明の粒を含む。	精製土器
31	Ⅱ	浅鉢	口縁部	(18.7)	-	-	横・斜方向の工具ナデの後、斜 方向のミガキ	横・斜方向の工具ナデの後、横 方向のナデ	にぶい黄褐色 10YR6/4	浅黄色 10YR8/4	微細な白色の粒を少し含む。微細な無色透明 の粒を多く含む。	精製土器、粘 土組織
32	Ⅱ	浅鉢	口縁部	(22.4)	-	-	斜方向の工具ナデの後、ナデ	横方向の工具ナデの後、ナデ	にぶい黄褐色 10YR7/4	にぶい黄褐色 10YR7/4	2mm以下の白・黄・茶色の粒を含む。	-
33	Ⅱ	浅鉢	口縁部	(19.8)	-	-	横方向の工具ナデの後、ナデ	工具ナデの後、丁寧なナデ	黒褐色 7.5YR3/1	にぶい褐色 7.5YR5/4	2mm以下の白・黄・茶色の粒を少し含む。	波状口縁
34	Ⅱ	浅鉢	口縁部	(31.2)	-	-	貝殻押圧文の後、横方向の工具 ナデ	貝殻条痕文の後、工具ナデ	灰黄褐色 10YR4/2	にぶい黄褐色 10YR6/4	2mm以下の白色の粒を含む。	貝殻条痕文、 貝殻押圧文
35	Ⅱ	鉢	口縁部	(27.2)	-	-	横方向の貝殻条痕文の後、横・ 斜方向の粗い工具ナデ	横方向の貝殻条痕文の後、同方 向の工具ナデ	にぶい黄褐色 10YR6/3	にぶい黄褐色 10YR6/3	2mm以下の透明光沢の粒をわずかに含む。4 mm以下の灰・白・黄色の粒を含む。	貝殻条痕文
36	M20Ⅲ96	鉢	口縁部	(26.0)	-	-	工具ナデ、斜方向に貝殻条痕文 の後、ナデ	ナデの後、横・斜方向の工具ナ デ	にぶい黄褐色 10YR7/4	にぶい黄褐色 10YR7/4	3mm以下の茶・白色の粒を含む。	貝殻条痕文
37	Ⅱ	鉢	胴部	-	-	-	ナデ、斜方向の貝殻条痕文の 後、横・斜方向の工具ナデ	横・斜方向の工具ナデの後、丁 寧なナデ	にぶい褐色 7.5YR5/3	褐灰色 10YR5/1	3mm以下の白・黄・灰色の粒を含む。	貝殻条痕文
38	Ⅱ	鉢	胴部	-	-	-	ナデ、横方向の貝殻条痕文の 後、同方向の工具ナデ	ナデ、横方向の貝殻条痕文の 後、同方向の工具ナデ	にぶい黄褐色 10YR5/3	にぶい黄褐色 10YR6/4	3mm以下の灰・白色の粒を含む。2mm以下の 透明・黒色光沢の粒をわずかに含む。	貝殻条痕文
39	Ⅱ	鉢	胴部	-	-	-	ナデ、横・斜方向の貝殻条痕文 の後、横方向の工具ナデ	ナデ、横方向の貝殻条痕文の 後、同方向の工具ナデ	にぶい黄褐色 10YR7/4	褐灰色 10YR5/1	2mm以下の白・灰・茶色、透明・黒色光沢の粒 を含む。	貝殻条痕文
40	Ⅱ	鉢	胴部	-	-	-	ナデ、斜方向の貝殻条痕文の 後、ナデ	ナデ、横・斜方向の貝殻条痕文 の後、ナデ	にぶい褐色 7.5YR5/4	にぶい黄褐色 10YR5/3	2mm以下の白・灰色の粒を含む。	貝殻条痕文
41	Ⅱ	深鉢	胴部	-	-	-	横方向の貝殻条痕文の後、ナデ	ナデ	にぶい黄褐色 10YR6/4	にぶい黄褐色 10YR7/4	2mm以下の白・茶色の粒を含む。1mm以下の 黒色光沢・無色透明の粒を多く含む。	貝殻条痕文
42	Ⅱ	深鉢	胴部	-	-	-	斜方向の貝殻条痕文の後、ナデ	ナデ	浅黄色 2.5Y7/4	にぶい黄褐色 10YR6/4	3mm以下の白・茶色の粒を含む。1mm以下の 無色透明の粒を含む。	貝殻条痕文
43	L20Ⅲ130	深鉢	胴部	-	-	-	縦方向の貝殻条痕文の後、同方 向の工具ナデ	斜方向の貝殻条痕文の後、同方 向のナデ	にぶい黄褐色 10YR7/4	にぶい黄褐色 10YR5/3	1mm以下の白・茶色、黒色光沢、無色透明の 粒を含む。	貝殻条痕文
44	Ⅱ	鉢	胴部	-	-	-	ナデ、横方向の貝殻条痕文の 後、同方向の工具ナデ	ナデ、横方向の貝殻条痕文の 後、同方向の工具ナデ	にぶい褐色 7.5YR7/4	にぶい黄褐色 10YR6/4	3mm以下の白・灰色の粒を含む。	貝殻条痕文
45	ET(Tr2)	鉢	胴部	-	-	-	ナデ、横・斜方向の工具ナデの後、 丁寧なナデ	ナデ、横・斜方向の工具ナデの 後、丁寧なナデ	にぶい赤褐色 5YR5/4	黒褐色 5YR3/1	1mm以下の白・灰色、透明光沢の粒を含む。	無文
46	NT(Tr1)	鉢	底部付近	-	-	-	組織痕	ナデの後、横・斜方向の工具ナ デ	褐色 7.5YR7/6	灰黄褐色 10YR5/2	2mm以下の白・灰色の粒を含む。	組織痕
47	M20Ⅲ93	鉢	底部付近	-	-	-	ナデ、斜方向のハケ目の後、工 具ナデ	ナデ、工具ナデの後、ナデ	にぶい褐色 5YR6/4	褐灰色 10YR4/1	3mm以下の灰・黒・白色、透明光沢の粒を多く 含む。	-
48	M18Ⅲ227	鉢	底部	-	4.1	-	縦・斜方向の工具ナデの後、横・ 斜方向の貝殻条痕文	工具ナデの後、ナデ	褐色 7.5YR6/6	明黄褐色 10YR7/6	1mm以下の白・茶色の粒を含む。1mm以下の 黒色光沢、無色透明の粒を含む。	貝殻条痕文
49	Ⅱ	鉢	底部	-	(8.4)	-	横・斜方向の工具ナデの後、同 方向の丁寧なナデ	横方向の工具ナデの後、ナデ	褐色 7.5YR6/6	にぶい褐色 7.5YR5/4	2mm以下の白・茶・黒・灰色の粒を含む。1mm 以下の無色透明の粒を含む。	-
50	Ⅱ	鉢	底部	-	(6.9)	-	ナデ、横方向の工具ナデの後、 丁寧なナデ	指押さへ、ナデ、斜方向の工具 ナデの後、ナデ	褐色 7.5YR6/6	黒色 7.5YR2/1	2mm以下の白・茶色の粒を含む。1mm以下の 透明光沢の粒をわずかに含む。	-
51	Ⅱ	鉢	底部	-	(7.4)	-	ナデ、横方向の工具ナデの後、 ナデ	ナデ、横方向の工具ナデの後、 ナデ	にぶい黄褐色 10YR6/4	褐色 7.5YR6/6	3mm以下の白・灰色の粒を含む。	-

法量の()は推定

(3) 縄文時代の石器 (第 65・69 ~ 74 図 52 ~ 142)

本調査区の石器は、Ⅱ~Ⅴ層から出土した。Ⅱ層は縄文時代~近世の遺物が混在し、Ⅲ層は二次堆積アカホヤ火山灰層であり、さらに、Ⅳ・Ⅴ層とは土石流等によって、明確に分層されない箇所もあった。このように、土層による時期の特定や、土器や陶磁器のように型式や文様等による分類が困難なものが多かったため、「縄文時代の石器」として一括分類した。総点数は 371 点である。

石鏃 (第 69 図 52 ~ 67)

本調査区で出土した石鏃は、全て無茎鏃である。平面形及び基部の形状をもとにⅠ~Ⅲ類・a~c 類に分類した。分類は下記のとおりである。以下説明を加えていきたい。23 点中 16 点図化した。

Ⅰ類：平面形が正三角形に近いもの (60・65)

Ⅱ類：平面形が二等辺三角形に近いもの (52 ~ 55・58・59・61 ~ 64)

Ⅲ類：その他 (56・57・66・67)

a 類：基部にアーチ状の浅い挟りがあるもの

b 類：基部にV字、もしくはU字状の深い挟りがあるもの

c 類：基部に挟りがないもの

Ⅰ b 類 (60)

60 はチャート製で、左脚端部が欠損しているが、ほぼ左右対称になっている。基部には深さ約 4 mm のU字状の挟りがある。断面形は凸レンズ状を呈し、裏面右側には、素材の剥離面を大きく残す以外は、整形剥離が行われ、全体形を作り出している。

Ⅰ c 類 (65)

65 はチャート製で、断面形は六角形に近い形状を呈している。先端部は細かな整形剥離により作り出されている。基部はやや凹むものの、明確な作り出しが見られないことから平基とした。

Ⅱ a 類 (52・53・58・59・64)

52 はチャート製で、右脚部が欠損している。基部に深さ約 2 mm のアーチ状の挟りがある。裏面には素材時の剥離面を大きく残している。断面形は蒲鉾状を呈している。先端部及び脚部は細かく整形されている。53 はチャート製である。基部に深さ約 2 mm のアーチ状の挟りがある。断面形は凸レンズ状を呈し、側縁は丁寧に整形されている。

58 はチャート製で、ほぼ完形である。裏面には素材時の剥離面を大きく残している。基部には深さ約 2 mm のアーチ状の挟りがある。断面形は凸レンズ状を呈するが、裏面中央はやや尖る。基部は両面から丁寧に整形されている。59 は姫島産黒曜石製で、ほぼ完形で左右対称となっている。基部には深さ約 3 mm のアーチ状の挟りがあり、脚部側縁には凹凸の加工により鋸歯状に仕上げている。断面形は凸レンズ状を呈している。64 は、ホルンフェルス製で、左脚部が欠損している。基部の長さは脚部欠損のため不明であるが、アーチ状の挟りがある。断面形は凸レンズ状を呈し、側縁に丁寧な整形剥離痕が見られる。

Ⅱ b 類 (54・61・62・63)

54 は姫島産黒曜石製で、先端部が欠損しているが、ほぼ左右対称である。基部に深さ約 4 mm のU字状の挟りがある。断面形は凸レンズ状を呈し、側縁には丁寧な整形剥離痕がある。61 はチャート製で、左脚部が欠損している。基部は深さ約 8 mm のU字状の挟りがある。断面形は凸レンズ状を呈し、側縁加工は丁寧に整形されている。62 はチャート製で、右脚部が欠損している。基部に深さ約 7 mm のV字状の挟りが見られる。断面形は凸レンズ状を呈しており、側縁に丁寧な整形剥離痕が見られる。63 は姫島産黒曜石製で、左右脚部は欠損している。基部に深さ約 4 mm のV字、もしくはU字状の挟りがある。断面形は凸レンズ状を呈し、側縁に丁寧な整形剥離痕がある。

Ⅱ c 類 (55)

55 は安山岩製で、先端部が欠損している。表面には素材時の剥離面を大きく残す。厚みはあまりなく、断面形は凸レンズ状を呈している。側縁調整はあまり見られないが、基部の整形は比較的丁寧である。

Ⅲ類 (56・57・66・67)

56 はチャート製で、右脚部が欠損している。基部に深さ約 2 mm のアーチ状の挟りをもつほか、左脚部側縁にも挟りが見られる。脚部側縁に挟りを入れることにより、側縁中位に突起状の張り出しが作り出されている。断面形は凸レンズ状を呈し、表裏面とも側縁整形は丁寧である。57 は姫島産黒曜石製で、左脚部が欠損している。基部に深

さ約3 mmのアーチ状の抉りがある。また右側縁下部には突起状の張り出しが見られる。左側縁には突起が見られないが、対になる付近に大きな剥離が見られることから欠損しているものと考えられる。また、先端部の左側には細かな加工痕が見られ、再加工を施している可能性がある。66はチャート製である。先端部及び基部が欠損していて分類が困難なことから、Ⅲ類とした。基部右側の欠損部分には、細かな剥離痕が見られることから、再加工を行った可能性がある。67はチャート製である。右側縁及び基部を欠損していて分類が困難なことから、Ⅲ類とした。裏面先端部の左側には細かな整形剥離痕が見られるが、それ以外の剥離痕はやや粗い。

トトロ石器 (第69図68)

本調査区では、トトロ石器が1点出土している。

68はチャート製で、左脚部とそれ以外の二つに折れた状態で出土している。平面形は先端部が丸みをもつ砲弾形を呈し、基部には深さ約5 mmのU字状の抉りがある。断面形は六角形状を呈し、側縁全体に丁寧な整形剥離痕が見られる。脚端部は右側のもは直線的であるのに対し、左側のもはや外側に張り出している。体部には研磨痕などは見られなかった。

尖頭状石器 (第69図69・70)

2点図化した。69は珪質頁岩製である。表裏面に二次加工が認められる。全体的に加工は粗く、尖頭状石器の未製品とも考えられる。70は珪質頁岩製で、先端部が欠損している。厚みがあり、断面形はやや歪な菱形を呈する。整形は両面から行われており、基部には細かい整形剥離が見られる。

石匙 (第69図71)

本調査区で出土した石匙は、この1点のみである。

71はホルンフェルス製で、左側縁下部が欠損している。裏面には素材の剥離面を大きく残している。つまみ部及び刃部は表裏面から加工を行っている。特につまみ部の上縁は細かく整形されている。つまみ部の下には表裏面から加工を行い、抉り部を作り出すことで、つまみ部と刃部を分けている。

二次加工剥片 (第69図72～81)

52点中10点図化した。72は腰岳産黒曜石製である。縦長剥片を素材に左側縁下部に抉入状の加工

を裏面から施している。また、左側縁上部及び右側縁には微細剥離痕が見られる。73はチャート製である。表面左側に自然面が残る縦長剥片を素材にして、下縁に二次加工が施されている。また右側縁上部には微細剥離痕が見られる。74は頁岩製である。縦長剥片を素材にして、下縁に二次加工が施されている。また左側縁上部には刃こぼれ状の微細剥離痕が見られる。75はチャート製である。幅広の剥片を素材として、打面部側に二次加工が施されている。76はチャート製である。縦長剥片を素材として、左右両側縁に二次加工が施されている。77はチャート製であり、表面右側に節理面を残す縦長剥片を素材としている。左右両側縁に二次加工が施されている。特に左側縁中程の加工は、抉入状を呈している。78はチャート製で、表面中央から左側縁及び裏面右側にかけて自然面を残す。表面上部及び下部に二次加工が見られる。79は姫島産黒曜石製の幅広な剥片を素材にして、下縁(右側)や右側縁(下側)には二次加工が施されている。右側縁(下側)下部が欠損しているが抉入状の加工を施していたものと考えられる。80は三船産黒曜石製で、裏面には自然面を大きく残す。上縁及び右側縁に二次加工が見られる。81はチャート製で、表面左下に節理面を残す厚みのある剥片を素材にして、表面左側縁中程から下部、右側縁中程に二次加工が施されている。

微細剥離痕のある剥片 (第69図82～85)

4点図化した。82はチャート製である。縦長剥片を素材として、左右側縁には、微細剥離痕が見られる。83は腰岳産黒曜石製で、表面に大きく自然面を残す縦長剥片を素材としている。左側縁には微細剥離痕が見られる。84は珪質頁岩製である。厚みのある横長の剥片の左右側縁に微細剥離痕がある。85は珪質頁岩製である。横長剥片の上縁から右側縁上部にかけて微細剥離痕が見られる。

石核 (第69・70図86～88)

6点中3点図化した。86はチャート製である。裏面を打面に設定して、そこより上面や左右側面、下面で剥片剥離作業を行っている。さらに下面には二次加工を行い、刃部を作り出していることから、エンドスクレイパーに転用されたものと考えられる。87は珪質頁岩製である。打面を転移させ

ながら剥片剥離作業を行っている。なお表面右側には節理面を残す。88 はチャート製で、節理面を有する上面を打面にして正面で剥片剥離作業を行っている。また、裏面下縁には二次加工が認められることから、サイドスクレイパーとして転用されたものと考えられる。

蛤形剥片石器 (第 70 図 89 ~ 96)

礫面を打面にして剥出された剥片の素材を生かし、縁辺に二次加工や微細剥離痕等が認められるものを一括した。第 9 次調査 (P25) でも述べているが、蛤形剥片石器が出土している藏座村 (ぞうざむら) 遺跡では、本石器を縄文時代早期に限定されている⁽¹⁾。しかし本遺跡のものは、堆積状況が一部不安定であることや後世の造成等により詳細な時期の特定が困難であり、早期以降のものも含まれている可能性がある。ここでは一括して蛤形剥片石器として報告する。本調査区では、石器の形状や加工をもとに、I 類、II 類に分類した。分類は下記のとおりである。以下説明を加えていきたい。49 点中 8 点図化した。

I 類：横長もしくは幅広の剥片を素材とするもので、素材剥片の形をそのまま、またはその形を生かしながら若干、加工を施すもの (89 ~ 94)

89 は砂岩製である。表面の左側縁下部から下縁及び右側縁下部にかけて裏面より加工が施されている。90 は砂岩製である。主に自然面から右側縁及び下縁に加工を施している。91 は尾鈴山溶結凝灰岩製である。左半分は母岩から剥出する際に、垂直割れをおこし、欠損している。右側縁は表面より、また下縁は表裏面の両面から加工が施されている。92 は尾鈴山溶結凝灰岩製である。下縁を V 字状になるように加工が行われているほか、打面側にも加工が施されている。93 は砂岩製である。下縁には自然面より粗い加工が施されている。両側縁の剥離面は使用後、欠損したのものと考えられる。94 は砂岩製である。大型で厚みのある剥片を素材にして、右側縁から下縁にかけて加工が見られる。

II 類：縦長剥片を素材とするもので、縁辺に微細剥離痕が認められるもの (95・96)

95 はホルンフェルス製である。表裏面ともに風化が著しくわかりにくい、部分的に微細な剥離痕が見られる。96 は珪質頁岩製である。右側縁か

ら下縁にかけて微細剥離痕が見られる。

スクレイパー (第 70・71 図 97 ~ 100)

4 点図化した。97 は尾鈴山溶結凝灰岩製のラウンドスクレイパーである。表面に自然面を残し、横長で厚みのある剥片を素材に表面上部以外の全縁に二次加工を施している。98 はホルンフェルス製のサイドスクレイパーである。表面には大きく自然面を残す厚みのある横長の剥片を素材にして、左右側縁及び下部に両面から加工を行い、刃部を作り出している。刃部のうち、特に下縁中央のものは鋭くなっている。99 は珪質頁岩製のサイドスクレイパーである。自然面を打面にした幅のある剥片を素材にして、左側縁には裏面より加工を行い、刃部を作り出している。100 はチャート製のサイドスクレイパーである。縦長剥片を素材にして右側縁に二次加工を施し、刃部を作り出している。なお、左側縁中程には微細剥離痕が認められる。

剥片 (第 71 図 101・102)

150 点中 2 点図化した。101 は尾鈴山溶結凝灰岩製の縦長剥片で、表面右側から下部にかけて自然面を残す。左右側縁ともに鋭利である。102 はホルンフェルス製の横長剥片で、表面下部に自然面が残る。表裏面ともに風化が著しい。

石斧 (第 71・72 図 103 ~ 118)

石斧は、加工方法や形状をもとに I・II a・II b・III 類に分類した。分類は下記のとおりである。以下説明を加えていきたい。24 点中 16 点図化した。

I 類：表面に、全面もしくは一部に研磨が施されているもの(磨製石斧を含む)(103 ~ 105・107・108)

103 は砂岩製であり、全面に研磨が施されている。断面形が楕円形を呈し、中程よりやや上に最大厚をもつ磨製石斧である。刃部は蛤刃状を呈し、右側には剥離痕が見られる。また基端には潰れが見られる。104 はホルンフェルス製である。表面は風化気味ではっきりしないところもあるが、敲打による整形の後、研磨が施されたものと考えられ、基部や体部の一部に研磨が見られる。また左右両側面の敲打痕は顕著である。刃部は粗い加工で作出しているが、欠損により刃部を再生しているものと考えられる。105 はホルンフェルス製の基部で、刃部は欠損している。全面に研磨が施されている。表面下には節理面を残す。基端部に微

細剥離痕があることから、基部も使用したか、こちら側が刃部だった可能性がある。107 はホルンフェルス製の基部で、刃部は欠損している。風化気味ではっきりしないが、基端部表裏面ともに研磨が施されている。また左右側面とも敲打痕が見られる。基端部が鋭く、裏面に剥離痕があることから、基部も使用したか、こちら側が刃部だった可能性がある。108 は頁岩製の基部で、刃部が欠損している。非常に薄く、表裏面ともに、大きく剥離面を残している。基端部には研磨が認められる。左右側縁とも丁寧に整形されている。

Ⅱ類：扁平で、左右両側縁に抉入部をもつ打製石斧 (109 ~ 113・116 ~ 118)

Ⅱ a類…基部幅に対し、刃部幅が広がるもの (109 ~ 111・113)

109 は砂岩製で、表面に自然面、裏面に素材時の剥離面を大きく残している。左右側縁から刃部にかけて表裏面からの加工が見られ、さらに抉入部には入念に敲打による整形が施されている。また、刃部には使用痕と思われる微細剥離痕が見られる。110 は砂岩製で、表裏面ともに素材時の剥離面を大きく残している。刃部は欠損している可能性があるものの、表裏面ともに全縁に加工が見られる。111 は砂岩製で、裏面に素材時の剥離面を大きく残している。加工は表裏面ともに全縁に見られ、基部の両側縁には剥離の後、敲打による整形が行われている。また、抉入部の抉りは 109 や 110 と比べ緩やかである。なお、刃部に使用痕と思われる微細剥離痕が見られる。113 は砂岩製で、表面の上部に自然面を残す。刃部は欠損しているものの、加工は表裏面とともに両側縁にも見られ、特に抉入部の加工は丁寧であり、剥離の後、敲打による整形が行われている。なお、右側縁の下部付近は、赤変している。

Ⅱ b類…比較的細長く、基部幅に対し、刃部幅が同等、もしくは狭いもの (116 ~ 118)

116 はホルンフェルス製で、表裏面ともに素材時の剥離面を大きく残している。基端部には自然面を残している。基端の一部を除き、全縁に表裏面からの剥離痕が見られる。また抉入部の抉りは緩やかである。刃部幅は刃先に向かって狭くなり、尖らせている。117 は砂岩製である。折れた状態

で出土しており、中程よりもやや上方で接合している。表裏面ともに素材時の剥離面を大きく残し、裏面には一部自然面が見られる。加工は表裏面ともに全縁に見られ、抉入部は刃部のすぐ上から中程にかけてと、中程から基端にかけての2箇所に作り出されている。抉りはどちらも緩やかで、敲打による整形が行われているが、特に下方のものは顕著である。上下とも先端が鋭くなっていることから、ともに刃部として使用した可能性が考えられる。118 も折れた状態で出土しており、中程で接合している。表裏面ともに素材時の剥離面を大きく残し、全縁に加工が施されている。また抉入部の抉りは緩やかに作り出されている。敲打調整は、右側縁の抉入部で見られるのに対し、左側縁は全体で見られる。砂岩製である。

Ⅲ類：平面形が長方形を呈する打製石斧 (106・112・114・115)

106 はホルンフェルス製である。刃部は欠損している。表面に自然面、裏面には主要剥離面を大きく残す。加工は表裏面から施されている。112 は砂岩製で表面に自然面、裏面に主要剥離面を大きく残す剥片を素材にして、表裏面から加工を行っている。さらに左右側縁には敲打による調整も行われている。刃部に最大幅をもつ。114 はホルンフェルス製である。表裏面ともに素材時の剥離面を大きく残し、全縁に加工痕が見られる。右側縁上部は欠損している可能性がある。115 は 14 の浅鉢に重なるように出土した。尾鈴山溶結凝灰岩製で、厚みのある礫を分割後、自然面より左右側縁に急角度の整形加工が行われている。刃部・基部ともあまり加工が行われていないことから、未製品の可能性がある。しかし下縁(刃部)には、敲打痕が見られることから、製作途中で使用された可能性が考えられる。

礫器 (第 72 図 119 ~ 122)

4 点図化した。119 は尾鈴山溶結凝灰岩製で厚みのある円礫を分割後、自然面側から左右側縁及び下部に二次加工を行っている。120 は尖頭状礫器である。砂岩製で円礫を分割後、自然面側から打面及び下縁に二次加工を行い、平面形をV字形に仕上げている。特に先端部は自然面側からだけでなく、表面からも加工を行い、尖らせている。

121 は砂岩製で、裏面は主要剥離面、表面は自然面が残る。裏面下縁には表面より粗い加工を施し、刃部を作出している。122 は砂岩製で、表裏面ともに自然面を残す。上部は欠損している。右側縁から下縁にかけて一端より加工を行い、刃部を作出している。刃部は使用による潰れが見られる。

石錘 (第 73 図 123 ~ 132)

縄文時代早期に多く見られる短軸を加工したものは出土しておらず、全て長軸を加工している。ここでは素材と着紐部の加工をもとに、I a・I b・II 類に分類した。分類は下記のとおりである。以下説明を加えていきたい。19 点中 10 点図化した。

I 類：扁平な礫を素材にしたもの (123 ~ 131)

I a 類…長軸方向に抉入状の加工を施し、着紐部を作り出しているもの(123・125 ~ 127・130・131)

123 は砂岩製である。左右側縁に表裏面から加工を行っているが、抉りが弱くやや直線的である。着紐部には敲打調整を行っており、着紐して使用していた可能性が考えられる。125 は尾鈴山溶結凝灰岩製である。左側縁下に敲打痕が見られる。126 は尾鈴山溶結凝灰岩製である。表面左下に節理面を残す。127 は砂岩製で、風化気味である。着紐部の加工は右側縁に対し、左側縁の抉りは緩やかである。また、右側縁のものには潰れが見られることから、着紐して使用していた可能性が考えられる。130 は砂岩製である。両側縁の着紐部に潰れが見られることから、着紐して使用していた可能性が考えられる。131 は砂岩製で、裏面には左右方向からの大きな剥離痕が見られる。

I b 類…長軸方向以外にも加工が見られるもの(124・128・129)

124 は砂岩製である。左右側縁に表裏面から加工を行っているほか、表面上部にも剥離痕が見られる。下部に若干の自然の凹みがあることから、縦方向にも着紐して使用していた可能性がある。128 は砂岩製である。左右側縁に表裏面から加工を施し、着紐部には敲打調整が行われている。また 124 同様表面上部にも剥離痕があり、下部に若干自然の凹凸があることから、縦方向にも着紐して使用していた可能性がある。129 は砂岩製である。右側縁の加工部に敲打痕があることから、着紐して使用するために縁に丸みをつけた可能性が

考えられる。また上縁部には加工により刃部が形成されていることから、礫器を転用したものと考えられる。

II 類：剥片素材のもの (132)

132 は尾鈴山溶結凝灰岩製で表面には自然面を大きく残す横長剥片を素材にしている。両側縁には抉入状の加工を表裏面から行い、着紐部を作り出している。また上下縁には、ともに剥離痕があることから、他の用途として使用されていた可能性も考えられる。

敲石 (第 73 図 133・134)

磨面があるものの、顕著な敲打痕が見られるものは敲石とした。13 点中 2 点図化した。

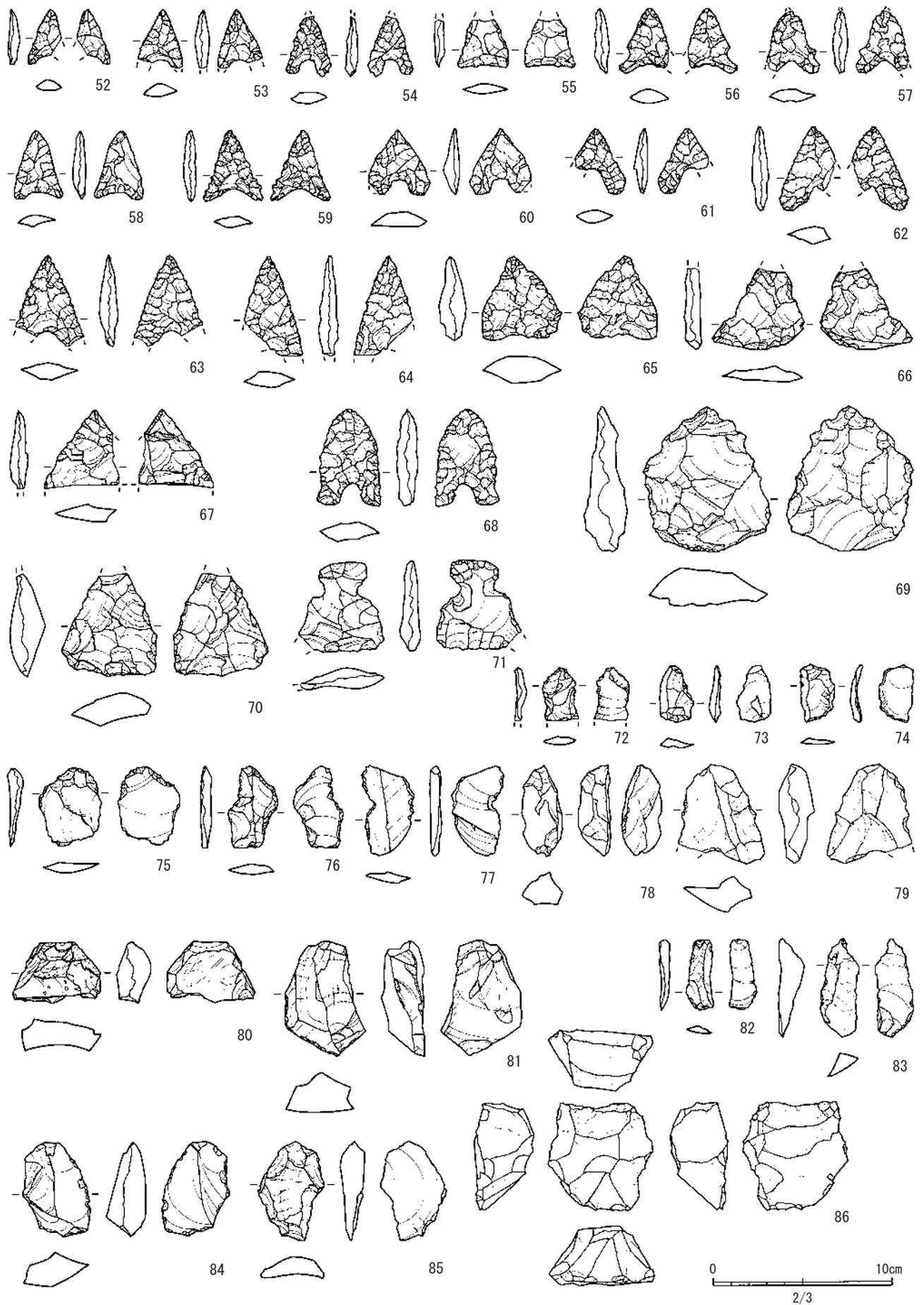
133 は尾鈴山溶結凝灰岩製である。上・下・右・裏面の中心部の右よりに顕著に敲打痕がある。左側縁にも若干の敲打痕が見られる。表裏面ともに磨面がある。134 は砂岩製で、上部が欠損している。下縁に顕著な敲打痕がある。表裏面ともに磨面がある。

磨石 (第 74 図 135 ~ 138)

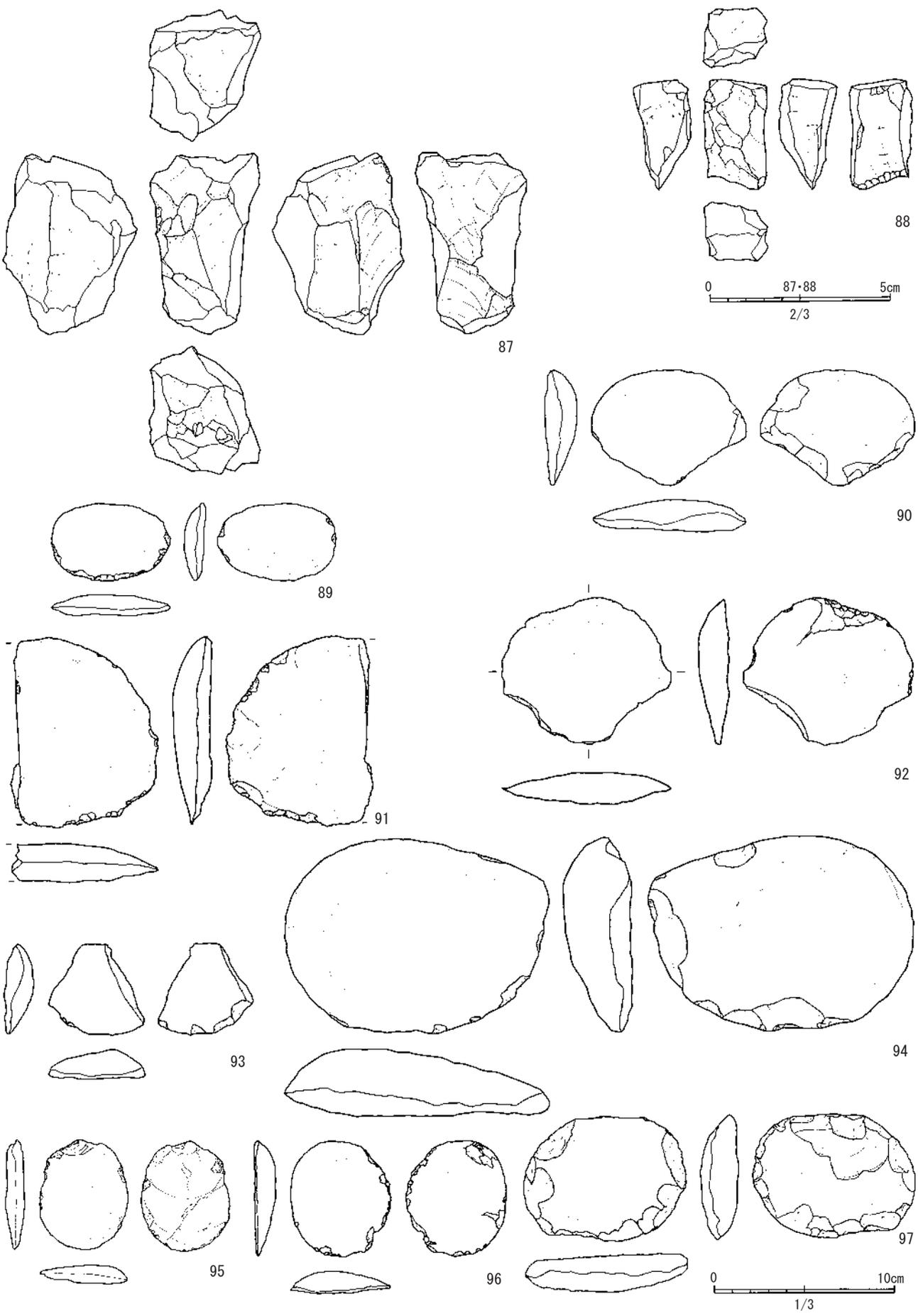
23 点中 4 点図化した。135 は尾鈴山溶結凝灰岩製で、表裏面ともに磨面がある。136 は砂岩製である。棒状で上部が欠損している。裏面が凹み、磨面がある。下縁の先端部に若干敲打痕が見られる。137 は砂岩製である。表裏面ともに磨面があるが、裏面が顕著である。138 は尾鈴山溶結凝灰岩製である。表裏面ともに磨面があるが、裏面は凹みがあり、顕著である。

石皿 (第 74 図 139 ~ 142)

6 点中 4 点図化した。139 は砂岩製で、上部が欠損している。中央部に凹みがあり、磨面になっている。この凹みが縦長で深く、磨痕が縦走していることから、砥石として使用した可能性も考えられる。側縁から下縁にかけて敲打痕があることから、敲石として使用した可能性もある。140 は尾鈴山溶結凝灰岩製で、表面は中央部付近に凹みがあり、右側は傾斜している。表面全体が磨面になっている。表面以外に敲打痕があることから、敲石として使用した可能性も考えられる。141 は尾鈴山溶結凝灰岩製である。表面全体に磨面が見られるが、中央部付近が特に顕著である。142 は尾鈴山溶結凝灰岩製で、上部が欠損している。表面に目立った磨面はないが、敲打痕と考えられる凹凸が全体的に見られる。

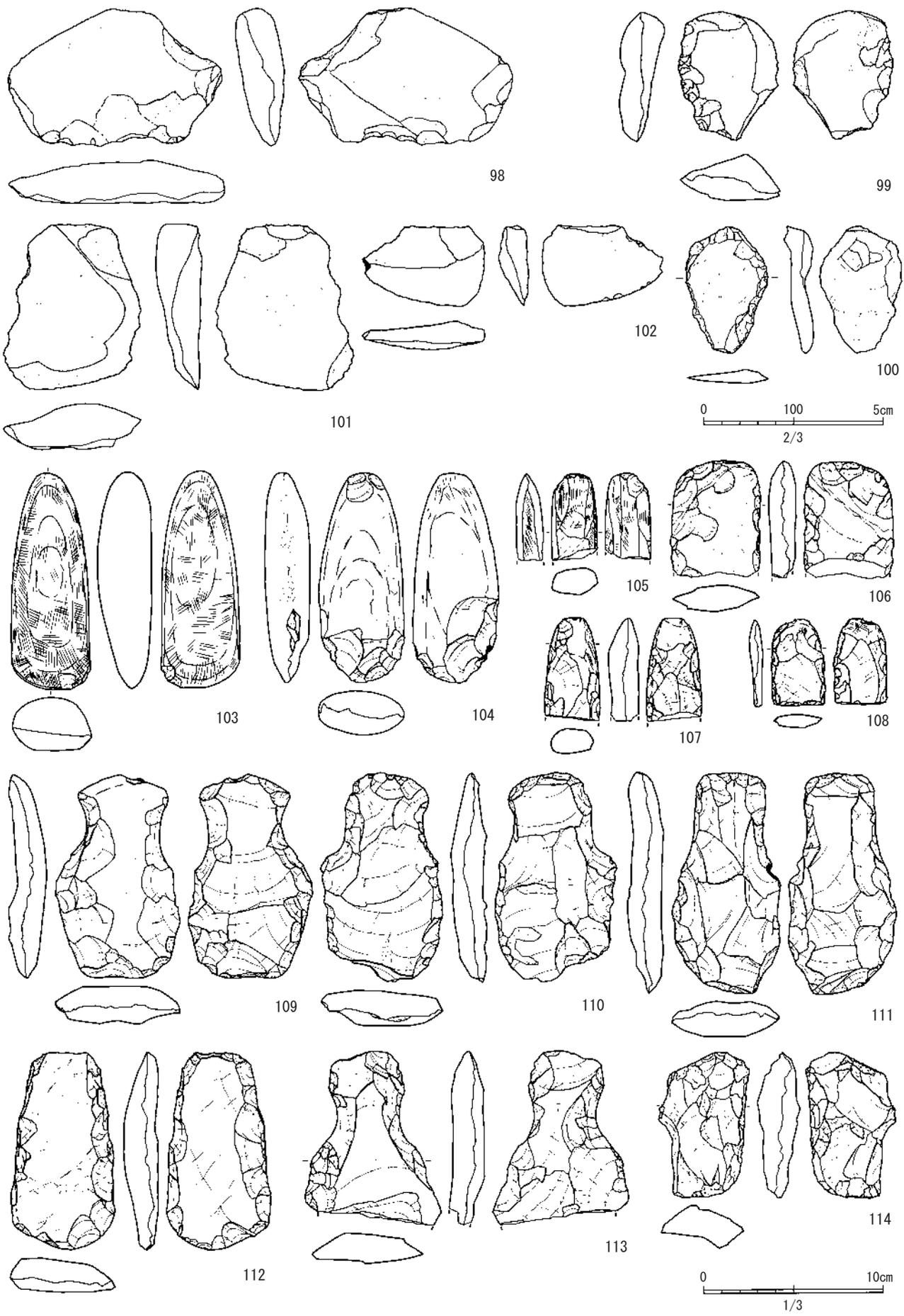


第 69 図 岡遺跡第 15 次調査区 縄文時代石器実測図 (1)

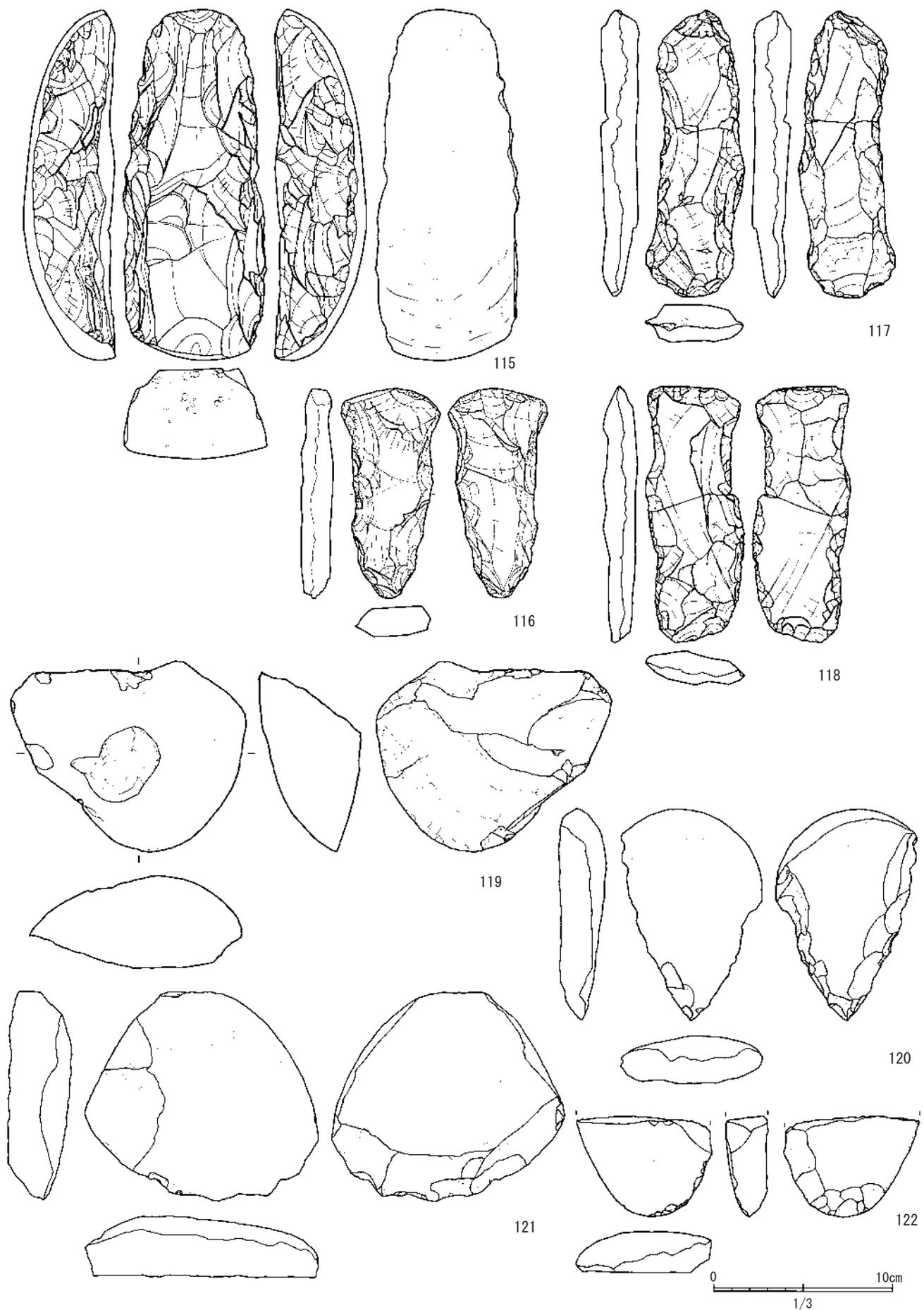


第70図 岡遺跡第15次調査区 縄文時代石器実測図(2)

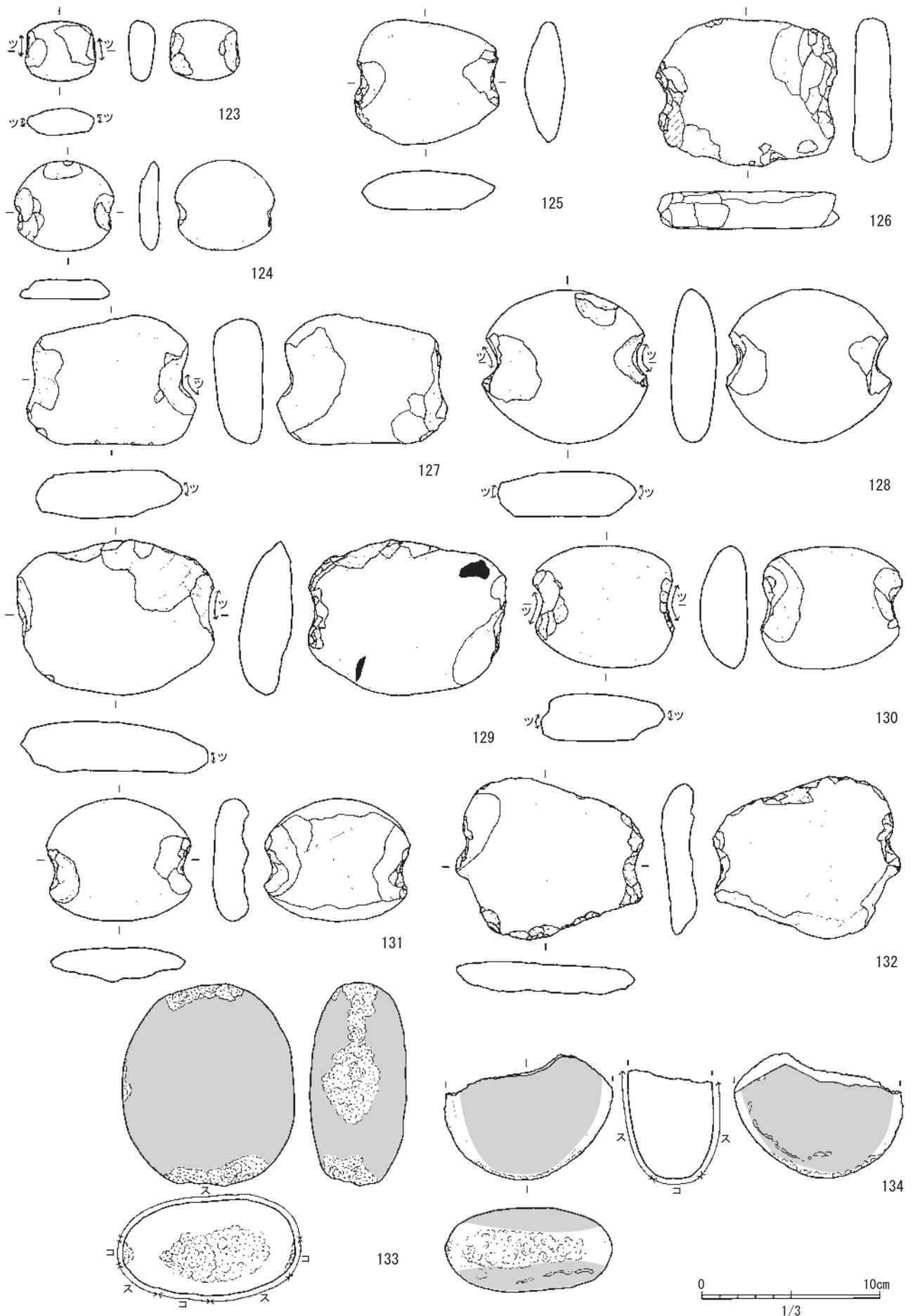
岡
第15次



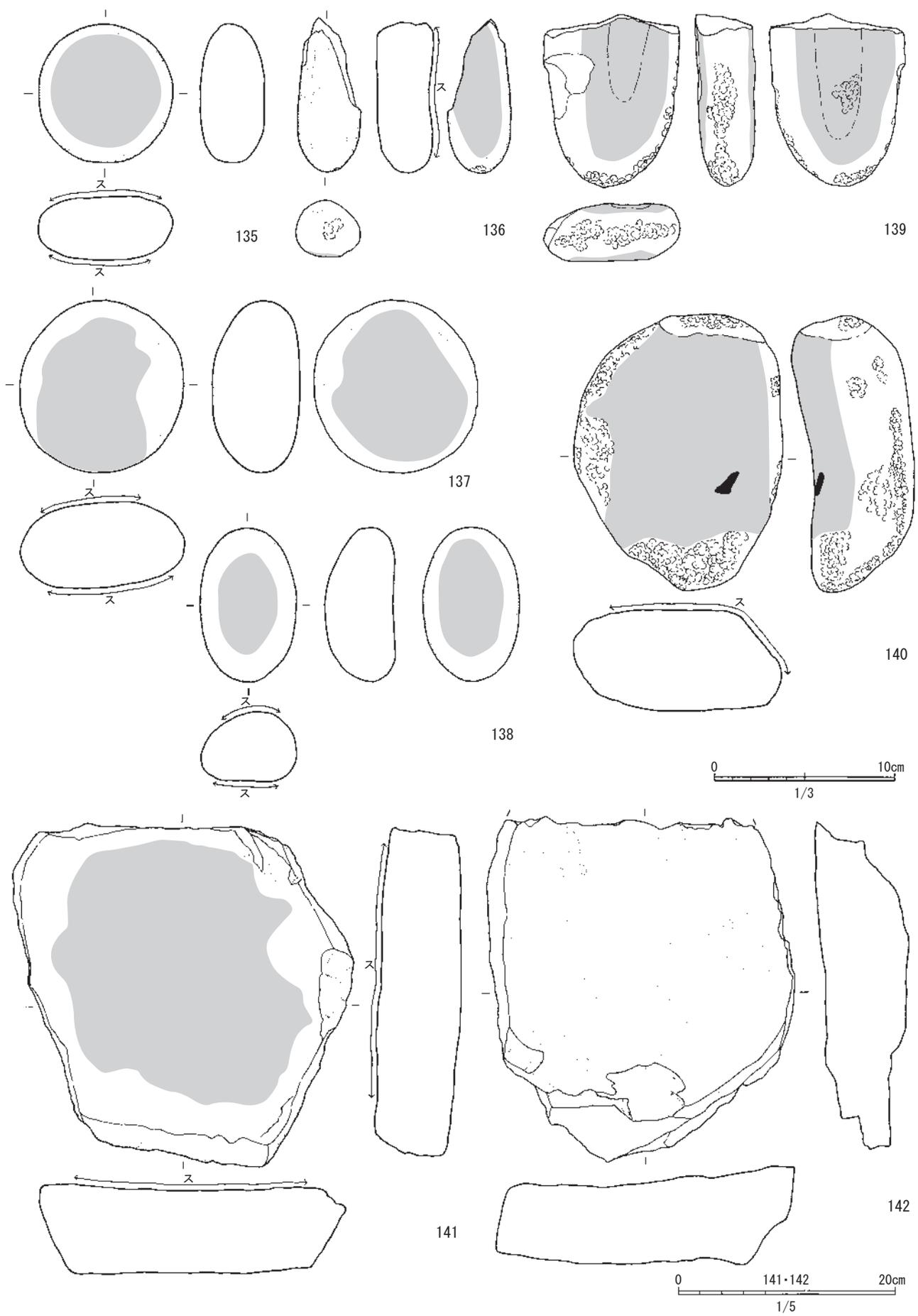
第 71 図 岡遺跡第 15 次調査区 縄文時代石器実測図 (3)



第 72 図 岡遺跡第 15 次調査区 縄文時代石器実測図 (4)



第73図 岡遺跡第15次調査区 縄文時代石器実測図(5)



第74図 岡遺跡第15次調査区 縄文時代石器実測図(6)

第 24 表 岡遺跡第 15 次調査区 縄文時代石器計測表

No.	出土地点 (グリッド)	層	器種	石材	法量			
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
52	-	II	石鏃	チャート	1.5	0.9	0.3	0.3
53	-	II	石鏃	チャート	1.7	1.3	0.4	0.6
54	M20	III	石鏃	姫島産黒曜石	1.7	1.3	0.4	0.4
55	-	II	石鏃	安山岩	1.4	1.4	0.2	0.5
56	-	II	石鏃	チャート	1.8	1.4	0.4	0.7
57	M18	III	石鏃	姫島産黒曜石	1.7	1.5	0.4	0.7
58	M20	III	石鏃	チャート	1.9	1.4	0.4	0.6
59	M19	IV	石鏃	姫島産黒曜石	2.0	1.7	0.4	0.6
60	N18	III	石鏃	チャート	1.9	1.7	0.4	1.0
61	-	II	石鏃	チャート	1.9	1.4	0.4	0.6
62	-	II	石鏃	チャート	2.3	1.6	0.5	1.1
63	-	II	石鏃	姫島産黒曜石	2.5	1.9	0.5	1.4
64	-	II	石鏃	ホルンフェルス	2.8	1.6	0.5	1.6
65	N18	III	石鏃	チャート	2.4	2.2	1.8	2.9
66	-	II	石鏃	チャート	2.3	2.5	0.5	2.4
67	-	II	石鏃	チャート	2.2	2.1	0.5	1.8
68	-	II	トロトロ石器	チャート	2.7	1.7	0.5	2.4
69	-	II	尖頭状石器	珪質頁岩	4.1	3.5	1.2	13.9
70	ET(Tr2)	-	尖頭状石器	珪質頁岩	3.0	2.7	1.0	5.6
71	M19	III	石鏃	ホルンフェルス	2.5	2.4	0.6	2.6
72	M19	III	二次加工剥片	腰岳産黒曜石	1.5	1.0	0.2	0.3
73	M18	III	二次加工剥片	チャート	1.6	1.0	0.2	0.4
74	M19	III	二次加工剥片	頁岩	1.6	1.0	0.2	0.3
75	L18	III	二次加工剥片	チャート	2.2	1.7	0.3	1.2
76	NT(Tr1)	-	二次加工剥片	チャート	2.3	1.4	0.2	0.9
77	M18	III	二次加工剥片	チャート	2.5	1.5	0.3	1.1
78	NT(Tr1)	-	二次加工剥片	チャート	2.5	1.1	0.9	2.7
79	M19	III	二次加工剥片	姫島産黒曜石	2.8	2.4	1.0	3.9
80	ET(Tr2)	-	二次加工剥片	三胎産黒曜石	1.7	2.5	1.0	3.7
81	N18	III	二次加工剥片	チャート	3.3	2.3	1.2	8.6
82	N19	III	微細剥離痕のある剥片	チャート	2.0	0.8	0.2	0.3
83	-	II	微細剥離痕のある剥片	腰岳産黒曜石	2.8	1.1	0.6	1.0
84	-	II	微細剥離痕のある剥片	珪質頁岩	2.7	1.9	1.1	4.1
85	-	II	微細剥離痕のある剥片	珪質頁岩	2.8	1.8	0.7	2.0
86	M18	III	石核	チャート	3.0	3.0	1.7	15.5
87	-	II	石核	珪質頁岩	5.0	3.1	3.7	56.3
88	NT(Tr1)	-	石核	チャート	3.1	1.7	1.6	10.7
89	M20	IV	蛤形剥片石器	砂岩	4.5	6.6	1.2	41.3
90	M18	IV	蛤形剥片石器	砂岩	6.5	8.4	1.8	112.6
91	N18	III	蛤形剥片石器	尾鈴山溶結凝灰岩	8.2	10.7	2.2	236.1
92	-	II	蛤形剥片石器	尾鈴山溶結凝灰岩	8.3	9.4	1.7	138.0
93	-	II	蛤形剥片石器	砂岩	5.2	5.4	1.7	39.1
94	N18	IV	蛤形剥片石器	砂岩	11.0	15.7	3.9	685.7
95	-	II	蛤形剥片石器	ホルンフェルス	5.0	6.3	1.1	36.6
96	-	II	蛤形剥片石器	珪質頁岩	5.5	6.6	1.3	46.2
97	L20	III	スクレイパー	尾鈴山溶結凝灰岩	7.0	9.1	2.1	161.5

No.	出土地点 (グリッド)	層	器種	石材	法量			
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
98	N18	III	スクレイパー	ホルンフェルス	7.8	12.0	2.8	248.0
99	-	II	スクレイパー	珪質頁岩	7.3	5.6	2.6	94.6
100	N18	III	スクレイパー	チャート	3.6	2.3	0.8	5.3
101	N18	III	剥片	尾鈴山溶結凝灰岩	9.4	7.8	2.6	171.8
102	N18	IV	剥片	ホルンフェルス	4.5	6.8	1.6	45.5
103	-	II	石斧	砂岩	12.2	4.4	3.0	238.0
104	ET(Tr2)	-	石斧	ホルンフェルス	11.8	4.8	2.5	199.2
105	-	II	石斧	ホルンフェルス	4.9	2.6	1.5	29.0
106	-	II	石斧	ホルンフェルス	6.6	4.9	1.5	79.8
107	M20	III	石斧	ホルンフェルス	5.8	3.1	1.7	43.5
108	-	II	石斧	頁岩	4.9	3.0	0.8	15.1
109	-	II	石斧	砂岩	11.4	6.9	2.1	164.9
110	N19	III	石斧	砂岩	12.3	6.8	2.0	162.8
111	ET(Tr2)	-	石斧	砂岩	12.5	6.0	2.0	165.8
112	N18	III	石斧	砂岩	11.2	5.8	1.9	152.6
113	ET(Tr2)	-	石斧	砂岩	9.7	7.6	2.0	125.0
114	-	II	石斧	ホルンフェルス	8.2	4.8	2.4	94.5
115	N18	III	石斧	尾鈴山溶結凝灰岩	19.8	8.0	5.1	1122.0
116	-	II	石斧	ホルンフェルス	11.8	5.6	1.8	133.0
117	--M19	II・III	石斧	砂岩	16.2	6.0	2.1	217.0
118	--M20	II・III	石斧	砂岩	14.5	5.5	1.9	173.7
119	-	II	礫器	尾鈴山溶結凝灰岩	10.8	13.2	5.8	781.7
120	-	II	尖頭状礫器	砂岩	12.0	7.9	2.7	275.8
121	M18	III	礫器	砂岩	11.7	13.1	3.5	713.2
122	M19	III	礫器	砂岩	5.7	7.7	2.4	128.5
123	-	II	石錘	砂岩	3.5	4.0	1.6	33.3
124	-	II	石錘	砂岩	5.1	5.5	1.2	52.3
125	M19	III	石錘	尾鈴山溶結凝灰岩	6.4	8.1	2.3	170.1
126	M18	III	石錘	尾鈴山溶結凝灰岩	8.3	10.2	2.2	288.7
127	-	II	石錘	砂岩	8.1	9.6	2.9	290.9
128	-	II	石錘	砂岩	8.7	9.3	2.6	310.4
129	N18	III	石錘	砂岩	8.7	11.2	3.0	401.7
130	M18	III	石錘	砂岩	7.0	8.0	2.7	229.1
131	-	II	石錘	砂岩	7.0	8.2	2.1	156.3
132	-	II	石錘	尾鈴山溶結凝灰岩	9.2	10.6	2.0	241.9
133	-	II	敲石	尾鈴山溶結凝灰岩	11.2	9.7	5.4	925.7
134	N18	III	敲石	砂岩	7.1	9.5	4.8	412.8
135	ET(Tr2)	-	磨石	尾鈴山溶結凝灰岩	7.9	7.5	3.6	322.2
136	M19	III	磨石	砂岩	8.7	3.6	3.2	131.9
137	N19	III	磨石	砂岩	9.7	9.2	4.9	624.2
138	L18	III	磨石	尾鈴山溶結凝灰岩	8.7	5.4	3.9	267.7
139	M18	III	石皿	砂岩	9.7	7.6	3.4	309.5
140	-	II	石皿	尾鈴山溶結凝灰岩	15.4	11.6	6.9	1380.0
141	N18	IV	石皿	尾鈴山溶結凝灰岩	32.0	28.4	8.5	11000.0
142	M19	IV	石皿	尾鈴山溶結凝灰岩	32.9	28.5	9.2	9000.0

第3節 弥生時代～近世の遺物

3-1. 弥生時代～古代の遺物 (第75図 143～148)

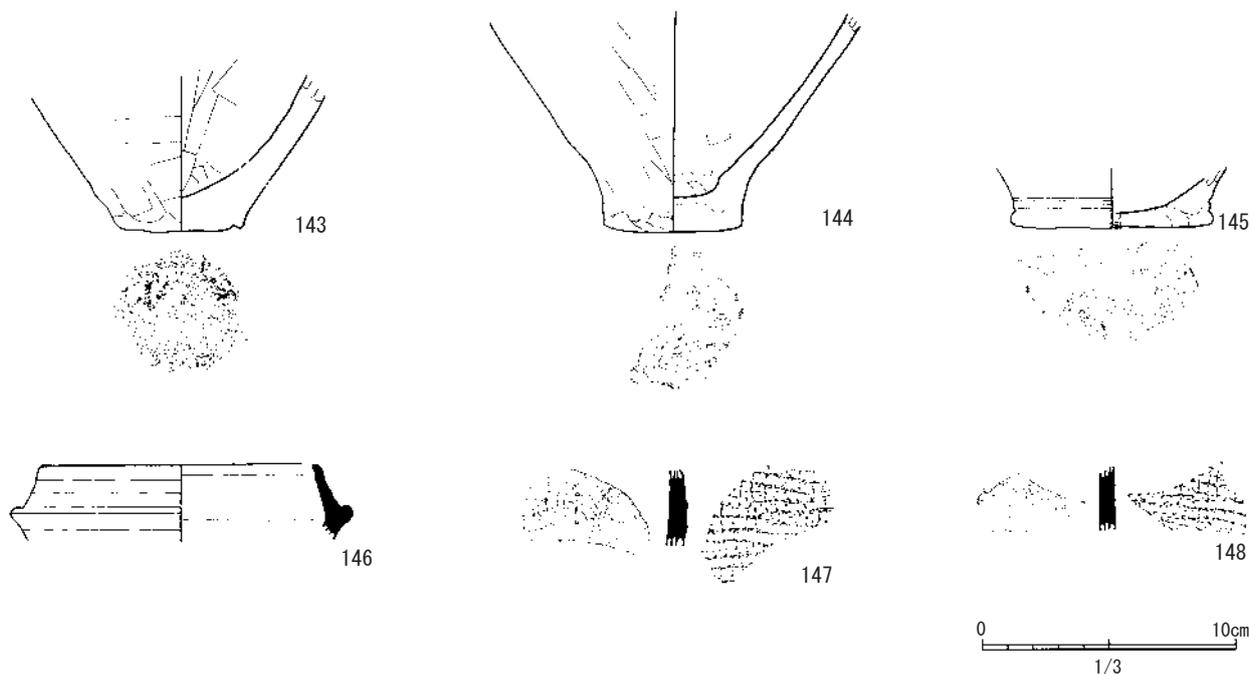
(1) 土器 (143～145)

143 は甕の胴下部～底部で、底面は完形で残る。全体的に風化気味である。底面に、指押さえがあまく、粘土のつなぎ目が残る箇所がある。底部外面にも指押さえの痕がある。144 は甕の胴部～底部で、内面が全体的に黒い。底部外面に指押さえ

の痕があり、底面に網代痕が見られる。145 は坏の底部で、全体的に風化が著しい。底部外面に、回転させながら工具によって付けられたと考えられる2本の沈線文が施されている。

(2) 須恵器 (146～148)

146 は坏身の口縁部で、外面下部に自然釉が施されている。147・148 は甕の胴部で、外面全体に格子目タタキがある。



第75図 岡遺跡第15次調査区 弥生時代～古代遺物実測図

3-2. 中世・近世の遺物 (第76図 149～159)

(1) 土師坏 (149)

149 は坏の底部である。底面は一部剥離しているため不明であるが、ヘラ切りされている可能性がある。底部外面に2本の細い沈線文が施されている。

(2) 土製品 (150)

150 は土錘の胴部である。上・下部ともに欠損している。中心の穿孔は約3mmである。

(3) 中世陶器 (151)

151 は播鉢の口縁部で、口縁部付近の外・内部に工具による凹線がある。播目単位は不明である。

(4) 青磁 (中国青磁) (152～154)

152 は蓮花文盤の口縁部から体部である。内面に蓮花文が施されている。153 は皿の口縁部であ

る。154 は碗の体部である。外面に蓮弁文が施されている。

(5) 青花 (155・156)

155 は皿の底部で、碁笥底になっている。156 は皿の底部で、表面と外面に施釉されているが、底面は釉剥ぎが行われている。

(6) 土器 (157)

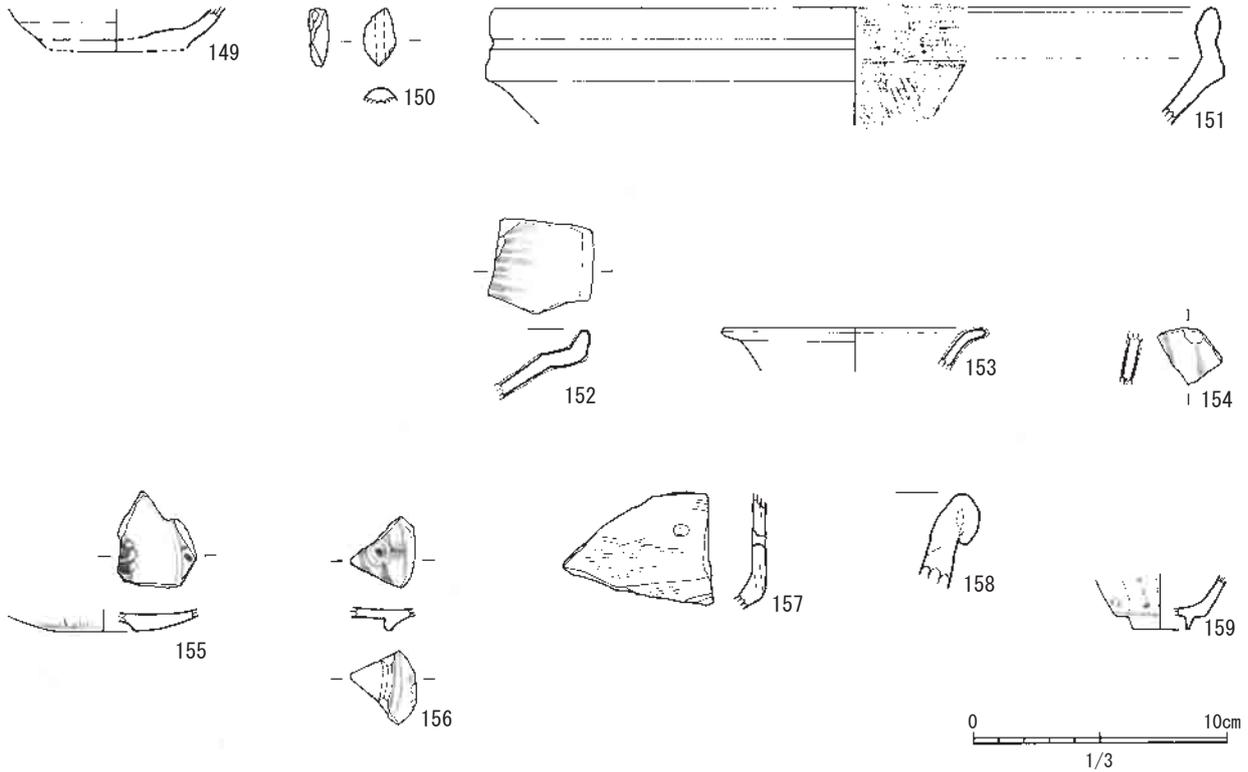
157 は焙烙の体部で、約4mmの穿孔がある。

(7) 近世陶器 (158)

158 は備前焼の大甕の口縁部で、外面に自然釉が施されている。

(8) 染付 (159)

159 は小坏の底部である。約1.5cm幅で、縦方向に面取りしている。面ごとに文字のような染付が施されている。



第76図 岡遺跡第15次調査区 中世～近世遺物実測図

第25表 岡遺跡第15次調査区 弥生時代～古代遺物観察表

No.	出土地点・取上番号	種別	器種	部位	法量(cm)			手法・調整等		色調		胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
143	ET(Tr2)	土器	甕	胴下～底部	-	5.1	-	ナデ、斜方向の工具ナデの後、横方向の工具ナデ、ナデ	ナデ、横方向の工具ナデの後、斜方向の工具ナデ、ナデ	灰黄色 2.5Y7/2	灰白色 2.5Y8/2	3mm以下の茶・白・黒・灰色の粒を含む。	弥生～古墳
144	II+M20Ⅲ 109・156	土器	甕	胴～底部	-	5.4	-	工具ナデの後、粗いナデ	横・斜方向の工具ナデの後、ナデ	橙色 5YR7/6	暗灰色 N3/	3mm以下の白・茶色の粒を多く含む。	古墳・縄代痕
145	M19Ⅲ317	土器	杯	底部	-	5.2	-	ナデ、横方向の工具ナデの後、ナデ	ナデ、回転工具ナデの後、ナデ	褐灰色 10YR5/1	にぶい黄橙色 10YR7/4	2mm以下の白・茶・灰色の粒を含む。	弥生～古墳
146	II	須恵器	坏身	口縁部	(12.2)	-	-	横方向の回転ナデの後、ナデ	横方向の丁寧な回転ナデ	灰色 5Y6/1	灰色 7.5Y6/1	1mm以下の白・黒・灰色の粒を含む。	古墳
147	II	須恵器	甕	胴部	-	-	-	ナデの後、格子目	同心円のタタキの後、ナデ	灰色 10Y6/1	灰白色 10Y7/1	1mm以下の黒・灰色の粒をわずかに含む。	古代・格子目 タタキ
148	II	須恵器	甕	胴部	-	-	-	ナデの後、格子目	ナデの後、工具ナデ	灰色 7.5Y5/1	灰白色 10Y7/1	1mm以下の灰・茶色の粒をわずかに含む。	古代・格子目 タタキ

法量の()は推定

第26表 岡遺跡第15次調査区 中世～近世遺物観察表

No.	出土地点・取上番号	種別	器種	部位	法量(cm)			手法・調整等		色調		胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
149	II	土師皿	坏	底部	-	(3.3)	-	ナデ、横方向の丁寧な工具ナデの後、ナデ	ナデ、横方向の工具ナデの後、丁寧なナデ	橙色 7.5YR7/6	橙色 7.5YR7/6	2mm以下の灰・茶色の粒を含む。1mm以下の透明・黒色光沢の粒をわずかに含む。	中世
150	II	土製品	土鍾	胴部	-	-	-	ナデ、縦方向の工具ナデの後、丁寧なナデ	-	灰白色 2.5Y7/1	浅黄色 2.5Y7/3	2mm以下の茶色の粒をわずかに含む。	古代～中世か
151	NT(Tr1)	陶器	掃鉢	口縁部	(28.0)	-	-	回転ナデ	回転ナデ	灰色 N5/	灰色 N5/	1mm以下の白色の粒を含む。	中世
152	II	青磁	皿	口縁～体部	-	-	-	施釉	施釉	オリーブ灰色 10Y6/2	オリーブ灰色 10Y6/2	精良	中世・中国青磁・蓮花文
153	II	青磁	皿	口縁部	(10.3)	-	-	施釉	施釉	オリーブ灰色 10Y6/2	オリーブ灰色 10Y6/2	精良	中世・中国青磁
154	II	青磁	碗	体部	-	-	-	施釉	施釉	オリーブ灰色 10Y6/2	オリーブ灰色 10Y6/2	精良	中世・中国青磁・蓮弁文
155	II	青花	皿	底部	-	(3.5)	-	施釉	施釉	明青灰色 5BG7/1	明青灰色 5BG7/1	精良	中世・葦筒底
156	II	青花	皿	底部	-	(7.0)	-	施釉	施釉	明青灰色 5BG7/1	明青灰色 5BG7/1	精良	中世
157	N18Ⅲ294	土器	焙烙	体部	-	-	-	横方向の工具ナデの後、ナデ、一部ミガキ	横方向の工具ナデの後、ナデ	にぶい黄橙色 10YR7/4	にぶい黄橙色 10YR7/4	1mm以下の茶・白・黒色の粒を含む。微細な無色透明の粒を多く含む。	近世
158	II	陶器	大甕	口縁部	-	-	-	自然釉。横方向の工具ナデ	横方向の工具ナデの後、指ナデ	灰褐色 5YR4/2	褐灰色 7.5YR4/1	2mm以下の白・茶色の粒を含む。	近世・備前焼
159	II	染付	小坏	底部	-	(2.2)	-	施釉	施釉	灰白色 N8/	灰白色 N8/	精良	近世

法量の()は推定

第4節 小結

本調査区は、岡遺跡の中央部付近の東端に位置する。出土した遺物は縄文時代～近世まで様々であったが、他の調査区同様、縄文時代、特に晩期の遺物が多い。遺構も縄文時代早期の集石遺構1基のみであった。そこで、本調査区は、縄文時代を中心にまとめた。

遺物が出土した層はⅡ～Ⅴ層で、Ⅳ・Ⅴ層は、Ⅲ層に鬼界アカホヤ火山灰が混在することから、縄文時代早期までに堆積した層である可能性が高い。Ⅲ層は出土した遺物がほとんど縄文時代晩期のものであったことから、弥生時代よりも前に流れ込みによって堆積し、Ⅱ層はそれ以降に堆積したり、近・現代に造成、攪乱されたりした層と考えられる。

縄文時代の遺構は、集石遺構が1基検出された(1号集石遺構=SII)(第62図)。検出面がⅣ層であり、配石や掘り込みを有していた。また、すぐそばから楕円押型文土器やチャート製の剥片、埋土中から貝殻条痕文土器が出土した。今回、集石遺構はこの1基しか確認できなかったが、調査区中央部から北東部にかけて、土石流の可能性のある多数の礫の流れ込みがあり、その中に赤化した礫が見られたり、比較的大きな礫が固まって確認された箇所があったりしたことから、他にも集石遺構があった可能性がある。縄文時代早期の土器は、先述したものの他に、山形押型文土器や塞ノ神式土器の可能性が考えられる土器が出土している。

調査区北東部Ⅲ層で、同一個体の土器が集中して出土した箇所があった(第64図)。本調査区は、地形的に流れ込みの遺物が多く、土器は破片で見つかることがほとんどであるのに対し、この浅鉢(14)は、晩期の組織痕土器(突帯文付)で、土圧等によって平たく押しつぶされていた。本調査区出土の土器で、ほぼ一個体分に近い状態で出土したり、組み上げて完形に近い状態になったりした土器は、この1点のみであった。また、重なるように打製石斧(115)が出土している。これらの出土箇所を調査したが、明確な掘込等は確認されず、遺構とは認定できなかった。縄文時代晩期の土器は、先述したものの他に、孔列文土器、精

製土器(黒色磨研土器含む)、貝殻条痕文土器、無文土器が出土している。

縄文時代の石器は、流れ込みにより層位の確定や型式による時期の判断が困難で、「縄文時代の石器」として一括分類している。器種として、石鏃、石匙、石核、剥片、スクレイパー、石斧、石錘、敲石、磨石、石皿等が出土している。その中で、石斧と石錘についてふれたい。石斧の中で、115は長さ約20cm、幅約8cm、高さ約5cm、重さ約1.1kgの尾鈴山溶結凝灰岩製で、石材や長さ、重量が他の石斧と大いに異なる。本遺跡の他の調査区での出土例も少ないことから、土掘り具や伐採具以外の使用法の可能性も考えられる。石錘について、第7次調査では、大きさから、小河川である高森川での使用よりも、海での使用の可能性が高い⁽²⁾と指摘している。本調査区では、長さ約4～10cm、重さ約30～400gの石錘が出土している。重さのピークは、100～200gである。日向灘はもとより、高森川や周辺の河川でも使用していた可能性も考えられる。石器の石材は、チャート、砂岩、尾鈴山溶結凝灰岩、頁岩、珪質頁岩、安山岩、黒曜石等幅広い。黒曜石の割合は、姫島産(大分県)が90%以上と圧倒的に多いが、その他に、腰岳産(佐賀県)、三船産(鹿児島県)が確認されている。

弥生時代以降の遺物は、土器や陶磁器等が見られるが出土量は少なく、また、遺構も確認されていないことから当時の生活をうかがい知ることは困難である。ただし、中世～近世の陶磁器については、上段にある第7次調査区に中世～近世の掘立柱建物跡が確認されていることから、そこから流れ込んできた可能性が考えられる。

本調査区は遺構が少なく、地形的に遺物は流れ込こんだものがほとんどであり、本遺跡の概要を詳細に語ることは困難である。ただし、出土した石器等から、海と山に囲まれた海成段丘上にある遺跡として、海の幸・山の幸をふんだんに取り入れた生活を送っていたことがうかがわれる。

註

- (1) 宮崎県埋蔵文化財センター2002『藏座村遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第53集
- (2) 宮崎県埋蔵文化財センター2012『岡遺跡(第6・7次調査)・坂元第2遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第212集

第V章 自然科学分析

自然科学分析では、降灰層準を推定して遺物包含層の年代や、層序に関する基本的な情報を得るために、旧石器時代～縄文時代早期の包含層の堆積層から試料を採取し、層序対比の指標となる広域テフラ（火山灰）の分析と、出土遺構の年代を推定するために放射性年代測定を実施した。岡遺跡（第9時調査区）では集石遺構4基（SI1～3、5）と炉穴1基（SP1）、土坑1基（SC1）、石組遺構1基（SX1）を対象とし、岡遺跡（第15次調査区）では集石遺構（SI1）を対象とした。

各分析の方法・結果等の詳細については下記に掲載した。

第1節 岡遺跡第（第9・15次）調査のテフラ（火山灰）分析

1-1. 試料

分析試料は、第9次調査区7トレンチのⅦa層（試料1）、Ⅶc層（試料2）、Ⅷb層（試料3、4）、および第15次調査区東トレンチのⅦ'層（試料5）、Ⅶ層（試料6）の計6試料である。

1-2. 分析方法

テフラの岩石学的諸特性（重軽鉱物組成、火山ガラスの形態分類、火山ガラスの屈折率）について、以下の方法で分析を行った。

（1）前処理

湿式用の篩（2～4φ）を用いて水洗しながら各粒径ごとに篩分けを行い、2～3φ（0.250～0.125mm）および3～4φ（0.125～0.063mm）の粒子について超音波洗浄を行って分析対象とした。

（2）重軽鉱物組成

テトラブロムエタン（比重：2.96）を用いて重液分離を行い、重鉱物と火山ガラスを含む軽鉱物のフラクションに区分した。重鉱物のフラクションで得られた鉱物粒子は、磁性分離して磁性鉱物を秤量した。重鉱物粒子はレーキサイドセメントで封入してプレパラートを作成し、100倍の偏光顕微鏡下で重鉱物の鑑定を行った。

（3）火山ガラスの形態分類

火山ガラスの形態分類は、吉川（1976）や町田・

新井（1978）の分類があるが、ここでは気泡（bubble）の大きさ、ガラスの厚さ、気泡の形状などを指標にして定めた遠藤・鈴木（1980）の分類基準に従った。以下にその基準を示す。

A型：気泡の曲率半径が大きく火山ガラスの壁が薄い平板状の火山ガラス

A'型：気泡と気泡の接合部が気泡の壁の平板上にXやY字状の稜を持つ火山ガラス

B型：平板状であるが、火山ガラスの壁が異常に厚く屋根瓦状、カマボコ状やフレーク状の火山ガラス

C型：A、A'型に比べて小さな曲率を持つ火山ガラスで透明なガラスの壁に幾つかの気泡が集まってできた火山ガラス

D型：C型とほぼ同じ曲率で、その気泡が管状に細長く引き伸ばされ、透明な火山ガラスに数本の平行した稜を持つ火山ガラス

E型：D型よりも管が細長く繊維を束ねた形状を示す火山ガラス
F型：最も曲率半径が小さく、不定形の多数の気泡を持った軽石状の火山ガラス

（4）火山ガラスの屈折率測定

テフラに含まれる火山ガラス（n1）について、温度変化型屈折率測定装置（古澤地質社製、MAIOT2000）を用いて屈折率測定を行った。

1-3. 分析結果

テフラの岩石学的諸特性（重軽鉱物組成、火山ガラスの形態分類、火山ガラスの屈折率）を表27・28および第77図に示す。

（1）第9次調査区7トレンチ

Ⅶa層（試料1）では、重鉱物の含有率は16.9%で、このうち40.8%が斜方輝石、11.4%が単斜輝石、7.8%が普通角閃石、4.9%が黒雲母、極少量のジルコンである。なお、重鉱物には表面が著しく風化して不明な鉱物が多数認められた。軽鉱物中に含まれる火山ガラスの含有率は17.0%で、その大部分はA'型のバブルウォールタイプであるが、わずかにD型およびF型の軽石タイプの火山ガラスが含まれている。火山ガラスの屈折率（n1）は、1.4955-1.4983の範囲である。

Ⅶc 層 (試料 2) では、重鉱物の含有率は 18.3% で、このうち 34.1% が斜方輝石、6.3% が単斜輝石、4.7% が普通角閃石、2.8% が黒雲母である。なお、重鉱物には表面が著しく風化して不明な鉱物が約 50% 程度認められた。軽鉱物中に含まれる火山ガラスの含有率は 14.3% で、その大部分は A' 型のバブルウォールタイプであるが、わずかに D 型および E 型の軽石タイプの火山ガラスが含まれている。火山ガラスの屈折率 (n_1) は、1.4956-1.4989 の範囲である。

Ⅷb 層上部 (試料 3) では、重鉱物の含有率は 9.7% で、このうち 42.2% が斜方輝石、12.7% が単斜輝石、4.8% が普通角閃石、7.2% が黒雲母である。なお、重鉱物には表面が著しく風化して不明な鉱物が多数認められた。軽鉱物中には火山ガラスは含まれていなかった。

Ⅷb 層下部 (試料 4) では、重鉱物の含有率は 16.8% で、このうち 14.4% が斜方輝石、6.8% が単斜輝石、2.4% が普通角閃石、7.6% が黒雲母、極少量のジルコンである。なお、重鉱物には表面が著しく風化して不明な鉱物が約 70% 程度認められた。軽鉱物を 500 個以上計測して A 型の火山ガラスが 1 個検出された。

(2) 第 15 次調査区東トレンチ

Ⅵ' 層 (試料 5) では、重鉱物の含有率は 2.3% で、このうち 11.3% が斜方輝石、8.2% が単斜輝石、1.6% が普通角閃石、8.6% が黒雲母、極少量のジルコンである。なお、重鉱物には表面が著しく風化して不明な鉱物が約 70% 程度認められた。軽鉱物中に含まれる火山ガラスの含有率は 1.0% で、A 型および A' 型の火山ガラスが含まれている。火山ガラスの屈折率 (n_1) は、1.4971-15000 の範囲である。

Ⅶ 層 (試料 6) では、重鉱物の含有率は 3.7% で、このうち 19.0% が斜方輝石、10.4% が単斜輝石、1.0% が普通角閃石、3.5% が黒雲母である。なお、重鉱物には表面が著しく風化して鑑定不可能や不明な鉱物が約 70% 程度認められた。軽鉱物中に含まれる火山ガラスの含有率は 1.0% で、A 型および A' 型の火山ガラスが含まれている。火山ガラスの屈折率 (n_1) は、1.4972-15004 の範囲である。

1-4. 考察

(1) 第 9 次調査区 7 トレンチ

テフラ分析の結果から、Ⅶ a 層 (試料 1) と Ⅶc 層 (試料 2) には少量ながら始良 Tn 火山灰 (AT, 約 2.6 ~ 2.9 万年前) に由来する火山ガラスが含まれていると考えられる。なお、火山ガラスの屈折率がやや低いことや、AT には含まれない角閃石も認められることから、AT 以外のテフラ粒子が混在している可能性も考えられる。

(2) 第 15 次調査区東トレンチ

テフラ分析の結果から、Ⅵ' 層 (試料 5) と Ⅶ 層 (試料 6) には少量ながら始良 Tn 火山灰 (AT, 約 2.6 ~ 2.9 万年前) に由来する火山ガラスが含まれていると考えられる。

文献

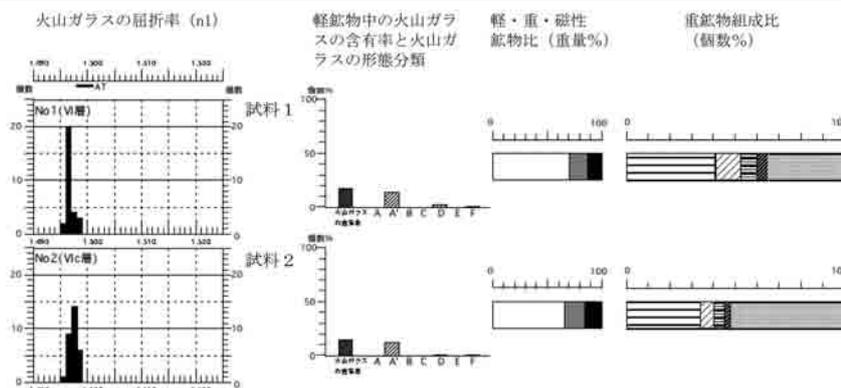
- 遠藤邦彦・鈴木正章 (1980) 「立川・武蔵野ローム層の層序と火山ガラス濃集層」『考古学と自然科学』No.13, p.19-30.
町田 洋・新井房夫 (1976) 「広域に分布する火山灰 - 始良 Tn 火山灰の発見とその意義」『科学』46:339-347.
町田 洋・新井房夫 (1978) 「南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ - アカホヤ火山灰」『第四紀研究』17, p.143-163.
町田 洋・新井房夫 (2003) 『新編火山灰アトラス - 日本列島とその周辺 -』東京大学出版会, p.58-63.
吉川周作 (1976) 「大阪層群火山灰層について」『地質学雑誌』82, p.497-515.

第 27 表 重軽鉱物組成表

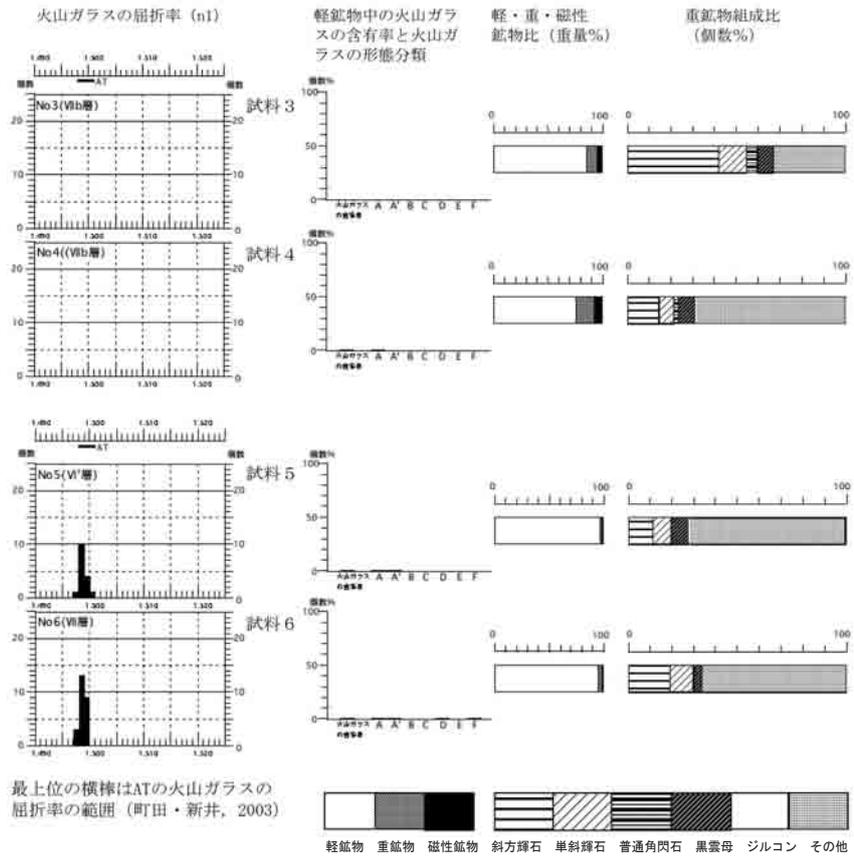
調査区		第 9 次調査区				第 15 次調査区	
サンプル名		1	2	3	4	5	6
試料重量 (g)		0.158	0.083	0.290	0.126	0.307	0.297
軽鉱物 (g)		0.108	0.054	0.248	0.096	0.294	0.285
重鉱物 (g)		0.026	0.015	0.028	0.021	0.007	0.011
磁性鉱物 (g)		0.020	0.013	0.012	0.008	0.001	0.001
回収重量合計 (g)		0.154	0.082	0.288	0.125	0.302	0.297
重鉱物組成 (個)	斜方輝石	100	87	70	36	29	55
	単斜輝石	28	16	21	17	21	30
	普通角閃石	19	12	8	6	4	3
	黒雲母	12	7	12	19	22	10
	ジルコン	1	0	0	1	3	0
	不明及その他	85	133	55	171	178	191
合計		245	255	166	250	257	289
火山ガラス (個)		69	57	0	1	6	6
非火山ガラス (個)		338	342	420	510	607	600
火山ガラス形態分類 (個)	A型	0	0	0	1	1	1
	A'型	57	47	0	0	5	5
	B型	0	0	0	0	0	0
	C型	0	0	0	0	0	0
	D型	10	6	0	0	0	0
	F型	0	0	0	0	0	0
合計		2	4	0	0	0	0

第 28 表 火山ガラスの形態分類

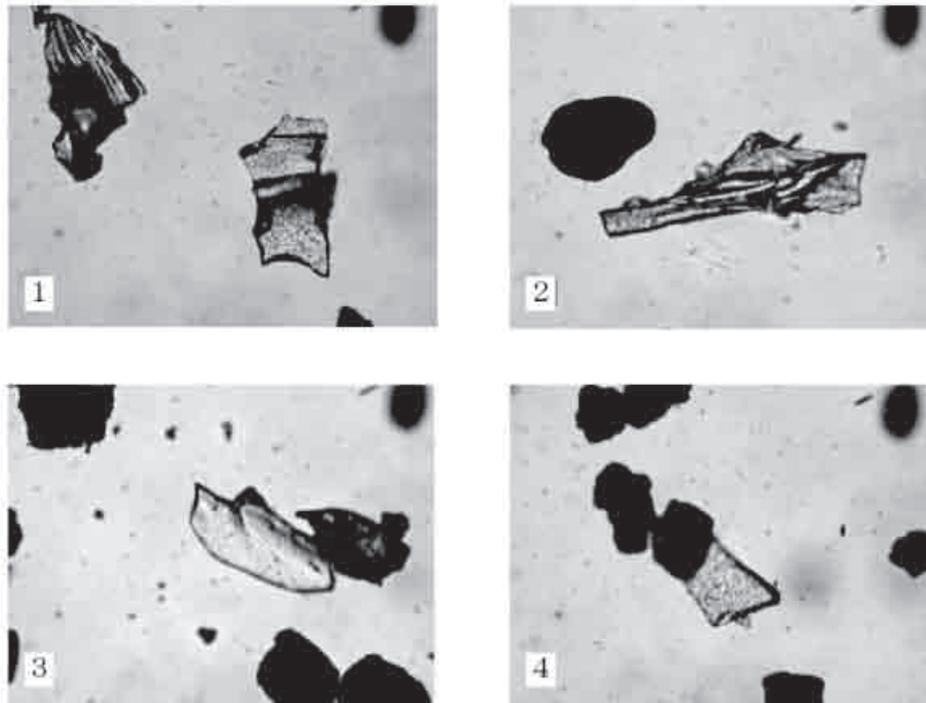
調査区		第 9 次調査区				第 1 5 次調査区	
サンプル名		1	2	3	4	5	6
重液分離後の回収率 (重量%)		97.47	98.80	99.31	99.21	98.37	100.00
軽鉱物の含有率 (重量%)		70.13	65.85	86.11	76.80	97.35	95.96
重鉱物の含有率 (重量%)		16.88	18.29	9.72	16.80	2.32	3.70
磁性鉱物の含有率 (重量%)		12.99	15.85	4.17	6.40	0.33	0.34
合計		100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00
重鉱物組成 (個数%)	斜方輝石	40.82	34.12	42.17	14.40	11.28	19.03
	単斜輝石	11.43	6.27	12.65	6.80	8.17	10.38
	普通角閃石	7.76	4.71	4.82	2.40	1.56	1.04
	黒雲母	4.90	2.75	7.23	7.60	8.56	3.46
	ジルコン	0.41	0.00	0.00	0.40	1.17	0.00
	不明及その他	34.69	52.16	33.13	68.40	69.26	66.09
合計		100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00
火山ガラスの形態分類 (個数%)	A型	0.00	0.00	0.00	0.20	0.16	0.17
	A'型	14.00	11.78	0.00	0.00	0.82	0.83
	B型	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
	C型	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
	D型	2.46	1.50	0.00	0.00	0.00	0.00
	F型	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
火山ガラス含有率 (個数%)		16.95	14.29	0.00	0.20	0.98	0.99
火山ガラスの屈折率 (n_D)		1.4955-1.4983	1.4956-1.4989	-	-	1.4971-1.5000	1.4972-1.5004
火山ガラスの屈折率 (n_D) の平均値		1.4966	1.4974	-	-	1.4987	1.4989



第 77 図 テフラ分析結果 (1)



第 77 図 テフラ分析結果 (2)



テフラの顕微鏡写真

- 1 : 試料 1 に含まれる A'型および D 型の火山ガラス
 - 2 : 試料 2 に含まれる D 型の火山ガラス
 - 3 : 試料 5 に含まれる A 型の火山ガラス
 - 4 : 試料 6 に含まれる A 型の火山ガラス
- ※粒子の大きさは 0.063 ~ 0.125mm

第2節 岡遺跡(第9・15次)調査の放射性炭素年代測定

2-1. 試料と方法

第29表参照。

2-2. 測定結果

加速器質量分析法(AMS)によって得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素(¹⁴C)年代および暦年代(較正年代)を算出した。表1にこれらの結果を示し、図1に暦年較正結果(較正曲線)を示す。

(1) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定¹⁴C/¹²C比を補正するための炭素安定同位体比(¹³C/¹²C)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を-25(‰)に標準化することで同位体分別効果を補正する。

(2) 放射性炭素(¹⁴C)年代測定値

試料の¹⁴C/¹²C比から、現在(AD1950年基点)から何年前かを計算した値。¹⁴Cの半減期は5730年であるが、国際的慣例によりLibbyの5568年を用いた。統計誤差(±)は1 σ (68.2%確率)である。¹⁴C年代値は下1桁を丸めて表記するのが慣例であるが、暦年較正曲線が更新された場合のために下1桁を丸めない暦年較正用年代値も併記した。なお、No.9についてはF¹⁴C(AD1950年の¹⁴C濃度を1.0としたときの¹⁴C濃度)が1.0以上であり、現代の試料(modern)であることを示している。

(3) 暦年代(Calendar Years)

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中¹⁴C濃度の変動および¹⁴Cの半減期の違いを較正することで、放射性炭素(¹⁴C)年代をより実際の年代値に近づけることができる。暦年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な¹⁴C測定値およびサンゴのU/Th(ウラン/トリウム)年代と¹⁴C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。較正曲線のデータはIntCal 09、較正プログラムはOxCal 3.1である。なお、AD1950年以降の試料についてはOxCal 4.1(較正曲線データはBomb04NH2:核実験後の北半球における較正曲線データ)を使用した。

暦年代(較正年代)は、¹⁴C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で表し、OxCal

の確率法により1 σ (68.2%確率)と2 σ (95.4%確率)で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の1 σ ・2 σ 値が表記される場合もある。()内の%表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

2-3. 所見

加速器質量分析法(AMS)による放射性炭素年代測定の結果、No.1で9370±30年BP(2 σ の暦年代でBC8740~8560年)、No.2では9120±30年BP(BC8440~8270年)、No.3では9370±30年BP(BC8740~8560年)、No.4では10880±35年BP(BC10960~10670年)、No.5では9170±30年BP(BC8470~8290年)、No.6では9210±35年BP(BC8550~8500, 8490~8300年)、No.7では585±20年BP(AD1300~1370, 1380~1410年)、No.8では585±20年BP(AD1300~1370, 1380~1410年)の年代値が得られた。No.9はAD1950年以降の試料であり、何らかの原因で現代の炭化材が混入した可能性が考えられる。

文献

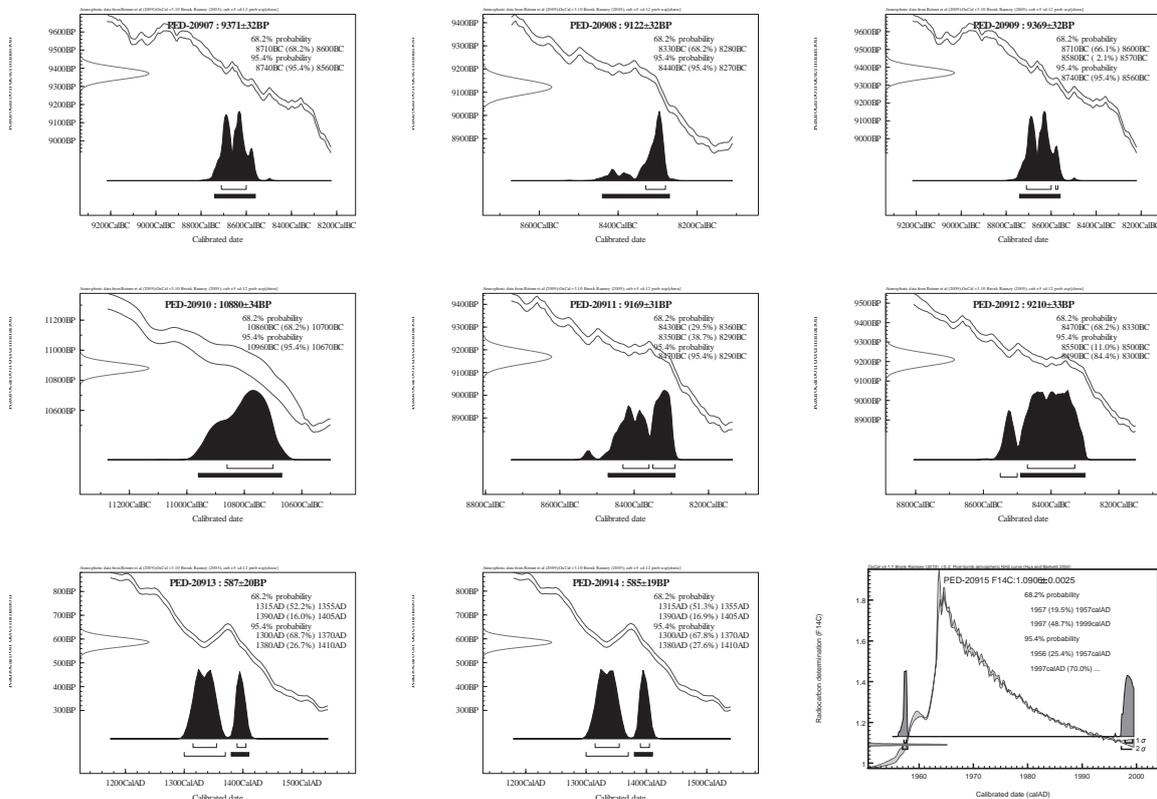
- Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy. The OxCal Program. Radiocarbon, 37(2), p.425-430.
Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, p.355-363.
Hua, Q., & Barbetti, M. (2004). Review of tropospheric bomb C-14 data for carbon cycle modeling and age calibration purposes. Radiocarbon, 46(3), p.1273-1298.
Paula J Reimer et al., (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, p.1111-1150.
中村俊夫(2000)「放射性炭素年代測定法の基礎」『日本先史時代の¹⁴C年代』p.3-20.

第 29 表 測定試料、前処理・調整法および測定法

試料No.	採取箇所	種類	前処理・調整法	測定法
No. 1	第 9 次, SI 1, 埋土中	炭化材	超音波洗浄, 酸-7401-酸処理	AMS
No. 2	第 9 次, SI 2, 埋土中	炭化材	超音波洗浄, 酸-7401-酸処理	AMS
No. 3	第 9 次, SI 3, 埋土中	炭化材	超音波洗浄, 酸-7401-酸処理	AMS
No. 4	第 9 次, SI 5, 埋土中	炭化材(灰質)	超音波洗浄, 酸-7401-酸処理	AMS
No. 5	第 9 次, SP2, A焼土面	炭化材	超音波洗浄, 酸-7401-酸処理	AMS
No. 6	第 9 次, SP 1, B焼土中	炭化材	超音波洗浄, 酸-7401-酸処理	AMS
No. 7	第 9 次, SC1, 埋土中	炭化材	超音波洗浄, 酸-7401-酸処理	AMS
No. 8	第 9 次, SX1, 埋土中	炭化材	超音波洗浄, 酸-7401-酸処理	AMS
No. 9	第15次, SI 1, 埋土中	炭化材	超音波洗浄, 酸-7401-酸処理	AMS

第 30 表 放射性炭素年代測定結果

試料No.	測定番号 PED-	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正用 年代(年BP)	^{14}C 年代 (年BP)	暦年代(較正年代): cal-	
					1 σ (68.2%確率)	2 σ (95.4%確率)
1	20907	-28.95 ± 0.18	9371 ± 32	9370 ± 30	BC8710-8600 (68.2%)	BC8740-8560 (95.4%)
2	20908	-29.30 ± 0.19	9122 ± 32	9120 ± 30	BC8330-8280 (68.2%)	BC8440-8270 (95.4%)
3	20909	-28.50 ± 0.18	9369 ± 32	9370 ± 30	BC8710-8600 (66.1%) BC8580-8570 (2.1%)	BC8740-8560 (95.4%)
4	20910	-22.04 ± 0.17	10880 ± 34	10880 ± 35	BC10860-10700 (68.2%)	BC10960-10670 (95.4%)
5	20911	-27.74 ± 0.14	9169 ± 31	9170 ± 30	BC8430-8360 (29.5%) BC8350-8290 (38.7%)	BC8470-8290 (95.4%)
6	20912	-27.42 ± 0.18	9210 ± 33	9210 ± 35	BC8470-8330 (68.2%)	BC8550-8500 (11.0%) BC8490-8300 (84.4%)
7	20913	-26.77 ± 0.19	587 ± 20	585 ± 20	AD1315-1355 (52.2%) AD1390-1405 (16.0%)	AD1300-1370 (68.7%) AD1380-1410 (26.7%)
8	20914	-26.10 ± 0.16	585 ± 19	585 ± 20	AD1315-1355 (51.3%) AD1390-1405 (16.9%)	AD1300-1370 (67.8%) AD1380-1410 (27.6%)
9	20915	-30.29 ± 0.16	F ¹⁴ C : 1.0906 ± 0.0025	modern (現代)	Bomb04NH2 : AD1957-1957 (19.5%) AD1997-1999 (48.7%)	Bomb04NH2 : AD1956-1957 (25.4%) AD1997 (70.0%)



第 78 図 暦年較正結果

第Ⅵ章 総括

岡遺跡の調査では、旧石器時代、縄文時代早期、縄文時代晩期、弥生時代～古墳時代、古代、中世～近世、近現代の遺構や遺物を確認している（第80・81 図）。日向市域の平岩地区の発掘調査は平成 23 年度報告書が刊行された岡遺跡（第6・7 次調査）の他なく、今回の調査によって更に当地域の歴史を復元する上で重要な成果が得られたと考える。

ここでは、第6・7 次調査の成果に加え、第9・13・15 次調査の報告を時代ごとの様相について検討を進める。

旧石器時代

旧石器時代を示す火山灰層として始良 Tn 火山灰層（以下、AT）があるが、AT は第6次調査区と第9次調査区、第15次調査区で確認された。遺構・遺物としては、第9次調査区で礫群1基を確認し、第6次調査区のもの合わせると2基の検出になる。遺物は乏しいものの、AT を境に2 時期の遺物が認められた。日向市内での AT 下位からの遺物の出土は塩見地区の奥野 B 遺跡と駄撃原遺跡につづき3 例目である。しかし、AT 下位の調査面積が狭小で、遺物数も少なく、遺構も現段階で確認されていないことから、当時の旧石器文化や生活をうかがい知ることは困難である。また、自然科学分析の結果、第9次調査区で確認された AT は、AT に由来する火山ガラスが含まれているものの、火山ガラスの屈折率がやや低いことや、AT には含まれない角閃石も認められ、AT 以外のテフラ粒子が混在している可能性も考えられることから、堆積した年代が異なる可能性があることに注意したい（第Ⅴ章参照）。

（久保田）

縄文時代早期

本遺跡では、縄文時代早期の遺構・遺物が確認されており、遺構は現在までで集石遺構 12 基、炉穴 8 基、土坑 9 基を検出している（第 81 図）。第6次調査では包含層出土の土器（貝殻円筒系土器、稲荷山式相当の押型文土器、手向山式土器）等から、集石遺構と炉穴を早期前半と後半に分け

ている。第9次調査区で確認された SI5 では BC10960～10670 の年代結果が出され、早期初頭の年代に当たる。SI 1～3 の年代は BC8740～8270 で比較的まとまった年代が出ている。これは、SI 1～3 と SP1・2 が第6次調査区と比較的近い年代測定結果が出ていることから、第9次調査区の集石遺構と炉穴の年代は縄文時代早期前半であることが言える。また、第9次調査からは円筒形土器（第9次1）が包含層から出土している。

縄文時代早期における遺物の中で、第6次調査区から第15次調査に共通して出土する同タイプの石斧（第6次 40・164、第7次 163・170、第9次 72・73・75、第13次 115・117、第15次 112・115 等）が見られた。第6・9次調査区からは縄文時代早期層から出土しているが、これらは、背面に自然面を残し、そのほとんどが表面にのみ剥離がみられ、横断面が台形状になるものである。縄文時代早期に相当すると考えられる（第6次 40、第9次 72・73・79 等）。この石斧は、第7・13・15 次調査区においては二次堆積アカホヤ火山灰層からの出土で、両側面の剥離が急斜度に加工が入り 20cm 大の大型（第7次 170、第13次 117、第15次 115）になるなど、若干の違いがみられる。また、日向市東郷町の向原中尾第1・2 遺跡からも同タイプの石斧（p 22、65・68）が縄文時代早期層から出土していることから、ここでは縄文時代早期の遺物として扱ったが、第15次調査区の14 の土器と 115 の石斧が相伴して出土していることなどから、縄文時代晩期まで継続的に利用されていた石斧である可能性も考えられる。なお、このタイプの石斧は他地域には見られないことから、日向市域の縄文時代に特徴的な石斧と言える。

縄文時代早期では、特に第6・9次調査区で遺構数や遺物が共に増加することから、この時期をピークに人々が生活していたと考えられる。

（久保田）

縄文時代晩期

縄文時代晩期の土器は、平成 22 年度に調査が行われた第6次調査区で無刻目突帯期の遺物が出

土し、7次調査区では無刻目突帯文～刻目突帯文の時期の遺物が出土している。平成23年度調査を実施した第9次、第13次、第15次調査区においては、無刻目突帯文期の遺物の出土がみられた。これらの調査によって出土した粗製深鉢については、無刻目突帯文や、孔列文、底部に張り出しがない等の特徴がみられ、粗製浅鉢については組織痕をもつなどの特徴があるものがみられた。また精製浅鉢については、口縁部が短く、鱗状やリボン状の突起をもたないものがみられた。粗製土器や精製浅鉢の特徴からみると、堂込秀人氏が論じている⁽¹⁾黒川式の新段階に相当すると考えられる。一方、口縁部に鱗状の突起をもつもの(第6次128・第13次51)や、胴部付近にリボン状の突起をもつもの(第13次62)など器形的に黒川式の中段階と思われるものも散見された。しかし、量的には新段階のものが多くを占めている。

第7次調査区のみ無刻目突帯文～刻目突帯文期の遺物が出土したが、時期的な違いが生じた影響の一つになった可能性として、第6次、第9次、第13次調査区とは小河川である高森川を挟んだ位置にあることや遺物が鬼界アカホヤ火山灰の二次堆積層から出土していることから第7次調査区のみ他の調査区と異なる場所からの遺物が流れ込んだことが考えられる。

(竹下)

弥生時代～古代

弥生時代～古墳時代前期については少量の遺物しか出土しておらず、遺構も検出されていない。しかし、古墳時代中期になると竪穴建物跡が第13次調査区から1軒検出されている。岡遺跡全体で古墳時代の遺物は出土しているものの、遺構の検出はこの1軒のみである。また、竪穴建物が検出された立地は、段丘上の狭小な緩斜面に位置しており、遺物出土量も少ないことから、小規模な集落が形成されていたと考えられる。第7次調査区で古墳時代中期に相当する土師器甕、第15次調査区で須恵器が出土していることから、古墳時代における集落域は高森川の両岸にあったと考えられる。

古代以降では、第9次調査区から陥し穴状遺構が1基検出されたが、検出面が浅く掘り込みから

は年代が確定出来なかった。しかし、布痕土器などが出土したことから古代以降の所産であると考えられる。また、陥し穴状遺構内からは羽口片も出土し、第6次調査区からは鉄滓、第7次調査区からは二次被熱・二次剥離のみられる羽口片が出土していることから、この地域において鍛冶が行われていた可能性は高まったと言える。

(久保田)

中世～近世

今回の調査では、掘立柱建物跡が第9次調査区では2棟、第13次調査区からも2棟検出し、第7次調査区の調査結果も合わせると、岡遺跡全体では9棟の検出となった。第7次調査区は柱穴から出土した遺物等によって中世末～近世初頭とし、第9次調査区は中世後半～近世末、第13次調査区は近世の掘立柱建物跡が検出されている。最大面積のものは第13次調査区で検出された50㎡を越えるもので、次いで第9次調査区の43.8㎡で規模も大きく、中世の貿易陶磁器(青磁・白磁・青花)等も多数出土し、備前焼の摺鉢も出土している。第9次調査区で、表土から天目茶碗片(図版10)も出土している。これらのことから、当時の武士階級の人々が暮らしていた可能性のある建物跡と考えられる。なお、本遺跡の南には本村城跡があり『日向市史(通史編)』によると、本村城跡は中世末に築城された山城で、城のつくりから有事の際にのみ利用されたと考えられている。通常住まう住居の候補として、城の東側に位置する幸福寺が挙げられ、そこに構え暮らしていた可能性があると考えられる。今回の調査で明らかとなった、岡遺跡で検出された建物跡も本村城跡に関連する人物の住まいであった可能性が高い。また、平岩の地名が出てくる史料として近世に書かれた『上井覚兼日記』がある。宮崎は、島津氏の支配によって各城に島津氏の家臣を地頭として配置し、その中に山東の諸地頭を統括する役目として上井覚兼が宮崎に在城することとなった。その上井覚兼が天正13(1585)年に行われた狩りの行事で塩見城を訪れた際に、穂北(現西都市)から美々津を経由し、平岩に入り、そこで宿泊をしたとある。詳しい記述等は無く、詳細は不明であるが、本遺跡で検出した掘立柱建物跡が、この宿舎とし

て利用された可能性が考えられるのではないだろうか。

(久保田)

近代

明治 10 (1877) 年 7 月～8 月にかけて日向地域が西南戦争の戦場の地となり、8 月 7 日～8 日にかけて耳川を挟んだ攻防、9 日には薩軍の防御を破られ美々津・細島が陥落している。その後、官軍が富高新町(現日向市街地)を占拠する。薩軍は陣地を放棄し延岡まで北進し、15 日に延岡北方で激しい戦いとなるも、官軍の勝利に終わった。これが、日向・延岡市域の戦いの概要である。第 9 次調査区では、SC 3 より鉄製銃弾が出土していることが特筆され、この土坑からは 19 世紀頃の羽釜や陶磁器が出土している。当時の主流であった銃がエンフィールド銃またはスナイドル銃であったため、どちらかの弾丸であると考えられる。出土した鉄製銃弾は重量が少なく、施条による回転が得られないため、威力もほとんどなかったと思われる。『鹿児島県史料 西南戦争 第三卷「明治十年役薩軍資料」』によると薩軍は鉄製弾を送られているが、実際の戦場では見つかっておらず、見られたのは鉛と錫の合金や青銅製の銃弾であった。資料の中に「為探打」とあり、鉄製弾は実戦用ではなく、戦闘がないときに威嚇のために発砲したものと考えられている。岡遺跡周辺での具体的な戦いの様子が書かれた記録等はないが、鉄製銃弾 1 点のみの出土で、周囲にそれ以外の銃弾は見つかっていないため、持ち込まれた可能性も考えられるが、威嚇のための発砲であった事も考えられる。

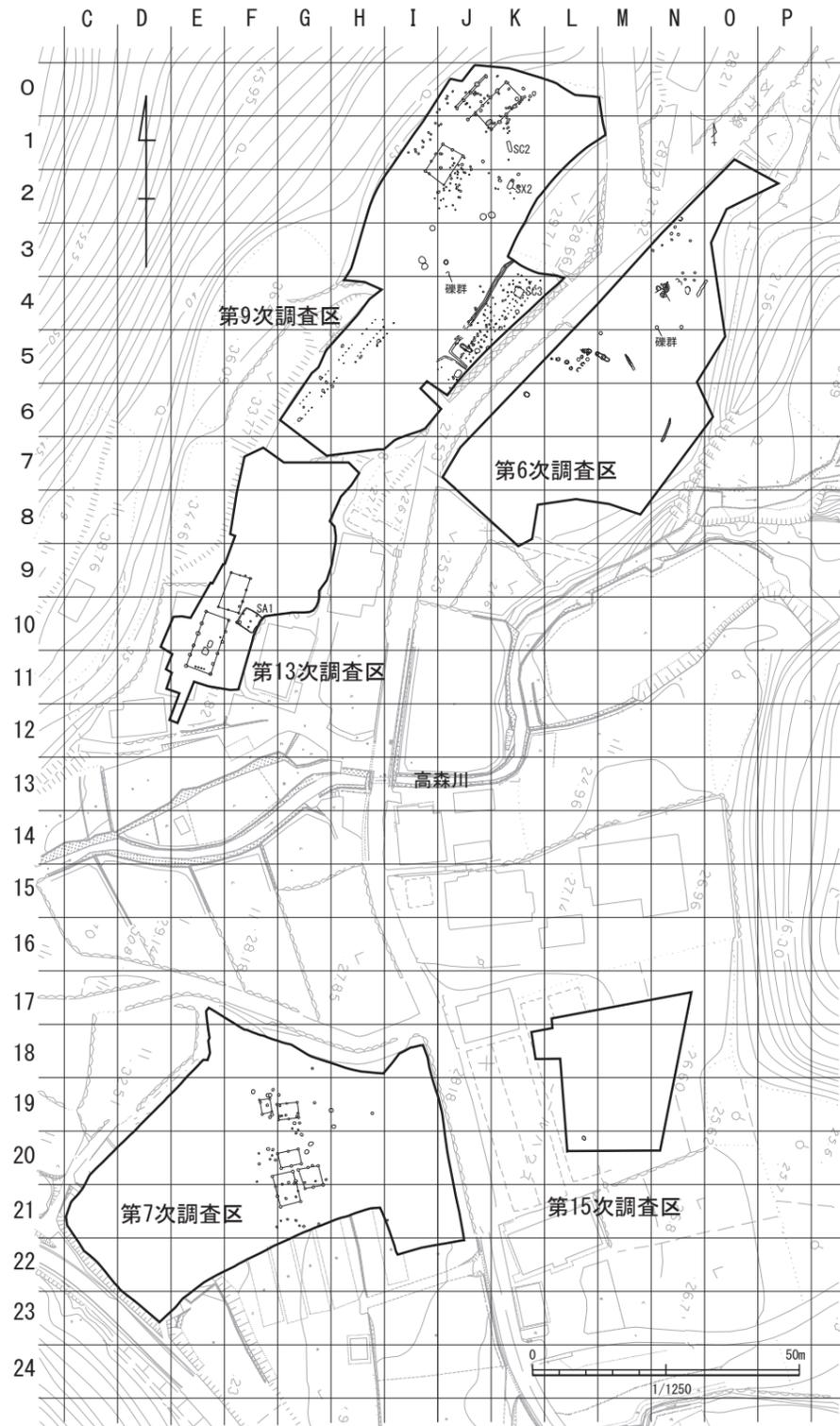
(久保田)

参考文献

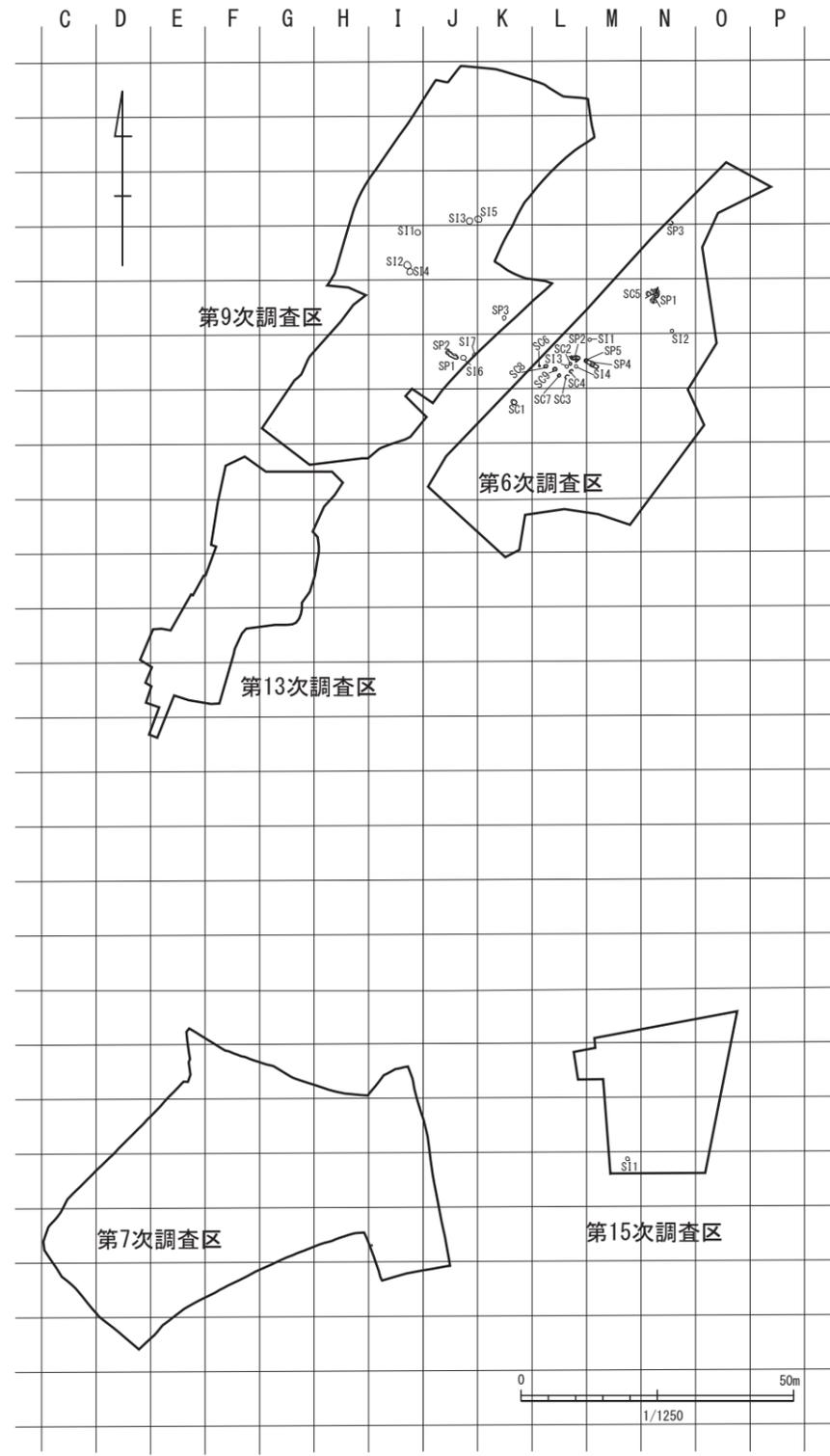
参考文献

- 宮崎県埋蔵文化財センター 2001『王子原遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 45 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2004『下那珂遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 90 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2006『下耳切第 3 遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 125 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2007『吉牟田遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 154 集

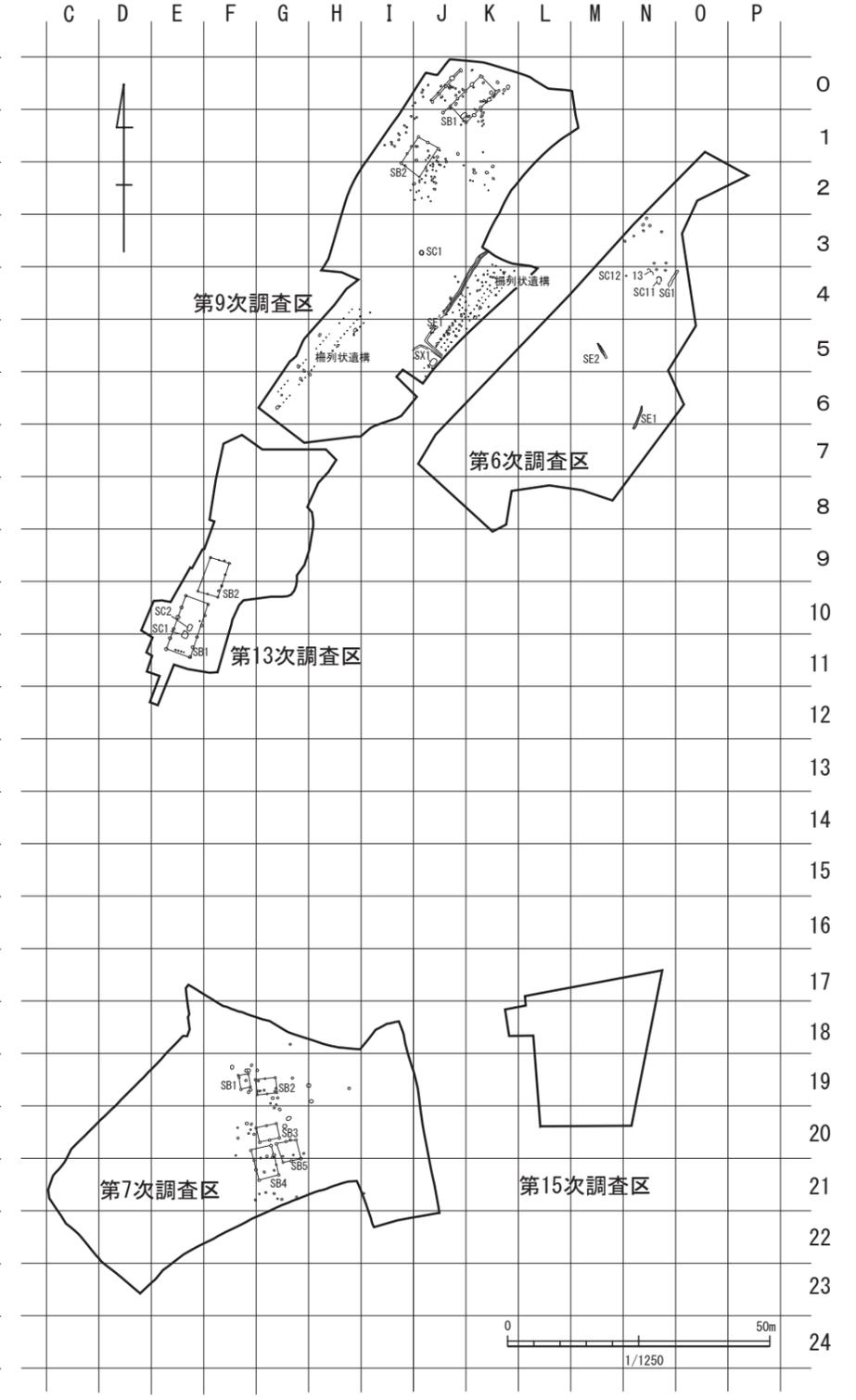
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2008『市納上第 2 遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 170 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2009『尾花 A 遺跡 1 旧石器時代～縄文時代編』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 185 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2011『板平遺跡 (第 3・4 次調査)』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 199 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2011『内野々遺跡 内野々第 2・第 3 遺跡 内野々第 4 遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 202 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2007『塩見城跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 210 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2012『岡遺跡 (第 6・7 次調査)・坂元第 2 遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 212 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2012『向原中尾第 1・2 遺跡 向原中尾第 4 遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 213 集
- 日向市史編さん委員会 2010『日向市史 通史編』日向市
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2007『上水流遺跡 1 縄文時代中期後半から弥生時代編』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (113)
- 愛媛県埋蔵文化財センター 1983『瀬戸内海大橋関連遺跡 埋蔵文化財調査報告書Ⅲ (見近島城)』10 集
- 愛媛県埋蔵文化財センター 1994『四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 V (西条市編)』第 44 集
- 第 27 回中世土器研究会 2008『瓦土器の出現と定着 - 瓦土器を考える (後編) -』北九州教育事業団埋蔵文化財調査室 1997『小倉城 2 (第 3 分冊 遺物編)』196 集
- 宮崎縄文研究会 1998『宮崎県内の平格式土器・壺ノ神式土器集成』宮崎縄文研究会資料集 2
- 九州縄文研究会 2003『九州縄文時代の集石遺構と炉穴』第 13 回宮崎大会
- 雨宮瑞生 1991『南九州縄文早期の石鏃変遷』『南九州縄文通信』No. 5
- 千羨幸 2007『西日本の孔列土器』『日本考古学』第 25 号
- 日向市編さん委員会 2009『日向市史 (資料編)』
- 堂込秀人 1997『南九州縄文晩期土器の再検討 - 入佐式と黒川式の細分』『鹿児島考古』第 31 号 鹿児島県考古学会
- 八木澤一郎 1994『南九州の集石遺構』『南九州縄文通信』No. 8
- 柴畑光博 2004『都城盆地における中世土器の編年に関する基礎的研究 (1)』『宮崎考古』第 19 号 宮崎考古学会
- 外山隆之・原田亜紀子 2004『都城市における中世掘立柱建物跡の類型化』『宮崎考古』第 19 号 宮崎考古学会
- 森田 勉 1982『14～16 世紀の白磁の形式分類と編年』『貿易陶磁研究』第 2 号 日本貿易陶磁研究会
- 上田秀夫 1982『14～16 世紀の青磁碗の分類について』『貿易陶磁研究』第 2 号 日本貿易陶磁研究会
- 小野正敏 1982『15～16 世紀の染付碗、皿の分類と年代』『貿易陶磁研究』第 2 号 日本貿易陶磁研究会
- 柴田圭子 2001『16 世紀中葉の輸入陶磁器の再評価 - 中国・四国地方の遺跡を中心に』『中世土器研究論集』中世土器研究会
- 九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』



第79図 岡遺跡調査区全体遺構分布図



第80図 岡遺跡調査区全体 縄文時代早期遺構分布図



第81図 岡遺跡調査区全体 中世～近世遺構分布図

図 版



第9次調査区全景



第9次調査区 SB1・SB2

図版 2



Tr7 IV層下位土層断面 (南東側から)



Tr5 土層断面 (北側から)



Tr3 土層断面 (南西側から)



AT 下位遺物出土状況 (南側から)



1号礫群 (北側から)



S11 (南東側から)



S11 配石 (南東側から)



S12 (西側から)



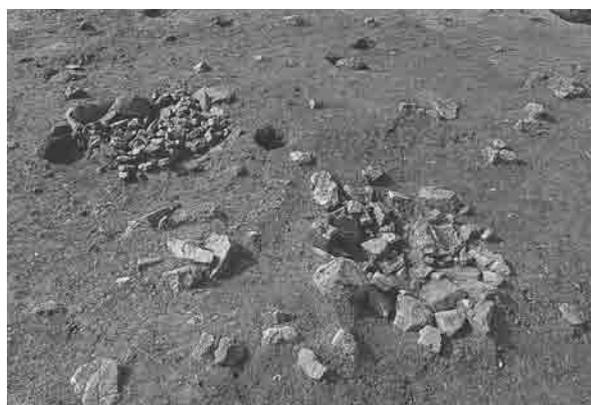
S12 配石 (西側から)



S13 (東側から)



S13 配石 (東側から)



S13・5 (東側から)



S14 (東側から)

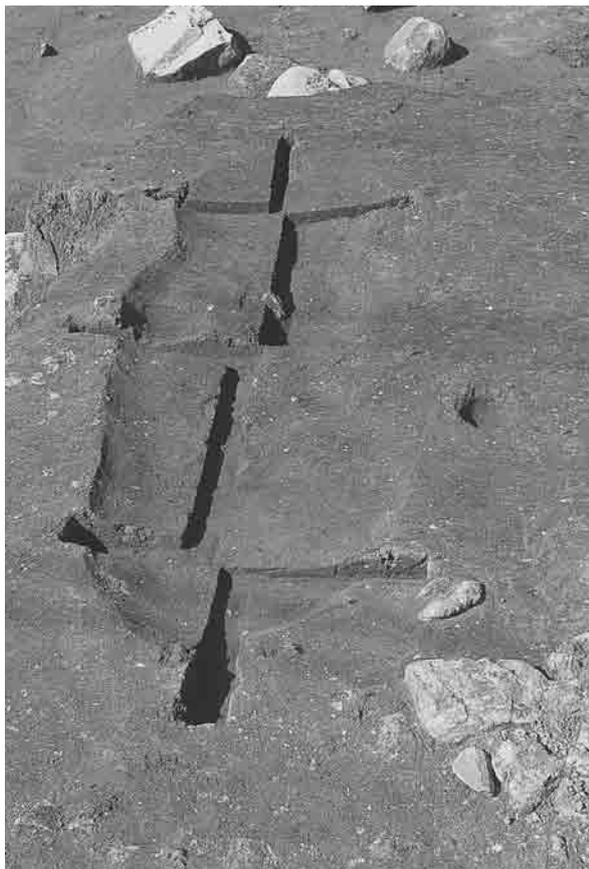


S15 (東側から)



S17 (北西側から)

図版 4



SP1・2 (東側から)



SP3 炉部 (東側から)



SX2 (東側から)



SE1・柵列状遺構 (北東側から)



SC1 完掘 (北西側から)



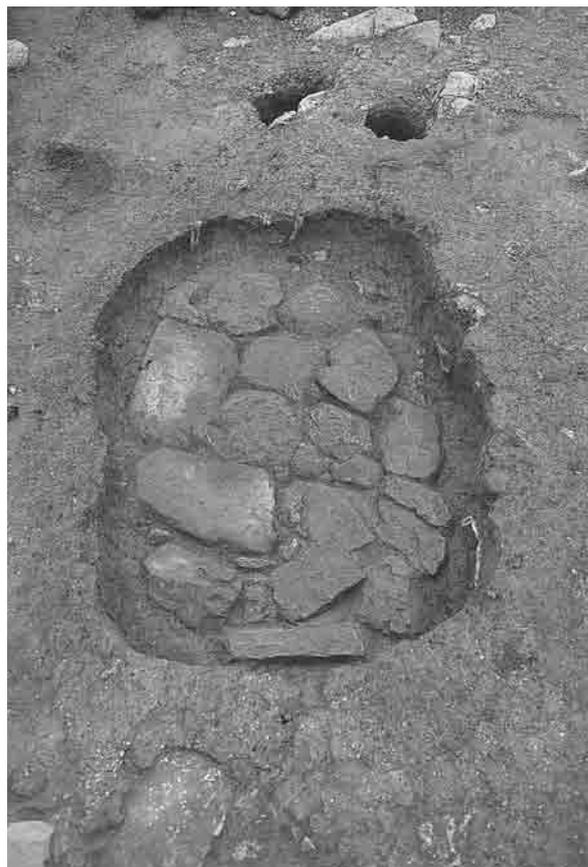
SC2 検出状況 (北側から)



SC2 完掘状況 (北東側から)



SX2 検出状況（北東側から）



SX2 床面検出状況（北東側から）



SC3 断面（東側から）



歯検出状況（東側から）

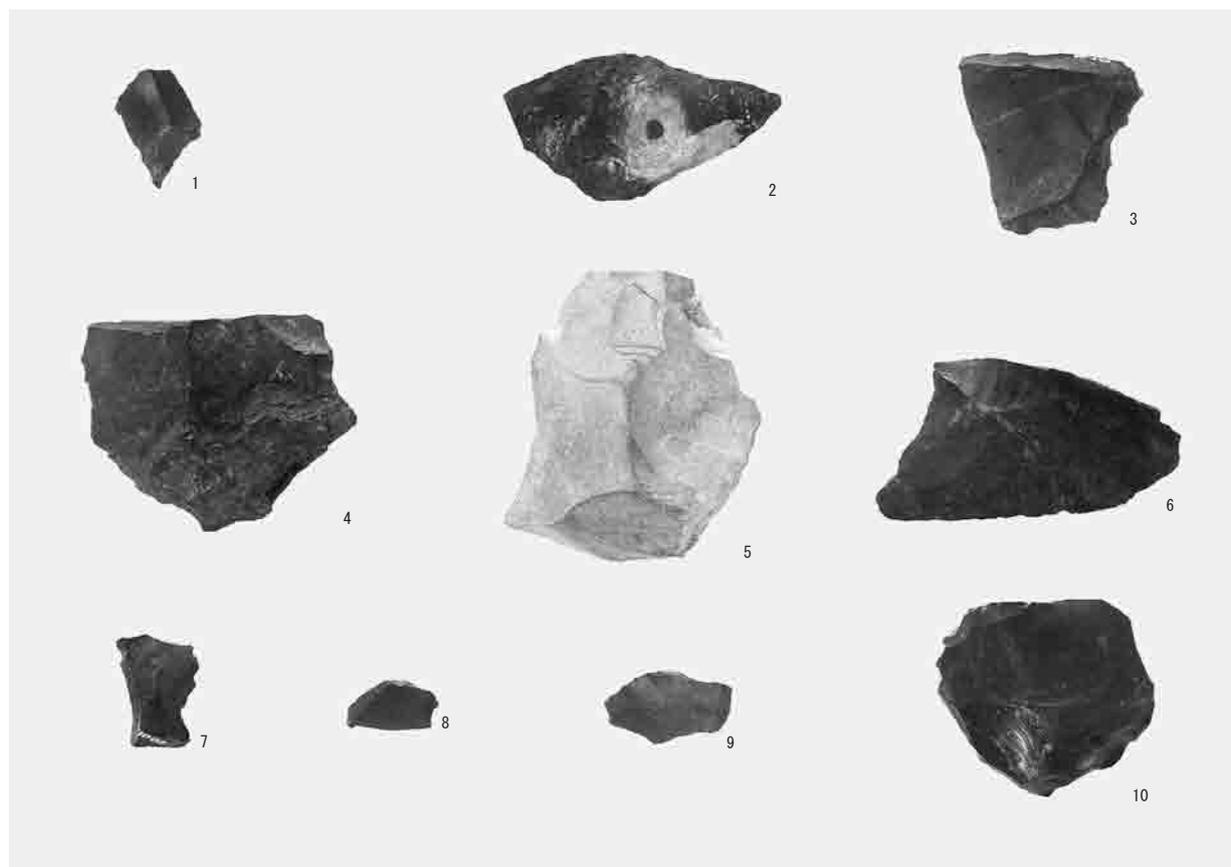


SB1（北東側から）

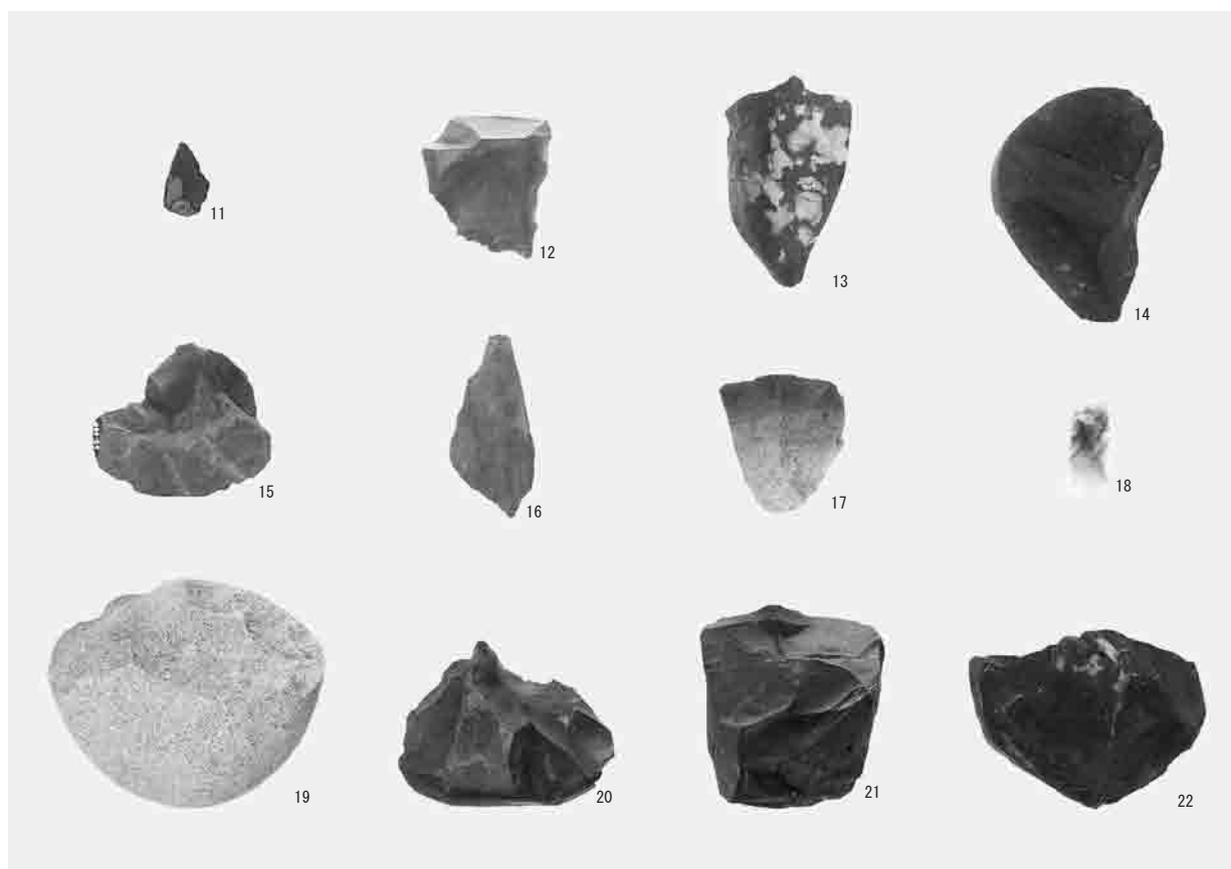


調査風景

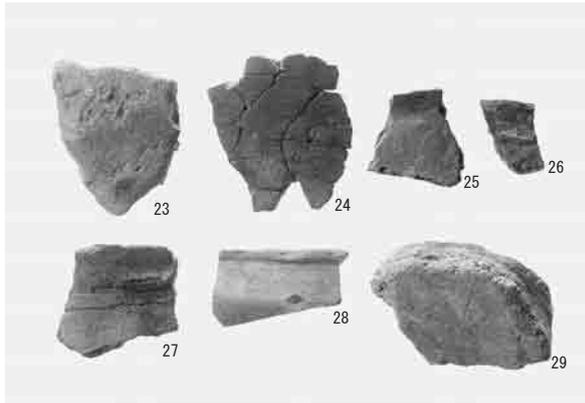
図版 6



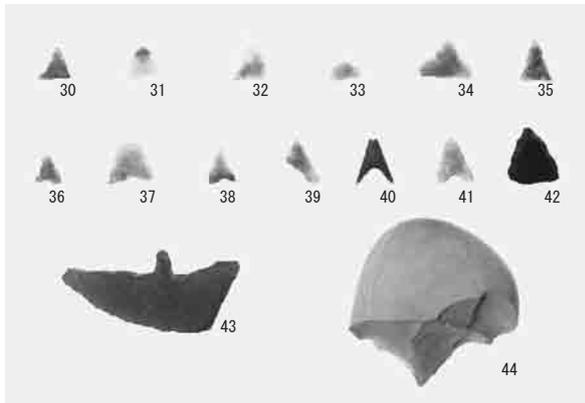
旧石器時代石器 (AT 下位)



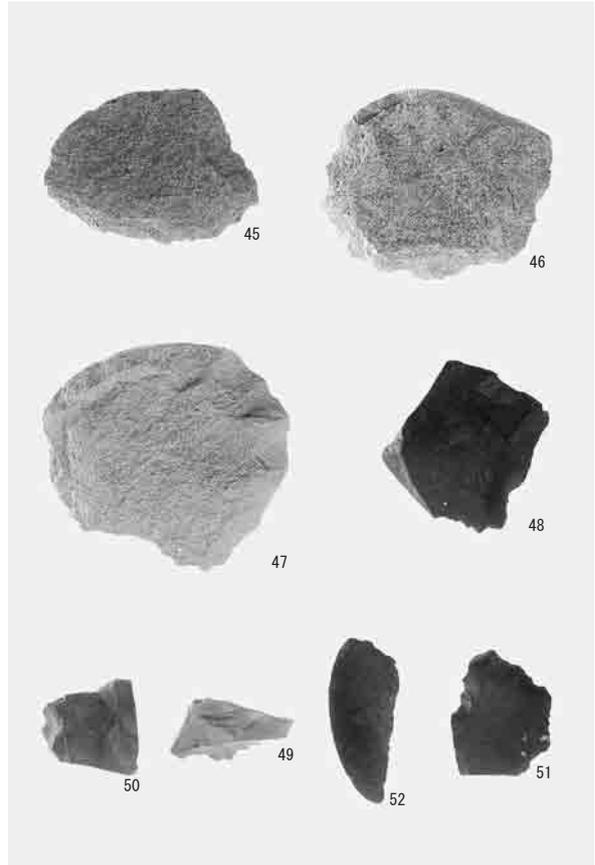
旧石器時代石器 (AT 上位)



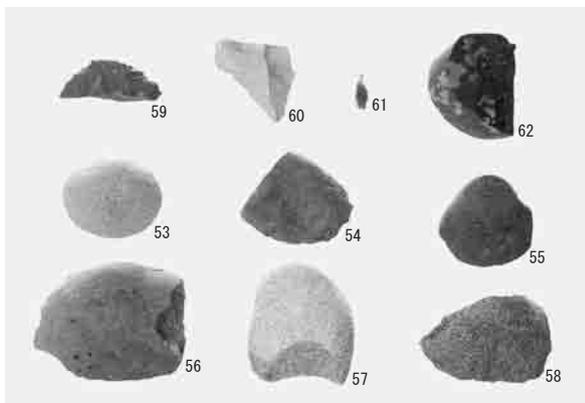
縄文時代土器



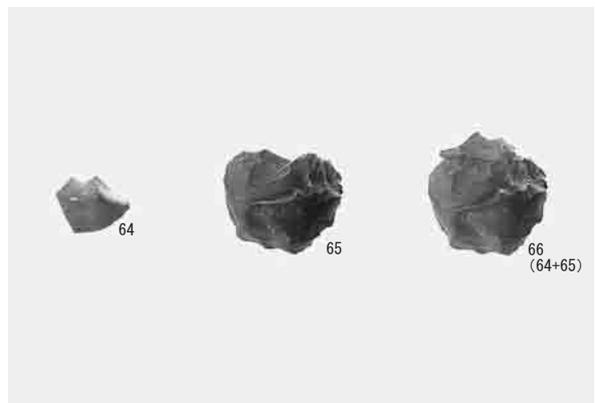
縄文時代石器 (1)



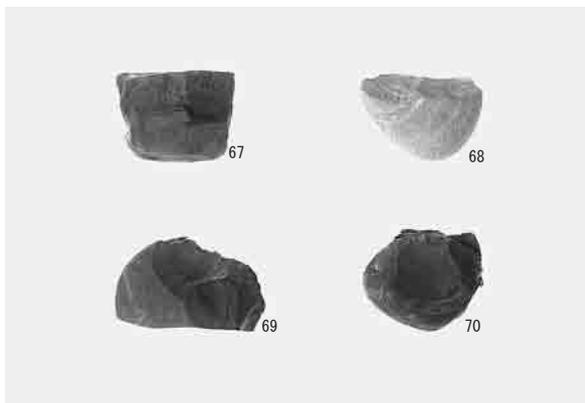
縄文時代石器 (2)



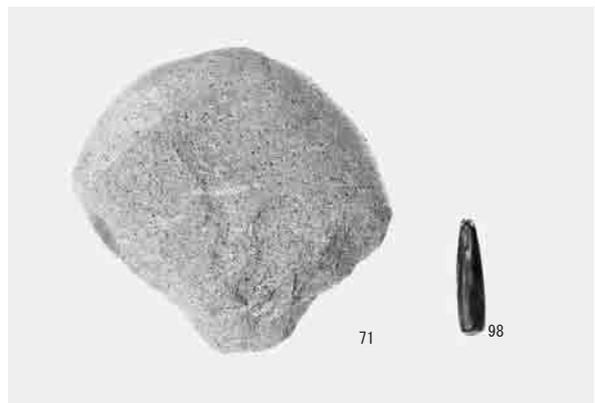
縄文時代石器 (3)



接合資料

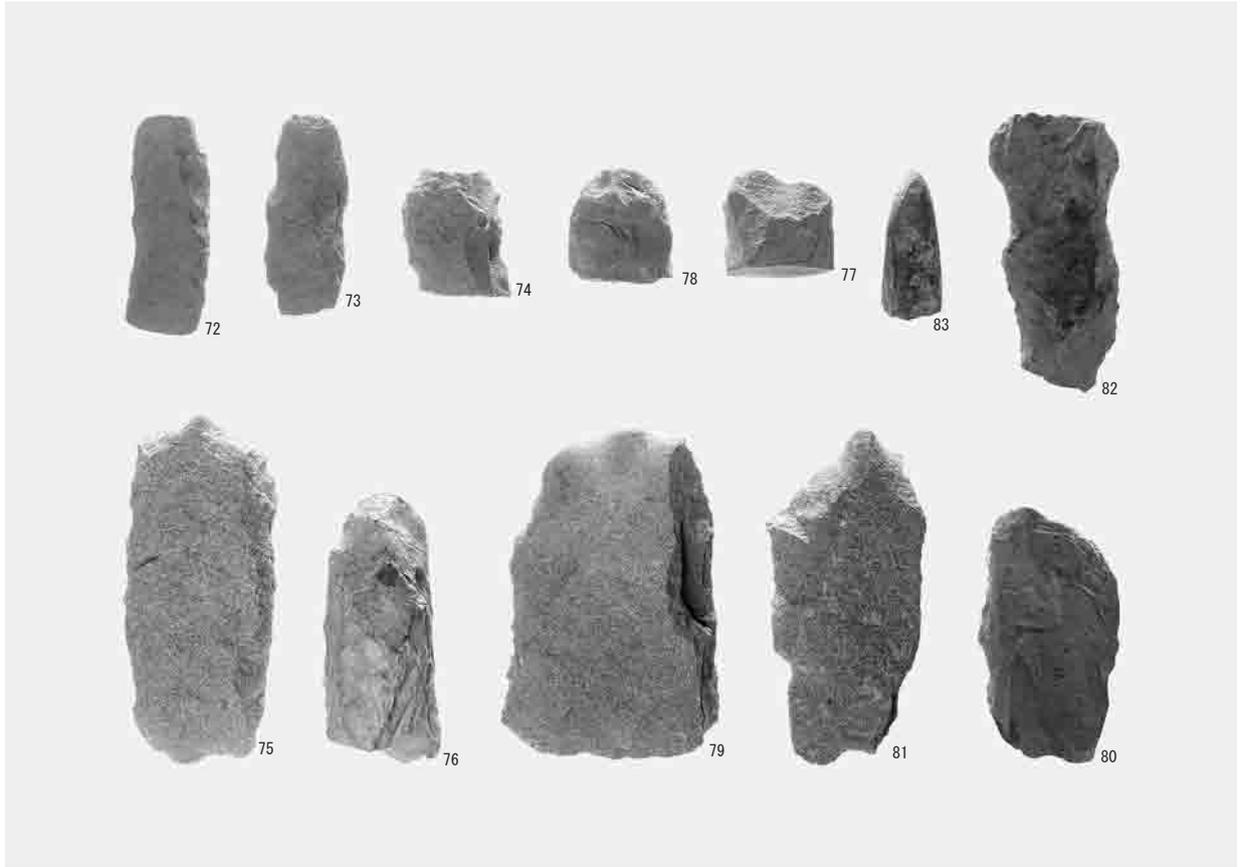


縄文時代石器 (4)

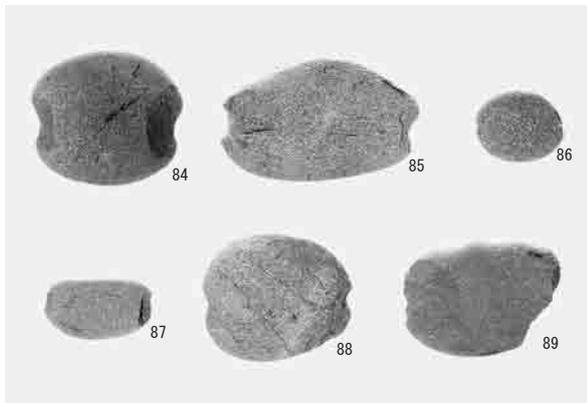


縄文時代石器 (5)

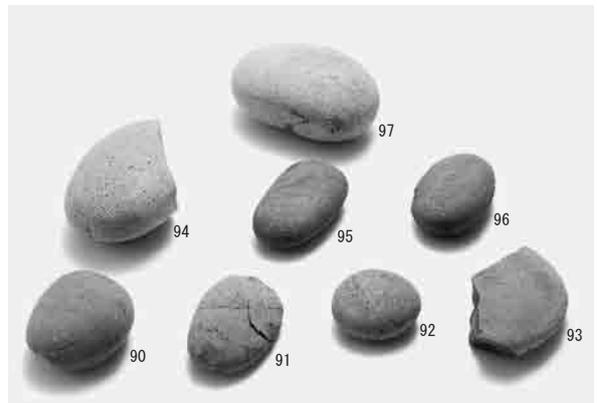
図版 8



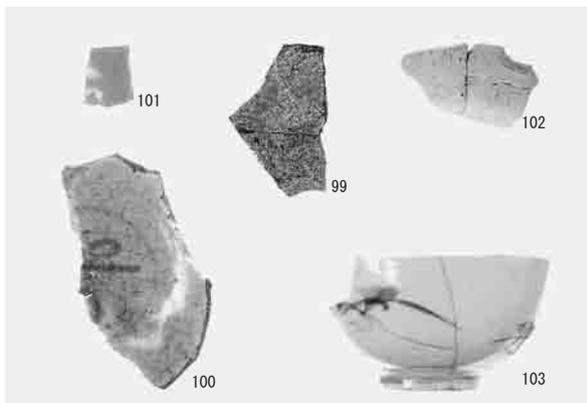
縄文時代石器 (6)



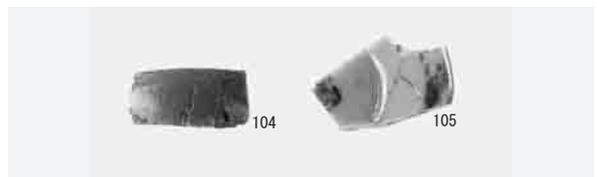
縄文時代石器 (7)



縄文時代石器 (8)



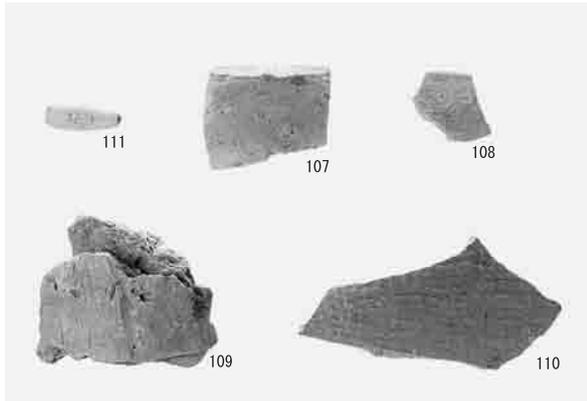
SB1 出土遺物



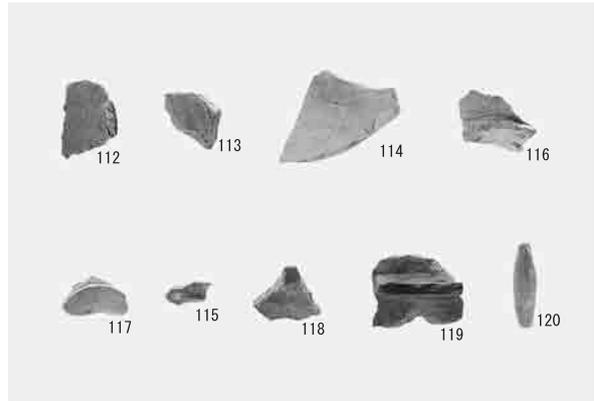
SE1 出土遺物



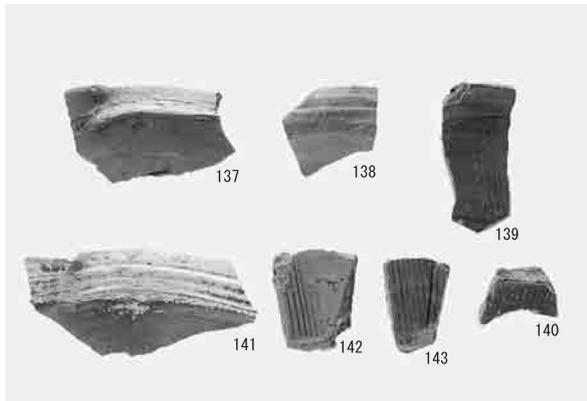
SC1 出土遺物



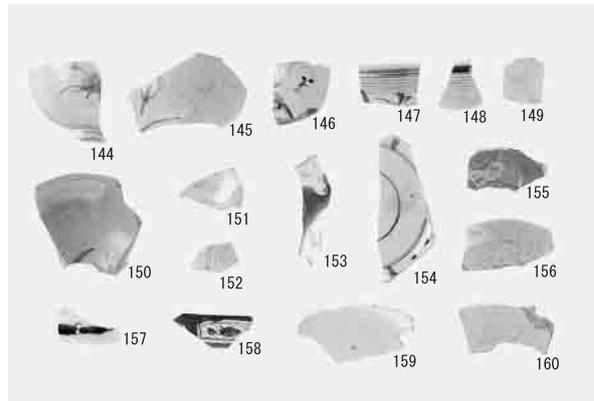
SC7 出土遺物



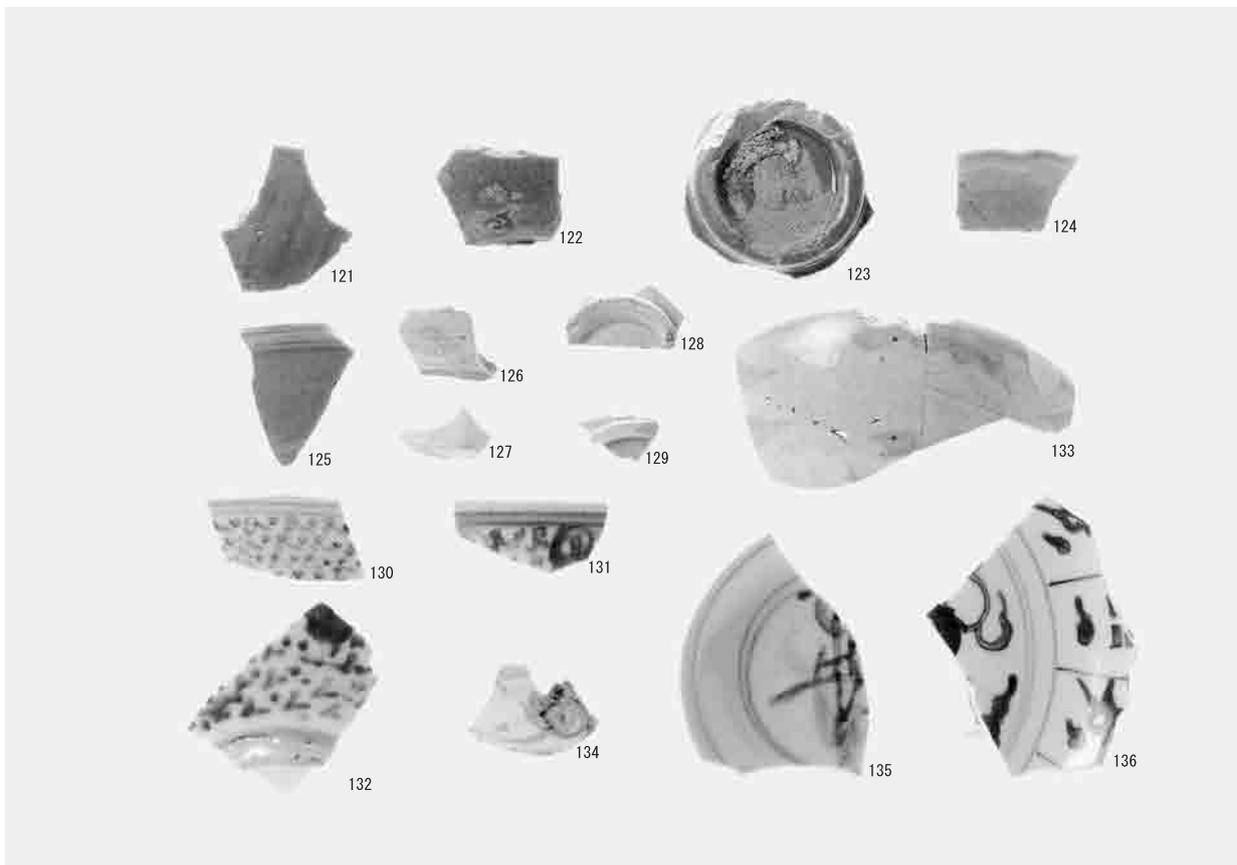
古代～中世 土器・土製品



中世陶器

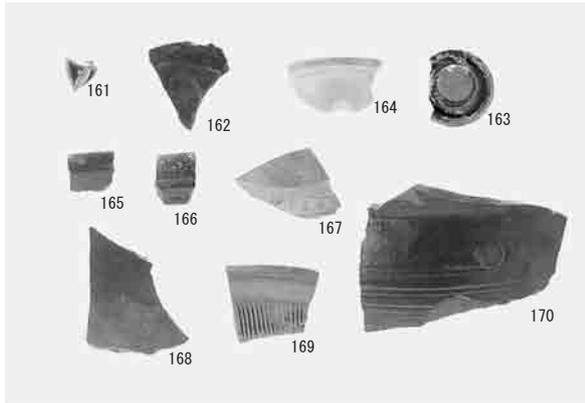


近世磁器

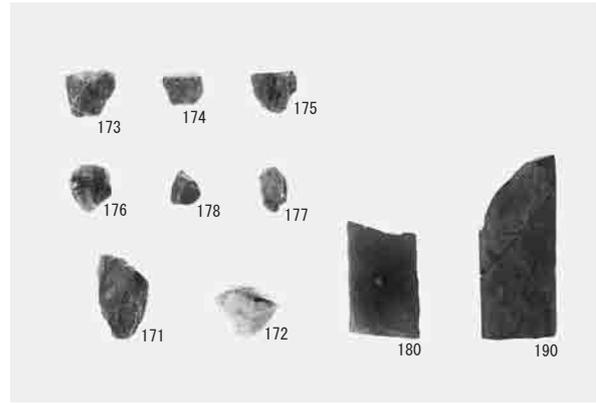


中世磁器

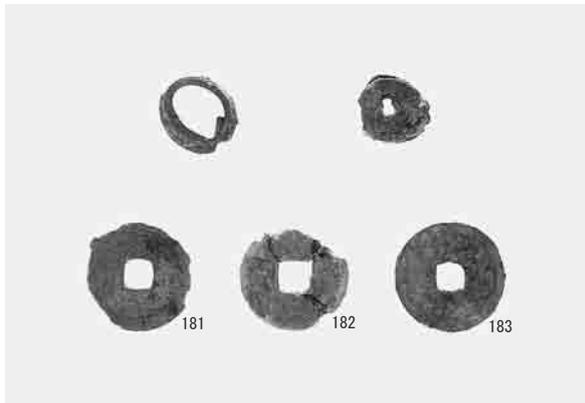
図版 10



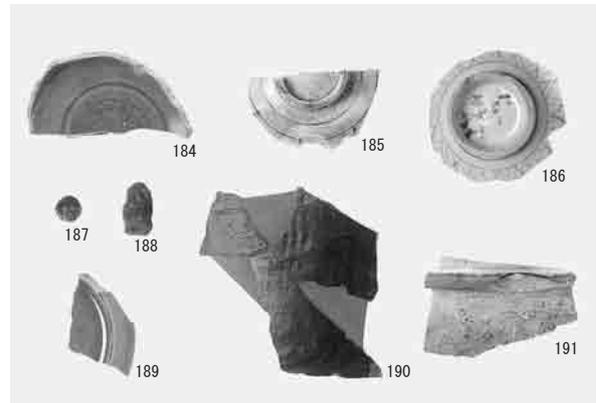
近世陶磁器



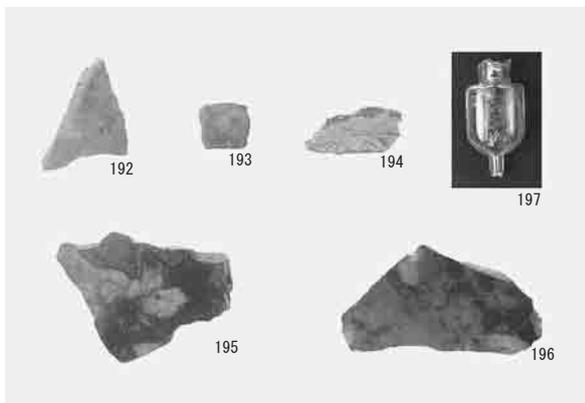
近世石器



金属製品・古銭



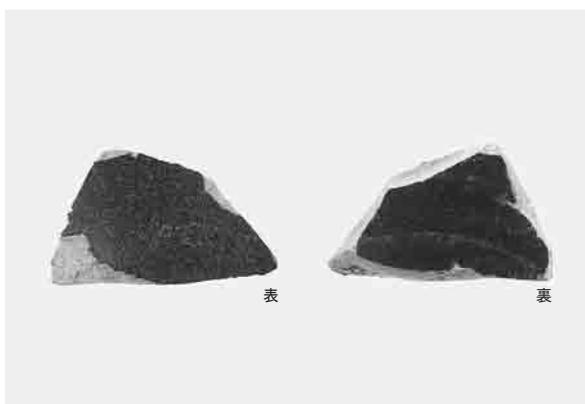
SC3 出土遺物



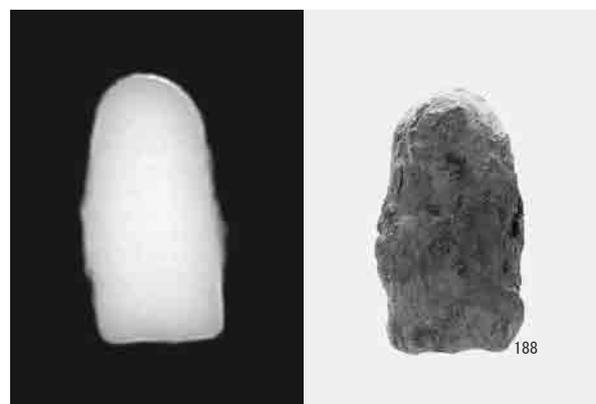
その他の時代出土遺物



参考資料 1 日東産黒曜石



参考資料 2 天目茶碗片



SC3 鉄製銃弾



調査区出土貝



調査区出土歯

図版 12



調査前風景（南東より）



調査区近景（北より）



調査区近景（北東より）



作業風景



調査区南半部垂直写真（写真上が北）



Tr1 土層堆積状況（東より）



SA1 検出状況（東より）



SA1 遺物出土状況（東より）



SA1 遺物出土状況（西より）



SA1 完掘状況（東より）



SB1 検出状況（北より）



SB1 完掘状況（北より）

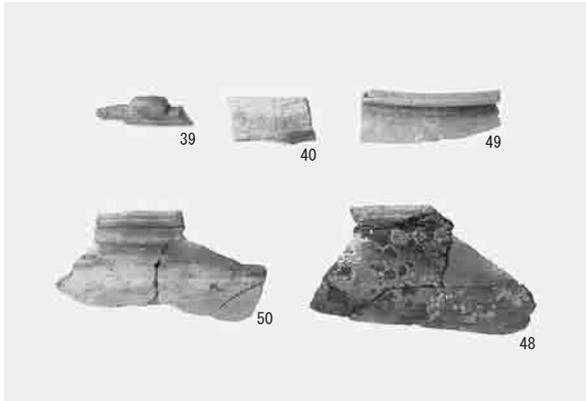


SB2 完掘状況（南東より）

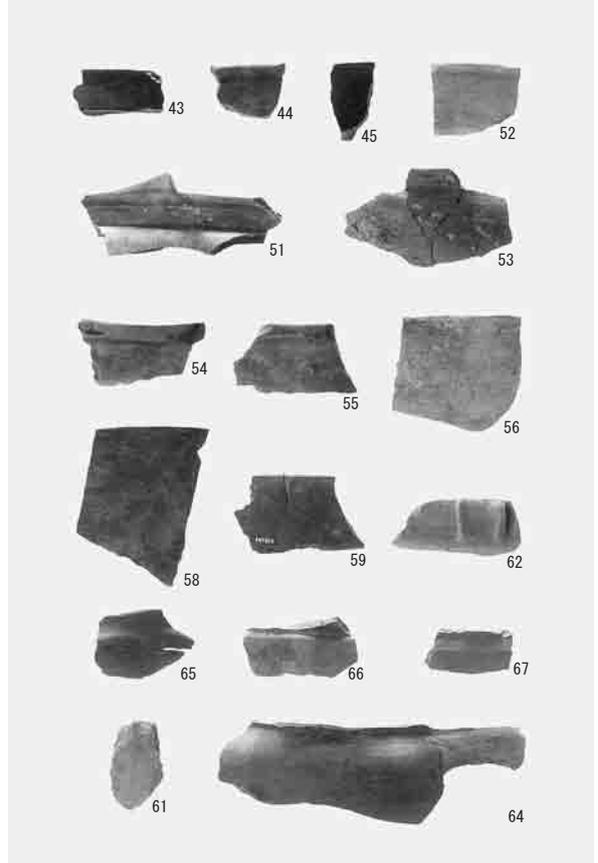
図版 14



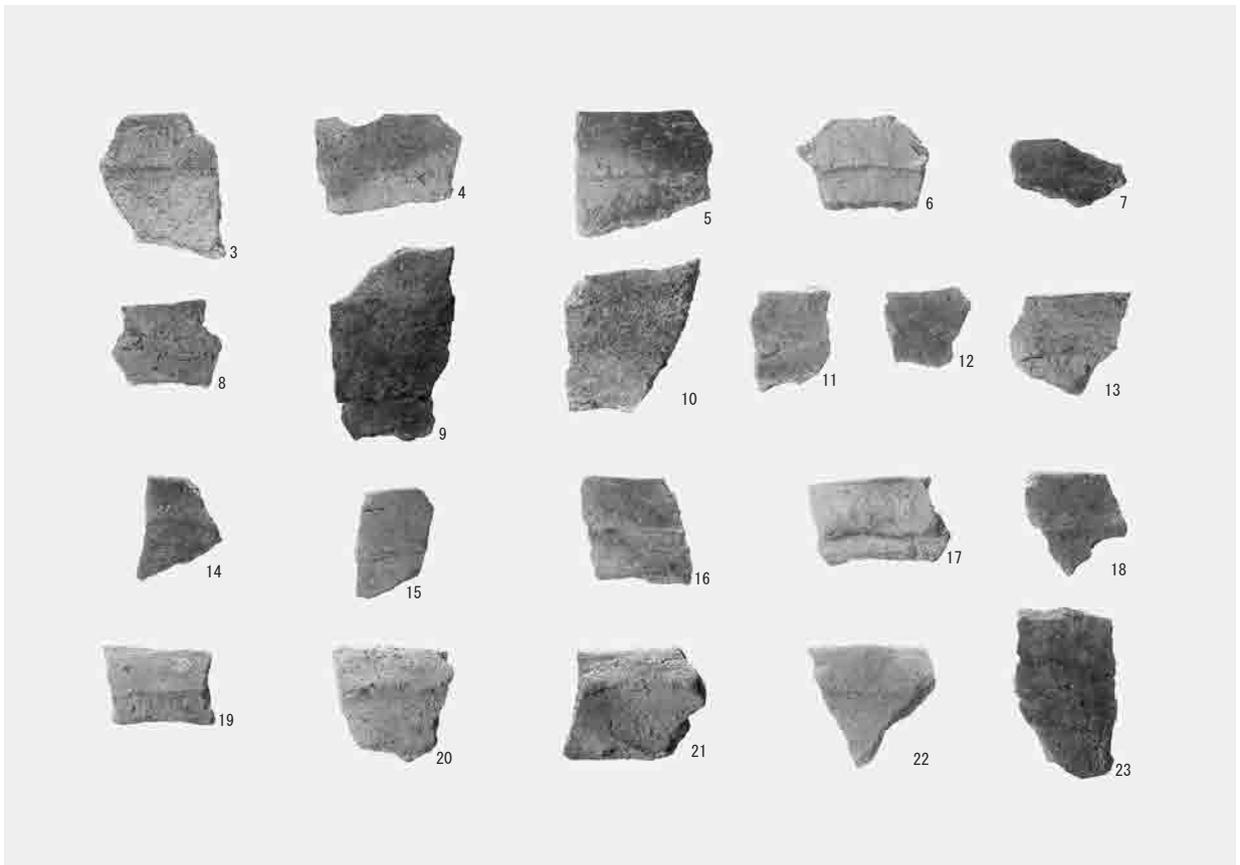
縄文時代早期土器



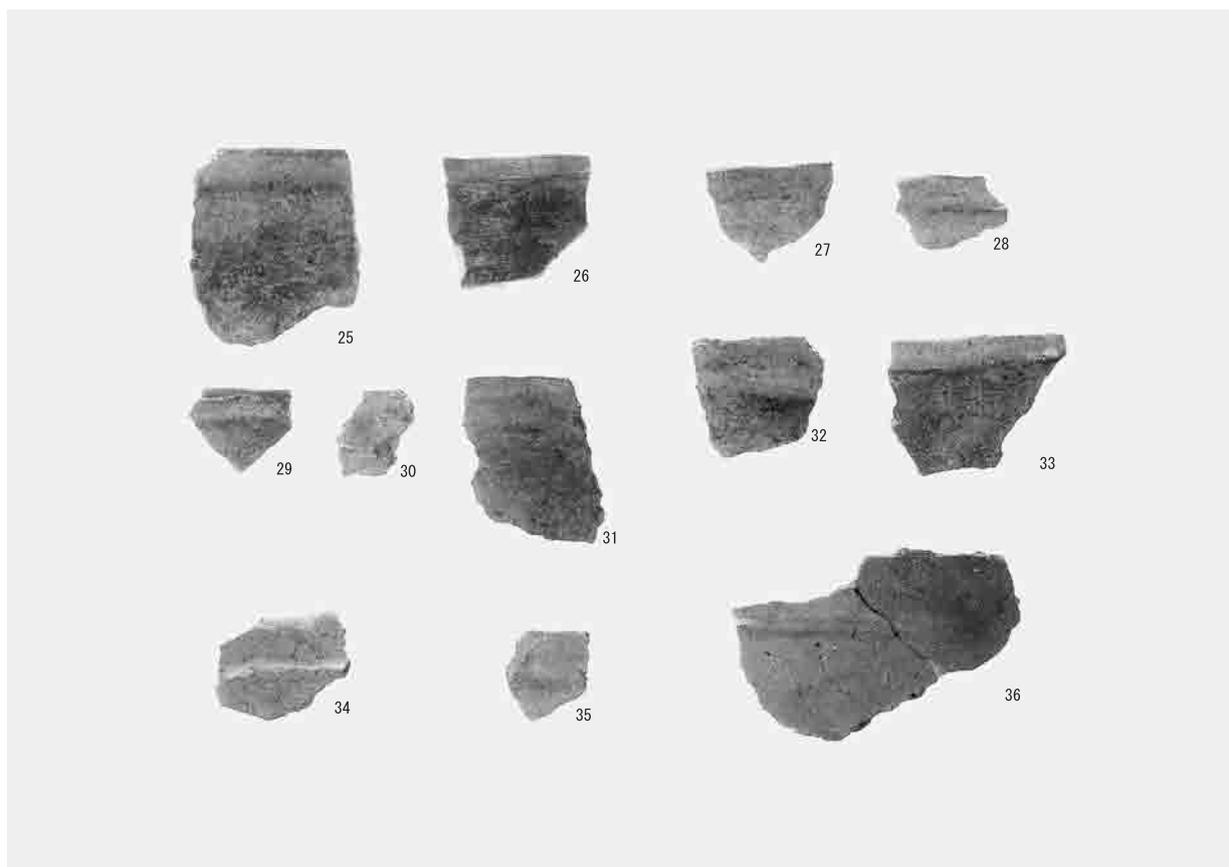
縄文時代晚期土器 (1)



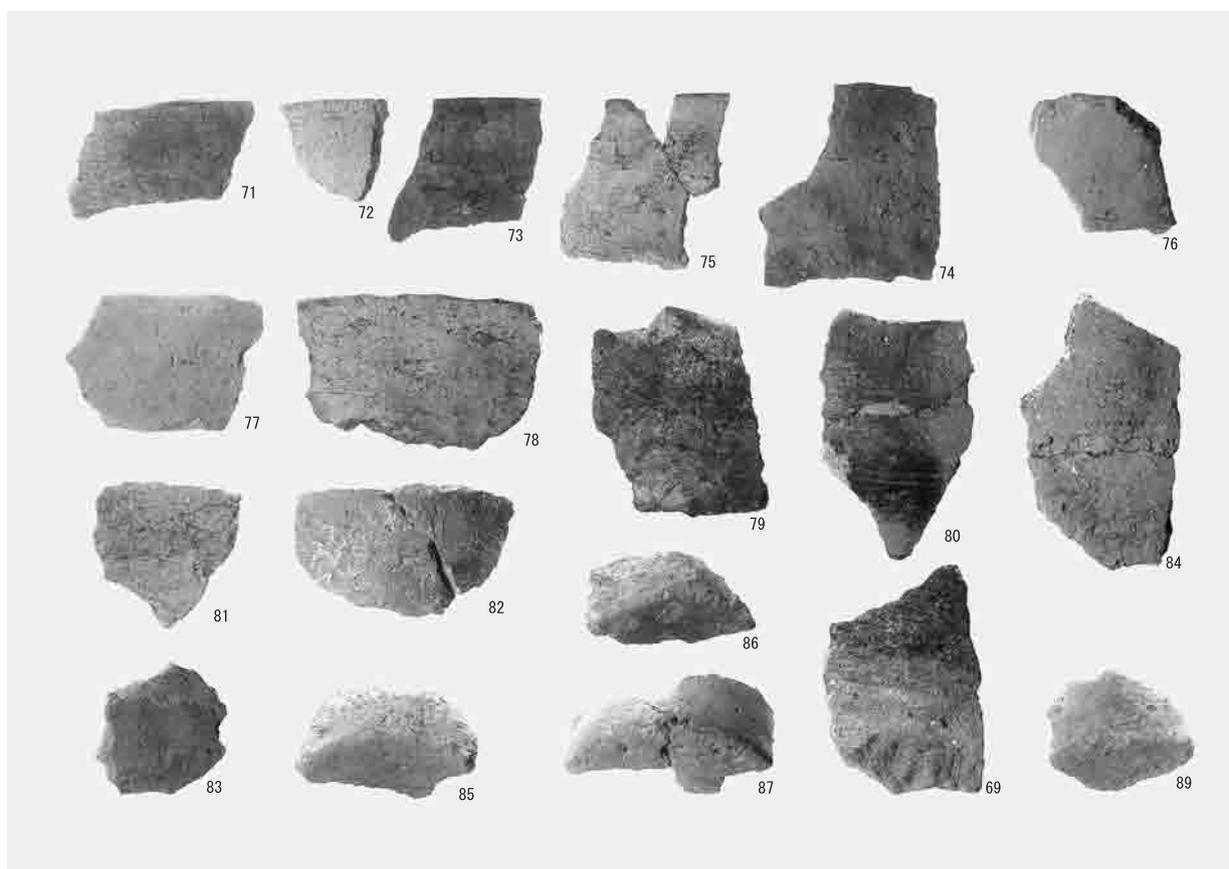
縄文時代晚期土器 (2)



縄文時代晚期土器 (3)

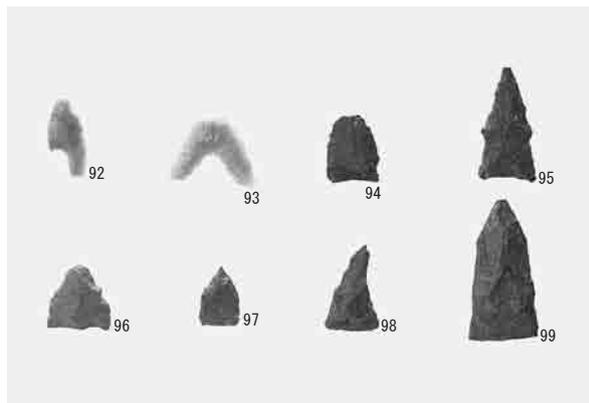


縄文時代晩期土器（4）

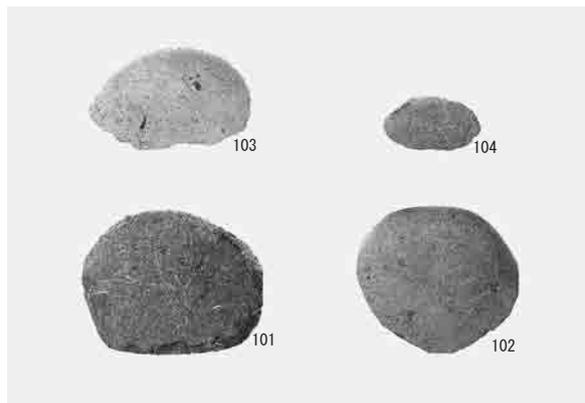


縄文時代晩期土器（5）

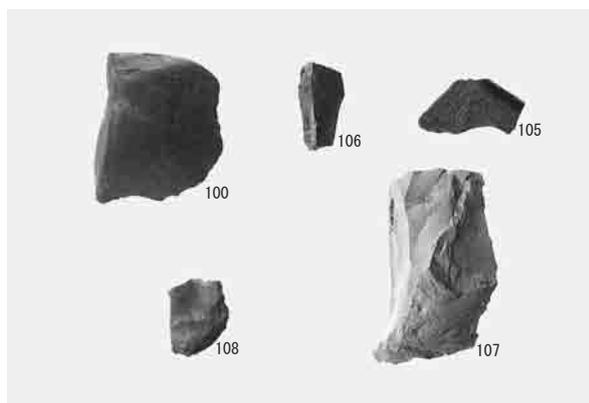
図版 16



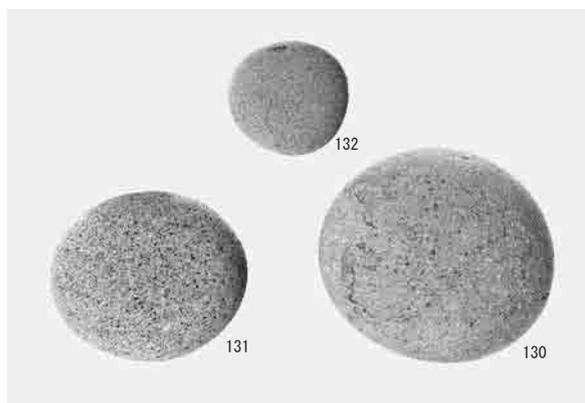
縄文時代石器 (1)



縄文時代石器 (2)



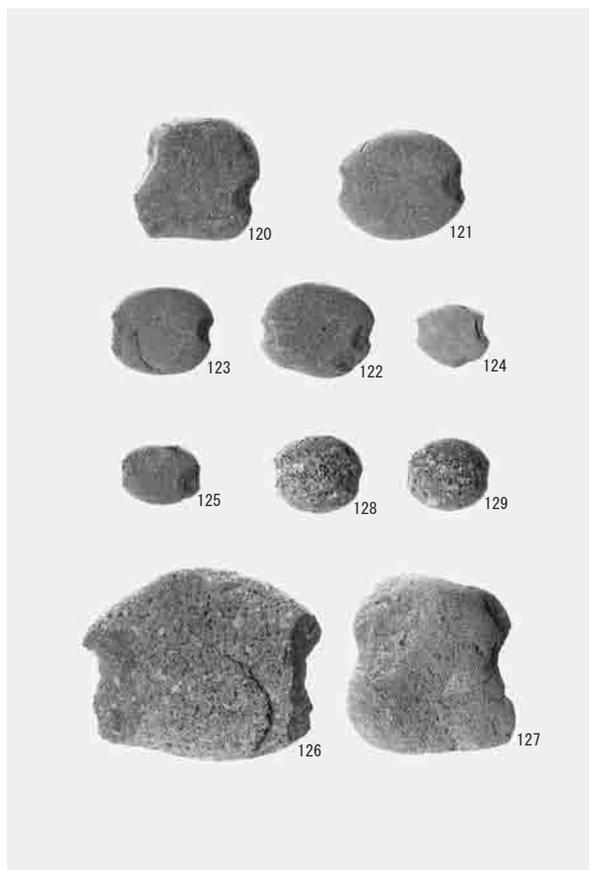
縄文時代石器 (3)



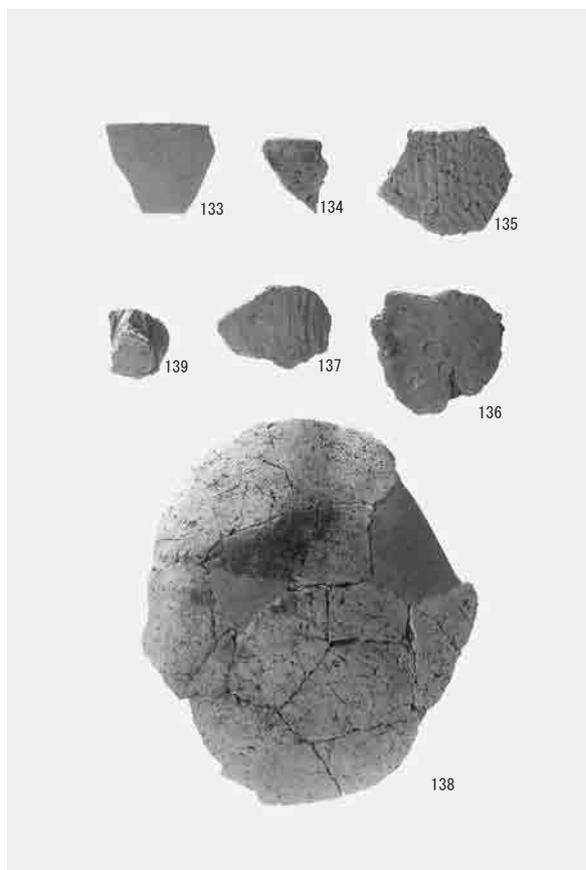
縄文時代石器 (4)



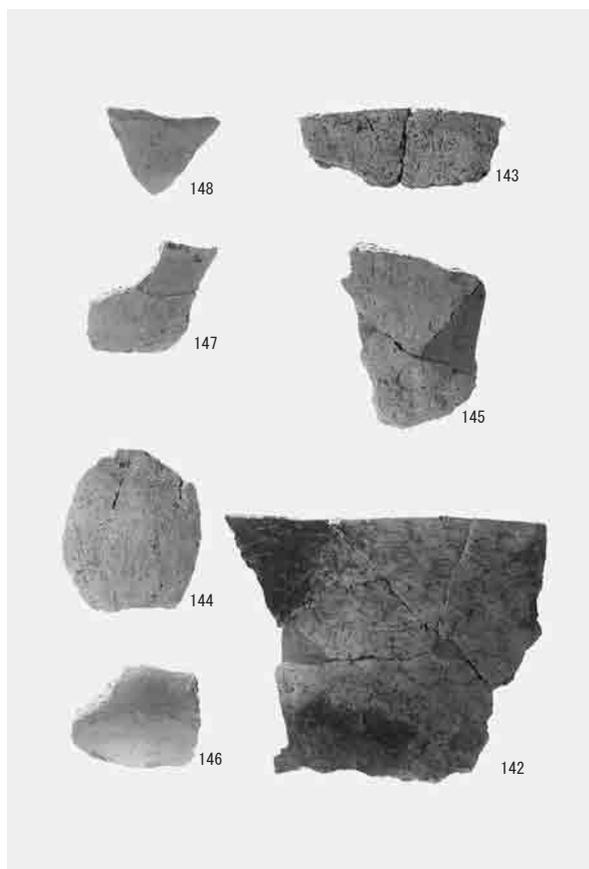
縄文時代石器 (5)



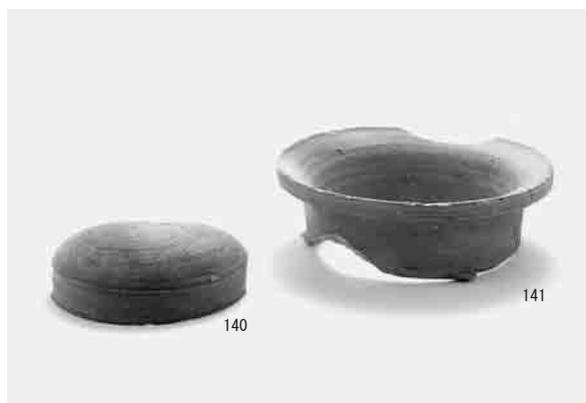
縄文時代石器 (6)



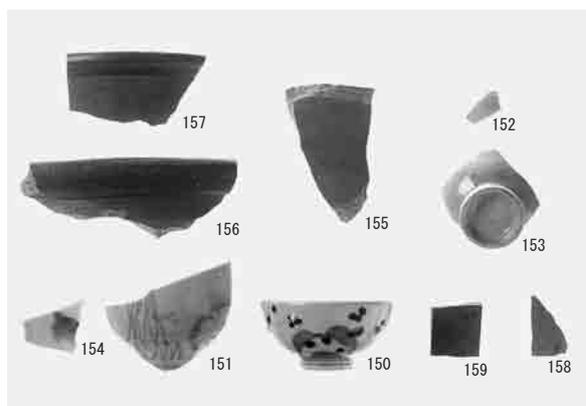
SA1 出土土器



古墳時代出土土器



SA1 出土須恵器

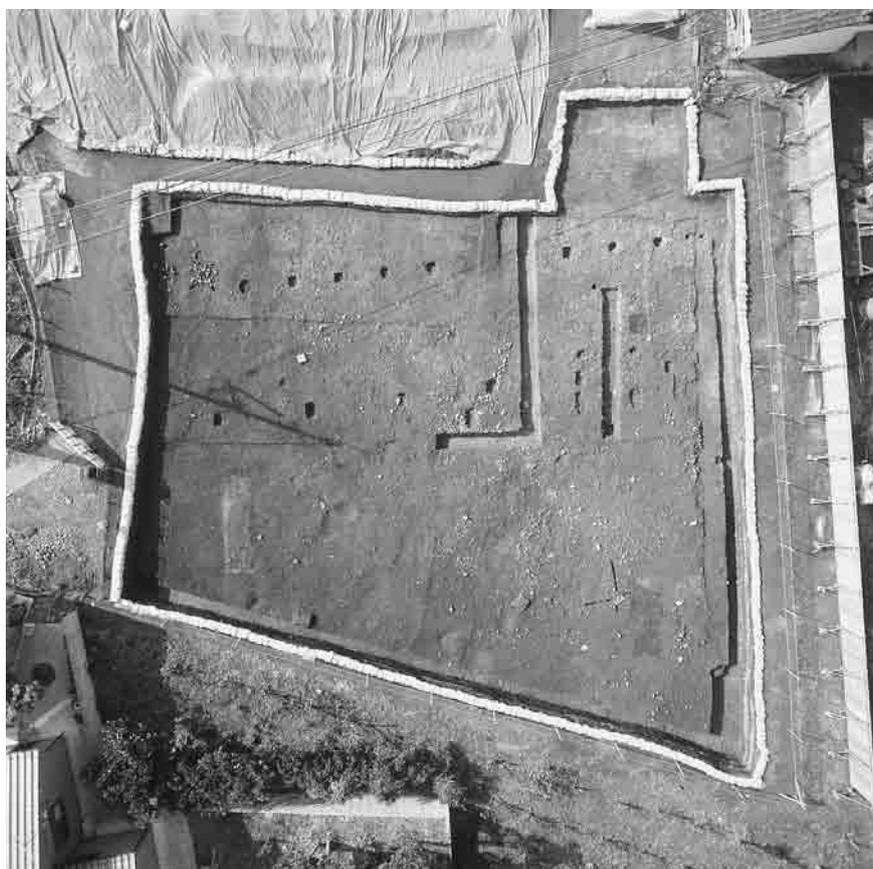


近世出土遺物

岡
第
13
次



調査区遠景、北に日向市街地を望む（南から）



調査区垂直写真（画面右が北）



Tr2 (東壁面) 南端土層堆積状況 (西から)



SI1 検出状況 (南東から)



SI1 配石検出状況 (北東から)



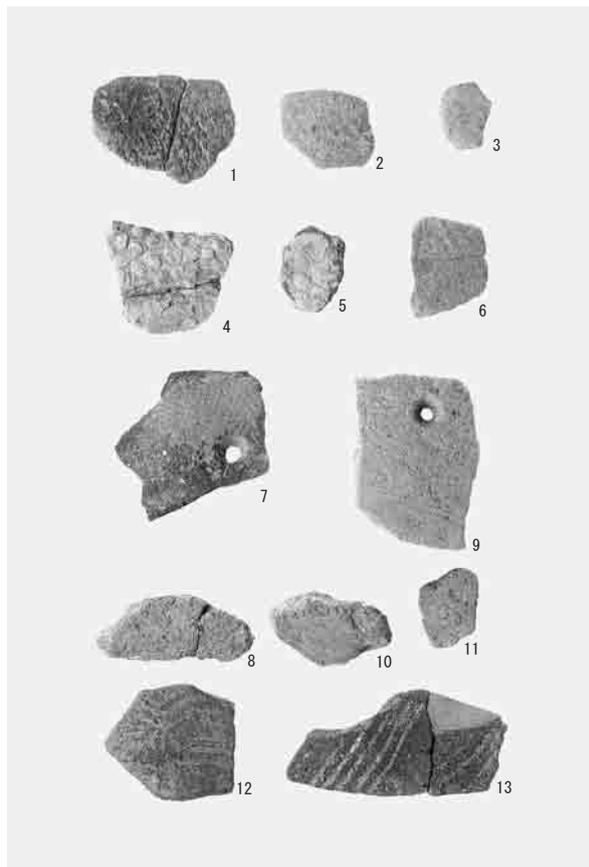
SI1 完掘状況 (北東から)



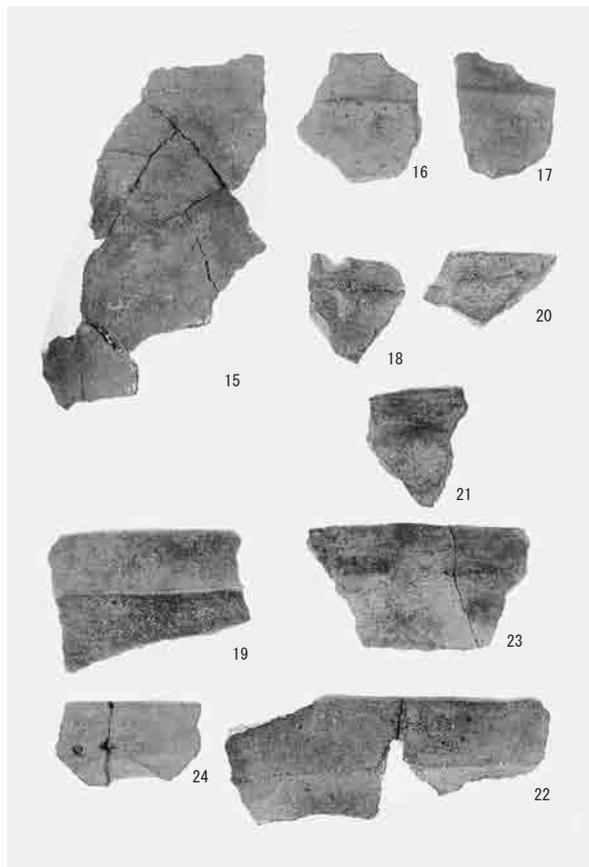
組織痕土器・打製石斧出土状況 (上) (北東から)



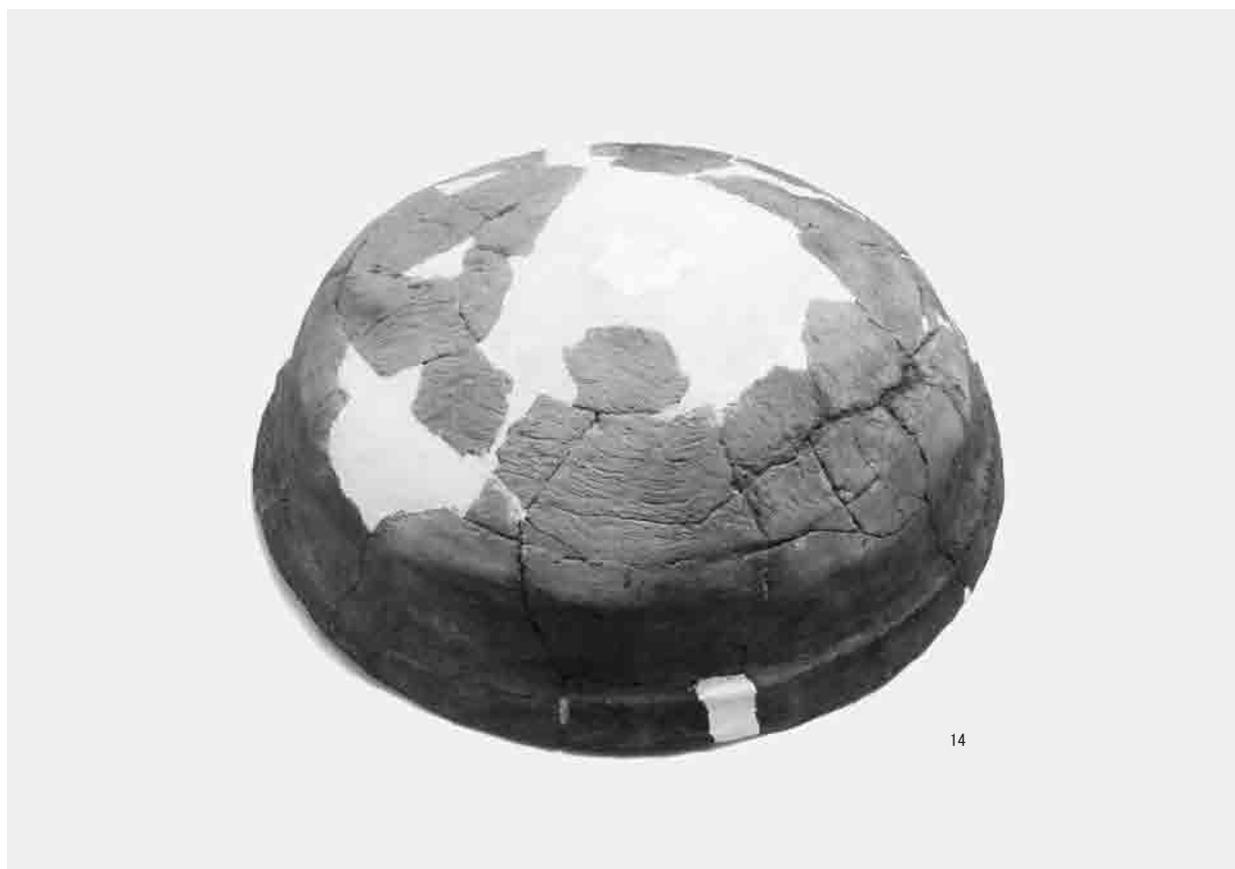
組織痕土器・打製石斧出土状況 (下) (西から)



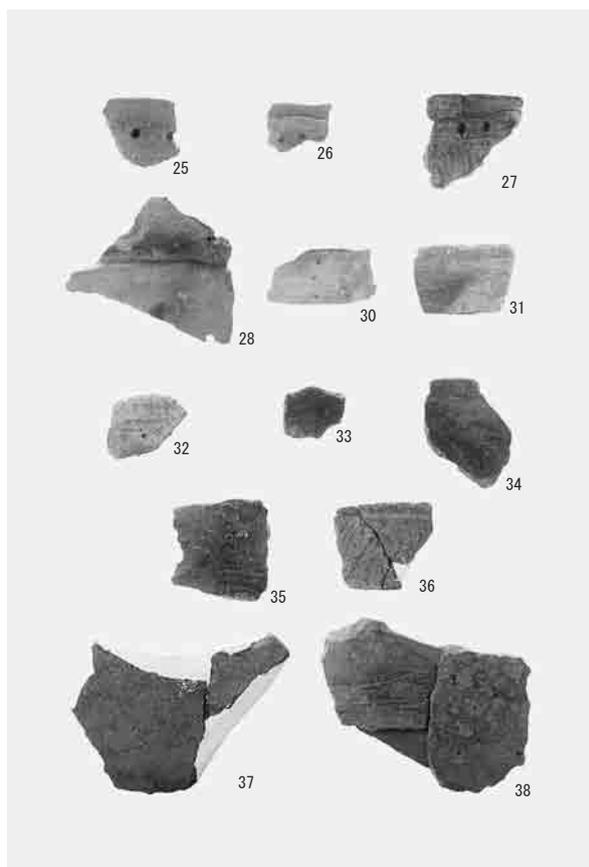
縄文時代早期土器



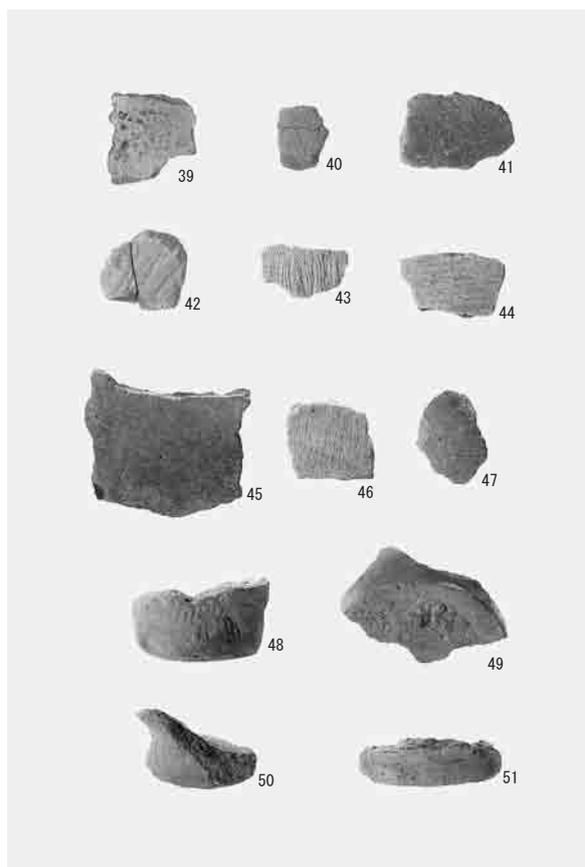
縄文時代晚期土器 (1)



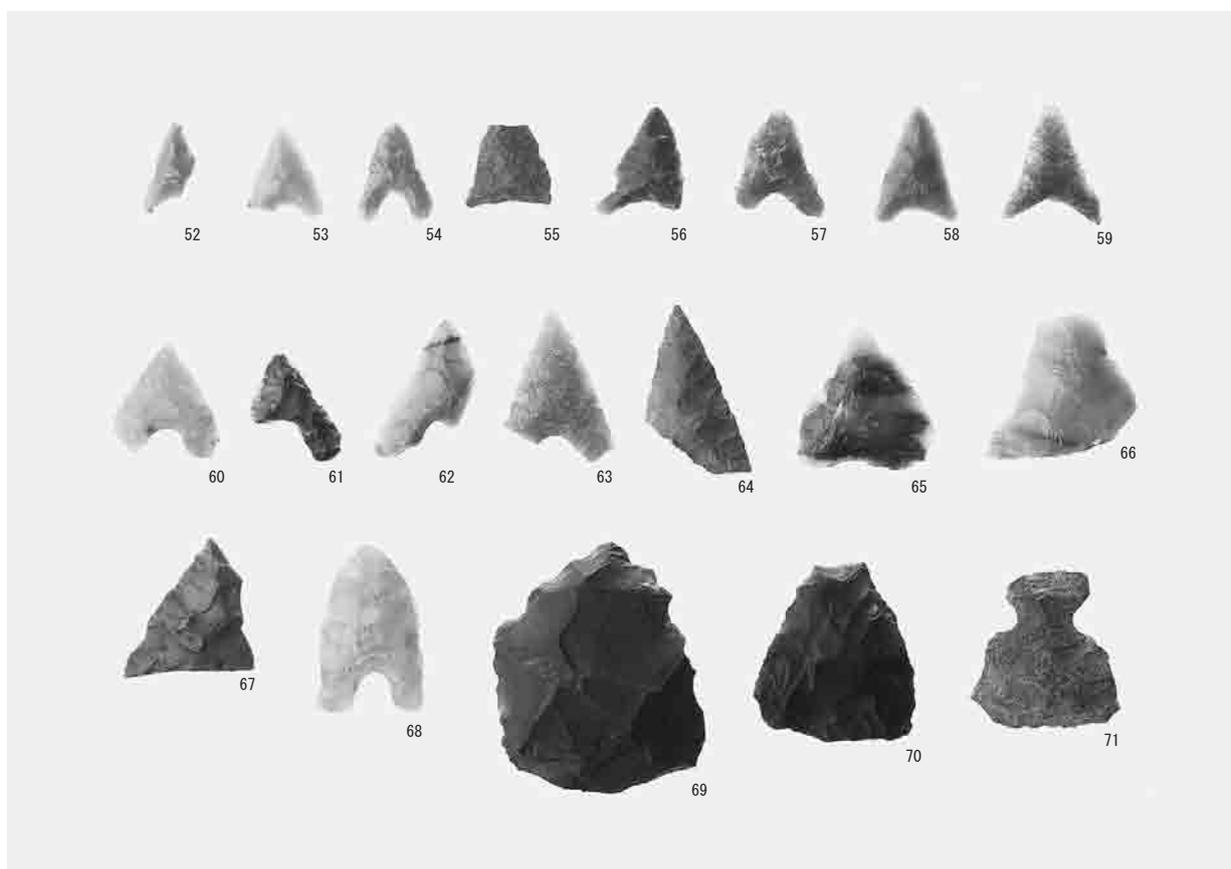
縄文時代晚期土器 (2)



縄文時代晩期土器 (3)



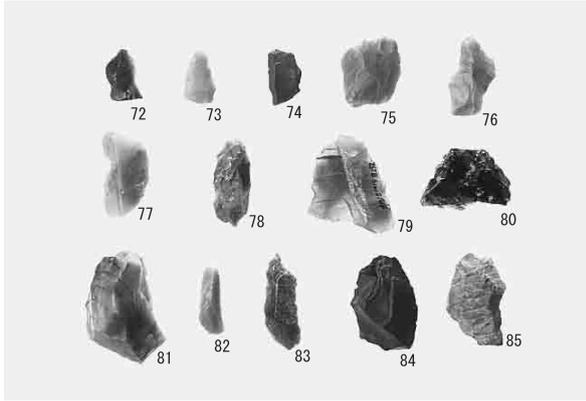
縄文時代晩期土器 (4)



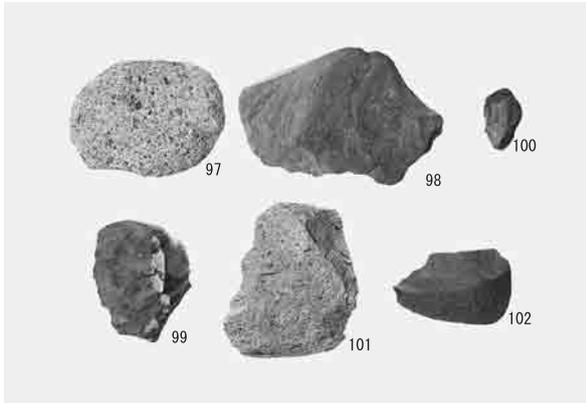
縄文時代石器 (1)

岡
第
15
次

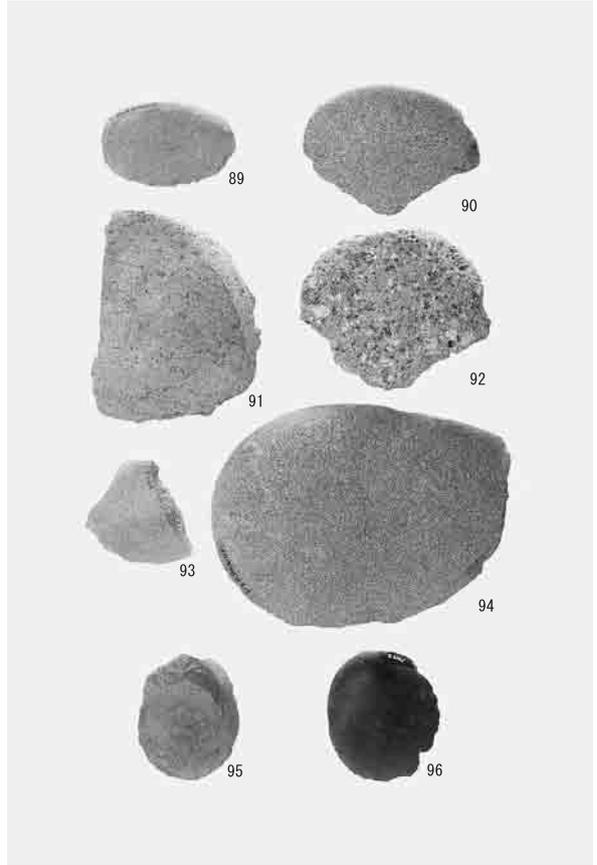
図版 22



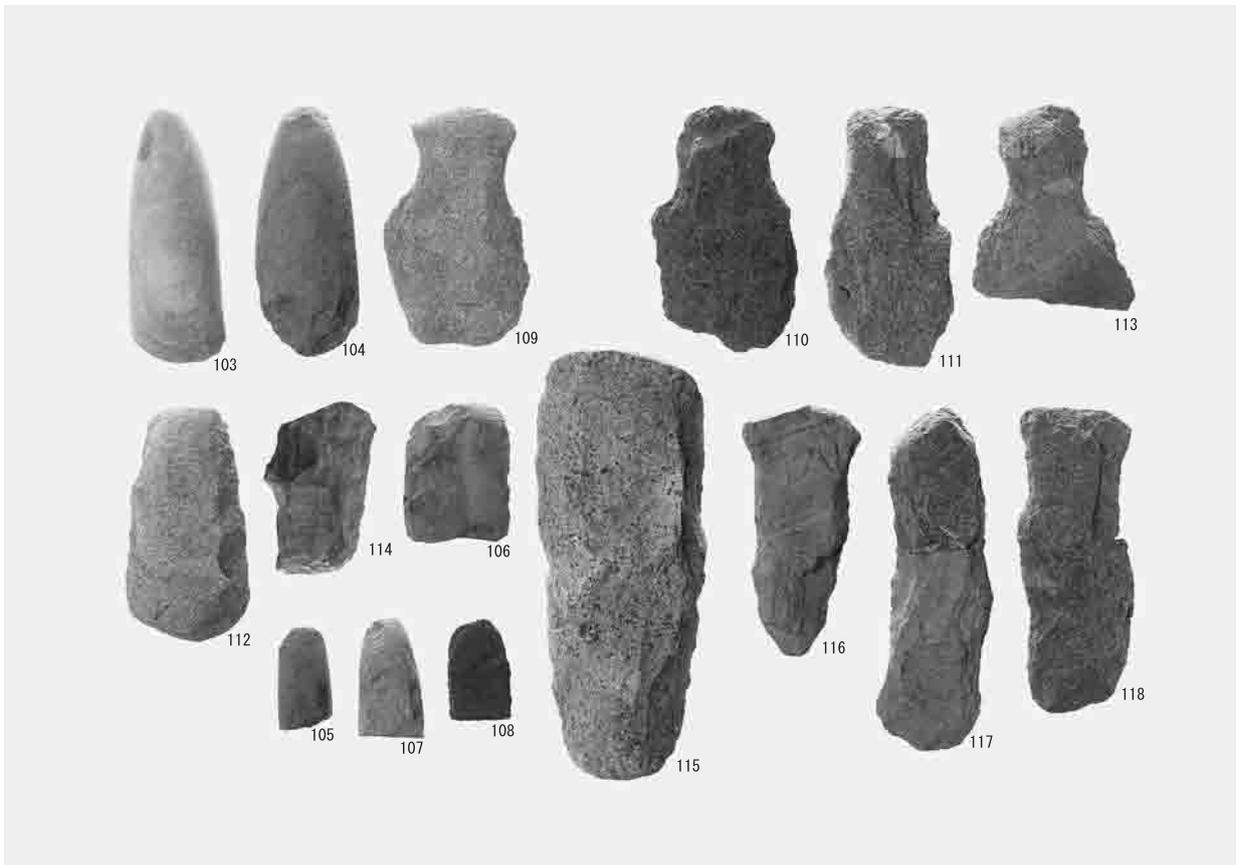
縄文時代石器 (2)



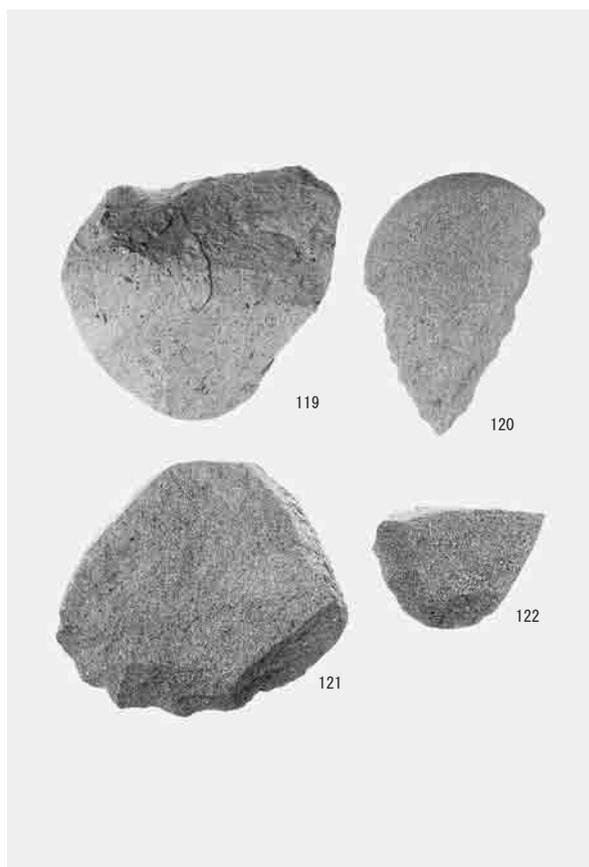
縄文時代石器 (3)



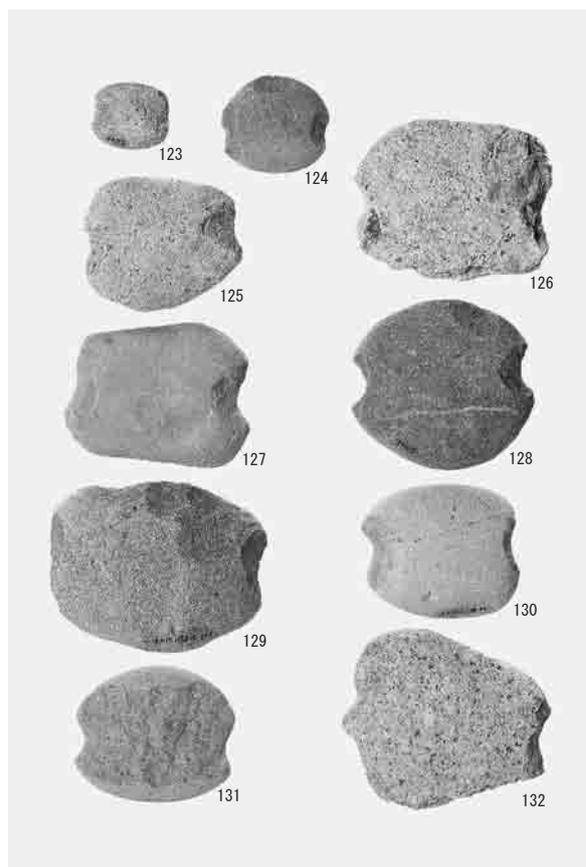
縄文時代石器 (4)



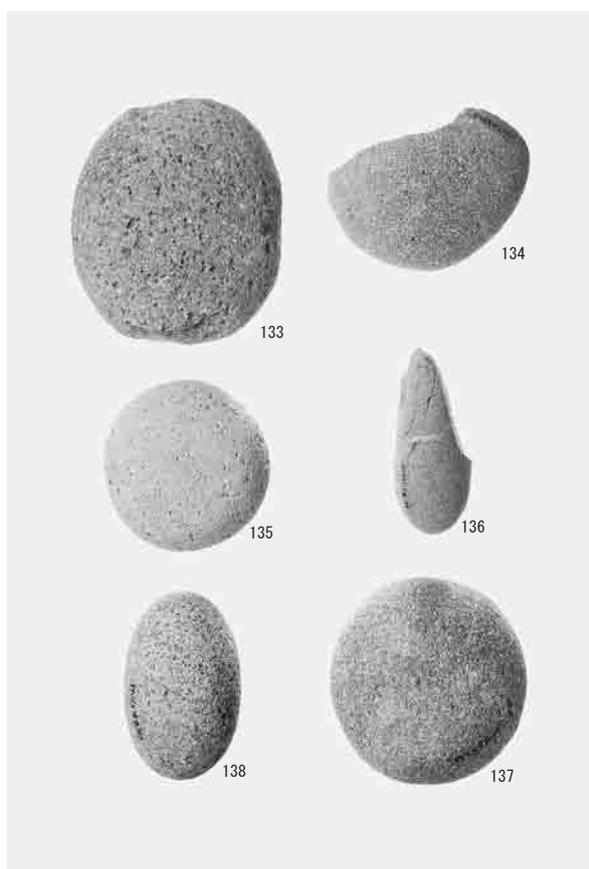
縄文時代石器 (5)



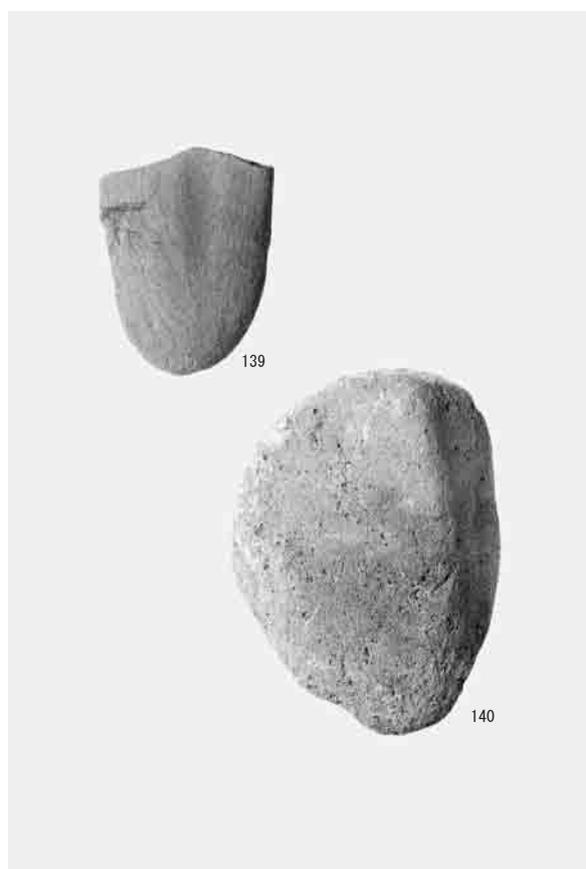
縄文時代石器 (6)



縄文時代石器 (7)



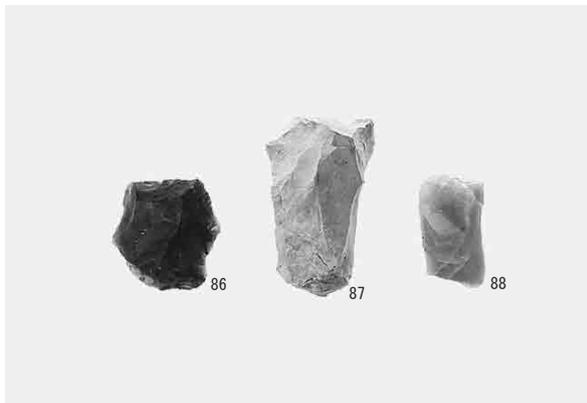
縄文時代石器 (8)



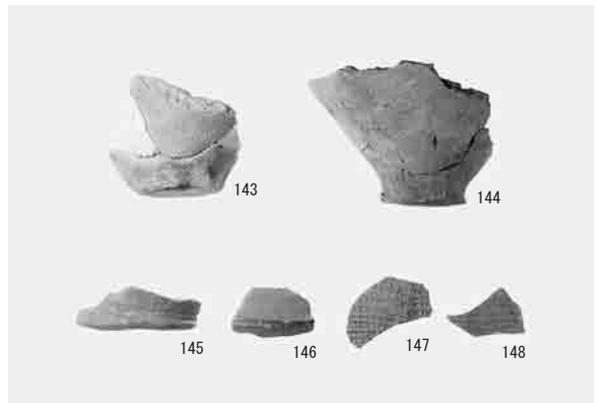
縄文時代石器 (9)



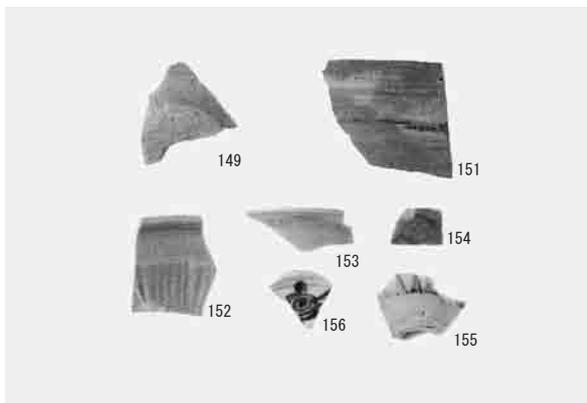
縄文時代石器 (10)



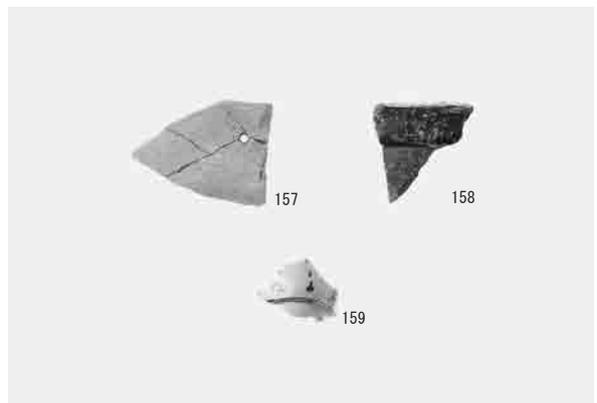
縄文時代石器 (11)



弥生時代～古代遺物



中世遺物



近世遺物

報告書抄録

ふりがな	おかいせきだいく・じゅうさん・じゅうごじちょうさ							
書名	岡遺跡（第9・13・15次調査）							
副書名	東九州自動車道（日向～都農間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書9							
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第223集							
執筆・編集担当者名	久保田陽香・竹下昭彦・松浦朋彦・松林豊樹							
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター							
所在地	〒880-0212 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂 4019 番地							
発行年月日	2013年1月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東緯	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おかいせき 岡遺跡 だい9じちょうさ (第9次調査)	みやぎきけんひゅうがし 宮崎県日向市 おおあざひらいわあざおか 大字平岩字岡	45206	6005	32度 22分 58秒	131度 37分 13秒	2011.5.9 ～ 2011.11.7	2,580 m ²	記録保存 調査
おかいせき 岡遺跡 だい13じちょうさ (第13次調査)	みやぎきけんひゅうがし 宮崎県日向市 おおあざひらいわあざおか 大字平岩字岡			32度 22分 56秒	131度 37分 12秒	2011.8.29 ～ 2011.11.28		
おかいせき 岡遺跡 だい15じちょうさ (第15次調査)	みやぎきけんひゅうがし 宮崎県日向市 おおあざひらいわあざ 大字平岩字 なにくち 谷口			32度 22分 52秒	131度 37分 14秒	2011.9.26 ～ 2011.12.21		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
岡遺跡 (第9次調査)	散布地 集落跡	旧石器時代 ～ 近世	礫群1基 集石遺構7基、炉穴3基 石組遺構2基 掘立柱建物跡2棟		縄文土器、羽口、貿易陶磁器、近世陶磁器、石核、剥片、石鎌、石匙、石斧、石錘、石錐、スクレイパー、敲石、凹石、磨石		AT下位より石錐の出土が確認された	
岡遺跡 (第13次調査)	散布地 集落跡	縄文時代 ～ 近世	竪穴建物跡1軒 掘立柱建物跡2棟		縄文土器、古墳時代の土師器、須恵器、近世陶磁器、石核、剥片、石鎌、石斧、石錘、スクレイパー、敲石		古墳時代の竪穴建物跡から須恵器が出土	
岡遺跡 (第15次調査)	散布地 集落跡	縄文時代 ～ 近世	集石遺構1基		縄文土器、弥生時代～古墳時代の土器、須恵器、陶磁器、青磁、青花、石核、剥片、石鎌、石匙、石斧、石錘、礫器、スクレイパー、敲石、磨石、石皿		縄文時代晩期の完形に近い浅鉢（突帯文・組織痕）が出土	
要約	<p>日向市大字平岩岡に位置する岡遺跡（第9次・第13次・第15次）の発掘調査報告書である。</p> <p>岡遺跡第9次調査区では、縄文時代早期の集石遺構や炉穴、中世の石組遺構や土坑、中世～近世の掘立柱建物跡を検出した。</p> <p>岡遺跡第13次調査区では、縄文時代晩期の遺物が出土した。また、古墳時代中期の竪穴建物跡、近世の掘立柱建物跡を検出した。</p> <p>岡遺跡第15次調査区は、特に、縄文時代晩期の遺構や遺物が確認された。</p>							

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 223 集

岡遺跡（第 9・13・15 次調査）

東九州自動車道（都農～日向）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 9

2013年1月

発行 宮崎県埋蔵文化財センター
〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂 4019 番地
TEL 0985(36)1171 FAX 0985(72)0660

印刷 田中印刷有限公司
〒880-0022 宮崎市大橋 3 丁目 110 番地
TEL 0985(28)4724 FAX 0985(20)9285
